

# 学力向上拠点形成事業

～確かな学力育成のための実践研究事業～

## 平成19年度 報告書



平成20年2月  
宮城県教育委員会

## はじめに

本報告書は、平成17年度から平成19年度までの3年間、学力向上拠点形成事業推進地区及び推進校として県内8地区、17校（小学校10校、中学校7校）が取り組んだ「確かな学力」を育成するための実践研究について、その概要及び成果をまとめ、広く普及を目指すものです。

最終年度に当たる今年度は、学力向上推進協議会からの本県児童生徒の学力向上に向けた「提言」等を掲載するとともに、各推進校の特色ある実践研究の概要や成果を紹介しています。推進校17校は「児童生徒の学習意欲の向上」「小・中連携」「家庭学習の充実」などについて、創意あふれる充実した取組を行っており、平成20年1月16日の研究協議会においては数多くの研究成果が報告されました。

各市町村教育委員会及び各学校におかれましては、掲載された「提言」や各推進校の取組を参考にして、考え方や実践を実情に合わせて取り入れるなど、本報告書を積極的に活用いただき、児童生徒の「確かな学力」の一層の育成を図っていただくようお願いします。

最後になりましたが、本県児童生徒の学力向上に向けての御提言と推進地区及び推進校に対する御指導・御助言等をいただきました宮城県学力向上推進協議会の構成員の皆様と、熱心に取り組まれている推進地区の方々及び推進校の先生方に感謝申し上げ、本報告書発刊の挨拶とします。

平成20年2月

宮城県教育委員会

教育長 佐々木 義昭



## 目 次

I	学力向上拠点形成事業（確かな学力育成のための実践研究事業）趣旨	1
II	事業の内容〈実施期間：平成17年度～平成19年度（3年間）〉	1
III	宮城県学力向上拠点形成事業 （確かな学力育成のための実践研究事業）の概要	2
IV	研究を進めるに当たっての基本的な方向	3
V	学力向上推進協議会	4
VI	提言 ― 本県児童生徒の学力向上を図るために―	8
VII	平成19年度学力向上拠点形成事業 1年間の取組	9
VIII	学力向上拠点形成事業推進校報告	
1	各推進校の取組の概要（ダイジェスト版）	11
2	各推進校の報告書	
	〈大河原教育事務所〉	
	（1）丸森町立丸森小学校	28
	（2）丸森町立館矢間小学校	33
	（3）丸森町立丸館中学校	38
	〈仙台教育事務所〉	
	（1）大衡村立大衡小学校	43
	（2）大衡村立大衡中学校	48
	〈大崎教育事務所〉	
	（1）大崎市立古川第一小学校	53
	（2）加美町立小野田中学校	58
	〈栗原教育事務所〉	
	（1）栗原市立鶯沢小学校	63
	（2）栗原市立鶯沢中学校	68
	〈登米教育事務所〉	
	（1）登米市立北方小学校	73
	（2）登米市立米山中学校	78
	〈石巻教育事務所〉	
	（1）石巻市立広渕小学校	83
	（2）石巻市立北村小学校	88
	（3）石巻市立前谷地小学校	93
	（4）石巻市立河南西中学校	98
	〈南三陸教育事務所〉	
	（1）気仙沼市立九条小学校	103
	（2）気仙沼市立条南中学校	108

## I 学力向上拠点形成事業（確かな学力育成のための実践研究事業）趣旨

本県の「学校教育の方針と重点」及び「宮城県学力向上推進プログラム」を踏まえ、基礎的・基本的な学習内容の定着を図り、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの「確かな学力」を育成するために、学習指導の充実及び教員の資質向上に向けた実践研究に取り組むとともに、各推進地区及び各推進校における研究成果の普及・共有化を推進し、児童生徒の学力向上のための拠点形成に取り組む。

## II 事業の内容 〈実施期間：平成17年度～平成19年度（3年間）〉

### 1 確かな学力育成のための実践研究推進校の指定

- (1) 県内の小学校10校、中学校7校、計17校を確かな学力育成のための実践研究推進校（以下「推進校」という。）として指定する。
- (2) 推進校は、学力向上推進協議会の提言や地区推進協議会の方針をもとに、「確かな学力」の育成のために次のような取組を行う。
  - ① 児童生徒一人一人の実態に応じた指導の一層の充実を図る取組
  - ② 教員の資質と指導力向上を図る取組
  - ③ 実践研究の成果等の普及を図る取組

### 2 宮城県学力向上推進協議会の設置（宮城県教育庁義務教育課主管）

- (1) 宮城県教育委員会は、宮城県学力向上推進協議会を設置・開催し、推進校に対して必要な指導・助言を行う。
- (2) 宮城県学力向上推進協議会は、学識経験者、推進校教職員、指導主事、保護者等をもって構成する。
- (3) 宮城県学力向上推進協議会の平成19年度の設置期間は、平成19年6月6日から平成20年3月31日までとする。

### 3 地区推進協議会の設置（該当市町村教育委員会主管）

- (1) 推進地区の市町村教育委員会は、地区推進協議会を設置・開催し、推進校に対して必要な指導・助言を行うとともに、教員の指導力の向上、研究の共有化及び成果等の検証を行う。
- (2) 地区推進協議会は、該当市町村教育委員会教育長、推進校教職員、指導主事、保護者等をもって構成する。

### III 宮城県学力向上拠点形成事業(確かな学力向上のための実践研究事業)の概要

#### 1 児童生徒を取り巻く現在の学力状況

国際・国の学力調査における児童生徒の実態	宮城県児童生徒の実態	学力向上フロンティア事業の成果
<p>■2007年PISA 生徒の学習到達度調査 (高1対象)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>科学的リテラシー国際的に見て上位</li> <li>読解力は加盟国平均と同程度</li> <li>学習意欲や学習習慣に課題</li> </ul> <p>■平成15年度TIMSS 国際数学・理科教育動向調査 (小4, 中2対象)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>児童生徒の学力は、国際的に見て上位。</li> <li>小学校理科、中学校数学は前回より得点が低下</li> <li>学習意欲や学習習慣に課題</li> <li>テレビやビデオの視聴時間が長く、家での手伝いの時間は短い。</li> </ul> <p>■平成19年度 全国学力・学習状況調査(国) (小6, 中3対象・悉皆)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>宮城県の小・中学生は、基礎的・基本的な内容は概ね理解しているものの、学んだことを活用する力に課題がある。</li> <li>小・中学生の国語、算数・数学の正答率の分布状況は、全国とほぼ同じ状況を示しているが、正答率の高い児童生徒数の比率が全国と比較してやや低い。</li> <li>「知識」に関する問題の中学校数学の正答率と、「活用」に関する問題の小学校算数の正答率が全国と比較してやや低くなっている。</li> </ul>	<p>■平成17年度 宮城県学習状況調査結果 【学習状況調査の概要】 (全体の状況)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>本県で定着の目安と想定した正答率60%以上段階の問題が6割(62.5%)を超え、前年度(61.4%)とほぼ同程度となったが、地方分権研究会参画4県全体の状況と比較すると、正答率60%以上段階の問題等が4県全体の状況を下回った。</li> <li>(小学校の状況) <ul style="list-style-type: none"> <li>正答率60%以上段階の問題は、国語(67.7%)、算数(66.7%)、社会(89.3%)、と3教科で6割を超えたが、理科(57.1%)で比較的正答率が低い状況となった。</li> </ul> </li> <li>(中学校の状況) <ul style="list-style-type: none"> <li>正答率60%以上段階の問題は、国語(71.9%)、英語(66.7%)で6割を超えたが、社会(50.0%)、数学(53.3%)、理科(45.7%)で定着の目安の段階に達しない結果となった。</li> </ul> </li> </ul> <p>【学習意識調査の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>小中とも学習意識は高い。</li> <li>授業内容の理解は、小学生は概ね良好、中学生は十分とはいえない。</li> <li>家庭学習時間は小中学生とも十分とはいえない。</li> <li>小中学生とも家庭での読書時間が少ない。</li> </ul>	<p>■学力向上フロンティア事業成果 (38校:H14~H16年度)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○発展的な学習や補充的な学習など個に応じた指導のための教材開発</li> <li>・児童生徒の実態を多面的にとらえた上で「学習のねらい」「学習内容」「学習方法」を明確にした教材開発を行い、発展的・補充的な学習を展開すること。</li> <li>○個に応じた指導のための指導方法 <ul style="list-style-type: none"> <li>・個に応じた指導を展開するに当たっては、学校や児童生徒の実態に応じ、個別指導、グループ別指導、習熟度の程度に応じた指導など指導体制の工夫改善を図り、一人一人の児童生徒に対するきめ細かな指導の充実を図ること。</li> </ul> </li> <li>○児童生徒の学力の評価を生かした指導の改善 <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童生徒の評価は、学習指導要領に示す目標の実現を判断の拠り所とするともに、4観点からバランスよく把握し、評価結果は、さらに指導方法・指導体制の工夫改善に具体に生かすこと。</li> </ul> </li> </ul>

#### 2 目指す目標の設定

■平成19年度 学校教育の方針と重点の具現化		
<p>■宮城県学力向上推進プログラム(H17.3策定) (目標達成年日:平成27年3月)</p>		
<p>目標Ⅰ 学習状況調査における正答率60%以上の割合</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○小学5年生 85% (本県現状 73.3% H16 宮城県学習状況調査)</li> <li>○小学6年生 73.3% (本県現状 69.3% H17 宮城県学習状況調査)</li> <li>○中学2年生 70% (本県現状 51.6% H16 宮城県学習状況調査)</li> <li>○中学3年生 57.1% (本県現状 57.1% H17 宮城県学習状況調査)</li> </ul>	<p>目標Ⅱ 「授業が分かる」と答える児童生徒の割合</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○小学5年生 80% (本県現状 72.8% H16 宮城県学習意識調査)</li> <li>○小学6年生 75.1% (本県現状 75.1% H17 宮城県学習意識調査)</li> <li>○中学2年生 60% (本県現状 52.2% H16 宮城県学習意識調査)</li> <li>○中学3年生 55.8% (本県現状 55.8% H17 宮城県学習意識調査)</li> </ul>	<p>目標Ⅲ 平日に家庭等での学習時間を確保している児童生徒の割合</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○学習時間30分以上の児童(小5)の割合 80% (本県現状 68.9% 県平均・H16 宮城県学習意識調査)</li> <li>○学習時間1時間以上の生徒(中2)の割合 70% (本県現状 56.0% 県平均・H16 宮城県学習意識調査)</li> <li>○学習時間1時間以上の生徒(中2)の割合 70% (本県現状 52.4% 県平均・H17 宮城県学習意識調査)</li> </ul>

(県平均・H16・17・18 宮城県学習状況調査, H16・17・18 宮城県学習意識調査)

#### 3 本県学力向上に向けた取組

<p>■本県学力向上推進事業(重点施策)</p>														
<p>(1)学習状況調査の実施:継続して行うこととしており、引き続きデータ蓄積と調査結果の効果的活用を図る。</p>														
<p>(2)具体的方策</p>														
<p>①学校への結果周知と指導</p>														
<p>○平成16・17年度及び平成18年度の学習状況調査を分析し、各学校等への結果周知と分析結果に基づく指導を行う。</p>														
<p>②教員研修の充実</p>														
<p>○平成16・17年度及び平成18年度の学習状況調査結果を活用しつつ、参加教員による学校での実践を促し、教員の力量を高める。</p>														
<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育課程研究協議会(全教員対象に県内全域で毎年度実施)</li> <li>・学力向上成果普及マンパワー活用事業(研究指定教員、研修経験者等を学校に派遣し学力向上に関する研究成果を普及)</li> <li>・小・中学校教員研修会(正答率の低い領域等の指導改善方策の理解と実践)</li> <li>・各種全国規模研修会への教員の派遣</li> </ul>														
<p>③施策の充実</p>														
<p>○研究指定校の指定と成果の普及</p>														
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学力向上拠点形成事業(確かな学力向上のための実践研究事業)小・中学校17校指定(H17~H19)</li> <li>・義務教育の質の保証に資する学校評価システム構築事業(H18~H19,1地域11校)</li> <li>○家庭学習の支援 <ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭学習啓発リーフレットの配布(H17.4)</li> <li>・児童生徒の自主的な学習の支援のため「地域学習支援センター設置事業」(柴田・塩釜・佐沼・古川黎明・白石女子高校 石巻工業・迫桜・名取・角田・気仙沼高校)</li> </ul> </li> </ul>														
<p>○小学校英語教育推進事業(H17~H20,8モデル地域29校)</p>														
<p><b>学力向上拠点形成事業(確かな学力向上のための実践研究事業)</b></p>														
<p>推進地域</p>	<p>■宮城県教育委員会 ○学力向上推進協議会(年2回開催) 推進校公開研究会視察(9月~11月) 協議会の役割①地区推進協議会、推進校に対する必要な指導・助言に関すること。 ②教員の資質と指導向上に関すること。 ③県のホームページを活用した推進校17校の情報提供に関すること。 委員構成:学識経験者、教育事務所長、研修センター、指定校校長、指定校研究主任、教育事務所指導主事、保護者、PTA連合会、高等学校長、教育企画室、教職員課、市町村教育委員会、学習相談員</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>月</th> <th>H19年度スケジュール</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>6月</td> <td>○第1回学力向上推進協議会 ①学習意欲の向上 ②小・中連携 ③家庭学習の習慣化</td> </tr> <tr> <td>9月</td> <td>○協議会構成員及び県教委による推進校公開研究会視察</td> </tr> <tr> <td>11月</td> <td></td> </tr> <tr> <td>1月</td> <td>○推進校17校による研究協議会 ○第2回学力向上推進協議会 ・研究成果の検証と今後の取組</td> </tr> <tr> <td>2月</td> <td>○報告書の作成と配布による普及</td> </tr> </tbody> </table>	月	H19年度スケジュール	6月	○第1回学力向上推進協議会 ①学習意欲の向上 ②小・中連携 ③家庭学習の習慣化	9月	○協議会構成員及び県教委による推進校公開研究会視察	11月		1月	○推進校17校による研究協議会 ○第2回学力向上推進協議会 ・研究成果の検証と今後の取組	2月	○報告書の作成と配布による普及
月	H19年度スケジュール													
6月	○第1回学力向上推進協議会 ①学習意欲の向上 ②小・中連携 ③家庭学習の習慣化													
9月	○協議会構成員及び県教委による推進校公開研究会視察													
11月														
1月	○推進校17校による研究協議会 ○第2回学力向上推進協議会 ・研究成果の検証と今後の取組													
2月	○報告書の作成と配布による普及													
<p>推進地区 8地区</p>	<p>■丸森町、大衡村、大崎市、加美町、栗原市、登米市、石巻市、気仙沼市教育委員会 ○地区推進協議会(年2回) 委員構成:教育長、事務所指導主事、校長、研究主任、保護者等 ・推進地区においては、成果の発表会や研修会等の開催、実践事例集の作成、インターネットによる情報提供等の取組を必要に応じて実施することにより推進校の支援を行う。</p>													
<p>推進校 17校</p>	<p>①丸森町:丸森小学校、館矢間小学校、丸籠中学校 ②大衡村:大衡小学校、大衡中学校 ③大崎市:古川第一小学校 ④加美町:小野田中学校 ⑤栗原市:篤沢小学校、篤沢中学校 ⑥登米市:北方小学校、米山中学校 ⑦石巻市:広瀬小学校、北村小学校、前谷地小学校、河南西中学校 ⑧気仙沼市:九条小学校、条南中学校 ○推進校において ・知識や技能に加え、自ら学ぶ意欲や判断力、表現力などの確かな学力の向上を図るための方策について実践研究を行う。 ・指定した推進校のみならず近隣学校と協力を図るほか、小・中連携を図りながら研究を進めること。 ・児童生徒の変容(意識や学力など)教師や保護者の意識の変容などの把握のための調査(アンケート調査)など経年比較が可能な定量的なデータを示せるようにすること。</p>													

成果を広く普及

## IV 平成19年度 研究を進めるに当たっての基本的な方向

本事業を推進するに当たり、研究の基本的な方向を次の3点とする。

### 研究の基本的な方向

研究の基本的な方向は、「児童生徒の学習意欲向上への取組」「小・中学校の連携した取組」「家庭学習の習慣化への取組」の3点とする。各校の実状があるので、新たな研究の重点を示さないが、各校は実状に応じて深めどころを見据え、しっかり取り組むこと。

なお、本事業の最終年度であるので、関係教育委員会及び各推進校は、研究成果等の積極的な公表・公開を図り、普及に努めること。

### 児童生徒の学習意欲向上への取組

- 1 児童生徒の学ぶ意欲を高めていくためには、分かる授業の展開と適切な評価への取組は欠かせないことから、「成就感や満足感をもたせる学習の在り方」、「そのための教師の指導と評価の在り方」などに着目した研究実践を求めていく。
- 2 授業改善については重点として押さえ、各推進校においては、実態や研究推進状況に応じて、ねらいを明確にした授業改善の取組と具体的成果を求めていく。

### 小・中学校の連携した取組

義務教育段階の小・中学校間では、相互の連携を一層促進し、継続性や接続の円滑化などを図るために、学習指導、生徒指導、学校運営などについて改善することが求められている。本事業は、中学校区を実施主体とする構成になっていることから、小・中連携を推進することで、児童生徒の学力向上を図るための研究が十分に可能である。この点に着目した研究成果を求めていく。また、小・中学校の連携だけでなく、さらに一歩踏み込んで、高校との連携を視野に入れた研究実践も求めたい。

### 家庭学習の習慣化への取組

学力向上のためには、学校での指導はもとより、家庭での学習が不可欠であり「授業が分かる」こととともに、「学んだことが定着する」ことを見通した一連の取組が必要である。各推進校においては、家庭学習の手立てを示しながら授業で身に付けた学習内容、学習方法を家庭学習に活かしたり、家庭での学習を授業に活かしたりするなど、授業と家庭学習の関連を図った取組に着目した研究実践を求めていく。また、その際に、「何のために学ぶのか」、内発的な動機づけをも行い、学習意欲を高く維持させることに留意してほしい。

## V 学力向上推進協議会

### 第1回宮城県学力向上推進協議会

日時 平成19年6月6日(水) 13:30～15:30  
会場 県行政庁舎 教育庁会議室

#### 1 平成19年度宮城県学力向上推進協議会構成員

	構 成	構成員氏名	所 属
1	学識経験者	小泉 祥一	東北大学大学院 教授
2	教育事務所長	高橋 睦磨	大河原教育事務所長
3	学力向上拠点形成事業拠点校校長	青田 穰	石巻市立河南西中学校長
4	高等学校長	遠藤 幸生	宮城県古川黎明高等学校長
5	教育研修センター指導主事	穴戸 勉	教育研修センター 企画研修班 副参事
6	教育事務所指導主事	大友 玲子	仙台教育事務所 副参事
7	学力向上拠点形成事業拠点校 研究主任	佐々木 智美	大崎市立古川第一小学校 教諭
8	P T A連合会	浅野 和子	元宮城県P T A連合会会長 (宮城県P T A連合会事務局)
9	保護者	佐藤 ゆり子	元鶴巣小学校P T A会長
10	教育企画室	小笠原 朋之	教育企画室学力向上推進班 室長補佐兼企画員
11	教職員課	星 豪	教職員課研修免許班 課長補佐
12	市町村教育委員会	大石 正利	岩沼市教育委員会 指導主事
13	地域学習支援センター 学習相談員	渡辺 みち子	地域学習支援センター 学習相談員

#### 2 協議内容と協議のまとめ

##### (1) 研究の基本的な方向

研究の基本的な方向は、「児童生徒の学習意欲向上への取組」「小・中学校の連携した取組」「家庭学習の習慣化への取組」の3点とする。各校の実状があるので、新たな研究の重点を示さないが、各校は実情に応じて深めどころを見据え、しっかり取り組むこと。

なお、本事業の最終年度であるので、関係教育委員会及び各推進校は、研究成果等の積極的な公表・公開を図り、普及に努めること。

##### (2) 児童生徒の学習意欲向上への取組

###### ① 授業の準備の充実、教材等の工夫

- ・児童生徒の学習意欲の向上、学力の向上のためには、ねらいと教育内容を具現化する教材づくりや発問、板書等の工夫をすること。

###### ② 評価を活かしたきめ細かな学習指導

- ・一人一人が学ぶ意義を実感できるきめ細かな学習指導を心がけること。
- ・評価方法を工夫して児童生徒の変容を具体的にとらえられるようにし、授業や家庭学習と関連させて、学習指導に評価結果をさらに生かすこと。



### ③ 学び合い高め合う学習集団づくり

- ・児童生徒同士が学び合い高め合う学習活動ができるように、授業についての申し合わせや約束ごとを決め、授業を通して学習のルールや学習習慣を身に付けさせて学級を学習集団に形成していくこと。
- ・望ましい学習集団の形成のためには、管理職のリーダーシップの下、まず、教職員が協力して取り組む姿を常に児童生徒に見せるよう心がけること。

### ④ 教師の授業力向上を目指した授業研究の実施

- ・「模擬授業」は教師の指導力向上に大変有効であるので積極的に実施すること。
- ・各教員は取組への熱心さはあるが、さらに授業技術力や授業経営力を高め、「この発問で子供がどう反応するか」といった授業の具体的場面でより適切な判断と指導ができるように努めていくこと。

## (3) 小・中学校の連携した取組

### ① 実態や小・中の学びの連続性を重視

- ・地域や児童生徒の実態にあった緩やかで息の長い連携・交流を推進すること。
- ・様々な取組が行われていることは評価できるが、内容の薄い交流にならないよう注意が必要である。小・中連携は手段であり、小・中学校の相互理解や教育課程の接続の工夫、縦の人間関係の形成など、児童生徒のためになることは何かを見据えて推進すること。

### ② 児童生徒・保護者・地域、他校種との交流の推進

- ・児童生徒、保護者、地域が求めているものについて、できることを工夫して推進し、全体として児童生徒を見守る眼が変わっていくことが大切である。
- ・高等学校との連携も報告されている。他校種と交流することは、視野が広がるので今後一層の連携・交流を求めたい。

## (4) 家庭学習の習慣化への取組

### ① 授業と家庭学習相互のかかわりを大切にした学習指導の推進

- ・学校での学習指導の改善とともに家庭学習の充実は学力向上に不可欠である。調べ学習など児童生徒の家庭学習の成果を用いて授業を構成するなど、授業と家庭学習のかかわりを緊密にする工夫をすること。
- ・家庭学習の習慣化できることは大切なことと認識し、児童生徒がそうできるような課題を設定する工夫が求められる。
- ・家庭学習のねらいは授業内容の定着にある。家庭学習の質を高める工夫をすること。

### ② 家庭学習の啓発

- ・推進校では家庭学習カード、自学自習ノート等の活用がすすめられており、学校だよりやPTA総会などでも家庭学習の充実に向けて働きかけが行われており、効果が認められている。今後も一層取組をすすめること。

### ③ 基本的な生活習慣の確立

- ・本県が推進する「はやね、はやおき、あさごはん」推奨運動の趣旨の徹底を図り、家庭における基本的な生活習慣の確立に今後も努めること。

## (5) 研究成果等の公表・公開

### ① 公表・公開の一層の推進

- ・推進校の教員が熱心に取り組んでいる内容が保護者・地域には十分理解されていない。各学校は研究実践のプロセスや成果について一層公表・公開の工夫をすること。

### ② 公開研究授業等における工夫

- ・推進校の教員は互いの公開研究に参加し、有効な研修の場としてほしい。
- ・公開研究授業の検討会等で少人数の検討会など工夫が見られたが、今後も参加者がより有効に研修できるような工夫をすすめること。

## 第2回宮城県学力向上推進協議会

日時 平成20年1月17日(木) 13:30~16:00  
会場 県行政庁舎 1601会議室

### 1 第1回学力向上推進協議会及び研究協議会等についての報告(省略)

### 2 推進校の公開研究会の視察報告(省略)

### 3 本年度の研究のまとめと本県の学力向上の取組について

#### (1) 児童生徒の学習意欲の向上について

##### ① 教員の教科指導力の向上

- ・優れた素材を教材化して子供に示すこと。「先生がわくわくする教材づくり」や「児童生徒一人一人へのきめ細かな心配り」は、学力向上を図る基本である。
- ・子供たちに学習のめあてや将来像を自覚させる中で、生活と結び付けながら目標決定能力を付けさせること。
- ・校内研修で模擬授業が広がってきていることは、好ましい傾向である。授業研究の在り方等を工夫して、研修に意欲的に取り組み、互いを高める教員集団を形成すること。それには、校長・教頭のリーダーシップが重要である。
- ・講師については、もっと勉強する機会をもたせたい。講師の研修は全国的な課題である。教師としての魅力を高める研修や行政の学校の研修への支援が必要である。

##### ② 児童生徒の意欲や学力を高める授業づくりと学校体制づくり

- ・長期間で形成されたものが表れる「関心・態度」に対し、「意欲」は比較的・一時的である。子供たちの意欲を常に高めるようにし、子供が学ぶ意義を理解して学ぶことが大切である。
- ・子供たちに意欲をもたせるためには、教員が授業づくりを楽しむようになっていかねばならない。
- ・教員の指導力向上が学力向上につながる。取り組む中で協力員間の労力や負担もあろうが、授業づくりは本務と認識し、学び合い、助け合うこと。
- ・校長のリーダーシップの下、学校全体で授業づくりに取り組む仕組みをつくること。
- ・能力ある生徒はどこまでも力を伸ばせるシステムが必要である。
- ・児童生徒一人一人を大切にすることが一層必要である。他県では、できない児童のカリキュラムについて職員会議で話し合う、学校で勉強できるよう学校を開放するなどの取組があった。

##### ③ 学び合い、助け合い、高め合う学習集団づくり

- ・児童生徒同士が学び合い、助け合い、高め合う学習活動ができるように、授業についての申し合わせや約束ごとを決め、授業をとおして学習規律・規範や学習習慣を身に付けさせて、学級を学習集団に形成していくこと。



- ・望ましい学習集団の形成のためには、管理職のリーダーシップの下、まず、教員が協力して取り組む姿を常に児童生徒に見せるよう心がけること。

## (2) 学びの連続性を重視した小・中連携の推進

- ・小・中連携の必要があるのは、特に算数と数学である。
- ・保護者は自分の子供が小・中学校に行くので、はじめから小・中が連携をしている状態にある。その点から見ても、小・中連携は一層必要である。なお、中・高連携も視野に入れたい。
- ・小・中連携の推進には難しい面もあるが、推進を図ったところ、中学校1年生の不登校がなくなるなどの成果があがっており、中1ギャップの解消に役立っている。
- ・小・中・高連携、幼・小連携などいろいろあるが、教員がどんな気持ちでこの子供を育ててきたのかを伝えること。校種を超えた先生方のつながりが大切である。
- ・小・中・高校がカリキュラムを共有し、何を学ぶかを明確にして、子供たちの成長を長期にわたり見守り、共有すること。小・中学校の教員間で自覚をもって一層連携し、子供への思いを共有すること。これらが学力向上につながっていく。

## (3) 家庭学習の習慣化と内容の充実

- ・家庭学習を根付かせようとした「地域学習支援センター」では、何をしたらよいか分からない子供、ドリルだけしている子供もいた。推進校が行っている学習のやり方を家庭へ伝えることは重要である。
- ・「家庭学習の手引き」などを作成・活用し、地域・家庭の協力を得て、家庭学習の習慣化と内容の充実に努めること。

# 提 言

## — 本県児童生徒の学力向上を図るために —

宮城県学力向上推進協議会

### 1 教員の教科指導力向上と児童生徒の意欲を高める授業づくり

- (1) 十分な教材研究と児童生徒一人一人へのきめ細かな心配りは授業づくりの基本と心得て、質の高い授業実践に一層努めること。
- (2) 児童生徒の学習意欲を高める工夫に努めるとともに、評価方法を工夫して児童生徒の変容を適切にとらえ、評価結果を授業に活かすこと。
- (3) 校長のリーダーシップの下、学力向上について中・長期的なビジョンを策定し、学校全体で授業づくりに取り組む仕組みをつくること。
- (4) 模擬授業など授業研究の在り方等を工夫して、研修に意欲的に取り組み、互いを高める教員集団を形成すること。

### 2 学び合い、助け合い、高め合う学習集団の形成

- (1) 学級を学習集団として形成していくこと。その際、授業をとおして学習のルール（学習規律・規範）や学習習慣を身に付けさせること。
- (2) 望ましい学習集団を形成するために、まず、教員集団が協力して取り組む姿を常に児童生徒に示すよう心がけること。

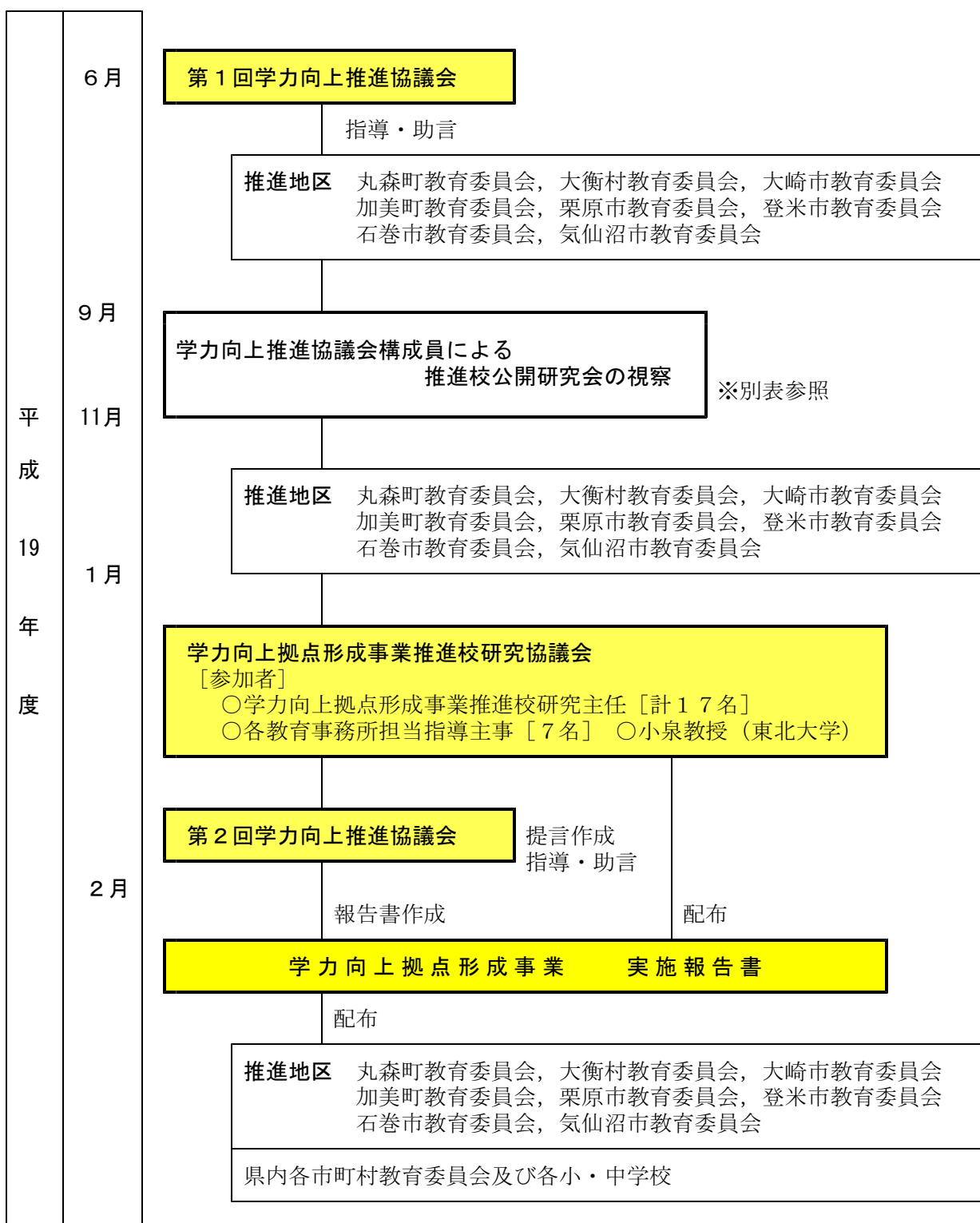
### 3 学びの連続性を重視した小・中連携の推進

- (1) 小学校と中学校は、実態に応じた継続的な連携を図り、カリキュラムを共有して9年間で何を学ばせるのかを明確にしていくこと。
- (2) 校種を超えた教員のかかわり合いをとおして互いの視野を広げ、児童生徒の成長を長期にわたって見守り、共有できるようにすること。

### 4 家庭学習の習慣化と内容の充実

- (1) 「家庭学習の手引き」などを作成・活用し、地域・家庭の協力を得て、家庭学習の習慣化と内容の充実に努めること。
- (2) 家庭学習の成果を授業の中で用いる工夫をするなど、授業と家庭学習のかかわりを緊密にすること。

## Ⅶ 平成19年度学力向上拠点形成事業 1年間の取組



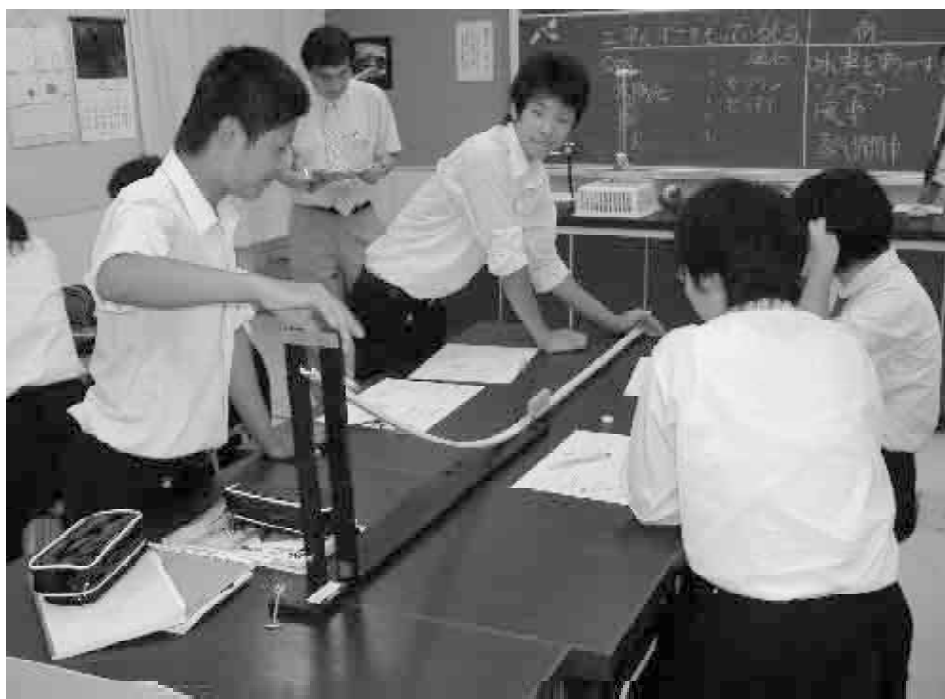
## 別表

## 推進校 17校の研究主題と公開研究会開催日

	学 校 名 等	研 究 主 題		公 開 研 究 会
大 河 原	丸森町立 丸森小学校	確かな学力 を身に付け 未来を拓く 丸館っ子の 育成 丸館中学 区共通研究 主題	主体的に考え、ともに学ぶ児童の育成 ～伝え合う活動による学び合いを通して～	11月 7日 (水)
	丸森町立 館矢間小学校		ともに考え、ともに学び、にこにこ学習に取り組む児童の育成 ～筋道を立てて考え、相手に分かりやすく伝える力の向上を図る指導法の工夫～	11月 7日 (水)
	丸森町立 丸館中学校		自ら考え、自らを高めようとする生徒の育成 ～学習における基礎・基本の定着を図り、学習意欲を高める手立ての工夫を通して～	11月 7日 (水)
仙 台	大衡村立 大衡小学校	確かな学力を身に付けさせる学習指導の在り方 ～国語科・算数科における「教えて考えさせる授業」の追究を通して～		11月 2日 (金)
	大衡村立 大衡中学校	確かな学力を身に付けさせる指導の在り方 ～4つの段階を踏まえた指導過程の工夫を通して～		10月26日 (金)
大 崎	大崎市立 古川第一小学校	「学ぶ力」を身に付け、共に伸びゆく児童の育成（4年次） ～個に応じた授業づくりを通して～		9月28日 (金)
	加美町立 小野田中学校	確かな学力の定着を目指した学習指導の工夫 ～基礎・基本を重視した、個に応じた指導を通して～		10月19日 (金)
栗 原	栗原市立 鶯沢小学校	自ら考え、表現する児童の育成 ～国語科・算数科におけるかかわり合いを生かした授業改善を通して～		11月30日 (金)
	栗原市立 鶯沢中学校	「確かな学び」をはぐくむ学習指導の工夫		11月13日 (火)
登 米	登米市立 北方小学校	学ぶ意欲とスキルを高め、確かな学力を身に付ける子どもの育成		9月28日 (金)
	登米市立 米山中学校	自ら考え、表現することができる生徒の育成 ～確かな学力の向上を目指す、個に応じたきめ細かな指導の育成～		9月21日 (金)
石 巻	石巻市立 広瀬小学校	学ぶ楽しさを感じ、確かな学力を身に付ける児童の育成 ～「3つの学び」を大切に国語科・算数科の指導の工夫を通して～		10月19日 (金)
	石巻市立 北村小学校	学ぶ楽しさを味わいながら、基礎・基本を身に付ける児童の育成 ～算数科における一人一人の学習意欲を高める指導の工夫を通して～		10月19日 (金)
	石巻市立 前谷地小学校	分かる喜びを感じ、意欲的に取り組む児童の育成 ～算数学習における「学び合う授業づくり」と「学習環境づくり」を通して～		10月19日 (金)
	石巻市立 河南西中学校	主体的に学び続けようとする生徒の育成 ～「分かる喜び」と「できる喜び」を実感できる支援のあり方の工夫～		10月19日 (金)
南 三 陸	気仙沼市立 九条小学校	学ぶ楽しさを味わいながら確かな学力を身に付ける児童の育成 ～感じ、考え、生かすことを支援する算数科の指導を通して～		7月 4日 (水)
	気仙沼市立 条南中学校	自ら学ぶ生徒をはぐくむための指導の工夫 ～学ぶ楽しさやわかる喜びを体感させる授業づくりを通して～		10月18日 (木)

# Ⅷ 学力向上拠点形成事業 推進校報告

## 1 各推進校の取組の概要（ダイジェスト版）



**主体的に考え、ともに学ぶ児童の育成**  
～伝え合う活動による 学び合いを通して～

**指導と評価の一体化**





# 丸森町立館矢間小学校

研究主題 **ともに考え、  
にこにこと学習に取り組む児童の育成**

## 研究のねらい

○児童一人一人の確かな学力を高めるために、算数科を中心にして、少人数指導やTT指導などの指導形態や指導方法の工夫・改善を図ります。

○地域や保護者の方々と連携し、児童のよりよい生活習慣の確立や家庭学習の定着に努めます。

## 特色ある取組

### 全学年でのTT指導, 少人数指導

- ◆1 学年 TT 105時間
  - ◆2 学年 TT 140時間
  - ◆3～6 学年 TT 100時間  
少人数 60時間
- ※主に算数科で

### 学習シラバスの活用

#### 【主に低学年で】

- ◆家庭学習の啓発
- ◆保護者への学習内容のお知らせ
- ◆家庭学習の進め方の手引き

#### 【主に中・高学年で】

- ◆学習意欲の喚起
- ◆主体的・計画的な学習の促進
- ◆自らの到達度や課題の振り返り

### 生活習慣の改善と学習習慣の形成

#### たてやまっ子のちかい

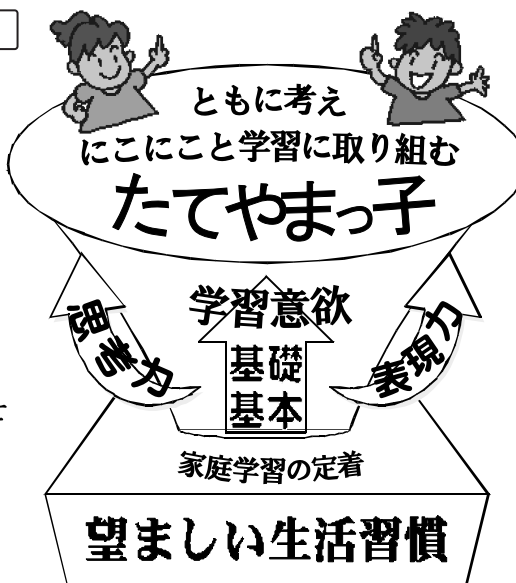
- ◆毎日決まった時間に学習
- ◆十分な睡眠時間の確保
- ◆朝食は毎日
- ◆テレビ等の視聴は2時間以内
- ◆家族からの励まし  
※家族で話し合っ

#### 家庭学習カード

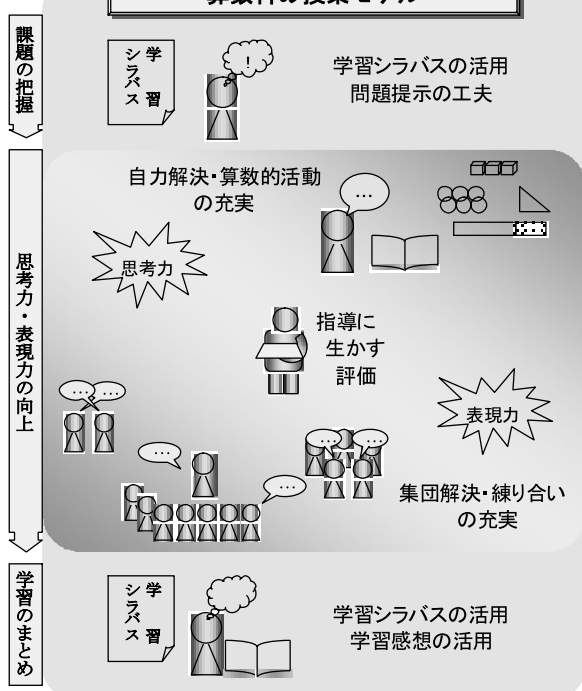
- ◆音読, 漢字練習, 計算練習, 日記, 自主学習などの習慣化
- ◆担任や家族からの励まし
- ◆簡潔な記入欄で毎日チェック

#### 学習ボランティアの活用

- ◆児童への励まし, 声かけ
- ◆特殊な技能の演示
- ◆課外学習の補助
- ◆教材, 教具等の整理

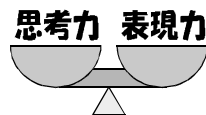


### 思考力, 表現力の向上を目指した算数科の授業モデル



### 指導計画の自校化

- ◆児童の到達度に合わせ, 具体的な支援の手立てを記載した, 単元の指導計画の作成
- ◆学習内容に合わせ, 思考力と表現力の重点の置き方に軽重を付けた, 算数科の指導過程の工夫



### 指導に生かす評価

#### 座席表

- ◆机間評価・指導の結果を記録し, 個々への指導・支援や次時の指導計画の修正に活用

#### 単元評価一覧表

- ◆毎時間の座席表の記録を転記し, 児童一人一人の理解・定着の把握や学習状況の総括的な評価に活用



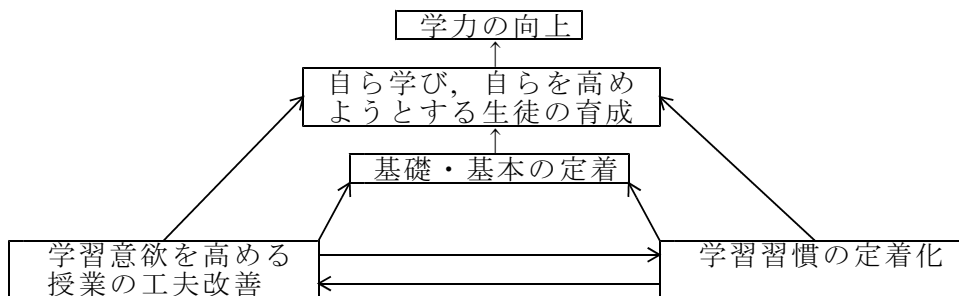


## 丸森町立丸館中学校

### 【研究主題】

自ら学び，自らを高めようとする生徒の育成  
～学習意欲を高める授業の工夫改善と  
学習習慣の定着化を通して～

### 【研究実践の基本的な考え】



### 【学習意欲を高める授業の工夫改善】

- 各教科で特に身に付けさせたい基礎・基本の明確化と定着
- 家庭学習課題を生かした授業実践  
(ねらい)
  - ・ 学習意欲の向上を図る
  - ・ 学習習慣の定着化を目指す  
(具体的な取組)
  - ・ 予習課題を取り入れた授業実践
  - ・ 復習課題を取り入れた授業実践
- 少人数指導（数学），TT（英語）による授業実践  
(ねらい)
  - ・ 習熟度別学習や個に応じた指導をとおして基礎・基本の定着を図る

### 【学習習慣の定着化】

- 「学習の手引」（冊子）の刊行と，教科の毎日の自主的学習への有効活用  
(ねらい)
  - ・ 教科の学習習慣の定着と自主的学習の推進に役立てる
- 「学びタイム」の実践  
(ねらい)
  - ・ 生徒同士の学び合いをとおし，自主的学習の推進を図る
- 「変身トライ！三カ条」自己診断表の実践  
(ねらい)
  - ・ 個人レベルでの学習習慣の定着と基本的な生活習慣の確立に役立てる
- 「家庭学習積み重ねカード」の実践  
(ねらい)
  - ・ 個人レベルでの学習習慣の定着に役立てる
- 自主学習ノートの実践  
(ねらい)
  - ・ 個人レベルでの学習習慣の定着と自主的学習に役立てる

### 【小・中学校の連携】

- 国語科，算数・数学科，教員の指導力向上の研修における小・中学校の連携の推進
- 学習習慣の定着化などを目指した小・中学校の連携の推進



平成19年度 学力向上に向けた特色ある取組  
大衡村立大衡小学校

＜学校教育目標＞

人間性豊かな心を持ち、社会に変化に主体的に対応し、  
たくましく生きる、心身ともに健康な子どもの育成

＜めざす児童像＞

・自ら学びとる子ども ・思いやりのある子ども ・進んで体を鍛える子ども

＜主題設定の理由＞

教育の今日的課題から

「確かな学力」「豊かな人間性」「健康や体力」  
特に基礎・基本の定着の重要性

児童の実態から

・基礎学力向上の必要性→わかる授業の追究  
・家庭学習の習慣化の必要性

昨年度の研究から

「学力向上拠点形成事業」の推進校として  
『教えて考えさせる授業』のさらなる追究

＜研究主題＞

確かな学力を身につけさせる学習指導のあり方

—国語科・算数科における

「教えて考えさせる授業」の追究を通して—

＜研究目標＞

- ・「学習意欲向上への取組」「家庭学習の習慣化への取組」
- ・「小・中連携への取組」の3つの視点で研究・実践に  
取り組むことにより、確かな学力を育む。
- ・『教えて考えさせる授業』を実践的に追究する。

＜視点1 学習意欲の向上への取組＞

『教えて考えさせる授業』の追究

「教え込み」や「子ども任せ」の授業ではなく、教えるべきことは教え、それを生かして考えさせること  
によって、みんながわかり考えるような授業をめざす。

『教えて考えさせる授業』の段階と内容

段階	各段階の内容
教える	基本的な学習内容について、教師がしっかりと教える。学習内容を精選するとともに、教材・教具を工夫したり、操作を通して体験的に理解させたり、発問を吟味したりするなど教え方の工夫が必要である。
理解確認させる	児童が本時の学習内容を理解したかどうか確かめる。基本的な問題を一人一人に解かせてみたり、わかったかどうか説明させてみたりする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>＜○つけ法＞</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・理解できたか確認する○つけ</li> <li>・どのような考えを持ったか確かめる○つけ</li> </ul> </div>
理解深化	理解したことを活用し、さらに理解や思考を深める段階である。類似問題や応用問題を解かせ適用範囲を広げたり、児童の思考を揺さぶるような課題を提示し、個人または集団で思考・討論したりしながら理解を深めさせる。
ふりかえり	「今日わかったことは何か」といったように記述式で評価させたり、わかり具合を段階的に評価させる。自己評価活動を通して、自分の理解状況を診断・表現する力をつけていくことがねらいである。指導者にとっては、具体的な反省の材料となる。

学習意欲の向上を支える取組 ・スキルタイム ・少人数指導の実施 ・読書の奨励

＜視点2 家庭学習の習慣化への取組＞

- ・家庭学習の手引きの活用 ・家庭学習カードの活用
- ・自主勉強の手引きの活用 ・長期休業中の学習支援

＜視点3 小・中連携への取組＞

- ・相互授業参観 ・小中合同研究会
- ・中学校教員による小学生への授業実施  
＜中学校での授業・部活体験会＞

＜研究の成果＞

①『教えて考えさせる授業』の追究

- ・学年部教科別の授業モデル作成。
- ・教員の授業力向上模擬授業の実施。

②児童の学力向上

学力到達度診断で、算数は2年間で7ポイント、国語では1年間で4ポイントの上昇。

	H18	H17	H16
国語	75	71	—
算数	78	74	71

③家庭学習の定着

実態調査で家庭で学習するが99%、3年以上で30分以上学習するが83%に上昇。

	H18	H17	H16
実施	99	96	88
30~	83	71	44

④小・中連携の実施

小学6年生の中学校での授業・部活体験が「とてもためになった・ためになった」が98%にのぼった。

＜課題＞

- ・『教えて考えさせる授業』のさらなる追究と他教科への波及。
- ・家庭学習の質的向上、授業との関連の模索。



# 望ましい学習態度・学習習慣の育成

大崎市立古川第一小学校

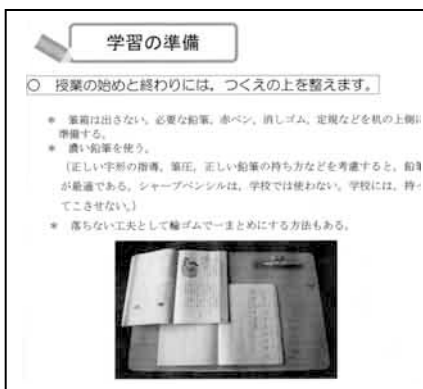
学習活動を根底で支える **望ましい学習態度の育成**  
 全校で、「学習の約束」を統一 → 定着に向けた指導を継続



「学習の約束」を全教室に掲示

- ・話の聞き方
- ・発表の仕方（話型）
- ・国語科「視写の仕方」
- ・算数科「文章問題の解き方」
- ・算数科「筆算の補助記号」

等



教師用指導マニュアル  
 「学習の約束」

教師の共通理解

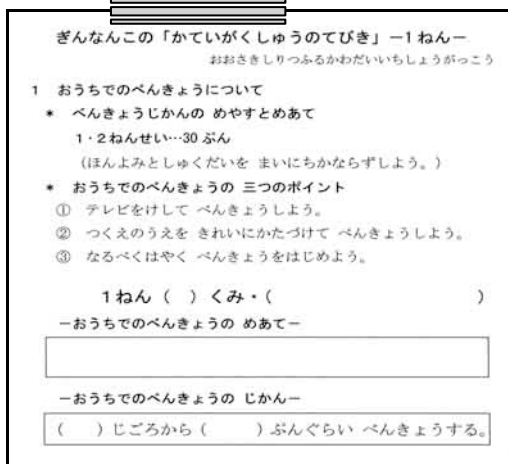
指導の統一

月	重点指導事項
4	学習の準備
5	始業・終業のあいさつ
6	ノートの使い方
1	毛筆・硬筆の指導
2	ノートの使い方
3	学習用具の整理

月別重点指導事項

計画的・意図的指導

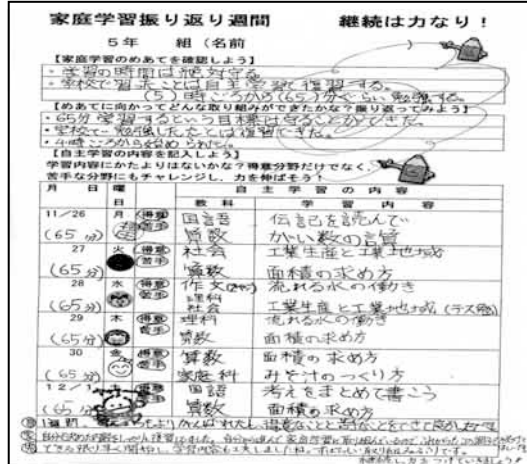
## 学習への意欲向上 → 学力向上



「家庭学習の手引き」

具体的な目標と内容を提示

めあてをもたせ、家庭学習の習慣化を図る。



家庭学習振り返り週間

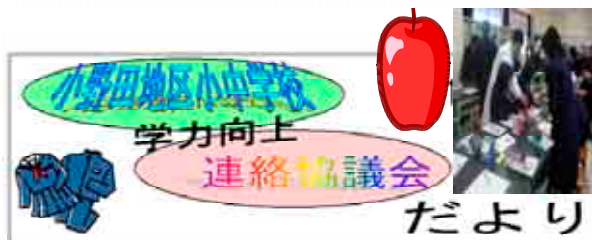
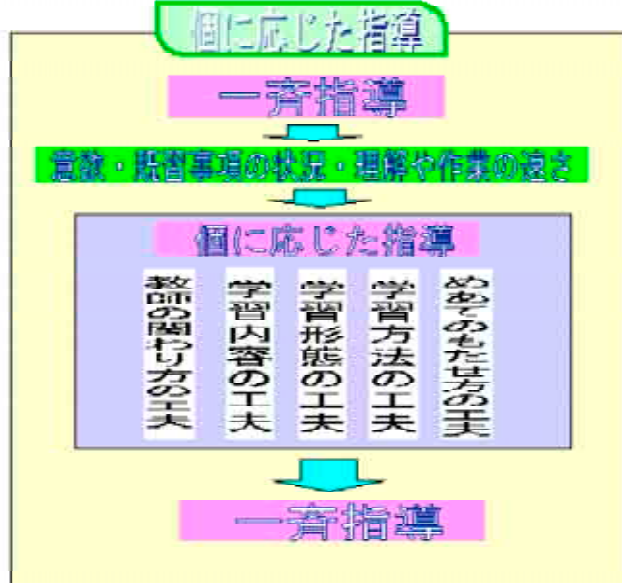
学年ごとに「振り返りカード」の取組

家庭との連携を図り、意欲を喚起する。

学習活動を根底で支える **望ましい学習習慣の育成**



平成19年度 学力向上に向けた特色ある取組  
**加美町立小野田中学校**  
 「実践研究と小・中学校の連携した取組について」



**小野田地区小中学校学力向上連絡協議会」ってなあに？**

小野田中学校と、小野田中学校区の3つの小学校計4校が連携して、小野田地区の児童生徒の学力向上のために、力を合わせて行こうという組織で、加美町教育委員会の指導のもと、平成19年4月に発足しました。

**なぜできたの？** ……

宮城県では、小学校5年生・中学校2年生を対象に年1度「学習状況調査」というものを実施しておりますが、加美町の結果は、県の平均より平成17年度が16.4%減、平成18年度が13.6%減と、必ずしも芳しくありません。

そこでまず、小野田地区の小中学校が協力し、授業の進め方や、教師の資質向上のための研修会を開くなどとして、児童生徒の学力向上のために連携して行こうということ、この連絡協議会を立ち上げることにしました。

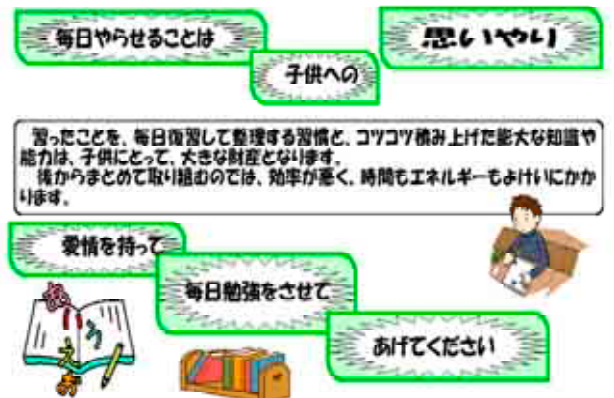


- どんなことをするの？**
- 4校合同で先生方の「授業づくり(研修会)」を行います。  
 ・先生たちが「わかる」「できた」と実感できる授業をのぞいて、教師の授業力の向上に努めます。  
 ・4校で授業を企画して、指導力を高め合います。  
 ・実践授業をもとに、検討会を開いて、分かれやすい授業づくりに努めます。
  - 4校PTAが合同で家庭教育・家庭学習の研修会を行います。  
 ・「子供たちの学力の低下は？」「学力向上に向けて学校では何をしているの？」「家庭学習の支援は？ 親は何をすればいいの？」など、身近な疑問や問題について、特に課題を挙げて、保護者と教師がともに学ぶ機会をもちます。
  - その他  
 ・小中学校の先生が教え方を一緒に考え集まって授業を行ったり、出題授業を行ったりします。

**家庭学習の充実のために**

家庭学習の充実、学力向上の重要な手だての一つです。そのポイントは、次の2点です。

- ① 「生活のリズムを整える」  
 ・一定の生活リズムを決めて、家庭学習の時間を確保します。  
 ・例えば、小学生なら「通学したる時から、6時までの1時間は家庭学習の時間にする」など、家族で約束をしっかりと決めておくのが良いでしょう。
- ② 「生活のリズムを整える」  
 ・「勉強」「早起き」「朝ご飯」の習慣作りにも関係し、生活のリズムを整えることがあての成果となります。
- ③ 「撮影すること」「褒めること」  
 ・「頑張ったよ」と、指示がけしてほかにするのではなく、「おれこれ、どんなふうにかきましたか？」など、一つのことを褒めてあげることが、子どもとやる気の上で大切です。  
 ・見てあげたら、「できたよ良かったね」「昨日よりここがよくなったね」など、具体的に褒めてあげると、生徒たちは、ますますやる気になります。



**小野田地区小中学校学力向上連絡協議会**  
 (小野田中学校・小野田小学校・西小野田小学校・東小野田小学校 後援 加美町教育委員会)

事務局 〒981-4341 加美郡加美町字中野23の4-1 加美町立小野田中学校  
 TEL: 02230-67-7100

確かな学力

かかわり合うことの価値

- ・ 集団の中で、自分の考えを友達と磨き合える
- ・ 新たな問題解決の道筋や方法等が習得できる
- ・ 課題が明確になったり、解決されたりする
- ・ 友達の考えや意見を真摯に受け止める態度が育つ
- ・ 個性を引き出し、それを伸ばす
- ・ 友達の存在に新たな価値を見出せる
- ・ コミュニケーション能力、豊かな人間関係が形成される

なぜ「かかわり合い」  
が学力向上につながるのか？

<研究主題> 自ら考え、表現する児童の育成  
—国語科，算数科におけるかかわり合いを生かした授業改善を通して—

小・中連携の推進

- 基礎・基本の系統の把握
- 合同授業研究
- 交流授業
  - ・ TT指導
  - ・ ゲストティーチャー

かかわり合いを生かした授業改善

- 効果的なかかわり合いの工夫
  - ・ 単元の構想
  - ・ 1単位時間の構成
  - ・ 学習形態 (ペア，小集団，一斉)
- 課題の工夫
  - ・ 興味・関心，学習意欲
  - ・ 考え方の多様性
- 自己，相互評価の工夫

家庭学習の定着

- 家庭学習カードの活用
- 児童，保護者の意識の啓発
  - ・ リーフレット
  - ・ 学習の手引き
  - ・ 研究日より
- 家庭学習課題の工夫

学習マナー，学習ルールの徹底

スキルタイム

基礎的・基本的な知識・技能の習熟

パワーアップタイム

定着の不十分な単元の補充的な学習など

読書タイム

読書習慣の育成

発表集会

学習成果や取組の発表の場



平成19年度 学力向上に向けた特色ある取組

# 栗原市立鶯沢中学校



## 研究主題

# 「確かな学び」をはぐくむ学習指導の工夫

## 研究の内容と方法

### 〔基礎・基本の定着〕

- (1) 生徒一人一人の学習状況の的確な把握・活用
  - ① 生徒，保護者の意識調査の実施，分析，活用
  - ② 総合学力調査（B社）や各教科による実態調査の実施，分析，活用



- (2) 基礎・基本の定着を図るための授業の質的改善
  - ① 「確かな学び」をはぐくむ指導方法の工夫
    - 「指導過程の基本形」の作成
  - ② 「確かな学び」をはぐくむ指導体制の工夫
    - 複数の教師による指導



### 〔学習習慣の確立〕

- (3) 学習習慣形成に向けた指導の充実
  - ① 「確かな学び」をはぐくむ学習習慣の確立
    - 学習規範の形成に向けた資料の作成，活用
  - ② 家庭における学習習慣の確立
    - 「学習と生活の記録」の作成，活用
  - ③ 学習環境の整備
    - 「鶯タイム」の設定，活用
    - 「教科の部屋」の設置，活用
    - 朝読書への取組

**「学力向上を目指す」確かな学び5箇条**

条	項目	めあて
第1条	授業での学び	自ら課題（目標）を見つけ、探究方法を考え、積極的に解決しよう。
第2条	自らの学び	図書館や教科の部屋等を活用し、進んで学習に取り組もう。
第3条	友からの学び	これまでの学習や友達の見習いを生かし、自分の考えをしっかりと持ちこたえよう。
第4条	家庭での学び	予習・復習を行い、学習の準備をしっかりとしよう。
第5条	学びの広がり	学んだことを学校や家庭生活の中で生かそう。

### 〔小・中連携〕

- (4) 小・中学校での連携した取組
  - ① 指導力向上のための取組
    - 小・中学校合同の授業研修の実施
    - 小・中学校合同講演会の実施
  - ② 小・中学校共通の研究だよりの発行
  - ③ 国語科，数学科における基礎・基本の系統の把握
  - ④ 学習習慣の形成に向けた共通理解



栗原市立鶯沢中学校URL  
<http://academic4.plala.or.jp/~ugu-jhs/>





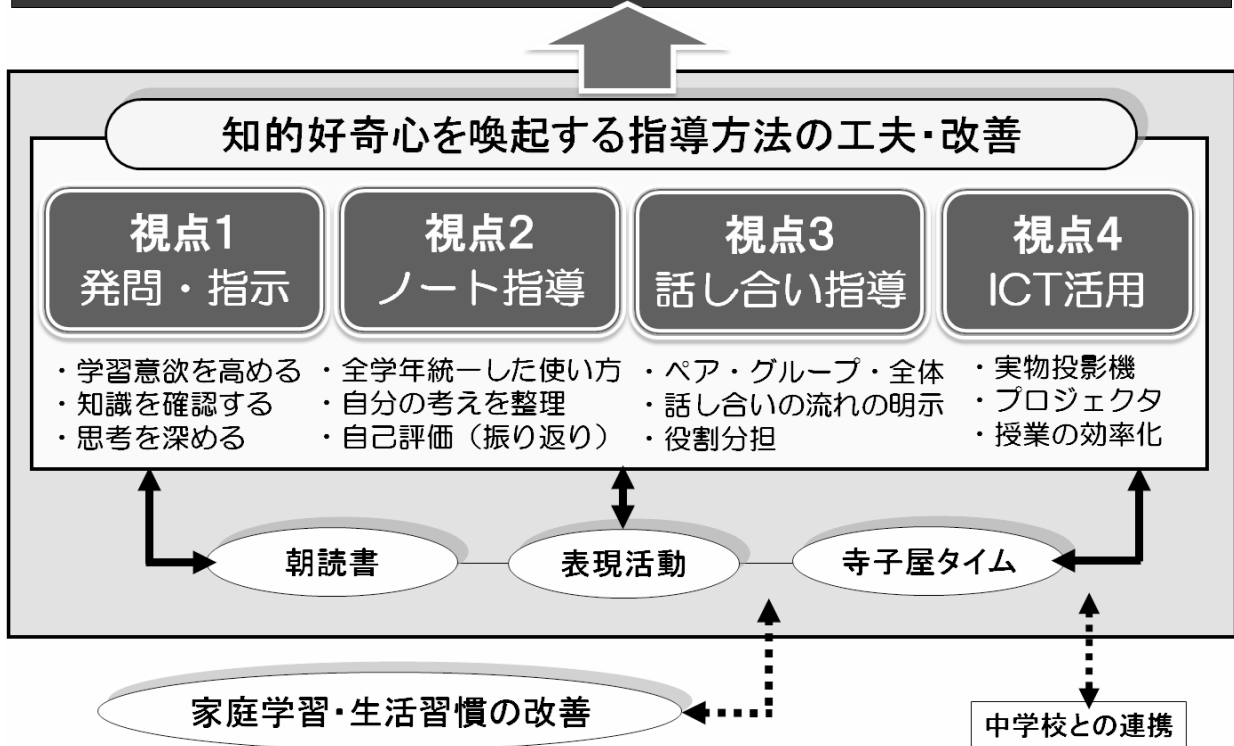
平成19年度 学力向上に向けた特色ある取組

# 登米市立北方小学校



研究主題

## 学ぶ意欲とスキルを高め、 確かな学力を身に付ける子どもの育成



ICTを活用した授業改善



授業研究会の活性化



家庭学習の習慣化



## 研究成果

続きはWebで <http://www.cms-school.jp/kitakata/>

4視点を意識した授業改善、寺子屋タイムでの指導、家庭学習の習慣化などに取り組んだことにより、子どもたちの学習に対する興味・関心が高まった。また、話す、書く、調べる、考えるなどの学習スキルが定着してきている。標準学力検査等の分析結果から、子どもたちの学力は向上傾向にある。



## 研究主題

自ら考え、表現することができる生徒の育成  
—確かな学力の向上を目指す、個に応じたきめ細かな指導の工夫—



単元構想の吟味  
課題解決方学習  
習熟度別・少人数指導  
読書活動・放課後学習



「自ら考える力」「自ら表現できる力」の育成

学習状況調査等の活用  
学習相談の充実  
座席表・集団表

場の設定

評価の工夫

視点

形成的評価を取り入れた指導  
授業評価を取り入れた授業改善  
自己評価を生かした授業

学びの把握

家庭地域との連携



基礎的・基本的知識・技能の習得

家庭学習の習慣化への工夫  
学力向上の保護者・地域への啓発  
地域の小・中・高校との連携



## 目指す生徒像

進んで、学習活動に取り組もうとする生徒  
課題意識をもち、見通しをもって、適切な手段を用いて解決できる生徒  
自分の考えを発表をしたり説明することができ、他の考えに対し意見を述べるができる生徒

# 石巻市立広瀨小学校

学ぶ楽しさを感じ、確かな学力を身に付ける児童の育成  
～国語科・算数科の指導の工夫を通して～

学ぶ楽しさ・確かな学力

楽しさを  
感じさせる  
授業づくり

〔主な取組〕

- 授業づくりの基本構想の構築  
(PDCAサイクル)
- 基本授業スタイルの構築
- 指導方法の工夫(教材や課題提示の工夫, 考えを交流させるための工夫等)
- 学習環境の充実

【さし絵の提示(国語科)】



【学び合い】



学習習慣  
づくり

〔主な取組〕

- ドリームタイム(朝の読書)
- チャレンジタイム(漢字・計算練習)
- パワーアップ教室(放課後学習)
- 「家庭学習の手引き」「生活がんばりカード」の作成と活用

【ドリームタイム】



【パワーアップ教室】



【家庭学習の手引き】



小・中を  
つなぐ  
連携づくり

〔主な取組〕

- 中学校教員とのTT授業の実施  
(国語科)
- 授業体験等による中学校との交流事業の実施(6年生対象)

【中学校教員とのTT授業(国語科)】



【中学校授業参観及び授業体験】



# 石巻市立北村小学校 「小・中連携授業の実践」

## 単元系統表の作成

- 3小（広瀬小・北村小・前谷地小）の5・6学年児童の算数の実態把握（学力検査，日常観察等）
- 河南西中1学年生徒の数学の実態把握（学力検査，日常観察等）

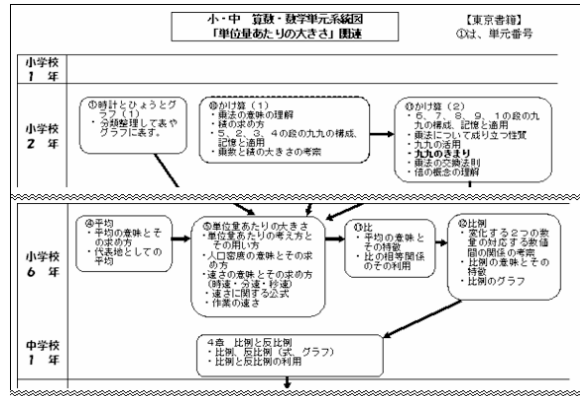


### 単元系統表の作成

- ・つまずきの多い単元を洗い出し，その中から「分数」「面積」「単位あたりの大きさ」「体積」の系統表を作成。



### 「単位量あたりの大きさ」単元系統表



## 小・中連携授業の意義

- 児童にとって
  - ・中学校の学習に対する不安感を解消し，期待をふくらませ，各教科への興味関心を高める。
  - ・中学校の学習内容に触れ，学習への心構えを持つ。
- 教員にとって
  - ・小・中学校の児童の実態を把握する。
  - ・小・中学校教員が一緒に教材研究をすることで，学習の系統を把握し，指導方法の交流を図り授業力を高める。



## 連携授業実践事例

### 6年 小単元「人口密度を求めよう」

#### ① 小・中連携授業に当たって

- ・TTの役割分担としては，前半はT1である小学校教員が主に授業を進め，T2である中学校教員は主に個別指導にあたり，後半はT2が練習問題を提示し，学習内容の中学校への繋がりを伝え，学習意欲を喚起することができるようにした。

#### ② 本時までの流れ（打ち合わせ回数10回）

- ・内容—今後の予定の確認，授業参観，実態把握，T2としての授業，授業構想，指導案の検討，模擬授業準備等

#### ③授業の実際

- ・「確かめる段階」「まとめる段階」—T1：人数をそろえた時は，面積が小さい方が混んでいること，面積をそろえた時は，人数が多い方が混んでいることを再度確認しながら，それぞれの数値の意味を考えさせ人口密度についてまとめた。  
T2：イメージ図を準備し，必要に応じて机間指導で活用。白地図を準備し，単位量あたりを求める問題が中学校の学習に結び付いていることや，生活場面の中でも用いられることを伝え，学習意欲を喚起した。

#### ④成果と課題

- 児童は中学校の学習に対して興味を持つことができた。単元系統表を作成し，共に教材研究を進めたことで，学習の系統が明確になった。授業づくりの過程で教材教具の工夫，発問の吟味，学習形態の工夫等，指導方法の交流が図られた。

- どの単元が連携授業に適しているのか考えていく必要がある。
- 打合せの時間の確保が難しく，設定に工夫が必要である。



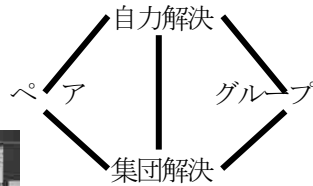


平成19年度 学力向上に向けた特色ある取組

# 石巻市立前谷地小学校

研究主題

分かる喜びを感じ、意欲的に学ぶ児童の育成  
～算数科における「学び合う授業づくり」と「学習環境づくり」を通して～



## ○学びを支える学習環境の工夫

### ①補充学習の工夫

- ・学習タイム
- ・放課後学習
- ・長期休業中のスクール

### ②教室環境の充実

- ・教室の算数コーナー
- ・算数ルーム
- ・おもしろ算数コーナー

## ○自ら考え、学び合う授業づくり

### ①問題提示・教材教具の工夫

### ②算数的な活動の工夫

### ③学び合いの工夫

- ・学習形態の工夫
- ・話し合いを深める工夫
- ・学習用具の工夫

## 視点2

家庭学習の支援

## 視点1

授業の工夫・改善

## 視点3

小・中のなめらかな連携

## ○家庭学習の工夫

- ①授業とかかわった宿題用学習プリント
- ②自主学習への取り組み

## ○家庭学習の啓発と生活習慣の改善指導

- ①「家庭学習の手引き」
- ②生活時間改善表の配布と学活指導
- ③講演会、おたより

授業とかかわった宿題用学習プリント

○復習型

○生活型

○予習型

## ○系統性を意識した授業づくり

- ①教科の系統性を意識した授業
- ②小・中連携授業

## ○中学校区共通の意識・実態調査

## ○相互の研修

授業研究会や講演会への参加

## ○交流事業の実施

小6児童による中学校訪問

# 石巻市立河南西中学校 「学び合い」を取り入れた学習過程の工夫

## 本校の「学び合い」のとらえ

生徒が、自分の考えをしっかりと持ち、互いを尊重し合いながら交流する中で、より確かな知識や高い技能を獲得したり、思考を深めたり、広げたりすることととらえる。

生徒が学校、教室で学習することの最大の意義は、多くの友だちとともに学ぶということであると考え。そしてそれは、家庭等での個人学習では得にくいものである。授業の中でできるだけ多く「学び合い」を取り入れ、生徒同士の学びを大切にしながら授業を構成していくことで、確かな学力を育成していくことができると考えた。

## 「学び合い」を取り入れる場合の留意点

### (1) 適切な学習課題

お互いの考えや意見を交流する場合、ある程度の学習抵抗を伴う学習課題を提示する。

### (2) 自分の考えを持たせる場

意見の交流を行う前に、個としての考えを明確にしたり、まとめたりする時間を設定し、自分の考えを持たせることを基本とする。

### (3) 自他の考えを大切にする姿勢

学び合いを行う際は、自分の考えを分かりやすく伝えることや、お互いの考えを尊重し、それをお互いにより良いものとしようとする態度を大切にする。

### (4) しっかり話し、しっかり聞く

発表の場面では友だちに聞こえる声量でしっかり話すこと、聞く場面では友だちの方を向いて聞くことを大切にする。

### (5) 学習形態の工夫

Tの字形の机の配置等、生徒同士が意見交流しやすい机の配置に配慮する。



\* T字形の机の配置での学び合い

## 「学び合い」の学習効果

### (1) 所属感、有用感の実感

誰もが学びに参加しているという所属感、有用感を実感できる。

### (2) 分かるまで聞ける

分からないときは分かるまで仲間に聞くことができる。

### (3) 学びの深化、広がり

お互いに知恵を出し合うことで、学びを深めたり、広げたりすることができる。

### (4) 自信を持って発表

他の意見に触れながら、自分の考えを深めたり、広げたりすることで自信を持って発表することができる。

## 学習過程の各段階における「学び合い」の効果

### (1) 課題を「つかむ」段階

課題に対する疑問点を出し合ったり、友だちと問題意識を共有したりすることで、追求すべき課題をより明確にとらえることができる。

### (2) 課題を「追求する」段階

友だちと知恵を出し合い、自分の考えと友だちの考えとを比較しながら、助け合って課題に取り組むことにより目標にせまることができる。

### (3) 「深める」段階

友だちとの意見交換により、自分の考えを修正したり、補ったりすることをおして、考えを整理したり新たな考えを生み出すことができる。



\* 学びの深化、広がり

## 「学び合い」による学習形態別の効果

### (1) ペア学習

自己を表現することが苦手な生徒にとっては、比較的抵抗感が少ない。演習や技術練習などの何回か繰り返し行うことによって技能を高め、習熟していくような場合にも効果的である。

### (2) グループ学習(3~4人を基本とする)

一人ひとりの自覚や役割、責任が明確となり、個の埋没も生じにくく、相互交流は活性化しやすい。具体物やワークシート等を用いた作業を伴う学習内容の場合にも効果的である。

### (3) 一斉(学級全体)学習

全員が共通の目標に向けて、思考や理解を深めることができる。

# 気仙沼市立九条小学校

学ぶ楽しさを味わいながら、確かな学力を身に付ける児童の育成  
— 感じ、考え、生かすことを支援する算数科の指導を通して —

## 視点1 感じ、考え、生かすことを支援する授業設計

### ① 数や量への感覚を働かせ、進んで学習に取り組ませる指導の工夫

題意を把握させ、意欲をもって課題に取り組ませるために、問題提示の工夫や算数的活動を取り入れました。



### ② 考えを表現し学び合わせる指導の工夫

学習内容を理解させ、考える力を伸ばすために、次の支援を行いました。

- ・児童に自分なりの考えをもたせ表現させる支援
- ・学び合わせるための支援



### ③ 確かに理解させる指導体制の工夫

1時間ごとの評価規準や児童の実態に応じて指導体制を変えました



### ④ 新しい学びに生かす評価の工夫

児童の学びを見取って支援に生かすために、単元の指導と評価の計画を作成しました。また、児童に考えを表現する力や自分の考えを見直す力をつけるために学習感想を取り入れました。

## 視点2 学びを定着させる場の設定

## 視点3 学びを支える学校間の連携

がんばりっ子カード

5月	算数	国語	英語	理科	社会	総合	道徳	体育	音楽	美術	保健	生活
5/1	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/2	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/3	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/4	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/5	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/6	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/7	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/8	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/9	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/10	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/11	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/12	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/13	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/14	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/15	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/16	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/17	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/18	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/19	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/20	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/21	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/22	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/23	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/24	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/25	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/26	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/27	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/28	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/29	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
5/30	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

学習内容の習熟を図るために、繰り返し学習や補充学習を行いました。家庭学習にも取り組みました。



中学校での学習状況のフィードバックや、6年生児童の中学校見学会を行いました。高校生による学習支援ボランティアも行いました。



平成19年度 学力向上に向けた特色ある取組

# 気仙沿市立条南中学校

〒988-0053 気仙沼市田中前四丁目8番地

TEL 0226(24)3131 Fax 0226(24)3132

メール jyounan-jh@blue.ocn.ne.jp



## 研究主題

「自ら学ぶ生徒をはぐくむための指導の工夫」

— 学ぶ楽しさやわかる喜びを体感させる授業づくりを通して —

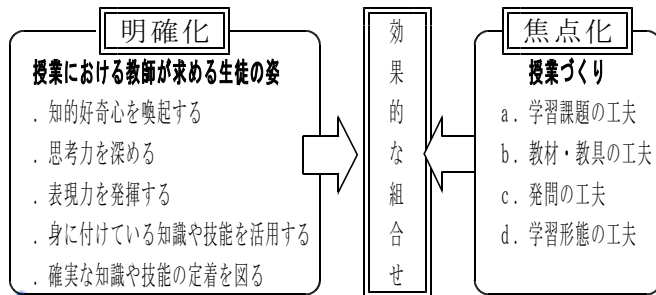
研究で目指す生徒像  
(「自ら学ぶ」生徒)

学ぶことに意義や喜びを見いだす生徒  
粘り強く課題解決に取り組む生徒  
深く思考する生徒

### 主な取組Ⅰ 『授業の「質」を高める』ことができる！

#### 明確化・焦点化を図った指導の工夫

単元全体を「効果的な組合せ」に基づいて1時間毎に分析。  
授業における生徒の姿を「明確化」し、授業づくりを「焦点化」することにより、授業のねらいを達成できる。

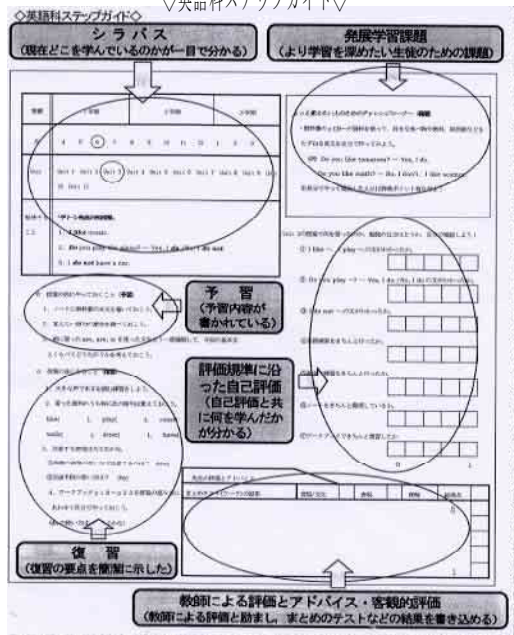


◇題材における「効果的な組合せ」例◇

単元	1. 基礎・基本	2. 追加学力	3. 応用	4. 発展
国語	基礎的な読解力、表現力を身に付ける。	追加の読解課題、表現課題を設定し、学習意欲を高める。	応用課題を設定し、学習内容を定着させる。	発展課題を設定し、学習内容を深める。
算数	基礎的な計算力、図形理解力を身に付ける。	追加の計算課題、図形課題を設定し、学習意欲を高める。	応用課題を設定し、学習内容を定着させる。	発展課題を設定し、学習内容を深める。
理科	基礎的な観察力、実験力、思考力を身に付ける。	追加の観察課題、実験課題を設定し、学習意欲を高める。	応用課題を設定し、学習内容を定着させる。	発展課題を設定し、学習内容を深める。
社会	基礎的な読解力、表現力を身に付ける。	追加の読解課題、表現課題を設定し、学習意欲を高める。	応用課題を設定し、学習内容を定着させる。	発展課題を設定し、学習内容を深める。
英語	基礎的なリスニング力、スピーキング力を身に付ける。	追加のリスニング課題、スピーキング課題を設定し、学習意欲を高める。	応用課題を設定し、学習内容を定着させる。	発展課題を設定し、学習内容を深める。

### 主な取組Ⅱ 『生徒が自ら進んで学習に取り組む！』ことができる！

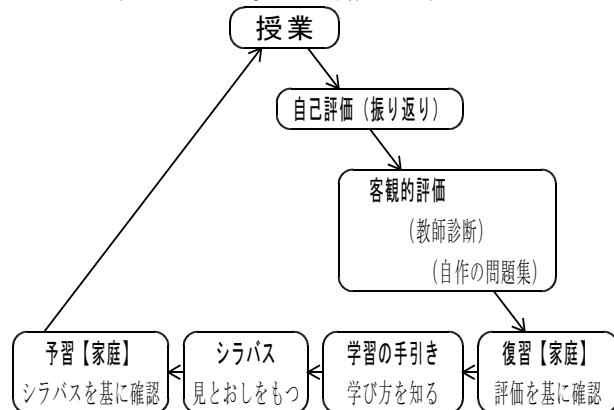
#### ◇英語科ステップガイド◇



#### 授業と家庭学習の連動を図った ステップガイドの作成と活用

「生徒の学びを導く」ための各教科における学習の手引き。  
各教科担当者が単元毎に作成。共通内容は「シラバス」  
「自己評価」「客観的評価」。

#### ◇「ステップガイド」における学習サイクル◇



# Ⅷ 学力向上拠点形成事業 推進校報告

## 2 各推進校の報告書



**学校名** 丸森町立丸森小学校  
**所在地** 伊具郡丸森町字菱川内39-1  
**電話番号** 0224(72)2140

## 1 学校の実態

児童数218人 職員数21人

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援	合計
児童数	33	32	41	31	39	28	4	208
(分校)	5	4	0	1				10
学級数	1	1	2	1	1	1	3	10
(分校)	1		1					2

## 2 研究の概要

### (1) 研究主題

主体的に考え、ともに学ぶ児童の育成～伝え合う活動による学び合いを通して～

### (2) 研究教科

国語科，算数科

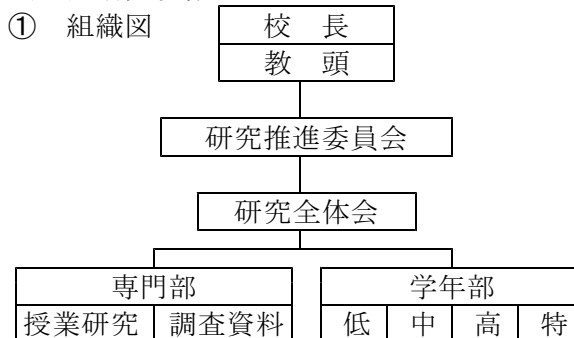
### (3) 主題設定の理由

学校教育の今日的課題は、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの「確かな学力」を育成することである。

本校児童の実態として、学習に対する興味・関心が高まり、意識調査では、9割の児童が学校の勉強に前向きな姿勢が見られる。標準学力検査でも、各学年ともに全国得点率と同等かそれ以上の数値を示すなど、前年よりも向上している。しかし、課題解決の見通しをもち筋道立てて考える力や自分の考えを進んで述べ合い、集団でよりよい解決を図ろうとする姿が十分には定着していない。

学び合いに対する意識は高まりつつあるが、自分の考えをまとめたり説明したりすることに苦手意識をもつ児童が見られ、表現力の育成も併せて行っていく必要を感じたことから、昨年までの算数科に加え、国語科での取組も行うことにした。特に「話すこと・聞くこと」へ焦点を当て、自分の考えを適切に表現したり相手の考えを正確に理解したりする「伝え合う力」を高めることで、それを基盤とした学び合いにつなげていこうと考えた。これまで以上に児童間の関わりを大切にしたい。学び合い高め合える学習集団づくりに向けた取組を目指すものである。

## (4) 研究組織



### ② 各部活動内容

<研究推進委員会>

研究推進計画，公開研究会の企画

<研究全体会>

計画案についての協議，共通理解・行動

<授業研究部>

授業研究，校内研修に関する企画・運営

<調査資料部>

各種調査計画立案と実施，資料管理

<学年部>

授業研究実践とまとめ，学年部研修

## (5) 研究主題について

### ① 「主体的に考え」とは

自ら進んで課題解決に向かおうとする姿、既存の知識、技能を基に思考力を駆使して課題解決に取り組む姿をとらえる。

### ② 「ともに学ぶ」とは

集団解決の場で友達と関わり、多様な見方考え方に触れながら互いの考えを共有したり検討したりすることで理解を深め、学習内容を確実なものにする学びの姿をとらえる。

## (6) 研究目標

一人一人の考えを基にした学び合いのある授業の工夫を行うことにより、主体的に考え、ともに学ぶ児童を育成する。

## (7) 研究の視点

指導と評価の一体化の観点から、国語科、算数科ともに以下の視点を設け、研究目標の達成に迫るものとする。

### 1. 伝え合う活動を取り入れた授業の工夫

授業の改善により、学び合いのある学習集団を形成し学習内容の確実な定着を図る。

### 2. 指導に生かす評価の工夫

一人一人の学びを見取り、それを個に応じた支援に生かす。



### 3 研究成果

(1) 学習意欲向上への取組(国語科) 国語科における視点1, 視点2を以下のように設けた。

国語科 研究の視点		伝え合う力を育てる授業の工夫			
		低学年部	中学年部	高学年部	特別支援部
伝え合う活動を取り入れた授業の工夫 【視点1】	<ul style="list-style-type: none"> <li>「話すこと・聞くこと」に関する行動目標から、単元を通して身に付けさせたい力を意識して取り組ませる。</li> <li>基本的な話形の指導を行い伝え合う活動に生かしていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教材文から自分なりに読み取った内容を伝え合う場を単元の中に設け、互いの考えの交流を図りよさを認め合う。</li> <li>「話すこと・聞くこと」に関する行動目標から重点目標を掲げ、伝え合う活動に生かすようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教材文の読み取りを基に、児童が関心をもったり問題意識を感じたりするような事柄を話題とした伝え合う場を単元の中に設け、互いの考えの交流を図りよさを認め合う。</li> <li>「話すこと・聞くこと」に関する行動目標から重点目標を掲げ、意識して取り組ませることで、よりよい伝え合いができるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>見る、触る、行うなどの共通体験を基に、話したり聞いたりする活動を行う生活単元を設定することにより、伝え合う活動を高めていく。</li> <li>「話すこと・聞くこと」に関する行動目標を個に応じて意識させ、自分の言葉や文章で伝えることができるようにする。</li> </ul>	
指導に生かす評価の工夫 【視点2】	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習の様子を見取り、児童の反応に即応できる座席表を活用することにより、個に応じた支援をしていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習の様子を見取り、児童の反応に即応できる座席表を活用することにより、個に応じた支援をしていく。</li> <li>発言内容や授業感想から、課題に対する児童の考えがどのように変容したか見取り、次時の指導に生かす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習の様子を見取り、児童の反応に即応できる座席表を活用することにより、個に応じた支援をしていく。</li> <li>発言内容や授業感想から、課題に対する児童の考えがどのように変容したか見取り、次時の指導に生かす。</li> <li>学習計画表を活用し、単元の見直しをもちせたり、授業の振り返りをさせたりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習活動の随所で、個に応じてそれぞれのがんばりを認め、児童にはっきりと伝わるよう具体的に賞賛する。</li> </ul>	

#### 【視点1】伝え合う活動を取り入れた授業の工夫

##### ① 伝え合う場を効果的に生かす単元構想

教材文の読み取りを基に、問題として意識したことや考えを深めたいことを話題として取り上げ、互いに考えを伝え合う活動を通してよりよい解決を図ろうとする学習を目指した単元を構想し実践してきた。

##### ② 「話すこと・聞くこと」に関する行動目標の作成と活用

相手、目的、意図などを意識し、適切な話し方と正確な聞き取り方、そして相互の理解を目指す行動目標を作成し、授業での具体目標としてその活用を図ってきた。

中学年児童	高学年児童
話すこと・聞くことに関心をもち、進んで伝え合うことができる児童。	話すこと・聞くことに意欲をもち、目的をもって伝え合う児童。
1. 表情や視線に注意して話す。 2. 中心点をはっきりさせて話す。 3. まとまりを考えて話す。 4. 理由や根拠を示し、筋道を立てて話す。 5. 聞き手の理解を確かめながら話す。 6. 必要に応じて資料を示しながら話す。 7. 相手や場に応じて丁寧な言葉で話す。	1. 態度や表情、視線などに注意しながら話す。 2. 聞き手に分かりやすく話そうとする。 3. 事実と感想、意見の組み立て、結論や山場の位置付けなど話の組み立てを工夫しながら話す。 4. 聞き手の理解度に合わせ、反応に応じて話す。 5. 必要に応じて資料や情報機器を活用しながら話す。 6. 相手や目的、場に応じて言葉遣いを考えたり、常体、敬体とを使い分けて話す。
1. 話し手の目を見て、表情や態度、言葉で反応しながら聞く。 2. 話の中心を考えながら聞く。 3. 分からないことは尋ねながら聞く。	1. 話し手と視線を合わせ、表情や態度、言葉で反応しながら聞く。 2. 話し手の意図を考えながら聞く。

##### ③ 話し方メモ・聞き取りメモの活用

音声言語による表現がより効果的になるよう、自分の考えを予め簡潔にまとめておく「話し方メモ」、相手の考えの要点をとらえる「聞き取りメモ」を活用した。

#### 【視点2】指導に生かす評価の工夫

##### ① 指導に即応する座席表の活用

授業での児童の学びを見取り、それを基に賞賛や助言、整理などすぐに指導に生かすための座席表を活用した。座席表には本時に関わる児童の実態と教師の願いを明記しておくとともに、見取りを簡潔に記入し適宜指導、助言などに生かした。(以下、6年生生活用例)

番号	話す	聞く	発表	評価欄
A:十分満足できる B:おおむね満足できる C:努力を要する				
7	B	B	B	話しこと・聞くことに関する実態及び支援事項 話しこと・聞くことに関する実態及び支援事項 評価欄
8	B	B	B	友達のと自分の考えを比べながら聞くことができるので、自分なりの考えをまとめ発表につなげたい。 ① 大塚 大樹
9	B	B	B	発表に苦手意識しているが自分の言葉でできるよう励みたい。 ② 佐々木 心菜
13	B	B	B	聞くことに集中できないとき、声がけをして支援をさせた。 モを活用した発表をさせた。 ③ 佐藤 大樹
14	B	B	A	自分なりの発想で進んで発表することができる。具体的な話題を発表できるよう支援する。 ④ 佐藤 大樹
15	B	B	B	自分の考えが伝いに話し方ができ、援をする。 ⑤ 佐藤 大樹

##### ② 授業改善に生かす授業感想

授業終末部において、学習を振り返り、自分の取組や考えを確かなものにするを目的として授業感想に取り組ませる。分かったことやもっと知りたいこと等を文章で表現させ、その内容から児童の理解度や意欲をとらえ、次時の授業に生かすようにしてきた。

##### ③ 学習計画表の活用

単元全体の学習計画表を作成し、単位時間ごとの学習内容や進め方について児童が見通しをもって取り組めるようにした。同時に、前時までの学習を振り返らせ、理解の程度や学習意欲などの自己評価を行わせた。必要に応じ、次時に関わる設問を予習的課題として計画表に明記し、家庭学習で取り組ませた。

(2) 学習意欲向上への取組(算数科) 算数科における視点1, 視点2を以下のように設けた。

算数科 研究の視点				
一人一人の考えを基にした学び合いのある授業の工夫				
	低学年部	中学年部	高学年部	特別支援部
伝え合う活動を取り入れた授業の工夫 【視点1】	・ 絵や図、操作活動を基に、自分の考えや疑問を話したり相手の話をしっかり聞いたりする伝え合う活動を行わせ、課題を解決できるようにする。	・ 自分の考えを図や式、操作などで表現し合う中で、論点を明確にした伝え合う活動を行わせ、よりよい解決ができるようにする。	・ 自力解決の場で、主体的な算数的活動に取り組みせ、それを基に論点を明確にした伝え合う活動を行わせ、よりよい解決を図るようにする。	・ 見る、触る、行うなどの具体的な体験を生かした学習の展開を工夫する。 ・ 自分の考えを絵や言葉で表現できるようにする。
指導に生かす評価の工夫 【視点2】	・ 学習の様子を見取り、児童の反応に即応できる座席表を活用し個に応じて支援する。 ・ 本時の振り返りに、算数日記やチェック問題に取り組みせることにより、学習への意欲や理解を把握し、次時の指導に生かす。	・ 自力解決における児童の考えを座席表で見取り、個に応じた支援をする。 ・ 学習を振り返っての授業感想を分析し、意欲や理解の様子を把握し次時の指導に生かす。	・ 座席表を効率的に活用して自力解決における児童の考えやつまずきを把握し、個に応じた支援をする。 ・ 学習を振り返っての自己評価、授業感想などを分析し、意欲や思い、理解の様子を把握し次時の指導に生かす。	・ 学習活動の随所で、個に応じてがんばりを認め、児童にはっきりと伝わるよう具体的に賞賛する。

【視点1】 伝え合う活動を取り入れた授業の工夫

① 自分なりの考えをもたせる算数的活動  
課題の把握から自力解決、学び合いによる集団解決、結果の共有といった問題解決的な学び方を意識させるとともに、特に自力解決の場で効果的な算数的活動に取り組みせ、自分なりの考えをもって伝え合う活動に臨むことができるよう支援の在り方を工夫した。

問題場面との出会い	知的好奇心の喚起 ・ 既習との対比 ———— できる問題→できない問題 ・ 条件不足 ———— 数値などが不足し ・ 特殊から一般へ ———— 割り切れる→割り切れない 問題場面のイメージ化 ~ 自分の言葉
既習事項と比較 既習体験の想起	
課題の把握	課題提示の工夫 「今日の課題は～です」教師主導の提示 ⇄
解決の見通し 自力解決 自分なりの考えをもつ	算数的活動を通して、自分なりの考えをもつ 数と計算 絵や図にかく ———— 位の部屋、線分図、方眼紙 かわり方を調べる ———— 数直線、面積図、等積変形 置き換える ———— 小数→分数、平行移動 式に表す ———— 公式、言葉の式、公式化 操作する ———— 半具体物
伝え合う活動による考えの交流 多様な考え よりよい考えへの気づき 「は、わ、い」	【伝え合う活動】 お互いの考え(自力解決した)をペア、グループの活用 ~ 自分の考えを語り、「つなぐ話し方」 ~ 友達考えに反応し  (児) いろいろな考えを「は・わ・い」の観点から「は・わ・い」～はやく (教) 多様な考えを整理、検討し、子どもの考えの個別化の可能性を多様性 ~ 「13-9」

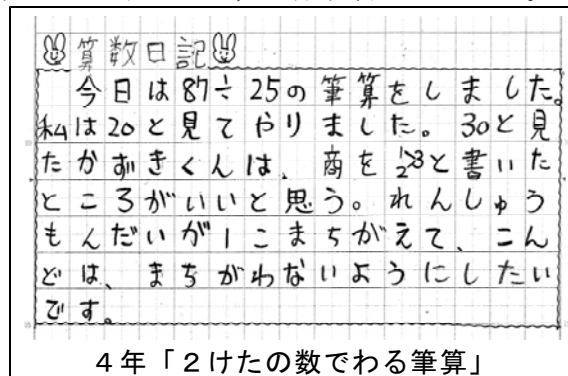
② 伝え合う活動による学び合いの工夫  
学び合いの場で、「はやくできる、わかりやすい、いつでも使える」の観点のもとに互いの考えを交流して、よりよい解決を図るための伝え合う活動を設け、児童の多様な考えを比較、検討、整理して課題の解決を図った。

③ 学習形態の工夫  
学習内容の理解や習熟の程度に応じ、一斉指導やT T, 少人数指導などの学習形態を計画的に展開し、個に応じた指導や集団での学び合いを支援した。

【視点2】 指導に生かす評価の工夫

① 指導に即応する座席表の活用  
児童の解決方法や思考過程を見取り、それをもとに助言や賞賛、指示などの指導に生かすために座席表を活用した。座席表には、本時に関わる児童の実態と教師の願いを明記しておき、見取りを記号化するなどして簡潔に記入した。T Tの際には分担して見取って情報交換を行うなど効率的な活用を図った。

② 授業改善に生かす授業感想(算数日記)  
授業の終末部に、学習を振り返り、自分の考えを確かなものにするを目的として授業感想に取り組みさせた。分かったことや難しかったこと、友達のよさ等を表現させ、その内容から児童の意欲や理解の様子をとらえ、次時の課題を設定したり未習熟なところを補充したりするなど、授業改善に生かした。



③ 学習計画表の活用  
学習内容や指導体制(一斉, T T, 少人数)について児童が見通しをもって取り組めるように、単元全体の学習計画表を作成し活用を図った。計画表には学習の振り返りのできる項目を設け、児童自身が自己評価できるようにした。



### (3) 小・中学校の連携した取組

「確かな学力を身に付け、未来を拓く丸館っ子の育成」を共通の研究主題に、館矢間小学校、丸館中学校との連携を図ってきた。

本年度は「授業の工夫改善」と「学習習慣の定着」を連携の視点とし、重点事項として以下の4点から主題に迫ることとした。

- ①学習指導における連携  
(国語, 算数・数学の教科間の連携)
- ②学習習慣の形成と定着における連携  
(学校及び家庭での学習習慣づくり)
- ③教員間の交流における連携  
(授業交流, 合同研修, 情報交換など)
- ④児童生徒間の交流における連携  
(丸館っ子6年生集合, 特別支援交流)

学習指導における連携では、国語部会、算数・数学部会を組織し、小・中9年間を見据えた取組を行った。国語部会では、学習カード等の工夫により、音読指導と漢字学習の充実を図ってきた。(以下、1年生活用例)

	月 9/17	火 9/18	水 9/19	木 9/20
よみかた	サラダでいんぎ			
よみかた (音・まじり・7音)	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
かいほう	5	7	6	
しゅくばい (音読・音読)	○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
おてづかい (くらあう...)	🌸	🌸	🌸	🌸
ぬら (9) ぬら (6)	○	○	○	○
おうちのひと	3連休中は新緑の季節がはじまり、自然の恵みを感じながら、おうちで過ごす時間も大切にしたいです。丸館っ子らしい生活を送りたいです。			
せんせい	先生は、子どもたちが、おうちで学習する姿を、とても楽しみにしています。毎日の学習の様子を、ぜひおうちで話してください。			

算数・数学部会では、丸館中学校区児童生徒の標準学力検査の結果から、算数・数学においてつまずきやすい傾向のある内容を洗い出し、「つまずき内容別系統一覧表」を作成し、特に小学校間での授業研究において活用を図り、各校それぞれの手立てを講じてつまずきやすい学習の授業改善に取り組んだ。

学習習慣の形成と定着における連携では、9年間を発達段階で4つに区分して取り組むべき指標を示した「望ましい学習・生活習慣の姿」を小・中共同で作成、活用した。

観点	学年				
	小学校1・2学年	小学校3・4学年	小学校5・6学年	小学校7・8学年	
学習	時間	30分以上	50分以上	1時	
	家庭学習への取り組み	時間を決めて、集中して取り組む。			
生活習慣	内容	音読・読書・漢字練習 計算練習・日記など	音読・読書・漢字練習 計算練習・日記	自主学習	
	食事	朝食は必ず食べる。 できるだけ家族と一緒に食べる。 栄養のバランスを考えて食べる。			
生活習慣	睡眠時間	小学生は8時間から9時間がめやす。 起床時刻を考えた就寝時刻(早寝、早起きを心がける)。 規則正しい生活のリズムを身につける。			
	テレビ・ビデオ・パソコン・漫画・携帯など	ルールは各家庭で話し合って決定する。 時間のめやすは、2時間以内。			
準備物	各家庭で手伝う仕事の内容を決め、発達段階に応じた手伝いを				

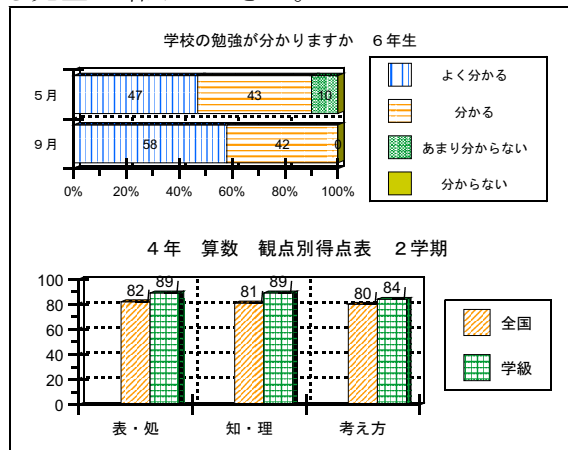
### (4) 家庭学習の習慣化への取組

家庭での学習、生活習慣に具体的なめあてをもたせて取り組ませ、また振り返ることのできる家庭学習カードを学年部ごとに作成した。保護者、教師ともにチェックしたりアドバイスを書き込んだりして活用を図り、成果も上がっている。(以下、5年生活用例)

日	行事予定	準備物	音読(題名)	漢字	宿題	自主学習	音読時間(分)	漢字時間(分)	宿題時間(分)	自主学習時間(分)
1 (金)	プール清掃		しりとり	① ② ③						
2 (土)			① ② ③							
3 (日)	PTAバレー		しりとり	① ② ③						
4 (月)	ホール大会		おはらい							
5 (火)	避難訓練(地震)		おはらい							

### 4 児童の変容

学習に対する児童の関心・意欲が各学年とも向上し、また学習内容が分かると答えている児童が増加してきた。



また、単元テストにおける全国平均との観点別得点の比較でも、国語科、算数科ともに全ての学年で上回ることができた。

### 5 今後の課題と改善策

#### (1) 研究の視点から

伝え合う活動を、よりよい解決を目指す学び合いとするために、自分なりの考えを確かなにもたせるための手立ての工夫や学習意欲の喚起、友達と意見を交流したくなるような場の設定をさらに工夫していく必要がある。

#### (2) 小・中学校の連携から

本年度に実践してきた連携策を今後も継続していくために、無理、無駄のない計画にしていく必要がある。また、小・中学校教員の小中連携に対する意識改革をさらに進めていけるような研修の場を設定していく。

## 6 実践事例

### (1) 授業実践1 5年 国語科 (一斉指導)

「インスタント食品とわたしたちの生活」

<手立て>

- ① 予習課題を基に、小集団で自分の考えを伝え合い、よりよい読み取りを目指す。
- ② 筆者の考えを自分の経験や生活に照らして考え意見を交流する中で読みを深める。

<授業の実際>

- ① インスタント食品の「問題点」について、各自が読み取ったことを発表した。その後、読み取った内容が「問題点」



と言えるかどうかを、司会が中心となり検討し、互いの読み取りの共通点をまとめた。

- ② 以下は、考えを交流する場面での児童のやりとりの一部である。

「カップ麺ばかり食べて頭が痛くなった親戚がいたので、栄養に偏りが出てくる」という筆者の考えに賛成です。」

「栄養の偏りと言うけど、インスタント食品と一緒に肉や野菜を取れば解消されるから、筆者が言うほどは問題ではないと思う。」

<授業の成果と課題>

◇成果

- ・ 予習課題により、自分の考えをもって伝え合う活動に取り組んだことで、自信をもった発表ができた。また、他者との共通点や相違点に気付きやすく、読み取りに深まりが出た。
- ・ 全員で課題解決をし要旨をつかんだ上で自分の経験や生活に照らした意見の交流ができたため、筆者の考えをよりの確につかんだり自分の考えを深めたりすることができた。

◇課題

- ・ 効果的な伝え合う活動を行わせる際には話の内容が課題や筆者の考えからずれないように児童の見取りをしっかりと行い、的確な個別指導や助言を行う必要がある。

### (2) 授業実践2 1年 算数科 (TT)

「14-8のけいさん」

<手立て>

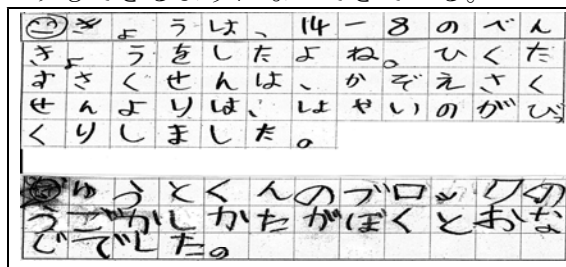
- ① 全体での練り合いの前に、ペアでの伝え合う活動を取り入れることで、全員が自分の考えをもち、全体でのよりよい解決が図れるようにする。
- ② 授業終末部で算数日記を書かせ、学習への意欲や理解の様子を把握し、次時に生かすための手がかりとする。

<授業の実際>

- ① 14-8の計算をブロック操作により考えさせた。「数え作戦(数え引き)」「ひくひく作戦(減減法)」「ひくたす作戦(減加法)」の3通りが見られ、ペアで互いに自分の考えを伝え合う姿が見られた。

その後、全体での検討では、「どの作戦が速くて便利か」という観点で話し合わせた。ブロック操作の回数から「ひくたす作戦が速い」とか「がばっと取れる」といった児童の言葉を取り上げ、減加法のよさを味わわせることができた。

- ② 本時学習を振り返る「算数日記」は、継続して指導してきたことにより、授業の内容や要点等に迫れるものとなってきた。また、「学習したことが分かった」「ここが難しい」という自己評価につながる振り返りもできるようになってきている。



<授業の成果と課題>

◇成果

- ・ 半具体物の操作等、算数的活動に取り組ませたことは、児童一人一人にしっかりと考えをもたせる事につながった。
- ・ 「算数日記」に継続して取り組ませた事で、学習内容や意欲について振り返ることができるようになってきた。

◇課題

- ・ ペアでの伝え合う活動をさらに充実させ全体での検討に生かせるようにしたい。

丸森町立丸森小学校 URL

<http://www.town.marumori.miyagi.jp/~marusyo/>

学校名	丸森町立館矢間小学校
所在地	伊具郡丸森町 館矢間館山字玉川29-1
電話番号	0224-72-2148

## 1 学校の実態

児童数195人 職員数16人

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援	合計
児童数	29	34	32	29	43	26	2	195
学級数	1	1	1	1	2	1	2	9

## 2 研究の概要

### (1) 研究主題

ともに考え、

にこにこと学習に取り組む児童の育成  
～筋道を立てて考え、相手に分かりやすく  
伝える力の向上を図る指導法の工夫～

### (2) 主題設定の理由

本校の教育重点目標「かしこく」の中に「考える力、発表する力の向上」を掲げている。これは、基礎・基本の中でも特に、思考力、表現力の育成に力を入れていくことが重要であるとの考えからである。

また、児童の実態として平成18年度に実施した標準学力検査の結果では、平成16年度の結果より平均正答率が10ポイント以上向上し、全国の平均正答率とほぼ同等となった。また、自力解決の姿勢、自信を持った話し合いへの参加の態度など、児童の学習活動の様子にも変容が見られた。しかし、自力解決でよりよい考えを導き出すことや、相手に分かりやすく説明するという点においては、まだ十分な力が身に付いていない。

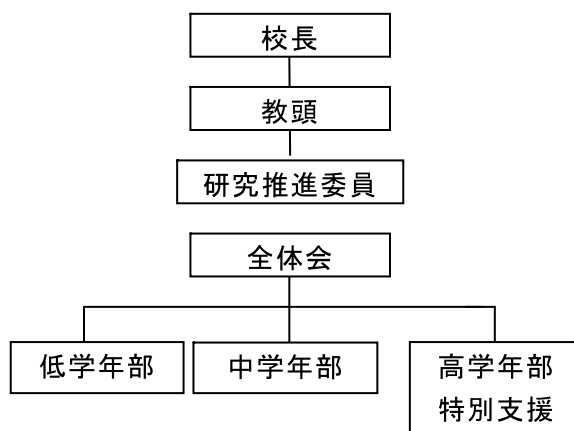
以上のことから、前年度まで進めてきた基礎・基本の徹底は引き続き大切にしながら、「課題に対して筋道を立てて考え（思考力の向上）」「相手に分かりやすく伝える（表現力の向上）」を重点に研究を進めていくこととした。

### (3) 研究組織図

- ・全学級が研究授業を行い、授業実践を大

事にして研究を推進する。

- ・研究授業は、全員で見合う。授業後は、研究全体会を行い、成果・課題を明確にし、次の実践に生かしていく。



### (4) 研究主題について

#### ① 「ともに考え」とは

- ・友達の意見を聞き取り、自分の考えと比べている
- ・自分の考えを友達に分かりやすく伝える
- ・話し合いをして解決する

#### ② 「にこにこと学習に取り組む」とは

- 「た」…楽しみだな
- 「て」…徹底的に
- 「や」…やった、できた
- 「ま」…学び合う

上記の4つを備えた児童をイメージしている。

基礎・基本を身に付け、「分かった」という実感を持ち、笑顔で学習に取り組むという姿である。

#### ③ 「筋道を立てて考える力」とは

解決の「方法」や解決の「結果」について見通しを持ち、算数的活動を通して、根拠を明らかにしながら順序立てて考えを進める力

#### ④ 「相手に分かりやすく伝える力」とは

明確な根拠を示しながら、自分の考えを短くまとめて説明する力

### (5) 研究目標

算数科を中心にして、筋道を立てて、相手に分かりやすく伝える力を育てる指導の工夫を通して、ともに考え、にこにこと学習に取り組む児童の育成の在り方について明らかにする。



## (6) 研究仮説

### ① 手立て1

学習課題への見通しを持って、意欲的に取り組むための工夫（学習意欲向上の工夫）

### ② 手立て2

根拠を明らかにしながら順序立てて考えたり、考えたことを根拠を示しながら短くまとめて説明したりする力を高めるための工夫

（思考力、表現力を高めるための工夫）

### ③ 手立て3

児童一人一人の学習状況に応じた、補充・発展的な指導に生かす評価の工夫

（指導に生かす評価の工夫）

## 3 研究成果

### (1) 研究の中心となる取組について

#### ① 手立て1 学習意欲向上の工夫

##### ア 学習シラバスの活用

学習の見通しを持たせ、学習意欲を喚起するために、単元の学習内容及び「学習の振り返り」や「分かったこと、学習したことのまとめ」ができる「学習シラバス」を作成した。学習シラバスの活用により、学習課題の確認や既習事項を確認することで、解決への見通しを持たせることができた。児童は意欲的に学習に取り組み、集中して自力解決を行う様子が見られた。

また、低学年では家庭向けの学習シラバスも作成し、学校での学習内容を知らせる一方で、保護者と連携し児童の学習への積極的な取組や家庭学習への意欲の喚起を図った。



学習シラバスの活用例

#### イ 問題提示の工夫

学習課題を意欲的に解決しようとする気持ちを高めるために、単元や一単位時間の導入で、発達段階に応じた様々な問題提示の工夫を行った。

問題提示の工夫を行うことで、学習課題や問題の意味を明確に把握させることができ、学習意欲を高めることにつながった。

### ② 手立て2

思考力、表現力を高めるための工夫

#### ア 思考力を高めるための工夫

（自力解決や算数的活動の充実）

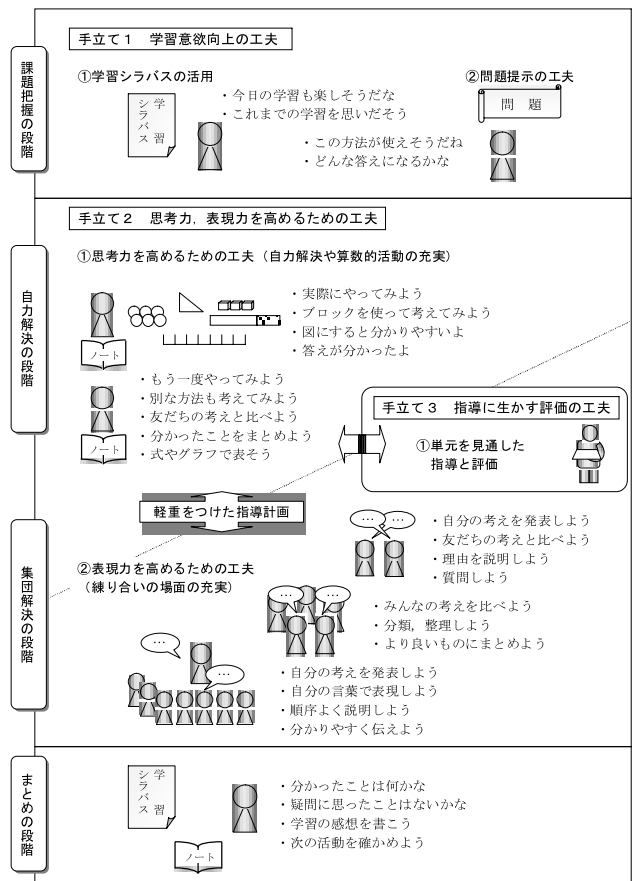
思考力を高めることに重点を置いた授業で、解決の見通しを持ち根拠を明らかにしながら順序立てて考えられるようにするために、自力解決の時間の確保や算数的活動の充実を図った。

#### イ 表現力を高めるための工夫

（練り合いの場面の充実）

表現力を高めることに重点を置いた授業で、明確な根拠を示しながら、自分の考えについて短くまとめて説明できるように、発表する側

研究仮説に基づく算数科の授業モデル



と聞き手側の話合いの観点を明確にして、練り合いの場面の充実を図った。

＊「研究仮説に基づく算数科の授業モデル」（前ページ）を作成し、思考力向上を重視した授業、表現力向上を重視した授業を小単元や一単位時間で設定する単元構成の工夫をした。

思考力、表現力を高めるための工夫を行うことで、自力解決で自分の考えを持てる児童が増え、自信を持って自分の考えを発表することができるようになってきた。

### ③ 手立て3 指導に生かす評価の工夫

#### ア 単元を見通した指導と評価

- ・ 児童一人一人の理解度や定着度を把握するために、単元評価一覧表を作成した。
- ・ 座席表を用いて、机間評価・指導を行った。（単元評価一覧表への転記）
- ・ 評価規準によるC評価・A評価児童への支援内容を明確にし指導に当たった。

指導に生かす評価の工夫をすることで、児童一人一人の学習状況を把握でき、個に応じた指導を展開することができた。

## （2）学習意欲向上への取組について

「3（1）①手立て1 学習意欲向上の工夫」のとおりであるが、その他の取組として以下のような習熟、補充指導等を工夫した。

### ① にこにこタイム

既習事項の定着や現単元の学習内容理解のために、業前の5分間を使い100マス計算や現単元の習熟問題などを行った。

### ② チャレンジタイム

本校で作成した国語テスト、算数テストを用い、意欲的に自主学習に取り組む姿勢、及び家庭での学習習慣を身に付けさせた。

### ③ のびのびクラス（放課後）

毎週月曜日の放課後は会議を設定しない日とし、評価規準に達しない児童に対し、個別に補充指導を行った。

### ④ 夏休みにこにこ算数2日間

夏休みの2日間、算数を苦手とする児童への補充授業を行い、算数に対する不安を取り除きながら、2学期の学習への意欲を喚起させた。

## オ 国語との関連

漢字の読み書きの習得について、すべての学習活動の土台作りと位置付け、各学年で工夫して指導した。

単作文の継続的指導では、自分の考えを短くまとめて書く取組について国語科を中心として行った。また、他の教科・領域でも機会をとらえて日常的に行い、相手に自分の考えを分かりやすく伝える力の基礎を養った。

## （3）小・中学校の連携した取組

「確かな学力を身に付け、未来を拓く丸館っ子の育成」を共通の研究主題に、丸森小学校、丸館中学校との連携を図ってきた。

本年度は「授業の工夫改善」と「学習習慣の定着」を連携の視点とし、重点事項として以下の4点から共通の研究主題に迫ることにした。

- |                                       |
|---------------------------------------|
| ①学習指導における連携<br>（国語、算数・数学の教科間の連携）      |
| ②学習習慣の形成と定着における連携<br>（学校及び家庭での学習習慣作り） |
| ③教員間の交流による連携<br>（授業交流、合同研修、情報交換など）    |
| ④児童生徒間の交流における連携<br>（丸館っ子6年生集合、特別支援交流） |

「①学習指導における連携」では、国語部会、算数・数学部会を組織し、小・中学校9年間を見据えた取組を行った。国語部会では、学習カード等の工夫により、音読指導と漢字学習の充実を図ってきた。算数・数学部会では、丸館中学校区児童生徒の標準学力検査の結果から、算数・数学においてつまずきやすい傾向のある内容を洗い出し、それを基に「つまずき内容別系統一覧表」を作成した。特に小学校間での授業研究において活用を図り、各校それぞれの手立てを講じてつまずきやすい内容の授業改善に取り組んだ。

「②学習習慣の形成と定着における連携」では、小・中学校9年間を発達段階で4つに区分し、取り組むべき指標を示した「学校における学習のきまり」「家庭における学習・生活のきまり」を小・中学校共同で作成、活用した。



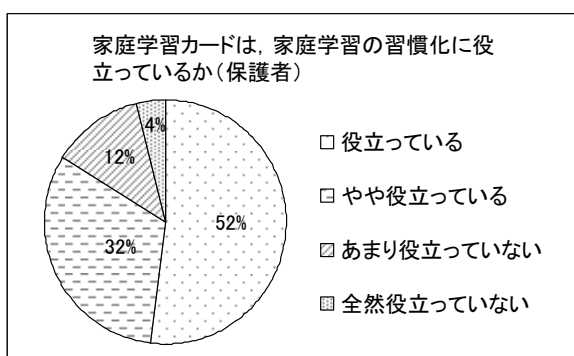
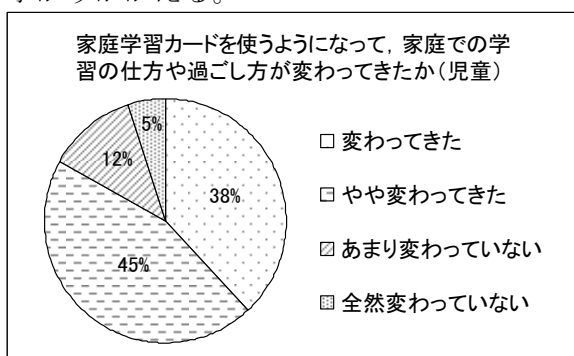
#### (4) 家庭学習の習慣化への取組

##### ア 家庭学習カード

毎日の家庭での学習習慣定着のために、学年毎に「家庭学習カード」を工夫して作成し、活用した。

音読、宿題の項目に加え、家の手伝いや生活時間などのチェック欄を設け、家庭学習とよりよい生活習慣の定着を図った。また、保護者や教師からのアドバイスや励ましを行うことで、家庭学習への意欲を高めた。

児童・保護者の意識調査から、「家庭学習カード」が家庭学習の習慣化に役立っている様子がうかがえる。



##### イ たてやまっ子のちかい

これは、家庭での学習時間、テレビやゲームの時間、寝る時間や起きる時間を児童が保護者との話し合いで設定するものである。これにより家庭での基本的な生活習慣の改善と学習習慣の定着について、家庭ぐるみで点検、評価をしながら主体的な取組を促していく。日々の振り返りに加え、長期休業中の学習及び生活指導でも取り上げ、児童への意識付けを行った。さらに、学年・学級懇談会や地区懇談会等の話題に挙げることで、保護者に対しても積極的に協力を要請した。

#### 4 今後の課題と改善策

##### (1) 研究の中心となる取組から

##### ア 学習意欲向上の工夫

学習シラバスの内容について有効な面が多くあったが、学習内容の示し方の工夫やよりよい学習計画としての学習シラバスの活用方法を探っていく必要がある。また、本年度各学年において作成した学習シラバスを吟味し、学年の系統性を持たせたものにしていく必要がある。

##### イ 思考力、表現力を高めるための工夫

単元内での思考力を高めることに重点をおいた授業、表現力を高めることに重点をおいた授業の設定について、単元での学習内容をさらに吟味しそれぞれの時間の割合や時間設定を工夫することで、よりよい単元指導計画にしていく。

##### ウ 指導に生かす評価の工夫

単元評価一覧表をより活用しやすい内容のものへと精選を図っていく。また、つまずき系統表の活用を含め単元評価一覧表などの評価したものをどのように中学校へ引き継ぎ、生かすかを今後探っていく。

#### (2) 小・中学校の連携

本年度に実施してきた連携策継続のため、それぞれ実施してみたの意見を交換しながら、無理のない計画へとしていく必要がある。また、小・中学校教員の小・中連携に対する意識改革をさらに進めていけるような交流が十分に行える研修の場を設定していく。

#### 5 実践事例

##### (1) 実践事例1 2学年 算数科(TT)

- ① 単元名 新しい計算を考えよう
- ② ねらい

問題作りを通して、乗法の意味や5, 2, 3, 4の段の理解を深める。

- ③ 本授業における取組

##### <手立て1> 学習意欲向上の工夫

本時では、大きな場面絵を用いて問題を提示した。「絵を見ていろいろな式のかけ算の問題を作りましょう」という学習課題を教師の演示とともに示し、短時間で確実に課題を把握させた。また、場面の一部を取り出したり、移動したりすることで、問題を作るときの文言や用いるべき数などについてとらえやすいようにした。



### <手立て2>

思考力、表現力を高めるための工夫

初めに、教師が提示した「2人ずつ座っている4つのベンチ」の場面絵を見ながら、問題文の作成に取り組ませた。

次に、絵の中から乗法の式に表すことができるいろいろな場面を探させ、問題文になりそうな場面を見つけさせた。必要に応じて「□つずつ」「全部で」などの言葉を補い、説明の仕方を助言した。

活動の時間が十分に確保できたことにより、多様な問題づくりができた。

解決の結果については、どのような問題文を作成したか、数名の児童を指名して発表させた。文章に合わせて場面絵を指し示すことで、発表した児童と発表を聞いていた児童の双方が、問題文の作り方について確認し合うことができた。

### <指導に生かす評価の工夫>

座席表を活用することで、児童一人一人の学習状況を把握でき、授業展開に生かすことができた。また、授業中の要所でT1とT2が問題提示の方法や発問の内容、活動時間や支援児童について打ち合わせを行ったことは、児童の実態に応じた指導に効果的であった。

## (2) 実践事例2 3学年 算数科 (TT)

- ① 単元名 かけ算のしかたを考えよう
- ② ねらい

筆算形式による2, 3位数に1位数をかける乗法計算の仕方について理解し、それをを用いる能力を高める。

- ③ 本授業における取組

### <手立て1> 学習意欲向上の工夫

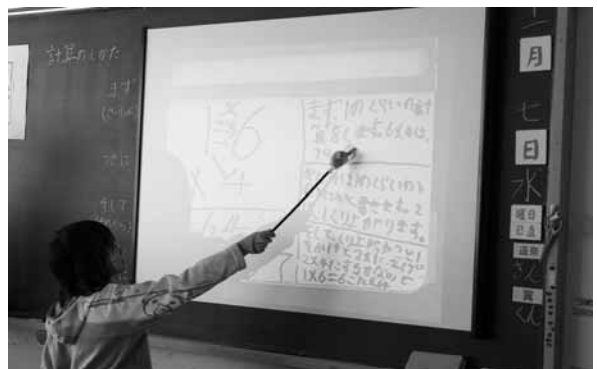
本時は、前単元で学習した「長方形」「直角三角形」「正方形」によるクイズ形式の導入を行った。クイズの中で、辺の数や頂点の数を確認していきながら、本時の計算式である「 $16 \times 4$ 」の「かける数4」へとつなげていった。やったばかりの単元ということもあり、児童はクイズに意欲的に取り組み、課題に向けての意欲の高まりが見られた。

### <手立て2>

思考力、表現力を高めるための工夫

自力解決では、ホワイトボードに自分の考えを書かせた。位取りの表を使って考えた児童、前時までに学習したお金を図に表して考えた児童などいくつかの考えが出された。いずれも、絵や図、記号を取り入れながら相手に伝えようと工夫している様子がかげえた。さらに、図と文を並べて書き、考えと図を対応させながら説明している児童も見られた。

自分の考えの発表では、「はじめに」「次に」「それから」「最後に」という4つの言葉を用いさせながら、ペア学習や全体での発表を行わせた。児童は、自分の書き表した考えを相手のうなずきに合わせてゆっくりと話したり、話が分かったか確認しながら説明を進めたりしていた。



### <指導に生かす評価の工夫>

単元評価一覧表で前時までの評価を確認しながら個別指導を行った。それにより、児童の実態に合わせて、プリントを選択させる時に適切なアドバイスをすることができた。

丸森町立館矢間小学校URL

<http://www.town.marumori.miyagi.jp/hp/tate-sho/index.html>

**学校名** 宮城県伊具郡丸森町立丸館中学校  
**所在地** 宮城県伊具郡丸森町字田町南24-2  
**電話番号** 0224(72)2144

## 1 学校の実態

生徒数245人 職員数19人

	1年	2年	3年	特別支援	合計
生徒数	74	75	95	1	245
学級数	2	2	3	1	8

## 2 研究の概要

### (1) 研究主題

自ら学び、自らを高めようとする生徒の育成  
 ～学習意欲を高める授業の工夫改善と  
 学習習慣の定着化を通して～

### (2) 主題設定の理由

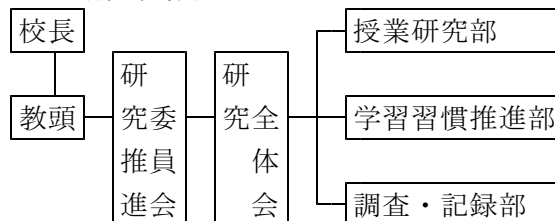
本校の生徒は、学校生活では、授業には真面目に取り組む、学級や生徒会の活動、各種行事など特別活動においても積極的に参加するなど意欲を持った生活をしている。部活動においても最後までやりぬこうとする意識は高い。また、家庭生活においても、大半の生徒は早寝早起きの習慣が身に付いており、朝食もきちんととり、家族間の人間関係も良好で、健全な生活を過ごしている。

学力面では、学力の水準が学校全体として「おおむね満足できる」という域に近づいてはきているが、学年が上がるにしたがって伸び悩みが見られ、「努力を要する」生徒が増える傾向にある。また生徒対象の意識調査の結果を見ると、学年が上がるにつれて、勉強が分からないと答えた生徒の割合が増えており、家庭で予習・復習などの自主的な学習に平日平均1時間以上取り組んでいる生徒は全体の59%にとどまり、自主的な学習をまったくしないという生徒も、まだ全体の18%

を占めるという状況にある。

こうした現状から、19年度は、本校の生徒が将来様々な分野でその個性を發揮し大いに活躍していく基盤づくりのためにも、また、これまでの研究実践の総仕上げという意味においても、学習意欲の向上と学習面での基礎・基本の定着に一段と力を入れていくことが必要と考え、本主題を設定した。

### (3) 研究組織図



#### 研究推進委員会

校長・教頭・教務主任・学年主任・特別支援教育主任・研究主任・各部会チーフ

#### 授業研究部

教員の指導力向上を図るための企画と実践

#### 学習習慣推進部

学習習慣の定着化を図るための企画と実践

#### 調査・記録部

実態調査、検証、各種記録など

### (4) 具体的な取組

#### 学習意欲を高める授業の工夫改善

- ① 各教科で特に身に付けさせたい「基礎・基本」の明確化と、その定着
- ② 家庭学習課題を生かした授業実践
- ③ 少人数指導（数学）、TT（英語）による授業形態の工夫
- ④ 国語科、算数・数学科の小・中学校の連携及び、教員の指導力向上のための小・中学校合同研修会

#### 学習習慣の定着化

- ① 「学習の手引き」の活用
- ② 「学びタイム」の実践
- ③ 「変身トライ！三カ条」自己診断表の実践
- ④ 「家庭学習積み重ねカード」の実践
- ⑤ 自主学习ノートの実践

⑥ 学習習慣の定着化のための小・中学校の連携

小・中学校連携の取組

丸森小学校，館矢間小学校，丸館中学校の推進校三校による連携の取組。

① 学習指導における連携

国語・数学（算数）の教科による連携

② 学習習慣の形成と定着における連携

学校及び家庭での学習習慣づくりにおける連携

③ 教員間の交流における連携

授業交流，合同研修，情報交換（学力面だけでなく生徒指導等も含めて）など

④ 児童生徒間の交流における連携

丸館っ子6年生集合，特別支援学級の交流

3 研究成果

(1) 標準学力検査・学習状況調査から

① 標準学力検査から（3年間の比較で）

期待正答率を1とした比率で見た場合，どの学年・教科も，全体的には，年度を追うごとに学力が向上してきており，19年度は，全体的には，「おおむね満足できる」水準(0.92～1.20)に到達し，更に，学年が上がるにしたがって学力が伸び悩むというこれまでの傾向が影を潜め，ほぼ平均した力が発揮されている。

② 2学年の学習状況調査から（2年間の比較で）

期待正答率を1とした比率で見た場合，18年度は17年度に比べて，理科は同率であるが，他の4教科では，いずれも0.11～0.35ポイント大きく上回るという結果になっている。更に，18年度の2学年の学力は，多少教科にバラつきはあるものの，「おおむね満足できる」水準(0.92～1.20)に近づいてきている。

(2) 生徒に対する生活・学習に関する意識調査から（3年間の比較で）

・年度を追うごとに学校での勉強が「分かる」という生徒が増え，また「分からない」とい

う生徒も減ってきており，19年度は「分からない」という生徒が9.6%にまで減少している。

・学校での勉強は大切と考える生徒が増え，19年度は「大切」という生徒が90.4%に達し，また「大切だとは思わない」という生徒が2.3%にまで減少している。

・宿題をきちんとする生徒が増え，また宿題をしない生徒も徐々に減ってきており，19年度は宿題を全くしない生徒は3.2%にまで減少している。

・平日1日平均の自主的な学習時間が0時間という生徒が減ってきており，19年度は0時間の生徒が9%にまで減少している。

・学校以外でも読書をする生徒が増えてきており，19年度は学校以外での読書を「全くしない」という生徒が20%にまで減少している。

・「早寝・早起き・朝ごはん」という生活習慣に関しては，概ね，きちんとした生活が身に付いており，年度を追うごとにその傾向が強くなっている。

(3) 生徒の学習意欲向上への取組について

前述の生徒の意識調査結果が示すように，年度を追うごとに学校での勉強が「分かる」という生徒が増え，また「分からない」という生徒も減ってきており，さらに，学校での勉強は大切と考える生徒が増え，平日1日平均の自主的な学習時間が0時間という生徒が減ってきている点などから，生徒の学習意欲は徐々にではあるが，向上してきていると考えられる。

(4) 家庭学習の習慣化の取組について

前述の生徒の意識調査結果が示すように，年度を追うごとに宿題をきちんとする生徒が増え，また宿題をしない生徒も徐々に減ってきており，さらに，平日1日平均の自主的な学習時間が0時間という生徒が減ってきている点などから，生徒の家庭での学習習慣も徐々にではあるが，定着してきていると考えられる。



#### (5) 小・中学校の連携した取組について

小・中学校の連携における研究実践を進めることで、特に国語・数学・学習習慣の指導においては義務教育9年間という視点から系統性を意識して指導に取り組むことができるようになった。

#### (6) 総括

意識調査から伺えるように、本校の生徒の生活習慣・学習習慣及び学習に対する意識は年度を追うごとに良くなってきており、それに比例するように、学力も向上してきている。

これには以下のような理由が考えられる。一つは、生徒一人一人に「家に帰ったら何かをしなければならぬ」という意識が定着したことである。各教科で宿題を出すように努めたり、学習課題に取り組まない生徒に粘り強く声がけをしたり、自主学習ノートへの頑張りを棒グラフ状に明示したりして学習習慣の定着化に努めたことがそうした意識の定着につながったものと考えられる。二つ目は、少人数指導やTTでの取組を始め、研究授業の参観や合同研修での教員間の学び合いをとおして教員の指導力が向上してきたことである。三つ目は、小・中学校の連携の取組をとおして、小学校での指導の効果が中学校での学習に発揮されていることである。

以上のような理由から、徐々にではあるが、生徒の学習意欲と学力が向上したものと考えられる。今後もこの結果に甘んずることなく、更なる向上を目指して、引き続き研究実践に邁進していきたいと考えている。

### 4 今後の課題と改善策

#### (1) 標準学力検査・学習状況調査から

##### ① 標準学力検査から

「おおむね満足できる」という現在の状況を、更に「十分満足できる」という域にまで押し上げるための工夫と努力が今後必要である。

##### ② 2学年の学習状況調査から（2年間の比較で）

正答率が60%を越えた問題数の割合で考

察してみると、18年度は、「正答率60%以上の問題が6割以上」の結果を出している教科は国語(75%)、数学(60%)の2教科で、ついで英語56.7%、理科48.5%、社会45.5%という結果になった。県では、60%未満の場合は、「学習内容がまだ定着していない」とみなすとしており、5教科すべてを「学習内容が定着している」という水準にまで押し上げる必要がある。

#### (2) 保護者に対する意識調査から（3年間の比較で）

3年間、「もっと勉強してほしい」という保護者の要望が毎年70%前後の数値を示しており、親も教師も思いは同じという視点から、今後、小・中学校が同一歩調で、保護者の理解と協力を基に学校と家庭との連携を更に強化して研究実践を進める必要がある。

#### (3) 小・中学校の連携の取組から

小・中学校の連携での取組は、小学校・中学校という校種の形態の違い等により、全教科・全領域に渡っての連携は難しく、どうしても限られた教科や領域での連携にならざるをえなかった。

また、学習習慣の定着化を更に推進するには、小・中学校が連携して、保護者のいっその協力を得ながら児童生徒への呼びかけをより活発にする必要がある。

#### (4) 総括

今後は生徒個々の学習に対する意欲や理解力のさらなる向上を目指して、授業の工夫改善や個人指導の充実を図り、「おおむね満足できる」という現在の状況を「十分満足できる」という域にまで押し上げていく必要がある。

また、家庭学習課題を生かした授業実践では、各教科で、教科の特性を生かした取組を大切にして学習過程を組み立て、家庭学習課題を提示していくという方向で今後実践していく必要がある。

## 5 実践事例

### (1) 数学科の取組

#### ① 少人数指導

平成15年度より2・3年生で少人数指導を行っている。19年度は全学年で実施している。習熟度別少人数指導で、章ごとの準備テストの結果を参考に、自分にあったコースを生徒自らが選択する方法をとっている。Aコースは、基本的な問題をじっくりと時間をかけて学んでいくコース、Bコースは、教科書の問題を一通り学習し、さらに問題集などを使って発展問題にも取り組むコースとしている。

机間指導の際、一人一人の生徒にかける時間が多くなることで、生徒も分からないことをじっくりと教えてもらえるという安心感を持ち、自分から質問できるようになったと認識している生徒も増えてきた。

これらの理由で、97%の生徒が少人数指導に対して好印象を抱いている。

#### ② 家庭学習課題プリント

授業で理解したと思っても、復習しないために定着しきれないことが多い。理解の定着を図るためには、家庭学習は必要不可欠である。

そのために、家庭学習課題プリントを配布し、宿題としている。このプリントは、上半分がその日に学習した内容の復習に当たる問題で、下半分は次時の予習に当たる問題になっている。また、この復習部分は、次時の初めに行う小テスト(あるいは解答)になる。家庭学習課題にまじめに取り組めば、小テストでも良い結果が得られることになり、それが生徒の励みや意欲につながっている。

また、予習部分は、できるだけその授業のポイントとなる部分を掲載するので、同じような内容を予習・授業・復習・小テスト(解答)と4回学習することになる。

この流れで学習すれば、家庭学習の習慣化につながり、自ら学習する意欲もわき、基礎・基本の定着に役立つのではないかと考えた。生徒の86%は、このプリントは、

予習・復習に役立っていると回答している。

### 成果と課題

#### ① 成果

・過去の実践の結果を踏まえ、あやふやなコース設定をより特徴付けたコース設定に改善したことが学習の効率化や理解につながり、学習意欲の向上に結びついている。

・家庭学習プリントについては、予習や復習に役立っているという感想を持っている生徒が多い。僅かにでも予習をすることで、授業中の理解に大変役立ち、それを実感している生徒が増えてきた。

#### ② 課題

・少人数指導については、章ごとに準備テストの結果を参考にコースを選択させているが、希望制のため、あるいは生徒の自己評価の誤りから、ずれが生ずる場合がある。正しい自己評価力を身に付けさせるための教師の支援の工夫がさらに必要である。

・家庭学習プリントについては、42%の生徒がこのプリントに取り組む時間帯は授業前学校でと答えている。休み時間等を利用し、課題を解決する姿勢は評価できるが、家庭学習の習慣化という点では問題が残る。今後、生徒の実態を把握しつつプリントの内容について再吟味する必要がある。

### (2) 学習習慣の定着化への取組

#### ① 「学びタイム」の実践

生徒同士の学び合いと自主的な学習の定着を図ることを目的として、毎日10分間の自主学習の時間として「学びタイム」を設定している。これは、それぞれが教科を選択し、自ら目標を設定して計画し、自主的な学習を進めるものである。20回程度を一区切りとして行い、それぞれがまとめのテストを作成し、お互いにそのテストをやってみることなども行っている。

#### ② 「変身トライ!三カ条」による目標の設定と自己診断の実践

学校生活において、自分が挑戦したいと思う目標を三つ設定し(必ず学習に関する目標も入れる)、達成状況を毎日帰りの会

で自己評価していく。後述の「家庭学習積み重ねカード」と一体化したカードを利用している。

### ③ 「家庭学習積み重ねカード」の実践

毎日の家庭での学習内容と学習時間を記録していくことによって、自己の家庭学習を振り返らせるとともに学習習慣の定着に役立てる。毎日、学級担任が集め、必要な場合には、家庭学習についての助言等も行っていく。

#### 成果と課題

・「学びタイム」の実践については、取組のよい生徒は教科の成績が高くなっている傾向が表れており、当然のことながら、毎日、継続して勉強することは、基礎・基本の定着に大いに役立つと言える。

・「変身トライ！三カ条」の実践では、学校生活への意欲の高い生徒にとっては、生活のよい目標になっていた。

・「学びタイム」「変身トライ！三カ条」「家庭学習積み重ねカード」などの実践により、全体的には家庭学習の取組はよくなってきているが、自主的・計画的という面では、まだ十分ではない。家庭学習の習慣が定着しておらず、意欲の低い生徒もまだ少なからず存在しているので、これらの生徒への支援の仕方等も検討していく必要がある。

### (3) 小・中学校連携の取組

#### ①国語部会における、音読カードをとおしての実践

音読カードをとおして、読解力・表現力の基礎を育成することをねらいとして、小1～中3までの、丸館中学校区における学年ごとの音読の力育成の到達目標（観点）を設定して取り組んだ。

##### <丸森小学校の取組>

・全学年、家庭学習カードを利用し、音読を毎日の家庭学習の課題とした。また、保護者にも協力をお願いした。

・各学年ごとに「声の大きさ」「読む速さ」「ていねいさ」の3つの観点を設定し、指導に当たった。

・2学年では、「はっきりと、まちがいをなく、点や丸に気を付けて」読む習慣を図った。3学年では、読む範囲を指定して、読み取りにも生かすようにした。6学年では、学年だよりで音読のポイントを記載し、児童への励まし等の声かけもお願いした。

##### <館矢間小学校の取組>

・全学年、家庭学習カードを利用し、音読を毎日の家庭学習の課題とした。また、保護者にも協力をお願いした。

・4～6学年は、前述の3つの観点を設定し、指導に当たった。

・1～2学年は、特に「声の大きさ」「読む速さ」の観点の指導に重点を置いた。3学年は、特に観点は設定せず、読む回数を重視し、暗唱練習にも取り組ませた。

##### <丸館中学校の取組>

・題材に応じて実施した。生徒は各自家庭で音読練習を実施し、その都度指定の観点項目により自己評価を行った。

・授業の学習過程の中に練習の成果を発表する機会をできるだけ多く設けたり、音読カードをできるだけこまめに点検したり、音読に対する自己評価や級友・教師による評価を与えることにより、意欲を引き出すように努めた。

#### 成果と課題

・音読カードを使った実践により、音読に対する意識は高まってきており、授業の中で、よく評価してもらいたいという思いなどから、しっかりとした音読をする児童生徒が多数見受けられるようになった。

・小1から中3まで共通の観点で取り組むことにより、系統性を持って指導に当たれるようになった。

・評価方法の改善や中学校での音読指導に当てる時間の確保が課題である。

・音読の力の向上を読解力や表現力の基礎づくりに効果的に生かしていくことが今後の課題である。

丸森町立丸館中学校 URL

<http://www.town.marumori.miyagi.jp/hp/marutate/main.html>

学校名 大衡村立大衡小学校  
 所在地 黒川郡大衡村大衡字平林13番地  
 電話番号 022-345-2424

## 1 学校の実態

児童数 341人 職員数 26人

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援	合計
児童数	49	63	45	57	61	62	4	341
学級数	2	2	2	2	2	2	3	15

## 2 研究概要

### (1) 研究主題

確かな学力を身につけさせる  
 学習指導の在り方

—国語科・算数科における『教えて考えさせる授業』の追究を通して—

### (2) 主題設定の理由

#### ① 教育の今日的課題から

これからの社会を生きる子どもたちには、「確かな学力」「豊かな人間性」「健康や体力」などの「生きる力」を育てていかなければならない。「確かな学力」とは、基礎的・基本的な知識や技能に加え、学ぶ意欲や思考力・判断力・表現力を含めたものであり、今日では学校教育活動に対して一層の工夫・改善が求められていると考える。

#### ② 本校の教育目標から

本校の教育目標は「人間性豊かな心を持ち、社会の変化に主体的に対応し、たくましく生きる、心身ともに健康な子どもの育成」であり、児童像としては、「自ら学びとる子ども」「思いやりのある子ども」「進んで体をきたえる子ども」を掲げている。特に学習面に関わる「自ら学びとる子ども」については、「基礎的・基本的な学習の定着」を土台とし、さらに「自ら学び、考える力」の育成をめざしている。

#### ③ 児童の実態から

#### 【学力到達度診断の結果から】

本校では平成16年度には算数、平成17年度からは国語と算数の学力到達度診断を実施している。平成16年度の時点では、算数の全校平均正答率が71%（全国平均80%）、17年度は国語が71%（全国平均79%）と全

国平均を大幅に下回る実態であった。基礎的・基本的な学力の定着が本校の課題として浮かび上がった。

#### 【学習意識調査の結果から】

平成17年度7月の児童アンケートの結果では、家庭学習を「少しでもする」と答えた児童は88%、3年生以上で「30分以上学習する」児童は44%であり、家庭学習がきちんと定着しているとは言えない状況であった。

#### ④ 昨年度までの研究の成果と課題から

昨年度は研究の成果を3つの視点に整理した。また、学習意欲の向上には「わかる授業」が重要であることから、市川伸一先生が提唱している『教えて考えさせる授業』を導入し、算数科と国語科で取り組んできた。本年度は、昨年度までの研究成果を深化・発展させ、より効果的・具体的な『教えて考えさせる授業』の実践を追究していった。

### (3) 研究の目標

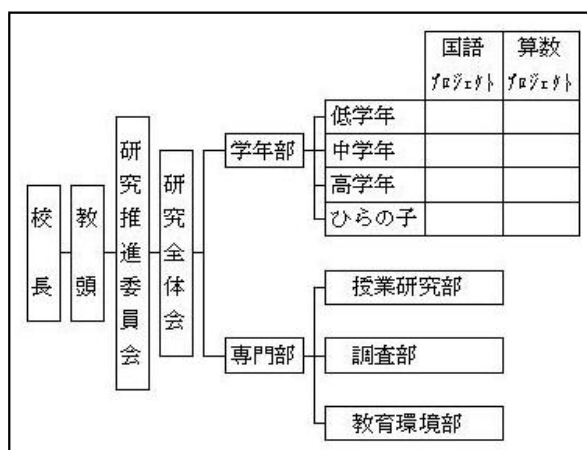
「学習意欲向上への取組」「家庭学習の習慣化への取組」「小中連携への取組」の3つの視点で研究・実践に取り組むことにより、確かな学力を育む。

特に、「学習意欲の向上」には「わかる授業」の実現が重要であることから、『教えて考えさせる授業』を国語科、算数科において実践的に追究していく。

### (4) 研究の視点

視点1 学習意欲向上への取組  
 視点2 家庭学習の習慣化への取組  
 視点3 小・中連携への取組

### (5) 研究の組織





### 3 3つの視点の取組

#### 視点1 学習意欲向上への取組

##### (1) 『教えて考えさせる授業』の追究 【『教えて考えさせる授業』とは】

これまでの授業スタイルを振り返ると、教師主導のいわゆる「詰め込み・教え込みの授業」や、その反対の子どもの考えにまかせて指導せず、きちんと教えない授業があり、どちらも学習意欲や知識・技能の習得に課題を残す結果となっていた。

『教えて考えさせる授業』とは東京大学大学院教授、市川伸一先生が提唱している授業スタイルで、基礎的・基本的な知識・技能に関しては、子どもの実態に即して、指導を工夫し確実に「教える」とともに、教えた内容を活用し、自分の力で問題を解いたり、発展的な問題や課題を集团的に追究したりすることにより「考えさせる」ことで、一連の学習内容が「わかる」ようになるという授業である。

##### 【「〇つけ法」による評価】

〇つけ法とは、授業の中で、1時間に1回程度、教師が全児童に〇をつけていく評価方法である。〇をつけながら、一人ひとりの児童のでき具合や考えを確かめ、授業展開や指導に生じていくようにした。

##### 【『教えて考えさせる授業』の段階と内容】

『教えて考えさせる授業』は以下のように4つの段階で進められる。

段階	各段階の内容
教える	基本的な学習内容について、教師がしっかりと教える。学習内容を精選するとともに、教材・教具を工夫したり、操作を通して体験的に理解させたり、発問を吟味したりするなど教え方の工夫が必要である。
理解深化 考えさせる	児童が本時の学習内容を理解したかどうか確かめる。基本的な問題を一人一人に解かせてみたり、わかったかどうか説明させてみたりする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <b>&lt;〇つけ法&gt;</b>                      ・理解できたか確認する〇つけ                      ・どのような考えを持ったか確かめる〇つけ                 </div> 理解したことを活用し、さらに理解や思考を深める段階である。類似問題や応用問題を解かせ適用範囲を広げたり、児童の思考を揺さぶるような課題を提示し、個人または集団で思考・討論したりしながら理解を

	深めさせる。 「今日わかったことは何か」といったように記述式で評価させたり、わかり具合を段階的に評価させる。自己評価活動を通して、自分の理解状況を診断・表現する力をつけていくことがねらいである。指導者にとっては、具体的な反省の材料となる。
--	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

##### 【『教えて考えさせる授業』の授業モデル作成】

市川先生の提唱している『教えて考えさせる授業』を、実践を積み重ねながら本校の実態に合わせて国語、算数において学年部ごとに作成していった。(下図は高学年国語)

高学年部・国語の研究			
【めざす児童像】 ○内容を的確に読みとり、要旨をとらえることができる子ども			
【高学年・国語の『教えて考えさせる授業』モデル】			
段階	項目	指導の手立て	指導のポイント・留意点
教える	○本時学習の見直しをもたせる。	○本時の学習の課題を提示する。 ・本時の学習範囲の確認 ・本時の学習範囲の音読	・本時の課題の確認 ・本時の課題をノートに書かせる。 ・形式段落の確認 ・一人読み 一斉音読 丸読み ・指名音読
	○課題に迫るために必要な事項について読み取る。 ○理解を確認する。	○叙述に即して内容を読み取ったり、要点をまとめるための発問の工夫や、視点の提示	・言葉の意味の確認 ・順序を表す言葉を押さえて読み取らせる。 ・指示語を確認し、読み取らせる。 ・問いかけの文と答えの文 ・事実と意見の区別(文末表現) ・大切な言葉や文への着目 ・直接的、間接的体験と結びつける実物、具体物、写真等の提示
考える	○学習課題に迫るために必要な事項について、理解の確認をする。	・説明活動	・ワークシートに取り組みせ、児童一人一人の理解を確認する。
	○本時の課題について考えさせる。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">                     【〇つけ法】による評価                      児童の理解度や考え方をその場で評価し、指導に生かす(1時間に1回程度)                      短い時間(1〜3分間)で全員の解答をチェックする。                      (理解深化段階)→児童が理解したのか確認する【〇つけ】                      (理解深化段階)→児童がどのように考えているのか確かめる【〇つけ】                 </div> ○中心点に迫るための発問の工夫、視点や考え方の提示。 ○段落相互の関係や述べ方のよさに着目する発問の工夫。 ○筆者の考えや主張に迫るための発問の工夫、視点や考え方の提示。 ・説明活動	・教材文の構造と学習内容との関連を意識するための、図や表の提示 ・事実と筆者の意見を区別して中心点に着目できる発問 ・文章の組み立てや構成がとらえやすい構造的な板書 ・中心段落の要約や、序論や結論の照応など、要旨をとらえるためのまとめ方の提示
ふりかえる	○自己評価	・4つの観点について評価させる 1 進んで発表しようとしたか。 2 しっかりと声を出して読むことができたか。 3 先生や友達の話をよく聞くことができたか。 4 自分なりの課題をもつことができたか。	・分かったことや感想を書かせる。 ・自己評価は3段階で評価させる。

##### 【模擬授業の実施】

わかる授業を実現するためには教員の指導力向上が必要である。本校では、校内授業研究の事前検討会を模擬授業形式で行っている。模擬授業で、事前に教員を相手に授業を行ってみることで、発問や板書、指導の工夫、授業の流れなどを具体的に検討することができた。



(2) スキルタイムの実施

授業で学習したことを定着させるには、習熟の時間が必要である。そこで月曜日と火曜日の朝の時間（8:15～8:25）を活用し計算や漢字のドリル学習を実施した。

(3) 少人数指導の工夫

5年生と6年生の算数で、少人数指導を実施した。担任と話し合い、児童の実態や単元によって指導の形態を工夫し、児童一人一人がわかる授業を目ざした。

(4) 読書の奨励

読書はすべての学習の土台となる。毎週金曜日の朝の時間を読書タイムにしたり、外部講師による読み聞かせを行ったり、図書への貸し出しを電子化し本を借りやすくしたりし、本に親しみやすい環境を整えた。



家庭学習では保護者の理解と協力が不可欠である。そこで、保護者向けに家庭学習のねらい、学習時間の目安と主な内容、家庭学習のポイントなどを記載した「家庭学習の手引き」（左下図）を発行し、家庭学習の進め方を示すとともに、保護者への協力を呼びかけた。また、児童用にも同様の手引きを作成し活用するようにさせた。

(2) 家庭学習カードの活用

各学年の発達などを考慮し、家庭学習の時間や主な内容を全校で話し合い、それに基づいて低・中・高学年ごとに家庭学習カードを作成し使用してきた。

低学年は、本読みと宿題、中学年は、本読みと宿題に加え、自主勉強への取組、高学年は、さらに自分で計画し実行できるようにカードを作成した。なお、高学年のカード（下図）は、中学校で使用している家庭学習カードにスムーズに移行できるように中学校と相談し様式を決めた。

学年	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日	月	日
読書														
宿題														
自主勉強														
計画														
実行														

視点2 家庭学習の習慣化への取組

(1) 家庭学習の手引きの活用

**家庭学習の手引き (保護者の皆様へ)**

大衛村立大衛小学校

**はじめに**

大衛小学校は、子どもたちの学力向上に取り組んでいます。そのためには、保護者の方のご協力が必要です。まずは、毎日しっかりと家庭学習に取り組ませていきたいと思っておりますので、ご協力をお願いします。

毎日の読み合わせ  
大切にしましょう!

**家庭学習のねらい**

\*まずは、毎日の本読み、宿題をしっかりとやる習慣をつけましょう。  
**低学年**・・・本読み、宿題を毎日きちんとやる習慣をつけさせましょう。  
**中学年**・・・宿題+自主的な学習もできるようにしていきましょう。  
**高学年**・・・宿題+自主学習を通して自ら学習していく力をつけさせましょう。

**時間の目安と主な内容**

**低学年<20分>** 本読み(5分ぐらい)→宿題(15分ぐらい)  
**中学年<40分>** 本読み(10分ぐらい)→宿題+自主勉強(30分ぐらい)  
**高学年<60分>** 本読み(15分ぐらい)→宿題+自主勉強(45分ぐらい)

\*家庭での勉強時間は、個人差があります。上の時間は目安です。お子さんの勉強の様子を見ながらその子にあった家庭学習の時間とやり方を見つけていけるといいですね。  
 \*本読みは、国語の教科書が大きな声ですらすら読めるようになったら、他の教科書や本を読ませましょう。

**家庭学習のポイント**

**<勉強を始める前に>**

- ①テレビやゲームを消す。
- ②机の上をきれいにする。
- ③よい姿勢で行う。

**<勉強が終わったら>**

- ①勉強したときを見てあげる。
- ②家庭学習カードに押印する。
- ③次の日の準備がしっかりできているか確認する。

\*毎日の規則正しい生活が子どもたちの学力を育てます。「はやね」「はやおき」「朝ごはん」の取り組みをよろしくお願ひします。  
 \*やらなしいことをしかるよりも、がんばったことをほめてあげてください。  
 \*この紙は部屋の壁等にはっておいいただき、お子さんに声かけするなどして、お子さんの家庭学習をねばり強く支えてあげてください。

(3) 自主勉強の手引きの活用

前年度の児童の自主勉強ノートから参考になるような勉強例をピックアップし、自主勉強のポイントを付け加え、自主勉強の手引きを作成し活用するようにした。

(4) 長期休業中の学習支援

長期休業中の家庭学習を支えることを目的に、夏休みと冬休みの数日間、午前9時から正午まで希望者を対象に実施した。児童が自分のやりたい課題を用意し、自分で勉強を進め、教師は必要とされたときに指導した。本年度夏季休業中は7日間実施し登録者数68人、延べ参加人数309人（1日平均44人）であった。



### 視点3 小・中連携への取組

#### (1) 小・中学校合同研究会の実施

小学校は算数プロジェクト・国語プロジェクト，中学校は理数部会と言語部会に分かれ，指導内容や指導法，児童についてなどを情報交換した。また，家庭学習の手引きやカードが小学校から中学校へと段階的な内容になるように調整した。

#### (2) 相互授業参観の実施

小・中学校の教員が，互いに授業を見合う機会を設け，相互理解を図っていくようにした。



「中学校の授業を見るのは初めて」「系統性が意識できた」など，中学での授業の様子を知る良い機会となった。

#### (3) 中学校での授業・部活動体験会

中学校で授業を受けたり，部活を体験したりすることで，6年生がスムーズに中学校生活に移行できるようにすることを目的に実施した。当日は，算数「ピタゴラスの三角形」，英語「絵を描いてそれを英語で紹介する」，理科「中学校で使用する実験器具を使って水溶液の性質を調べる」，の中

から受けたい授業を1つ選び体験した。さらに部活動体験では，説明や体験のお世話を中学生がやさしく丁寧に行ってくれたので，6年生にとっては先輩に対する人間関係の不安が和らいだようだった。



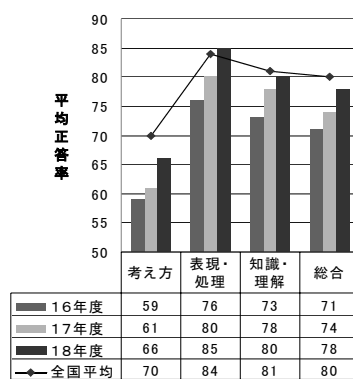
## 4 研究の成果と課題

### (1) 児童の学力向上について

#### －学力到達度診断の結果から－

国語，算数とも調査開始の時点では，全国平均を8～9ポイントも下回る状況であった。平成17年度から算数科，平成18年度からは国語科を研究教科として取り組んできた。その結果，算数では2年間で7ポイント，国語科では1年間で4ポイントの向上が見られた。(右図)

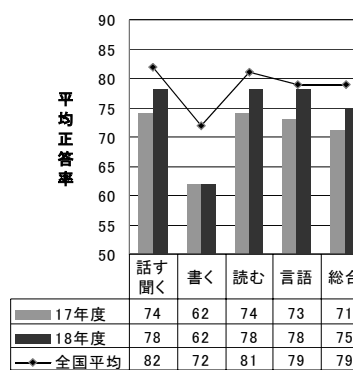
算数 学力到達度診断結果の変容



算数科では，どの領域でも伸びが見られた。

ただ「数学的な考え方」は全国との差がまだ大きく，『教えて考えさせる授業』の「考えさせる」段階の指導の充実を図っていく必要がある。

国語 学力到達度診断結果の変容

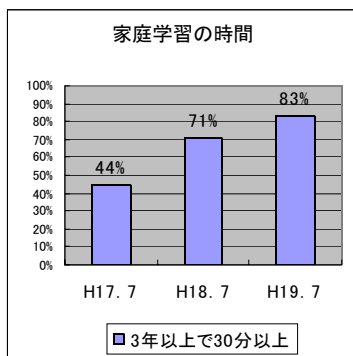


国語科では「話す・聞く」「読む」「言語事項」が向上している。教える段階で基本的な内容を捉えた指導や，教科書がすらすら読めること，先生や友達の話をしきりと聞くこと，授業中に考え発表することなど，国語の時間の基本的な学習の成果が，現れてきていると考える。ただ，「書く」は全国平均より10ポイント差が開いているので，その点が課題である。

### (2) 家庭学習について－児童意識調査から－

家庭学習を「少しはする」と答えた児童が17年度が88%だったのに対し，今年度は99%に達した。家庭学習の習慣化がかなり進んでいると考えられる。

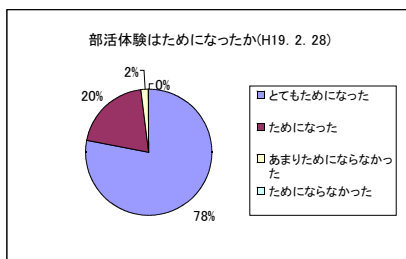
また、3年生以上で「1日30分以上学習する」児童は、17年度が44%だったが、今回の調査では83%まで向上した。家庭での学習時間も延びてきていることが分かる。



### (3) 小中連携の取組について

相互授業参観については、これまで中学校の授業を見たことがない教員もいたため、中学校を理解する上で有効であった。また、それぞれの授業の進め方が分かり参考になった。また、家庭学習カードについても、カードの様式や実施方法などの情報交換ができ、小学校から中学校へとスムーズに移行できるようになった。

小学校6年生対象の中学校での授業部活体験では、「非常にためになった・ためになった」という意見が98%に達し、いわゆる「中1ギャップ」といわれる問題に対して多少なりとも改善になったのではないかと考える。



#### <児童の感想から>

- ・前はとても不安だったけど、部活や勉強が楽しかったんで、とても楽しみになりました。
- ・前は、いつも先輩たちにいじめられないかと、中学校へ行くのはこわかったです。でも今は、先輩たちはやさしくて、中学校へ行くのが楽しみです。

### (4) 研究の課題

- 授業改善を目指し、国語科と算数科で『教えて考えさせる授業』を追究してきたが、他教科についても『教えて考えさせる授業』を波及させていきたい。
- 家庭学習の定着はかなり進んできたので、家庭学習と授業の関連などを探りながら、家庭学習の質的な向上を図っていきたい。




## 5 授業実践例

### 【学年・題材名】

5年「分数のたし算とひき算を考えよう」

### 【本時のねらい】

同分母の真分数どうしの加法計算のしかたを理解し、その計算ができる。

段階	授業の様子・留意点など
教 え る	1 学習課題の確認 分数と分数をたすことができるか 2 同分母分数どうしの加法のしかたを教える。 ・具体物を操作・実演し教えた。 ・分母は変わらずに分子だけをたすことを確認した。 
	3 基本的な問題に取り組ませる。 ・面積図に色を塗りながら分数のたし算の立式を行い答えを導かせていく。 「〇つけ法」による評価の実施 
理 解 深 化	4 発展的な問題に取り組ませる。 ・答えが仮分数になるもの、式に帯分数があるものにも取り組ませた。 5 逆説的な問題を考えさせる。 ・「なぜ、分母どうしをたしてはいけないのか」を考えさせ、児童の意見を引き出す。 「分母は決まっているからたせない。」 「分母は何等分という意味だからたせない。」など 
	6 本時の学習を振り返り、表現させる。 ・わかったことを書かせる。 ・次時の指導の方策等に生かしていく。



学校名 大衡村立大衡中学校  
 所在地 黒川郡大衡村  
 大衡字爪木145-1  
 電話番号 022-345-2072

1 学校の実態

生徒数 165人 職員数 15人

	1年	2年	3年	特別支援	合計
生徒数	66	40	58	1	165
学級数	2	1	2	1	6

2 研究の概要

(1) 研究主題

確かな学力を身につけさせる  
 指導のあり方  
 ～4つの段階をふまえた指導過程の工夫を通して～

(2) 主題設定の理由

① 教育の今日的課題から

変化の激しいこれからの社会を生きるためには、基礎・基本を確実に身に付け、それを基に、自分で解決する能力や豊かな人間性、健康と体力などの「生きる力」を育成することが求められている。その生きる力の「知」の側面であり、基礎・基本はもとより、学ぶ意欲、思考力、判断力、表現力まで含めた「確かな学力」を身に付けさせることは、教育の重要な課題である。

② 本校の教育目標から

本校の教育目標は「健康で心豊かな生徒を育みながら、基礎的・基本的学力の向上を目指す」であり、日常のあらゆる教育活動を通して目標達成を目指している。生徒に学習の基礎・基本を定着させ、確かな学力を身に付けさせることは、学校教育目標の具現化を進めていく上で重要な視点である。

③ 生徒の実態から

生徒については、全体として落ち着いた学校生活を送れている。与えられたことについては、誠実に取り組んでいるが、自主的に取り組む態度や切磋琢磨して自己の能力を高めようとする力、自分の思いや考えを表現する力が十分ではなかった。

生徒の学習の意識調査からは、7割の生徒

が比較的楽しく、積極的に授業に取り組んでいる。「授業が分かる」という生徒も徐々に増えている傾向にある。しかし、理解度は学年が進むにつれておちており、授業が分かるという生徒が多い割には、標準学力検査結果などは平均値を下回っており、基礎・基本がしっかり定着しているとはいえない状況である。そこで、本年度は、指導計画及び指導過程において、「気づく・見通す・深める・まとめる」の4つの段階を設定する。そして、それぞれの段階で、共通実践事項を設定し、各教科で授業改善を行い、学力の向上を目指している。

(3) 研究目標

生徒一人ひとりに確かな学力を身につけさせるための学習指導のあり方を、「気づく」「見通す」「深める」「まとめる」の4つの段階を踏まえた指導過程の工夫を通して明らかにする。

3 研究成果

(1) 生徒の学習意欲向上の取組について

学習意欲を向上させるためには、「楽しく、分かる授業」を実現していくことが重要である。そのために、下記の①～⑤の取組を通して、授業改善を図ってきた。特に、本年度は、生徒の実態を調査・分析した結果を基に、各教科で向上させたい力を「期待される生徒の姿」として設定した。

① 評価規準表の見直し(週指導記録簿の活用)

各教科で、毎時間のねらいや評価規準の見直しを行った。それを基に授業実践し、その手立てや反省を週指導記録簿として蓄積することにより年間指導計画の土台を作成した。

学年	教科	単元	内容	英語	国語	社会	理科	道徳	総合	体育	音楽	美術	保健	家庭	特別支援
1	英語	Reading for Communication	英語圏への動機に書き分け、比較することで、文化や意味への理解を促す。	読みの意図・態度	見方・考え方	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現
1	英語	Reading for Communication	英語圏への動機に書き分け、比較することで、文化や意味への理解を促す。	読みの意図・態度	見方・考え方	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現
1	英語	Reading for Communication	英語圏への動機に書き分け、比較することで、文化や意味への理解を促す。	読みの意図・態度	見方・考え方	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現
1	英語	Reading for Communication	英語圏への動機に書き分け、比較することで、文化や意味への理解を促す。	読みの意図・態度	見方・考え方	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現
1	英語	Reading for Communication	英語圏への動機に書き分け、比較することで、文化や意味への理解を促す。	読みの意図・態度	見方・考え方	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現
1	英語	Reading for Communication	英語圏への動機に書き分け、比較することで、文化や意味への理解を促す。	読みの意図・態度	見方・考え方	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現
1	英語	Reading for Communication	英語圏への動機に書き分け、比較することで、文化や意味への理解を促す。	読みの意図・態度	見方・考え方	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現
1	英語	Reading for Communication	英語圏への動機に書き分け、比較することで、文化や意味への理解を促す。	読みの意図・態度	見方・考え方	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現
1	英語	Reading for Communication	英語圏への動機に書き分け、比較することで、文化や意味への理解を促す。	読みの意図・態度	見方・考え方	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現
1	英語	Reading for Communication	英語圏への動機に書き分け、比較することで、文化や意味への理解を促す。	読みの意図・態度	見方・考え方	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現	読解・表現

<週指導記録簿>

## ② 年間指導計画の作成

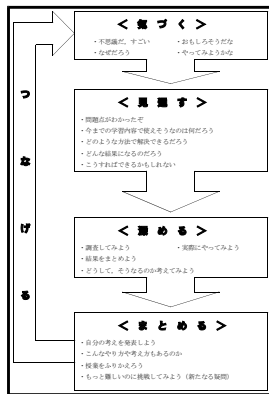
年間指導計画作成に当たっては、生徒の実態を踏まえて作成した。また、毎時間の評価規準を1つに焦点化、内容もより具体的に設定した。それにより、毎時間に達成すべき学習内容が明確になり、一人ひとりの生徒をみとれる授業が展開できた。

単元	内容	ねらい	関心・意欲・態度	思考力・判断力・問題解決力	表現・発表	学びで（反省中）
5	Reading for Communication 「小説」の登場人物の心理 の読みと理解の深め	登場人物の心理を読みとる 小説の登場人物の心理の読みと理解の深め				主語や述語の読みと理解の深め 小説の登場人物の心理の読みと理解の深め
6	Reading for Communication 「小説」の登場人物の心理 の読みと理解の深め	登場人物の心理を読みとる 小説の登場人物の心理の読みと理解の深め				主語や述語の読みと理解の深め 小説の登場人物の心理の読みと理解の深め
7	Reading for Communication 「小説」の登場人物の心理 の読みと理解の深め	登場人物の心理を読みとる 小説の登場人物の心理の読みと理解の深め				主語や述語の読みと理解の深め 小説の登場人物の心理の読みと理解の深め
8	Reading for Communication 「小説」の登場人物の心理 の読みと理解の深め	登場人物の心理を読みとる 小説の登場人物の心理の読みと理解の深め				主語や述語の読みと理解の深め 小説の登場人物の心理の読みと理解の深め
9	Reading for Communication 「小説」の登場人物の心理 の読みと理解の深め	登場人物の心理を読みとる 小説の登場人物の心理の読みと理解の深め				主語や述語の読みと理解の深め 小説の登場人物の心理の読みと理解の深め
10	Reading for Communication 「小説」の登場人物の心理 の読みと理解の深め	登場人物の心理を読みとる 小説の登場人物の心理の読みと理解の深め				主語や述語の読みと理解の深め 小説の登場人物の心理の読みと理解の深め

＜年間指導計画＞

## ③ 4つの段階をふまえた指導過程の工夫

指導過程において、「気づく」「見通す」「深める」「まとめる」の4つの段階を取り入れ、各段階における授業改善のための共通実践事項を下記のように設定した。それを基に、各教科において校内研究授業など実践を通して、授業実践モデルとして具現化していった。



### ○「気づく」段階→課題提示の工夫

生徒が主体的に受け止められる課題とし、ねらいがしっかり把握できるようにする。提示するに当たっては、生徒が学習に対して意欲的に取り組めるように、教材・教具の開発や工夫をし、興味・関心を喚起する。

### ○「見通す」段階→課題解決を見通す工夫

解決の見通しを立てたり、結果を予想したりすることは、その問題を生徒自身の問題とする働きに通じるものである。そのためには、既習事項や先行経験の何を活用しようとしているのかを明らかにしていくことが大切である。そこで、この段階では、グループ活動や学び合いの場を設定するなど、課題解決に向けて、考えを深めさせるように工夫する。

### ○「深める」段階→課題解決の工夫

課題解決や問題解決のための探求活動を行う。学習形態や学習機器、思考の支援を工夫し、本時の評価規準の達成を目指す。評価規準が達成されたかどうかは、座席表や生徒名簿にチェックしていき、規準に到達していな

い生徒については、指導の手立てを工夫する。

### ○「まとめる」段階→課題をまとめる工夫

まとめに当たっては、個々の生徒を生かすとともに、発表を通して、互いの学習を認め合うようにする。また、単元毎に作成した学習計画表に自己評価を記入、達成状況を踏まえ、次時への学習意欲や指導につなげるようにする。

## ④ 学習計画表の作成

学習内容やねらいをあらかじめ単元ごとに明確にした「学習計画表」を生徒に配布、活用することにより、生徒の主体的な学習意欲を高めていった。また、ねらいが達成できたかの自己評価を生徒自身の振り返り学習に活用するとともに、生徒の学習到達度を把握し、達成できなかった生徒への個別指導の充実に努めた。

II - Math 学習内容「平行と合同」				
2年組 番 氏名				
段階	月日	学習内容	ねらい	自己評価
気づく	○	合同な図形	合同な図形の性質がわかる 合同な図形の性質がわかる	
	○	三角形の合同条件	合同な図形を記号を使って表せる 三角形の合同条件がわかる	
見通す	○	三角形の合同条件	三角形の合同条件がわかる 三角形の合同条件がわかる	
	○	三角形の合同条件を利用した証明	三角形の合同条件を利用して証明ができる 三角形の合同条件を利用して証明ができる	
深める	○	仮定と結論	仮定と結論の意味がわかる 仮定と結論の意味がわかる	
	○	証明の進め方	証明の進め方がわかる 証明の進め方がわかる	
まとめる	○	証明の根拠となること	証明の根拠となること 証明の根拠となること	
	○	証明の根拠となること	証明の根拠となること 証明の根拠となること	

＜学習計画表＞

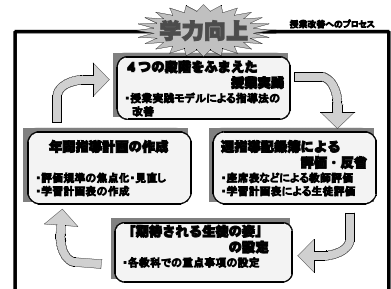
## ⑤ 座席表・生徒名簿による評価の累積

評価については、座席表や生徒名簿に規準に到達していない生徒を授業中にチェックし、その場で個別指導する。また、学習計画表の自己評価も踏まえ、個に応じた適切な指導ができるように「手立てと反省」として週指導記録簿に記入し、次年度の年間指導計画に反映していくようにした。

## ⑥ 成果

○以上についてまとめると、授業改善へのプロセスは、右の図のようになる。

まず、4つの段階を踏まえた「授業実践モデル」による授業を実施する。この実践を受けて週指導記録簿に

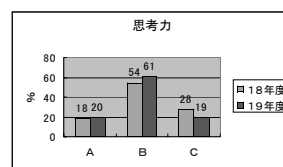
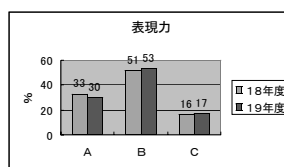
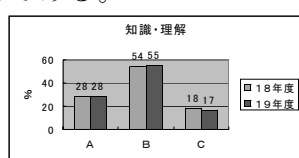
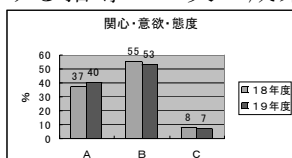


評価・反省を記入する。評価については、座席表などによる教師評価と学習計画表による生徒評価を活用していく。次に、生徒の実態を踏まえ、生徒に身に付けさせたい力として「期待される生徒の姿」を設定し、年間指導計画を作成する。これを毎年サイクルさせることにより、教師の指導力の向上や学力の向上につながると考え実践してきた。

その結果、授業において生徒にどのような力を付けさせたいのか、はっきり意識するようになった。また、この取組を継続していくことにより、授業が常に活性化され、生徒の学力向上につながってきた。

○授業づくりについては、上述した4段階における各教科の工夫を柱に校内研究授業を通して授業改善に努めてきた。それを基に各教科で修正を加えながら、それぞれの段階における取組を「授業実践モデル」として作成できた。特に、見通す段階は、課題解決の方法を考えたり、結果を予想したりすることで、「何をどうすればよいのか」生徒が見通しをもって課題解決に取り組めることが有効であった。また、まとめる段階で活用した学習計画表については、生徒のアンケート調査からは、「計画表があった方がよい」と回答した生徒74%に達し、その理由としては、「授業で何を学習するか分かる」という回答が最も多く、「家庭学習で何を学習したらよいか分かる」「ふりかえり学習」が続いた。逆に、「計画表がない方がよい」と回答した理由には、「ファイルが多くて整理が大変」や「書くのが面倒」という意見が多く、今後の課題である。

○生徒の学力の向上については、下表は、昨年度と本年度の5教科における観点別評価の結果である。最も顕著な成果が見られたのは「思考力」で、規準に達していない生徒が9ポイント減少した。学習意欲・関心についても、Aの生徒が若干増えるなど授業に意欲的に取り組んでいる生徒がほとんどであった。生徒の学習についての意識調査からも授業が「いつも楽しい」「だいたい楽しい」が80%以上あり、また、授業理解度については、「よく分かる」「だいたい分かる」生徒が、学年が進むにつれて徐々に減ってはきているが、70%以上であったことは、各教科における指導の工夫の成果である。



## (2) 家庭学習の習慣化の取組について

確かな学力の育成するためには、授業実践に加え、それぞれの能力や資質に応じた自主的な学習が重要である。そこで、家庭学習計画表や「自学学習の時間」の活用を通して、家庭学習の習慣化を図ってきた。

### ① 家庭学習計画表の活用

「分かる授業」を支えるためには宿題や予習・復習など、家庭での学習課題を適切に課したり家庭と連携して学習習慣を確立することが必要である。そこで、家庭学習を充実させるために「家庭学習計画表」を作成した。計画表をファイルにとじて配付し、帰りの会でその日に家庭で学習する具体的な内容と学習時間を記録する。実施後、実施した時間や記録をつけさせ、翌日の朝の会で提出させることで、家庭学習の習慣化を目指した。計画を立てるに当たっては、その日の授業での自己評価を振り返らせたり、翌日の宿題や課題を優先させて決定させた。また、家庭や担任が点検することで、学習意欲を高めてきた。

＜家庭学習計画表＞

### ② 「自学学習の時間」の活用

「自学学習の時間」は、定期考査一週間前の6校時と放課後に実施している。あらかじめ補充学習の重点が記載された「自学学習の時間」についてのプリントを配布しておき、事前に計画を家庭学習計画表に立てさせる。実施に当たっては、自分で課題を見つけて集中して取り組む時間であることを原則にしているが、補充学習のために特別教室を「教科の教室」として設置した。そこには、自由に移動することがで



き、質問に対して教科担任から指導を受けることができるようにした。約半数の生徒は、教科の教室を訪ねて指導を受けている状況である。また、長期休業中にも教室を開放して実施している。

「自学学習」の時間の活用について

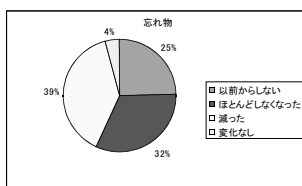
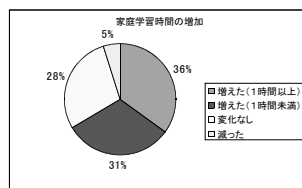
・2/10日(金)・13日(月)～15日(水)6校時および放課後に自学の時間を設けます。(13日(月)は6校時のみ)  
 「自学学習」の時間は、自分で課題を受けて、自分で取り組むための時間です。どの教科のどんな課題に取り組むかを、あらかじめ計画しておきましょう。  
 ・「自学学習」の時間は、自分の課題に集中して取り組みましょう。  
 ・また、この期間中「教科の教室」も設置します。どうしても自分で解決できないことを、その教室に訪ねていて、直接教科担当の先生からアドバイスをもらうことができます。さらに「教科の教室」では、下の表に示す内容を取り上げて復習することも予定しています。自分の学習計画に合わせてうまく活用して下さい。

教科/学年	10日(金)	13日(月)	14日(火)	15日(水)
国語 【高学年】 高学年 低学年	<2年> ・助動詞 ・古典	<3年> ・おくの細道 ・漢詩 その他	<1年> ・指示する語 ・数詞 ・序語	<2年> ・助動詞 ・漢字
社会 【高学年】 高学年 低学年	<2年> ・二つの世界大戦と 日本 ・現代の日本と世界	<全年> ・全分野から質問を 受け付けます	<3年> ・公民分野全部	<1年> ・元寇から宗教改革
理科 【高学年】 高学年 低学年	<1年> ・大地の変化	<2年> ・道徳や環境を学ぶ ・道のり	<3年> ・全学年の学習プ リント	<全年> ・テスト対策や中間
家庭学習 高学年 低学年	<3年> ・電気回路	<1年> ・製図	<2年> ・工具の使い方	<3年> ・電気回路

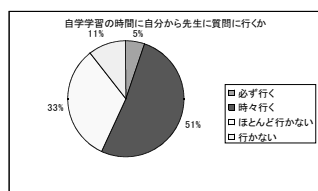
<自学学習プリント>

### ③ 成果

○「明日の予定を書く」と同時に今日の家庭学習の大きな予定を立てる」という流れが定着しつつあり、家庭学習時間が増えた生徒も50%を超えた。また、「学習用具や宿題の忘れものが減った」と多くの生徒が答えており、以前よりも授業に集中できる条件が整ってきた。



○「自学学習の時間」については、事前に計画を立てている生徒は84%と高い数値を示している。しかし、補充学習のための「教科の教室」を設置しているにもかかわらず、分からないところは自分から先生に質問に行く生徒が、「時々行く」で50%を少し上回っているのが現状である。自学学習の時間が自習の時間にならないようにすることが今後の課題である。



### (3) 小・中学校の連携した取組について

#### ① 小・中学校合同研究会の実施

小・中学校の教師が、言語部会と理数部会の2つの部会に分かれ、授業研究会や部会議を通して、指導法の工夫や生徒に付けたい力などを情報交換し、共通理解のもと継続して指導していただけるようにした。まず、お互いの授業参観については、校内授業研究会、指導主事訪問、幼小中研究会において実施した。毎年、最低2回以上は事前・事後検討会も含め授業参観をし、相互理解を図っていくようにした。家庭学習計画表については、小学校

で使用してきたカードからスムーズに移行できるように調整し、家庭学習の習慣化が保たれるようにした。

#### ② 中学校での授業体験の充実

小学校6年生の中学校進学への心配は、「先輩との関係がうまくいくか」「部活動についていけるか」などが主なものである。そこで、中学校で授業を受けたり、部活動を体験することで6年生がスムーズに中学校生活がスタートできるようにすることを目的に実施した。当日は、英語、理科、数学の中から1教科を選択、また、部活動についても入部したいと考えている1種目を選んで体験した。

### ③ 成果

○相互授業参観については、指導案の事前検討会から小学校の教師にも参加してもらったことにより、昨年までと違い活発な検討会となった。この授業参観について、中学校の教師からは、「小学校の学習内容が理解でき、それを踏まえた授業づくりが展開できる」など肯定的な意見が多かった。また、家庭学習計画表については、1年生が4月からスムーズに計画を立てることができるようなど、有効であった。

○中学校での授業体験では、「とてもおもしろかった」「とてもためになった」という肯定的な意見が圧倒的に多かった。また、「入学するのが楽しみなった。少し楽しみなった。」という児童が91%もいたことから、今後も継続して実施していきたい行事である。

## 4 今後の課題と改善策

### (1) 生徒の学習意欲向上の取組について

今年度作成した評価規準を基に単元ごとの学習計画表の内容や書式を工夫することが重要だと考える。全教科全単元にわたって、生徒自身が使いやすく、自主的に勉強する意欲が増す計画表を作成し、授業改善に生かしていくことが最大の課題である。

### (2) 家庭学習の習慣化の取組について

家庭学習計画表については、準備物の記入で終わってしまい、家庭学習計画を立てるまで指導しきれなかったため計画を立てられる生徒と立てられない生徒とに2分化してきた。今後は、学習時間だけに目を奪われるのではなく、学習の具体的な内容や方法を記入させ実施できるように指導していきたいと考える。





学校名	大崎市立古川第一小学校
所在地	大崎市古川二ノ構7番67号
電話番号	0229-22-2072

## 1 学校の実態

児童数656人 職員数52名

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援	合計
児童数	111	91	102	125	111	113	3	656
学級数	4	3	3	4	3	3	2	22

## 2 研究の概要

### (1) 研究主題

「学ぶ力」を身に付け、共に伸びゆく児童の育成  
一個に応じた授業づくりを通して一

### (2) 主題設定の理由

本校では、次の四つの観点から、研究主題を設定した。

- ・ 教育の今日的課題から
- ・ 学校の教育目標から
- ・ 児童の実態と保護者の願いから
- ・ 「確かな学力育成のための実践研究事業」の指定から

平成15年度から、児童に「確かな学力」を育成することを目指して、個に応じた授業づくりと、児童相互の学び合いの在り方について、研究と実践に取り組んできた。

本校で実施している「NRT学力テスト」（3年生以上、国語科・算数科、平成19年5月実施）の結果を見ると、全学年で全国平均を上回る結果となった。学習の内容がおおむね定着していると判断することができる。また、前年度と比較すると、どの学年でも数ポイントの伸びが見られた。

このことから、本校における「確かな学力」の育成について、昨年度までの取組が実を結んできているものと考えられる。しかし、共に伸びゆく児童の育成については、課題が残った。

そこで、3年間の研究の最終年度に当たる本年度は、個としての「学ぶ力」を着実に身

に付けさせていくことと同時に、学習活動の中に意図的に学び合いの活動を設け、集団としての「学ぶ力」を高めていくことを課題として、研究に取り組むことにした。

### (3) 研究主題・副題のとらえ方

#### ① 「学ぶ力」とは

本校では、「生きる力」の知的側面である「確かな学力」を「学ぶ力」ととらえる。そして、「学ぶ力」は、教科や領域に対する「関心・意欲・態度」に支えられるものであり、幅広く「学び方」の習得をも含んだものとする。

#### ② 「共に伸びゆく」とは

「共に伸びゆく」とは、「学習に際して、友達とのかかわりを通して学び合うことにより、自らの考えをより確かなものにしたたり、自らの考えを修正したり、新たな気づきを得て理解を深めたりすること」と押さえる。

学級という集団の中で学習する意義は、一人学びでは得られない効果が認められるということである。具体的には、次のような姿であるとする。

- 他の児童の学び方を参考にして、自らの学びの質を向上させていく。
- 共同での作業・教え合い・話合いを通して、よりよい考えや方法に気付いていく。
- 互いの考えを理解・受容したり、互いに励ましたりしていく。

授業の中に、意図的に学び合いの場を設定していくことで、共に伸びゆく児童を育成していくことができるものとする。

### (4) 研究目標

「学ぶ力」を身に付け、共に伸びゆく児童を育成するための指導の在り方を、個に応じた授業づくりを通して明らかにする。

### (5) 研究仮説

各教科の指導において、以下の仮説を基にした個に応じた授業づくりを進めることにより、「学ぶ力」を身に付け、共に伸びゆく児童を育成することができるであろう。

**仮説 1 :** 学習内容や児童の実態を分析して学習計画を立案し、「指導の重点事項」を受けた個に応じた指導の在り方を工夫する。

**仮説 2 :** 評価規準を基にした教師の評価と児童による自己評価・相互評価を充実させ、個に応じた指導への連動を工夫する。

**(6) 個に応じた指導の在り方の工夫 (研究仮説 1 に対応)**

本年度は特に、「指導の重点事項」の見直しを行い、教科に応じた手だての工夫を図る。

<p><b>【国語科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>理解のための視写の活用</li> <li>理解や表現のための音読の工夫</li> <li>互いのよさに気付く学び合いの工夫</li> </ul>
<p><b>【音楽科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>旋律やリズム・和声の美しさを感じ取らせるための聴取の工夫</li> <li>曲想を生かした表現の工夫</li> <li>互いのよさに気付く学び合いの工夫</li> </ul>
<p><b>【算数科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>課題をとらえやすくする問題設定の工夫</li> <li>筋道を立てて考えさせる算数的活動の工夫</li> <li>互いのよさに気付く学び合いの工夫</li> </ul>
<p><b>【図画工作科】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>児童の思いや願いを引き出す場の設定の工夫</li> <li>つくりだす喜びや楽しさを味わわせる表現の工夫</li> <li>互いのよさに気付く学び合いの工夫</li> </ul>

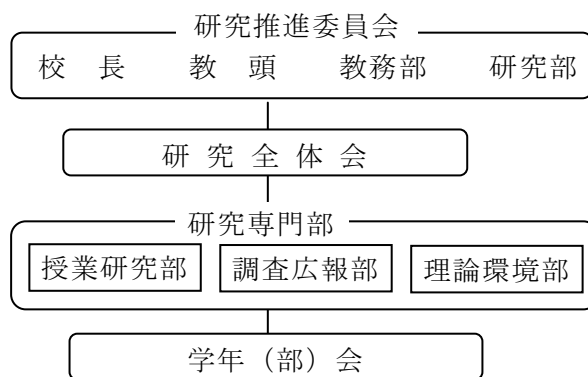
**(7) 指導に連動させる評価の工夫 (研究仮説 2 に対応)**

指導に連動させるため、教師の評価、児童による自己評価や相互評価の工夫を行う。

評価の際には、教師の評価に加え、児童自身が自分の学習の理解度や学習に臨む態度を評価したり (自己評価)、児童相互に考え方や表現内容を評価させたり (相互評価) して、

それらの評価内容も、次時以降の学習計画の立案に活用していくことにする。同時に、教師の指導の在り方を振り返り、定着の不十分な児童には学び直しをさせたり、逆に十分に定着していると考えられる児童には発展的な学習に進ませたりするなど、指導へのフィードバックの機能をもたせていく。

**(8) 研究の組織及び構成**



研究部は、研究主任・研究副主任・各学年の代表 1 名によって組織する。研究推進委員会で検討した案を基に、研究全体会を開く。

研究専門部は、「授業研究部」「調査広報部」「理論環境部」の三つに分かれ、各部の創意と独自性を重視して活動を進める。研究専門部の内容によって学年会を開いたり、逆に学年会の求めに応じて研究専門部の仕事を進めたりするなど、双方向的に機能させている。

**3 研究成果**

昨年度の課題を受けて、3 年目の研究と実践を行った結果、以下の成果が得られた。

**(1) 「学ぶ力」の育成について**

教科ごとに「指導の重点事項」に基づき、児童の発達段階に応じた学年部ごとの具体的な手だての工夫を図りながら、きめ細かく個に応じた指導を行うことで、教科の基礎・基本を定着させることができ、「学ぶ力」を身に付けさせることができた。

また、1 時間の評価項目を一つに絞って本時の目標に沿った評価を行い、その結果を個に応じた指導にフィードバックしたことで、児童が「分かる」「できる」と感じる授業となり、「学ぶ力」の育成に結び付いた。

## (2) 共に伸びゆく児童の育成について

学年部ごとに目指す学び合いの姿を明らかにして、発達段階に応じた系統的な学び合いの在り方を探った。

学習過程に意図的に学び合いを位置付け、ペアやグループでの活動を生かした学級全体での学び合いの在り方を工夫した。それにより、低学年では、互いの考え方の違いに気付くことができるようになった。中学年では、友達考えのよさに気付き、考えを広げることができるようになった。高学年では、友達考えのよさを自分の考えに取り入れ、考えを深めることができるようになった。

また、相互評価を活用してきたことで、児童同士がかかわり合いながら学習することに喜びや意欲を感じ、みんなで考えて分かったという成就感を味わうことができるようになってきた。

## (3) 授業づくりについて

一連の「分析・計画」の流れを押さえた授業づくりを積み重ねることで、同じ手順を踏みながら「分析・計画」を行い、指導に生かしていくことができるようになってきた。

また、国語科では「系統一覧」、算数科では「系統表」を踏まえることで、系統性を意識しながら指導することができた。学習すべき基礎・基本を洗い出し、単元の学習内容を分析することで、本時で育てたい「学ぶ力」の姿を具体的に設定することができ、個に応じた指導の手だてを工夫することにもつながった。

今年度は、さらに学習指導案に「個に応じる手だて」を明示することに努めた。本単元・本時における具体的な手だてを記すことで、意図的に個に応じた指導を行うことができた。

そして、評価をフィードバックして学び直しを行ったり、次の授業づくりに生かしたりしていくことで、授業づくりを深めることができるようになった。

## (4) 校内研究推進の活性化について

各学年部の提案授業に基づいた授業研究会

を重ねることで、主題に迫る授業づくりの在り方を研究してきた。模擬授業や先行授業を積極的に行いながら、学年部が共同で授業をつくり上げた。参観者は、提案の視点に従ってそれぞれの意見を短冊に書きながら参観した。

事後検討会は、「提案についての検証の場」と位置付けている。事後検討会の活性化のために、小グループでの話し合いを含むワークショップ形式の事後検討会を行った。短冊を基にして話し合いの焦点化を図ることで、参観者全員が課題意識をもって話し合うことができた。事後検討会で「次に引き継ぐ課題」を明らかにする授業研究会を積み重ねることが、研究を推進する原動力となった。

## (5) 児童の学習意欲向上への取組について

児童の学習意欲を向上させるためには、望ましい学習態度の育成が不可欠である。そこで、児童が授業に集中し、意欲的に学習できるようにするために、全校で共通した指導を継続してきた。その結果、学習用具の準備、話を聞く態度、積極的な発表態度など、授業に臨む姿勢が培われてきた。

今年度は、年間計画に基づいて、全校統一の「学習の約束」月間重点指導項目を決め、発達段階に応じてレベルアップを図る取組を行った。望ましい学習態度を身に付けた児童は、学習に意欲的に取り組んでいる。

## (6) 小・中学校の連携した取組について

平成15年度から毎年、授業研究会の際に、大崎市内の各小・中学校、近隣の幼稚園や高等学校等に呼び掛けて広く参加者を募り、実践の内容を公開することで、他校種との連携を図ってきた。

今年度は、第4回授業研究会(6月18日)、公開研究会(9月28日)、第12回授業研究会(2月12日予定)の3回、ワークショップ形式の事後検討会で他校種の先生方と意見交換を行った。

事後検討会では、中学校、高等学校の先生方から、教材解釈や授業の進め方について専



門的な立場から意見をいただいた。また、幼稚園の先生方からは、児童の発達段階に応じた指導の工夫について示唆に富んだ意見をうかがうことができた。他校種の先生方と共に学ぶことで、実践を通して研究の成果の検証を図っている。

### (7) 家庭学習の習慣化の取組について

本年度は、家庭学習課題の工夫を図ることで、児童の家庭学習に対する意欲の継続を目指してきた。そのため、授業に直接結び付く課題を出し、家庭学習を生かした授業を行う「レディネス学習」を試みた。また、学習内容の充実のため「自主学習コーナー」を設定し、他の児童の参考になる自主学習ノートを掲示したり、自主学習課題例を提示したりした。家庭学習で培われた意欲・関心を授業で生かすことにより、児童の家庭学習への意欲を維持させることができるようになった。

また、学期ごとに「家庭学習の振り返り週間」を設定した。学年ごとに「振り返りカード」を作成し、家庭学習の時間やめあてについての自己目標が達成されたか、自己評価をさせたり、保護者に励ましの言葉を書いてもらったりすることで、家庭学習の習慣化を図った。

## 4 今後の課題と改善策

### (1) 研究の成果の他教科への波及

平成18年度「宮城県学習状況調査」の結果を見ると、国語科に比べて他教科の結果が下回っている。国語科で培っている学力が、うまく他教科に反映されていない傾向がある。また、「NRT学力テスト」の結果には、学年格差も見られる。研究の成果が他教科にも波及するように、また、学年格差が少なくなるように、個に応じた指導の取組を継続していきたい。

### (2) 学年部研究教科における手だての波及

全校研究教科の国語科だけでなく、学年部研究教科の「指導の重点事項」についても、

学年部における手だての有効性が確認された。そこで、学年部の取組の成果を全校で共有していくことが、今後の課題となる。音楽科、算数科、図画工作科の手だてを、学年の実態に応じて修正しながら全校に広げて、手だての内容や有効性を検証していきたい。

### (3) 望ましい学習習慣の充実

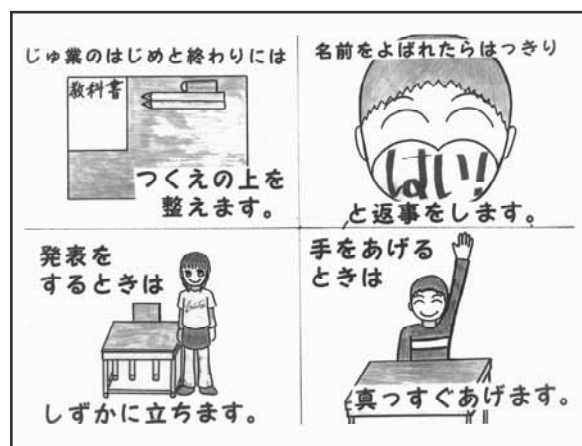
望ましい学習習慣の充実に向けて、今後も、家庭学習内容の充実に努めていきたい。意図的、計画的な課題に基づく家庭学習を行わせるとともに、家庭学習を生かす授業づくりをさらに工夫していきたい。

## 5 実践事例

学習活動を根底で支える「望ましい学習態度」の育成に向けて、全校で「学習の約束」を統一し、定着に向けて継続した指導を行っている。望ましい学習態度を身に付けることで、学習に意欲的に取り組む児童が育ってきた。

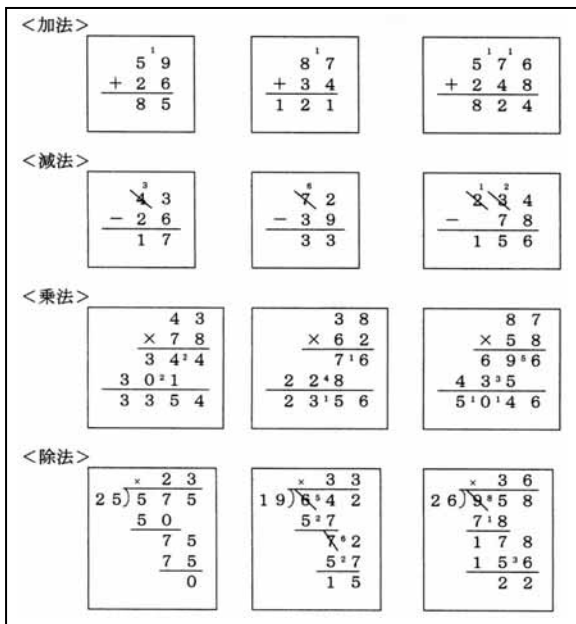
### (1) 実践事例1 「学習の約束」を全教室に掲示

「学習の約束」は、児童向けの掲示物として、全教室に掲示している。



話の聞き方、話型、国語科「視写の仕方」算数科「文章問題の解き方」などを、発達段階に応じた掲示物にして、児童に常に意識させるように努めた。

加法、減法、乗法、除法の筆算については、1年生から6年生まで補助記号の書き方を統一し、掲示している。





## (2) 実践事例2 教師用指導マニュアル「学習の約束」

教師用指導マニュアル「学習の約束」を作成している。文字の書き方、音読の仕方、発表の仕方、声の大きさ、ノートの使い方などについて、教師全員が共通理解し、共通指導することを確認し合っている。

### 座り方

- \* 授業中は、いすを動かして音を立てないようにする。いすに座るときは、机とお腹を握り拳二つ分開けて座る。
- \* 文字を書くときは、お尻を前にずらす。
- \* 足の裏を床にしっかり着ける。
- \* 立つときは、いすを動かさないでそのまま静かに立つ。
- \* 教室を出るときには、いすを入れてから出る。

毎年、年度初めの「研究全体会」や学年会で、転勤してきた先生方と共通理解を図っている。「学習の約束」の冊子を活用しながら、教師が「目指す児童の姿」を具体的に押さえて指導を行うことで、どの学年、学級においても、学習に向かう構えや学習訓練が徹底されている。

また、保護者にも、学校運営説明会、学年懇談、「スクールガイド」や学年通信などで「学習の約束」について説明し、理解と協力を得るようにしている。

## (3) 実践事例3 「学習の約束」月別重点指導事項

年度当初に「学習の約束」月別重点指導事項を決め、計画的、意図的な指導を行ってきた。

月	重点指導事項	月	重点指導事項
4	学習の準備	10	音読の仕方
5	始業・終業のあいさつ	11	原稿用紙の使い方
6	ノートの使い方	12	話型
7	文字の書き方	1	毛筆・硬筆の指導
8	話の聞き方	2	ノートの使い方
9	発表の仕方	3	学習用具の整理

6月には、「ノートの使い方」に取り組んだ。学年ごとにノートの規格を指定して、学年に応じた使い方を指導したことが、学習内容の理解を深めることにつながった。例えば算数科では、1まずに1文字ずつの数字を書くことを徹底させたことにより、位取りが明確になり、計算ミスが減った。

7月には、「文字の書き方」に取り組んだ。書写の教科書を基にして、正しい鉛筆の持ち方について指導した。持ち方の癖が直らない児童には、さいころや洗濯ばさみを用いて矯正を行うことも試みた。さらに、学年通信などを通して、家庭にも協力を仰いだ。1年生では、毎日の家庭学習カードに「鉛筆の持ち方」のチェック欄を設け、保護者に確認し記入してもらった。家庭と連携を図ったことで児童の意識が高まり、効果が上がった。

実践した内容については、毎月、研究全体会で情報交換をして、取組のステップアップを図っている。

大崎市立古川第一小学校URL

<http://www.educ.osaki.miyagi.jp/fd1/>

学校名 加美町立小野田中学校  
 所在地 〒981-4341  
 加美郡加美町字中原23番地41  
 電話番号 0229-67-7100

## 1. 学校の実態

生徒数	216人			職員数	34人
	1年	2年	3年	特別支援	合計
生徒数	74	69	72	1	216
学級数	2	2	2	1	7

## 2. 研究の概要

### (1) 研究主題

「確かな学力の定着を目指した  
 学習指導の工夫」

～基礎・基本を重視した、個に応じた  
 指導を通して～

### (2) 研究主題設定の理由

#### ① 教育の今日的課題から

近年実施された国際的な調査では、児童生徒の学習意欲の低下をはじめ、家庭学習の時間の減少、読解力、論述する力、数学の応用力の低下など、現在の日本の児童生徒の現状とともに、今後の教育に関する様々な課題が明らかになった。そのために学校教育が担うべき役割は、生涯にわたって学習の積み上げが可能となるよう「基礎・基本」の力を構築することに加えて、学ぶことへの関心・意欲、学びを持続できる力、自ら考え判断できる力、判断材料となる知識や自らの手で実践するための技能などの「確かな学力」を身に付けさせることであると考えます。

#### ② 学校目標の具現化から

本校では、学校や家庭、地域の実態に即して、個性を生かし自ら学ぶ意欲をもち、社会の変化に主体的に対応できる心豊かでたくましい生徒の育成を目指し、「向上」「敬愛」「強健」の3つの具体目標の達成を目指している。生徒たちにとって自己を高める力（向上）の土台となるものは、「確かな学力」であると考えます。そこで、生徒一人一人の特性に応じて学ぶ意欲を喚起し、個に応じた指導を加えながら学習の基礎・基本を身に付けさせ、「確かな学力」を育てていくことが、学校教育目標の具現化を進めていくことにつながると考えます。

#### ③ 生徒の実態から

豊かな自然の中で育った本校の生徒は、明朗で真面目な生徒が多く、部活動に熱心に取り組んでいる。しかし、学習に関しては、目標や課題を自覚して取り組む意欲が低かったり、根気強さが不足していたりする生徒も多く、学習の基礎・基本が定着していない生徒もいる。平成17年4月に全校で実施した「中学校観点別到達度学力検査（DR T）」の結果は、国語・社会・理科に関しては、平均して全国達成率より2～3ポイント程度低く、

2・3年生の英語・数学に関しては、5～10ポイント低いという結果であった。これは、学習の基礎・基本が身に付いていない生徒たちが、学習意欲を持続できず、学年が上がるにつれ理解できない範囲が拡大していくことが原因だと考えられる。

このような状況の中で、生徒たちに、将来社会生活を営む上で必要となる「確かな学力」を確実に身に付けさせるためには、生徒の学力の実態をより詳しく把握・分析し、生徒たちの実態に合った指導方法や授業展開の仕方を工夫し、学習の基礎・基本を確実に定着させていくことが必要であると考え、本主題を設定した。

### (3) 研究主題の捉え方

#### ① 「確かな学力」とは

本校で育てたい学力を以下の3つの点で捉えた。

#### ○ 「学ぼうとする力」

- ・興味・関心をもって学んでいこうとする力
- ・動機をもって学び向上していこうとする力

#### ○ 「知識・技能としての力」

- ・次の学びに必要な知識や技能
- ・生活する上で必要な知識や技能

#### ○ 「活用する力」

- ・知識・技能を組み合わせ、関係付け、働かせる力
- ・学びを高め、向上させていく力

また、各教科の「確かな学力」を以下のように捉えた。（国語科・社会科・数学科のみ掲載）

#### 『各教科の「確かな学力」』

教科名	生徒に身に付けさせたい、各教科で捉える「確かな学力」
国語	「学ぼうとする力」 ① 言葉や語句、読解や言語による表現活動に興味・関心をもち、自ら追究し進んで学ぼうとする力 「知識・技能としての力」 ① 「読解力」……… 語句の意味を理解し活用できる力 ② 「読解力」……… 文章や資料の内容を正しく理解できる力、登場人物の気持ちなどを豊かに想像できる力 ③ 「音読力」……… 文章を正確に声に出して読める力 ④ 「表現力」……… 文章を正しく書いたり、自分の気持ちを豊かに表わすことのできる力 「活用する力」 ① 「問題解決力」……… 辞書を活用し調べ、理解できる力 文章や資料の内容を正しく読み取り、筆者の意図を理解できる力 …… 登場人物の気持ちなどを想像し、主題に迫ることのできる力 指示語や接続語、段落の構成などを考えながら、筆者の意図を正しく理解できる力 …… 描写や表現を基に、登場人物の気持ちなどを豊かに想像できる力 ③ 「情報収集力」……… 辞書や辞典・参考書などを活用して調べ、理解したり整理できる力 ④ 「情報活用力」……… 辞書や辞典・参考書などを活用して調べ、自分の表現活動に生かせる力
社会	「学ぼうとする力」 ① 社会的事象に興味・関心をもち、意欲的に追究しようとする力 「知識・技能としての力」 ① 「読解力」……… 語句の意味を理解し整理できる力 ② 「問題解決力」……… 考察した結果を基に、作業などに関連させ創意・工夫する力 「活用する力」 ① 「課題発見力」……… 社会的事象に関心をもち、問題点、課題を考える力 ② 「問題解決力」……… 問題点・課題点について資料を収集し、調査する力、またそれをレポートや発表・討論などに活用し表現する力 ③ 「思考力」……… 調べた事象を多面的・多角的に考察する力
数学	「学ぼうとする力」 ① 数学的事象に興味・関心をもち、意欲的に追究しようとする力 「知識・技能としての力」 ① 「課題発見力」……… 関係や法則を数理的に正しく把握する力 ② 「表現力」……… 数量関係を式や図、計算などに書いて表す力 「活用する力」 ① 「情報活用能力」……… 既習事項を活用する力 ② 「思考力」……… 筋道を立てて考える力（帰納的、演繹的、類推的 等）

### ② 「学習指導の工夫」とは

○ 「学ぼうとする力」の定着を目指した学習指導の工夫

- ・生活と結び付けながら学ばせたり、学ん



- だことが生かせる実感を味わわせたりする。
- ・自分に合った学習のめあてをもたせ、課題解決の方法を自分で考えさせたり、教師が示したりする。
  - ・評価を通して、できる喜びや認められる喜びを味わわせていく。
  - 「知識・技能としての力」の定着を目指した学習指導の工夫
  - ・学んだことを確実に積み上げられるよう、関係付けてまとめることができる指導を行う。
  - ・学んだことを、何度も繰り返しながら学ばせる。
  - ・自分自身で学びを広げたり深めたりできるよう、学び方を身に付けさせる。
  - 「活用する力」の定着を目指した学習指導の工夫
  - ・学んだ知識や技能を活用して、自分の考えを導き出す学習を取り入れる。
  - ・自分で考える力を身に付けさせるため、原因や理由を考へること、根拠を基に考へること、比較し分析することなどを学習の中に取り入れる。
  - ・学習したことを、生活と関連付けて考えさせ、実際に役立つ力となるようにしていく。

### ③ 「基礎・基本を重視した」とは

本校では、「基礎・基本」を「学習指導要領に示された内容」と捉え、学力を積み上げていく上で大切な「骨組み」の部分であると捉えた。

### ④ 「個に応じた指導」とは

本校では、一斉指導を授業の軸として指導を行っている。しかし、「学習意欲」「既習事項の習得状況」「理解や作業のスピード」には個人差があるため、目標のめあせ方、課題の与え方、指導の仕方を変えながら、生徒一人一人に、できる喜びや達成感を味わわせるような学習を目指し、「個に応じた指導」を取り入れている。また、個別指導やグループ学習などの「学習形態」、練り合いや調べ学習などの「学習方法」、基礎問題や発展問題などの「学習内容」などを変えた指導も、個に応じた指導として取り入れている。

## (4) 研究の目標

基礎・基本を重視した指導や、個に応じた指導を通して、生徒に確かな学力を定着させるための学習指導の在り方を、明らかにしていく。

## (5) 研究の視点と取り組み内容

**視点1** 「確かな学力」を身に付けさせるための授業づくり

### ① 生徒の学力の実態を踏まえた授業展開

#### ア 調査

生徒の「学習意識調査」と保護者の「家庭教育に関する実態調査」を行い、経年比較し意識の変容をみる。また、年度初めに実施する「中学校観点別到達度学力検査(DRT)」の結果を分析し、各教科(5教科)の学力の実態を把握するとともに、前年のものと比較して指導の効果・課題を分析する。また、学期毎に「生徒による授業評価」を、単元に入る前にはレディネステストを行う。

#### イ 授業づくり

DRT、生徒による授業評価、レディネステストの結果を分析考察し、既習内容のどの分野に、どんな関心や意欲をもっているのか、力がどのくらい身に付いているかなど、生徒の実態をつかむ。そして、授業展開に当たっては、課題提示の吟味や予想される生徒の反応などの対策を十分行う。また、学習指導要領に示されている内容がきちんと身に付いているかどうかを把握して、不十分な生徒に対する補充的学習を行う準備をする。評価基準の「十分満足」まで到達した生徒への発展的学習についても準備しておく。

指導体制については、生徒の実態に即して、個別学習、ペア学習、グループ学習などを取り入れ、個人で課題を追究させたり、学び合いを通して課題を深め広げていく学習に取り組ませたりする。

### ② 個に応じた指導

生徒の「学習意欲」「既習事項の習得状況」「理解や作業のスピード」に応じて、指導形態や学習方法、学習内容などを変え、生徒一人一人にできる喜びや達成感を味わわせるような指導を取り入れる。

### ③ スキルアップをねらった学習

ドリル練習やスキル学習、基礎学力コンテンツなど反復学習を行う時間を設け、生徒のスキルアップを図る。また、ペア学習やグループ学習で、体験し合い、見合い、検討し合い、教え合う学習を通して、助け合い、競い合いながらスキルアップさせる方法も取り入れていく。

### ④ 生徒の励みになる評価

学習の検証を行うことにより、自分の伸びた点を確認できたり、次の活動の具体的なめあてがはっきりすることで、生徒の励みにつながる。教師による評価、相互評価、自己評価などを織り交ぜて行うが、いずれも次のような手順で行う。

ア 学習のポイント、評価の観点を生徒にきちんと示し、目標が達成できたか、学力が伸びたかどうかを具体的に検証するため評価規準を用意する。

イ 評価規準を参考に自分の目標を立て学習に臨ませる。

ウ 学習内容を分析し、分析結果を基に、評価規準に従って評価する。

エ その評価を基に次の学習課題を決め、次の学習へとつなげる。

教師による評価や相互評価は、良さを認められることによって、大きな喜びを味わえる評価であり、自己評価以上に生徒の励みになる評価である。また、相互評価を行うには、根拠を示して良い点を評価することが必要であり、分析的な見方をすることによって、自分自身の力を高める学習にもなっている。

**視点2** 「確かな学力」を支える家庭学習の支援

### ① 授業につながる家庭学習の工夫(レディネステスト)

生徒の学習習慣の確立のため、各教科、次の授業に生かせるような家庭学習の課題を出



して生徒に行わせる。

## ② 「家庭学習の手引き」の活用

学習の進め方（17年度・18年度は5教科、19年度は9教科）を解説した「家庭学習の手引き」を作成して配付し、生徒に自学自習の習慣を身に付けさせるとともに、家庭学習の充実を図る。

### 視点3 「確かな学力」の育成を目指した小・中学校の連携

#### ① 学習に関する実態調査と分析・考察

小野田中学校区の小・中学校4校が同じ項目で「学習に関する実態調査」を行い、分析・考察した結果を話し合い、児童生徒の学習への意識の傾向や特性を把握し今後の指導に生かしていく。

#### ② 授業研究や研修会の合同開催と相互参加

校内授業研究会や講演会、指導主事訪問などの際に、相互参加ができるようにし小・中学校それぞれの立場から意見の交換を行う場を設ける。

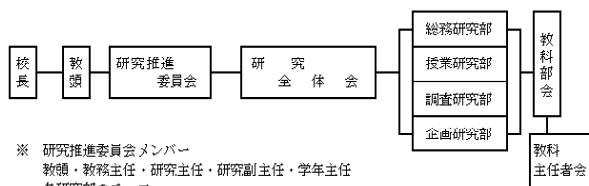
#### ③ 小野田地区小・中学校学力向上連絡協議会の立ち上げ

小野田中学校区の小・中学校4校による合同会議を定期的で開催し、各学校の学力の実態と課題を明らかにし、学力向上に向けた対策（基礎・基本の捉え、学力向上推進プラン、テスト資料分析・指導対策等）を話し合う。

#### ④ 家庭地域への啓発活動

小野田地区小・中学校学力向上連絡協議会で、定期的に保護者・地域向けリーフレットを発行する。また、各学校のPTAと連携し学力向上の講演会・研修会などを開き、保護者の意識高揚を図っていく。

## (6) 研究組織図



※ 研究推進委員会メンバー  
教頭・教務主任・研究主任・研究副主任・学年主任  
各研究部のチーフ  
上記の研究組織図をもとに研究を推進する。  
研究部門を、四部門に分けて全職員がいずれかに所属する。

研究部門	主な活動内容とメンバー構成<◎=チーフ>
総務研究部	研究計画の企画立案、小中連携の取り組み、研究紀要の編集、公開研究会の企画・立案、渉外、研究費用の執行、研究の記録等を行う。
授業研究部	少人数指導や個に応じた指導のあり方など、授業の展開についての検討を行うとともに、「数学科」「英語科」「理科」「保健体育科」の公開授業に向けて、指導案の作成にあたる。
調査研究部	生徒や保護者の意識調査票の作成及び調査結果の分析・考察や「中学校観点別到達度学力検査」(DRT)の結果分析・考察、結果のグラフ化、資料の作成を行う。
企画研究部	研修会や授業研究、模擬授業、研究会などの企画を行う。また、総務研究部で企画・立案した「公開研究会」の原案を受けて準備などを行う。

月に一度の割合で「研究推進委員会」「研究会全体会」を開き、研究の推進状況や各研究部の活動報告や校内研究の進捗具合を確認する。研究推進委員会は、各研究部の研究内容、

研究方法などの検討を行い、「全体研究会」への提案をする。教科主任者会及び教科部会は、適宜開催し教科毎の実践研究を推進する。

## 3. 研究成果

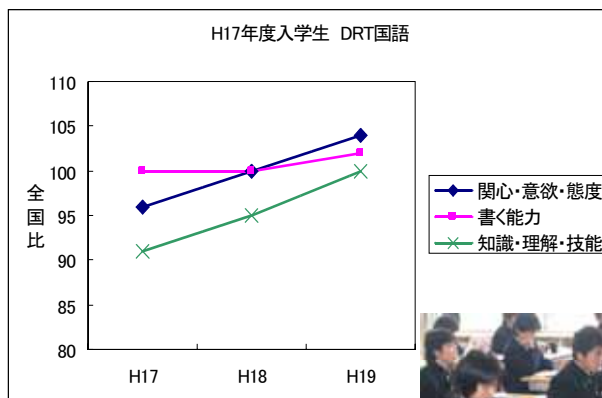
### (1) 生徒の学力の実態を踏まえた授業展開について

#### ① DRT（19年度）の結果分析を基にした具体的取組

<第3学年時実施(H19.4.17)>

#### <国語科>

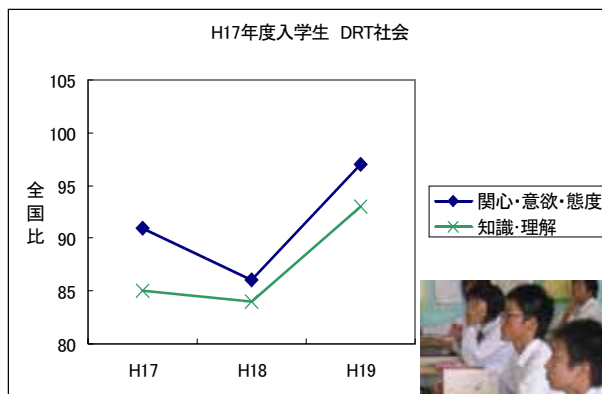
観点別調査結果を見ると、「読む能力」を除いて2～5ポイント上昇した。2学年の実践で、生徒に覚えさせたい漢字一覧表を提示し、書き取りテストを実施したこと、文法に関しては、既習内容のプリントに取り組み、その解答をしながら復習を行い新たな内容の積み上げを行ってきたことが、結果に結びついていたのではないかと考えられる。今年度「読む能力」の指導に関しては、一人一人が課題解決の喜びを味わえるよう段階的に問題を設定して、ステップを踏みながらより難しい問題に取り組んでいけるようなコース別学習を行なった。



#### <社会科>

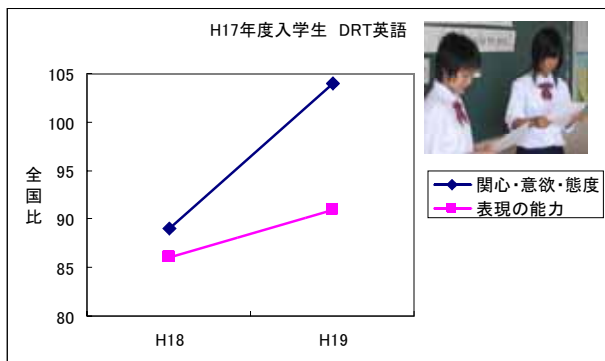
観点別調査結果は、「知識・理解」「関心・意欲」に伸びが見られた。これは、生徒が授業内容をよく理解できるようになってきたからだと考えられる。「技能・表現」が低下したことについては、語彙調査を基にした授業展開が中心となり、作業学習への取り組みが減少してしまったことが原因と考えられる。

今年度は、作業的な学習にも十分な時間をとるよう心掛けて授業を展開した。



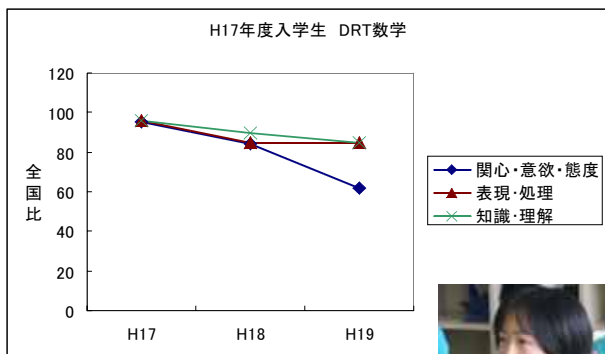
## ＜英語科＞

観点別調査結果を見ると「関心・意欲・態度」が15ポイント、「表現の能力」が5ポイント上昇した。しかし、「言語や文化」の観点で4ポイント低下し、その中でも状況に応じて質問に適切に答えたり、流れをつかんだりする力が低い傾向にある。そこで日本と外国との言語や文化・習慣の違いを、言語と関連付けて学ばせる学習を行った。



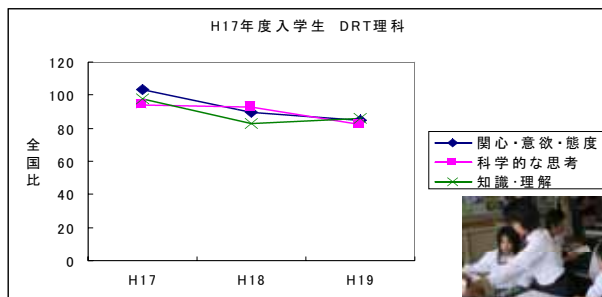
## ＜数学科＞

観点別調査結果は、「関心・意欲・態度」「数学的な考え方」が著しく低い結果となった。そこで、数学的な考え方の力を伸ばすため、上皿天秤やタイル図などの具体物の操作を通して、数量をまず感覚的に捉えることから始め、数式を用いて数量関係を把握する力へと結び付けさせた。また、読み取る能力を高めさせるために、実生活に即した問題を数多く取り入れた授業を行った。



## ＜理科＞

生徒たちは、実験に対する興味・関心は高いが、観点別調査結果を見ると「技能・表現」「科学的な思考」が全国平均より低い結果であった。これは、技能や表現に関する基礎・基本が確実に身に付いていなかったこと、実験結果を検証して考える力が身に付いていなかったことによると考えられる。「知識・理解」は、2学年の時よりも3ポイント上回った。特に、生徒の興味・関心を引く工夫がうまくいった単元での定着率がよかったことから、理科は、実験・観察を通して興味・関心を高め、課題を解決させていくことが大事だということが確認できた。そして「技能・表現」を高めていくために、一人一人に目的意識をもたせ、実験器具に多く触れさせ、主体的に学ばせる指導を展開した。



### (2) 生徒の学習意欲向上への取組について

スキルアップをねらった学習＜補充的な学習支援＞として「スキル学習」を毎日実施した。月曜から「国語」「数学」「英語」「社会」「理科」のローテーションを組んで行った。実施時間は、授業終了後10分間である。「漢字などの言語事項」「計算問題」「英単語」「重要語句」などを中心とし、教科担当が作成した。生徒が自己採点し、結果を個人票に記録し蓄積した。また、「スキル学習」への意欲付けと成果の確認のために、全校で年6回の「学力コンテスト」を実施した。テストは5教科同時に実施し、時間は50分とした。問題の作成は教科担当が、採点は学年で担当した。各学年、教科毎、満点者及び成績優秀者の氏名を掲示し、賞状を授与した。

「スキル学習」や「学力コンテスト」を実施した結果、生徒の授業評価では、「授業が分かるようになった」と答える生徒が増え、教師も授業での理解度が高まったと感じている。

### (3) 家庭学習の習慣化の取組について

#### ① 授業につながる家庭学習の工夫

各教科で、宿題（課題）に「レディネス学習」を取り入れている。内容は、次時の授業で必ず取り上げるもの、短時間で学習可能なものとしている。学年に応じた出題内容にし、3学年では、総合力を問うような課題も出している。

#### ② 「家庭学習の手引き」の活用

より活用できる「家庭学習の手引き」を検討し、平成19年度版「家庭学習の手引き『集中倍率』」を作成した。

平成18年度版の利用状況や内容の再検討を行い、大幅改訂をし従来の「各教科の学習方法」に加え、各教科の3年間の学習内容（シラバスのもの）を付けた。また、年間の定期テスト、実力テストの日程とテスト勉強の学習計画表も付けた。さらに、一日の振り返り（反省）の欄も設け、毎日記入できるようにした。活用の仕方は、毎日の家庭学習の手引きとしての活用の他に、定期テスト・実力テスト時に学習計画を立てさせその点検も行った。

また、「一日の振り返り」は、2週間に一度の割合で点検しているが、家庭学習の質がしだいに良くなってきたことが実感できるようになった。また、家庭学習の時間も増加に転じてきている。



#### (4) 小・中学校の連携した取組について

① 授業研究や研修会の合同開催相互参加  
校内研究や講演会、指導主事訪問などの  
際に相互参加を行いそれぞれの立場から意  
見の交換を行っている。

#### ② 「小野田地区小中学校学力向上連絡協議会」の立ち上げと活動

昨年度の小野田中学校区小・中学校4校  
による合同会議を受けて、今年度5月に学  
力向上に向けた「小野田地区小・中学校学  
力向上連絡協議会」を立ち上げた。また、  
4校の学力向上への取り組みと、連絡協議  
会の役割を載せたリーフレットを作成し、  
6月に4校の全家庭に配布した。更に、各  
学校の取組を載せたリーフレットの2号も  
12月に4校の全家庭に配布した。

#### (5) 地域への啓発活動の取組について

上記②の取組とリンクさせて、リーフレ  
ットの発行や研究だより「志学」を発行し、  
学校の取り組みを紹介するとともに、家庭  
学習の大切さや保護者への協力の呼び掛け  
を行った。そして、小野田地区の全戸へも  
回覧板で回し、活動の様子を知らせた。

また、「小野田地区小・中学校学力向上連  
絡協議会」主催による4校PTAの合同研  
修会を実施した。内容は、「平成18年度宮  
城県学習状況調査の実態から見た小野田地  
区の子供たちの学力の実態」の報告会と、「子  
供の学力向上のために親ができること」と  
題した講演会を行った。

このような環境が整ってきたことで、小  
・中学校がお互いの情報を共有しながら、  
長いスパンでの一貫性ある指導が可能にな  
って来ると考えている。

### 4. 今後の課題と改善点

#### (1) 「確かな学力」を身に付けさせるための授業づくりについて

今年度4月に行った「中学校観点別到達度  
学力検査」(DR T)の結果から、本校で取  
り組んできた研究の成果が生徒たちの学力向  
上につながってきたことが伺えた。しかし、  
「分野」・「観点」によっては、課題が大きく  
浮き彫りになった面もある。この結果を全職  
員で分析し、その対策を実践しているところ  
である。そして、角度を変えて検証し続け、  
生徒に力を付ける授業づくりに努力していかな  
ければならないと感じている。

#### (2) 「確かな学力」を支える家庭学習の支援について

毎日決まった時間、家庭学習に取り組む習  
慣を身に付けさせるため、「家庭学習の手引  
き」の活用や学習ノートの提出が活発になる  
よう、点検や励ましの方法を工夫していく。

#### (3) 「確かな学力」の育成を目指した小・中学校の連携について

生徒の学習履歴に関する情報交換や、解決  
方法についての意見交換を密に行い、合同で  
授業作りを行うなど、児童生徒に応じた学習  
方法の在り方についての連携を図っていく。

### 5. 実践事例

#### (1) 実践事例1 <個に応じた指導>

<数学科…2学年>の具体的な実践例

数学科では次の①～④の視点で個人差を想定し、それに対する具体的な支援策を実践した。

- ①学習意欲としての個人差
- ②思考の速さとしての個人差
- ③思考の深さとしての個人差
- ④課題解決の違い方法の違いとしての個人差

【方法の違いとしての個人差に応じた指導】

学習内容 「連立方程式の解き方」の課題  
○スーパーマーケットでは、  
①りんご2個とオレンジ5個の代金の合計は600円  
②りんご2個とオレンジ3個の代金の合計は480円です。  
オレンジ1個の値段を求めなさい。

①で、例えばりんご1個100円とすると、オレンジは1個60円になる。  
これを②に当てはめると、 $100 \times 2 + 60 \times 3 = 480$  確かに成り立つ  
上記のように数を当てはめて解いた生徒には、答えの求め方が極めて偶然性に  
頼った求め方であり、より複雑な問題になると、解を見付けられなくなる可能性が  
高くなることを理解させた。モデルを使って数量関係を表すことで、数式的関係を  
正しく把握できることを示し、どのような問題にも対応できることを指導した。  
具体的には以下の実践である。

りんごを○、オレンジを■で表すと、  
○○ ■■■■■ → 600 …… ①  
○○ ■■■ → 480 …… ②  
2つの式を見比べると、オレンジの個数の差が代金の差120円になってい  
ることが分かる。だから、■■→120なので、オレンジは1個60円。  
上記のようにモデルを使って加減法的な考え方で解いた生徒には、りんごの個数  
もオレンジの個数も異なる場合はこの考え方で対応できないことを理解させ、立  
式で係数を揃える必要性を示した。また、加法でも減法でも対応できるようにア  
ドバイスをした。

りんごを○、オレンジを■で表すと、  
○○ ■■■■■ → 600 …… ①  
○○ ■■■ → 480 …… ②  
2つの式を見比べると、点線の部分が同じなので、①の点線内は480円  
だから、 $480 - \blacksquare \rightarrow 600$   
つまり ■■■ → 120 となり、オレンジは1個60円。  
上記のようにモデルを使って代入法的な考え方で解いた生徒には、数量関係がよ  
り複雑になると、代入法的な考え方をすることは無理であることを理解させた。代入  
してもどちらか一方を消去できない場合を示し、モデルの形によって代入法と加減  
法を上手に使い分けことが問題解決の近道であることを指導した。

【実践の成果と課題】

- ・モデルを使って説明することで、それぞれの考え方のよさを理解することができ、状況によって使い分けられることの大切さを、理解できた生徒が多い。
- ・加法や代入法で解いた生徒に、自分の考えを発表させ、他の人に説明することで自分の考えを再確認し、「分かる」ことができた。
- ・自分で考えることを大切に、考えを発表させる時間を確保したことで、生徒の学びを深めることができた。

#### (2) 実践事例2 <スキルアップの指導>

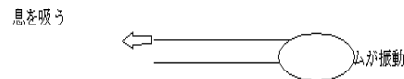
1学年の始めの段階で最も重要視すべきスキルを、「関心・意欲・態度」と捉え、「ものづくり」を通してスキルアップをねらった学習を行った。

<理科…1学年>の具体的な実践例

単元の導入において、その単元に関心・興味・関心をもたせるかは授業を展開していく上でかなり重要なことである。1学年の「身の回りの現象」は中学校理科において初めての物理領域の学習となり、今後物理領域を学習する上での基礎となる重要な単元でもある。この単元でつまづいてしまうと、物理領域の学習はもろろん、今後の理科の学習に対する苦手意識をもってしまい、学習意欲が低下してしまう。そこで、この単元では生徒に「ものづくり」をさせて興味・関心を高めさせる指導を行った。単に「ものづくり」で終わるのではなく、自分でつくったもので実験をさせ事象を検証させた。

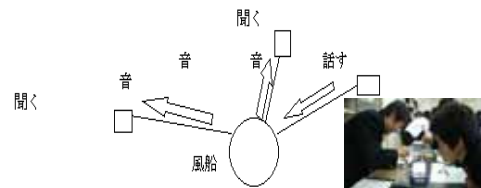
【ストローとフィルムを使った笛の作成】

ストローの口から息を吸うことで、ストローの反対側の先端に取り付けたフィルムが振動する。これにより、物体が振動することで音が出るという概念をつかませることができる。



【何人でも話せる糸電話の作成】

風船に班の人数分の糸を付け、糸の反対側の先端に紙コップを取り付ける。風船を中継地点とした糸電話が完成する。一人が話すと他の紙コップに声の振動が伝わることで音が自分の耳(鼓膜)に伝わるといった概念をつかませることができる。



【実践の成果と課題】

- ・生徒は大変意欲的に「ものづくり」に取り組んだ。授業の後に「次の理科が楽しみだ」といった声があふれた。笛の作成では「ストローをつなげるとどんな音になるのか」「ストローをつなげるとどんな音になるのか」と生徒自身が次の課題を見付け、考えを深めることができた。
- ・課題として、単元の授業時数を考えると毎時間「ものづくり」を行うことは不可能である。「ものづくり」の内容を精選し、授業内容と関係が深いものを取り扱っていく必要がある。



**学 校 名** 栗原市立鶯沢小学校  
**所 在 地** 宮城県栗原市鶯沢南郷辻前10  
**電 話 番 号** 0228-55-2042

## 1 学校の実態

児童数173人 職員数15人

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援	合計
児童数	27	30	26	20	32	34	4	173
学級数	1	1	1	1	1	1	2	8

## 2 研究の概要

### (1) 研究主題

「自ら考え、表現する児童の育成」

—国語科，算数科におけるかかわり合いを生かした授業改善を通して—

### (2) 主題設定の理由

我が国の社会は、国際化、情報化、科学技術の発展など、様々な面で急激な変化を遂げている。子供たちを取り巻く社会情勢も、地域社会の人間関係の希薄化、少子化に伴う過保護や過干渉、自然体験・生活体験・社会体験の不足など、様々な課題が指摘されている。一方、子供たちの実態に目を向けてみると、学力の低下、国際的に低い学習意欲、いじめ、不登校、引きこもりなどの心の問題、社会性の欠如、体力の低下など、多くの課題が指摘されている。今、このような課題に対応すべき「生きる力」の育成が、学校教育に求められている。

「生きる力」は、「確かな学力」「豊かな人間性」「たくましく生きる健康や体力」のバランスがとれた全人的な力を意味する。この中でも県として学力向上を第一の課題としている。「確かな学力」は、知識や技能に加え、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などを含めたものである。児童がこのような変化の激しい社会を生きていくためには、自分の考

えをしっかり持ち、思考、判断し行動できる資質や能力を身に付けることがきわめて重要なことであり、自分の思いや考えを進んで表現する力はそのために必要不可欠な能力であるとする。

このような資質や能力は、自分と他者、環境や文化、さらには自分自身とのかかわり合いの中で育まれていくものであるとする。学校における教育活動、とりわけその中核をなす授業を「かかわり合いの場」としてとらえ、生かすことによって「確かな学力」、さらには「生きる力」へと結びついていくものとする。

以上の理由から、上記主題を設定した。

### (3) 研究組織図

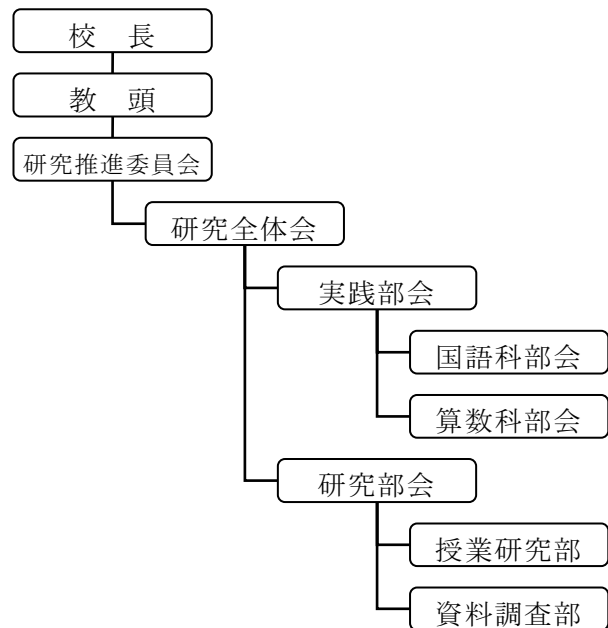


図1 研究組織図

## 3 研究成果

### (1) 児童の学習意欲向上への取組について

#### ① かかわり合いを生かした学習活動

##### ア 授業づくりの基本

学習のねらいに応じ効果的なかかわり合いを作り出すためには、単元全体をとおした指導構想を持つことが大切であるとする。児童に付けさせたい力、単元の中で教えることと考えさせることを明確にして指導計画を立



て、それらを踏まえて1単位時間ずつの指導過程を組み立てることが重要である。

<p><b>○身に付けさせたい力の明確化</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学習指導要領の内容の確認</li> </ul> <p><b>○児童の実態把握</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教科，単元，教材に関する実態把握</li> </ul>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------



<p><b>○単元の構想</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>単元目標</li> <li>教材研究，教材解釈，教材分析</li> <li>教えることと考えさせることの明確化</li> <li>どこで「かかわり合い」を生かすか</li> <li>評価規準の作成</li> <li>1単位時間ずつの組み立て</li> </ul>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------



段階	とらえ方	具体的手だて
つかむ	学習課題を的確にとらえ，興味・関心を持ち，意欲を高める。	<ul style="list-style-type: none"> <li>「かかわり合い」につながる課題内容の工夫</li> <li>興味・関心，意欲を高める課題提示の工夫</li> </ul>
見通す	個又は小集団で，既習内容をもとに自分の考えを持たせたり，自力解決させたりする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>考え，取り組む時間と場の確保と解決方法の示唆</li> <li>学び方につながるノート指導，ワークシートの工夫</li> <li>話し合いの基本形の提示</li> </ul>
深める	課題について考えたことや方法について，小集団あるいは全体で発表，交流し，互いに深めたり高めたりさせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>小集団，全体による交流の場の工夫</li> <li>発表方法，形態の工夫</li> <li>自由な発言につながる人間関係の構築</li> </ul>
確かめる	異なる方法で解決を試みたり，友達の考えを取り入れながらまとめたりすることで，学習内容や自他の変容を確認させる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習内容確認の手だての工夫</li> <li>まとめ方の基本形の提示</li> <li>振り返りの視点の提示</li> <li>自己，相互評価の工夫</li> <li>「かかわり合い」につながる家庭学習課題の工夫</li> </ul>

図2 授業づくりの基本形

## イ 学習形態の工夫

かかわり合いの学習形態をペア，小集団，一斉の3つに分類し，より効果的なかかわり合いができるように工夫してきた。

ペア学習は1対1なので，基本的に全員が自分の考えを相手に伝える，相手の話をしっかり聞くという場が保障される。話し方・聞き方を身に付けるのに最も基本的なかかわり合いといえる。また，一人一人に自分の考えをしっかりと持たせたい場合なども，ペア学習が有効である。さらに，音読や暗唱を聞き合いながら練習したり，問題の答えを確認し合ったりなど，授業の中ですぐに取り入れられるよさがある。

小集団は気軽に自分の考えを言えるというよさがある。実際，全体での話し合いではなかなか自主的な発言がみられない児童も，小集団の中で積極的に発言している場面がみられる。小集団の構成のしかたも，生活・学習グループや課題選択別グループなど様々なバリエーションがあり，学習課題やねらいとする効果に応じて構成することができる。また，ペア学習で考えが出ない場合や問題解決に至らなかった場合などに取り入れることによって，これらの問題を解決できることもあった。

一斉でのかかわり合いは，個，ペア，小集団から出された考えを，さらに話し合いや練り合いをとおして深めたり，また，それを共有し個へ還元したりする場となる。

相手に考えを伝える方法も基本的には言葉であるが，より分かりやすく伝えるために図表や操作活動を介する場合もあり，課題やねらいに応じた表現を工夫させている。

## ② 基礎的な学力の定着を図るための取組 ア スキルタイム

基礎的・基本的な知識・技能の習熟を図る目的で，月～金曜日の2校時開始前10分間をあてて取り組んでいる。内容は漢字の読み書き，音読，暗唱，計算練習等である。

## イ パワーアップタイム

定着の不十分な単元等の補充的な学習を目的として、月曜日の放課後30分程度の時間で取り組んでいる。

### (2) 小・中学校の連携した取組について

#### ① 合同授業研究の実施

お互いの研究授業を参観し、できる限り事後検討会にも参加し合った。それによって学習内容の系統性だけでなく、児童生徒の発達の段階についても理解を深めることができた。

#### ② 小・中学校教師による交流授業

小学校の授業に中学校教師の持つ深い専門性を、中学校の授業に小学校教師の持つきめ細かな個への支援を生かしたTT指導やゲストティーチャー等の交流授業を実施することによって、児童生徒の学力向上へつながるのではないかと考えた。

19年2月と11月には、中学校1年の国語（領域：話す聞く）の授業で小・中学校教師によるTT指導を実践した。前年度の6年生担任がT2としてグループへのアドバイスや個への支援、励ましの声かけなどを行った。生徒は小学校で学習した話し合い活動のポイントを想起しながら、意欲をもって学習に取り組むことができた。

小学校では11月に4学年の総合的な学習の時間に、環境教育について実践の豊富な中学校教師をゲストティーチャーとして迎えた実践を行った。



図3 小・中交流授業（4年 総合的な学習）

#### ③ 合同講演会、研修会の実施

県内外の大学教授、有識者を講師として招聘し、小・中学校で実践している研究の理論を深め、指導方法を学ぶことを目的として実施している。合同で講演会、研修会を行うことにより学習指導の方法や小・中連携の在り方について共通認識、共通理解を深めることができた。なお、講演会は近隣の学校にも参加を呼び掛けている。



図4 講演会（上越教育大学 西川純教授）

### (3) 家庭学習の習慣化の取組について

#### ① 授業でのかかわり合いを意識した家庭学習課題の工夫

国語においては、家庭学習で書いてきた感想や疑問の交流、共有をとおして課題作りを行ったり、調べてきた漢字や言葉を仲間分けしたりなどの活動を行った。また、算数では家庭学習課題に翌日の学習内容にかかわる問題を入れ、授業の中でその解決方法を小集団で追究したり、問題作りの課題を与え、それをお互いに解き合ったりするなどの活動を行った。家庭学習が授業に生かされることによって、意欲的に取り組む姿が見られた。

#### ② 家庭学習カードの活用

家庭での学習習慣を定着させるための方策として、家庭学習カード（パワーアップカード）を活用している。全校で統一したカードで、家庭学習の内容や時間を簡単に記入できるようにし、保護者と担任が確認のサインをしている。また、児童は、月初めには、自分の家庭学習のめあてを書き、月末には、保護

者や担任が励ましの言葉を書くなどして、意欲付けを図っている。外部評価では、保護者から「自分から進んで家庭学習に取り組むようになった」「何をどのように学習しているか一目で分かり、励みになっている」など、肯定的な意見を多くいただいた

日	時	時間	国語	算数	理科	社会	その他	保護	連絡
1	月	10:20-30:40	○	○	○	○	○	○	○
2	月	10:20-30:40	○	○	○	○	○	○	○
3	月	10:20-30:40	○	○	○	○	○	○	○
4	月	10:20-30:40	○	○	○	○	○	○	○
5	月	10:20-30:40	○	○	○	○	○	○	○
6	月	10:20-30:40	○	○	○	○	○	○	○
7	月	10:20-30:40	○	○	○	○	○	○	○
8	月	10:20-30:40	○	○	○	○	○	○	○
9	月	10:20-30:40	○	○	○	○	○	○	○
10	月	10:20-30:40	○	○	○	○	○	○	○
11	月	10:20-30:40	○	○	○	○	○	○	○
12	月	10:20-30:40	○	○	○	○	○	○	○

図5 家庭学習カード

③ 児童，保護者の意識の啓発

年度当初に児童と保護者に学習の手引きを配布している。児童用は壁や机に貼っていつでも見られるようにリーフレット型とし、家庭学習の進め方、課題例、目安となる学習時間などを学年部ごとに記している。

保護者用はパンフレット型とし、家庭学習の意義や親としての家庭学習へのかかわり方などを記した内容としている。

また、長期休業の前にも家庭学習習慣のより一層の定着を目的とした「春休み・夏休みの学習の手引き」を配布している。

(4) 児童の学力，学習意識等の変容

① 宮城県学習状況調査

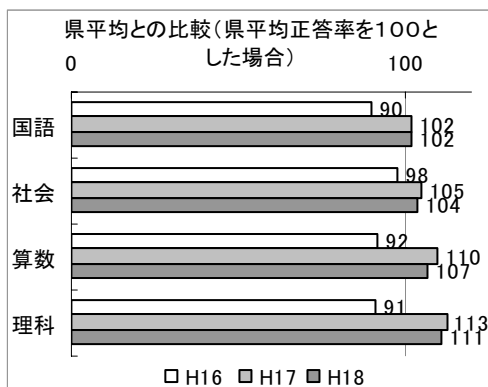


図6 宮城県学習状況調査結果の変容

② CDT-II 学力テスト

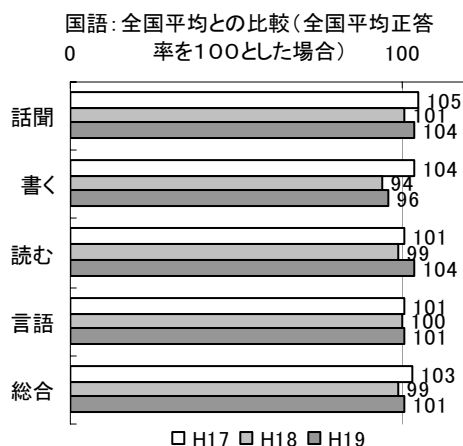


図7 国語学力テスト結果の変容

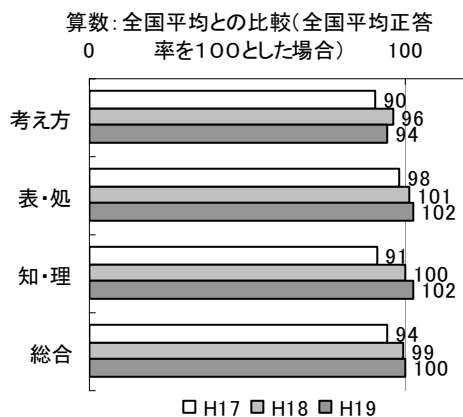


図8 算数学力テスト結果の変容

③ 校内学習意識調査

Q: 友達の考えのよさを見つけ、自分の考えに生かすことができる

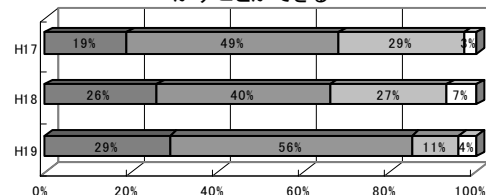


図9 「考えること」についての意識の変容

Q: 自分の思いや考え、感じたことを相手に伝えることができる

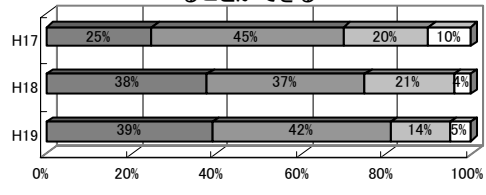


図10 「表現すること」についての意識の変容

## 4 今後の課題と改善策

### (1) 児童の学習意欲向上への取組について

かかわり合いの活動内容が、授業のねらいからずれてしまうことがあった。かかわり合いを取り入れることを意識し過ぎて、その目的がはっきりしない場面も見られた。事前に単元全体の指導構想を十分に練り、目的をもってかかわり合いを取り入れていくことを心がけていきたい。

また、目指す児童像に迫るための学習スキルについて整理していきたい。「どの発達段階で、どのようなスキルが必要か」「どのようにして身に付けさせていくか」など、児童の発達段階に応じて系統的な計画を作成したい。

### (2) 小・中学校の連携した取組について

交流授業については（TT授業，ゲストティーチャー等）については，単元全体を見とおした授業づくりの段階からお互いにかかわり合い，ねらいを押さえて役割分担をしっかりと行うことが大切であるとする。そのための時間の確保も含め，周囲のサポート体制を整えておく必要がある。

### (3) 家庭学習の習慣化の取組について

家庭学習時間については毎年着実に増えてきているが，全国・県平均と比較するとまだ少なく，今後も手だてを工夫していく必要がある。家庭学習習慣を定着させるためには，まずしっかりした生活習慣を確立することであると考える。しかし，調査結果を見ると生活習慣の改善はあまり見られず，今後も継続的に児童や保護者への働きかけが必要である。

## 5 実践事例

6年 算数科「割合の表し方を考えよう」

目標：比の性質を利用して，比の一方の量を求めることができる。

### つかむ

写真を引き伸ばしたときの大きさを求める問題場面で，コンピュータとプロジェクターを活用し，写真の縦横比を保つ必要性和，比の性質を利用できることに気付かせた。



### 見通す

自力で考えさせる。解決できたら他の方法を考えさせたり，説明を考えさせておいたりする。



### 深める

小集団で全員が自分の考えを説明する。解決に至らなかった児童はできたところまで説明し，友だちから学んだり，アドバイスをもらったりする。



次に，意図的に指名していくつかの考えを出させ，観点を与えて比較検討させる。本時では倍を使った考えと等しい比を利用した考えが出された。等しい比には倍の考えが使われていること，比は2つの数量をそのまま使って表せるよさがあることなど，それぞれの考えのよさや共通点について話し合った。



### 確かめる

比の性質を活用して適用問題を解決し，学習の振り返りを行った。



栗原市立鶯沢小学校URL

<http://www.kurikoma.or.jp/~ugusho/>



---

**学校名** 栗原市立鶯沢中学校  
**所在地** 宮城県栗原市鶯沢南郷下久保前  
**3の2**  
**電話番号** 0228-55-2272

---

## 1 学校の実態

生徒数77人 職員数14人（非常勤講師等は含まない）

	1年	2年	3年	特別支援	合計
生徒数	24	20	30	3	77
学級数	1	1	1	2	5

## 2 研究の概要

### （1）研究主題

「確かな学び」をはぐくむ学習指導の工夫

### （2）主題設定の理由

本校は、昨年度まで、「基礎・基本の定着と学習習慣の確立を図る指導を通して」を副題に掲げ、生徒一人一人に応じたきめ細やかな指導の在り方と生徒の主体的な学習態度の育成のための学習習慣の定着に視点を当て研究を進めてきた。

その結果、学習規範が高まり学習意欲の向上が見られた。また、家庭学習に取り組む生徒が増え、学習時間が増加した。

課題としては、学習習慣の定着が不十分な生徒に対しては、より一層きめ細やかな指導の充実が必要であること、また、授業において、基礎・基本が確実に身に付いている生徒を、更に伸ばすための方策が必要であることが明らかになった。これまでの成果を踏まえ、より一層研究を深めるため本主題を設定した。

### （3）研究主題のとらえ方

本校における「確かな学び」とは、教科に共通するものとして、以下のような姿としてとらえた。

- ① 興味・関心をもち、自主的に課題に取り組もうとする。
- ② 既習事項や実体験、気づき等を生かし、課題の解決を図ろうとする。

③ 自分の考えや思いを積極的に表現しようとする。

④ 学んだ知識や技能を生活の中で活用しようとする。

⑤ 互いの考えや意見を認め、良いものを取り入れ、自他を高めようとする。

### （4）研究目標

各教科において「確かな学び」を明確に押さえ、それをはぐくむための学習指導の在り方を、授業の質的改善と学習習慣の定着を図る指導を通して明らかにする。

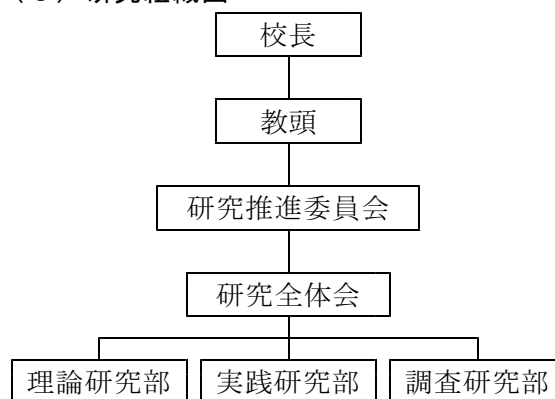
### （5）研究仮説

各教科において、生徒の実態を客観的にとらえ、以下のような手だてを工夫すれば、「確かな学び」をはぐくむことができるであろう。

【仮説1】 指導方法や指導体制を工夫し、授業の質的改善を図る。

【仮説2】 学習習慣の形成に向けた指導の充実を図る。

### （6）研究組織図



## 3 研究成果

### （1）生徒一人一人の学習状況の的確な把握・活用について

① 生徒、保護者の意識調査の実施、分析、活用

生徒の学習意識調査や保護者の意識調査の結果から、学習に対する意識や家庭学習の取組状況を把握することができた。学級担任は、その結果を、教育相談や学習方法を助言する

際の資料として活用することができた。また、保護者と情報を共有することで、学校や家庭における学習の問題点について意見交換を行うことができた。また、研究による生徒の変容を検証し、考察することができた。

## ② 総合学力調査（B社）や各教科による実態調査の実施、分析、活用について

総合学力調査（B社）の結果や各教科の実態調査の結果から、基礎的な学力や既習事項の定着状況を把握した。また、生徒一人一人の課題を明確に押さえ、具体的な改善策を学習指導案の座席表に掲載し、指導する際の配慮事項として活用することができた。

学級担任は教育相談や学習方法を助言する際の資料として活用することができた。

## （2）基礎・基本の定着を図るための授業の質的改善について

指導過程の基本形を作成し、「『確かな学び』をはぐくむ指導の手だて」を意識することにより、指導のねらいが明確になった。

指導過程の基本形		
学習活動	教師の働きかけ	指導上の留意点
学習課題	★「確かな学び」をはぐくむ指導の手だて	評価
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>★興味・関心をもち、自主的に課題に取り組みさせる。</li> <li>★自分の考えや思いを積極的に表現させる。</li> <li>・既習事項の確認</li> <li>・本時の課題提起</li> <li>・実態調査、既習体験等の活用</li> </ul> 本時の学習課題を明確に示す。	
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>★既習事項や実体験、気付き等を生かし、課題の解決を図らせる。</li> <li>・学習課題の把握（「授業での学び」）</li> <li>・指導すべき場面設定</li> <li>・主体的に活動する場面設定</li> <li>・教材・教具の工夫・活用</li> <li>★自分の考えや思いを積極的に表現させる。</li> <li>・「自らの学び」</li> <li>・「友からの学び」</li> <li>★互いの考えや意見を認め、よいものを取り入れ、自他を高めようとする。</li> <li>・「友からの学び」</li> <li>・効果的な指導体制</li> </ul>	評価 評価規準に則り評価を行うとともに、個に応じた手だてを講じる。
終結	<ul style="list-style-type: none"> <li>★学んだ知識や技能を生活の中で活用させる。</li> <li>・「家庭での学び」</li> <li>・「学びの広がり」</li> <li>・学習習慣の形成</li> </ul>	

## （3）学習環境の整備について

### ① 「驚タイム」の設定、活用

「驚タイム」については、年間計画に位置付け毎週水曜日に実施できた。主体的な学習を奨励し、教科ごとに復習を中心とした学習の場を設定したこのことにより、ほとんどの

生徒は、苦手教科の克服に努めようと有効にこの時間を活用していた。

### ② 「教科の部屋」の設置、活用

定期考査前は8割程度、毎週水曜日は5割程度の生徒が「教科の部屋」を利用している。また、3年生では日常的に放課後に「教科の部屋」を活用している様子もみられる。復習を中心とした学習プリントを用意するだけでなく、解答の解説も行ったり、学習の不安な生徒の相談に応じたりするなど個への指導の充実を図ることができた。

### ③ 朝読書への取組

読書を楽しむ生徒が増え、読書への関心の高まりがみられた。また、学校生活の始まりを静かな環境の中で過ごさせることにより、落ち着いて学習へ向かおうとする態度が形成されてきた。

## （4）生徒の学習意欲向上への取組について

### ① 複数の教師による指導

他教科の教師とのTT指導により、多面的な生徒理解につながり、個のよさを認めた指導ができた。また、小学校の教師とTT指導することにより、生徒の既習事項をよりの確に把握することができ、個に応じた指導を進め、意欲を高めることができた。

### ② 学習規範の形成に向けた資料の作成、活用

生徒の学習規範が高まり、学習へ向かう意欲の向上がみられた。

「学力向上を目指す」確かな学び5箇条		
案	項目	めあて
第1条	授業での学び	自ら課題（目標）を見つけ、追究方法を考え、積極的に解決しよう。
第2条	自らの学び	図書室や教科の部屋等を活用し、進んで学習に取り組みよう。
第3条	友からの学び	これまでの学習や友達の見解を生かし、自分の考えをしっかりと持とう。
第4条	家庭での学び	予習・復習を行い、学習の準備をしっかりとしよう。
第5条	学びの広がり	学んだことを学校や家庭生活の場で生かそう。

栗原市立鶯沢中学校

## （5）小・中学校の連携した取組について

### ① 小・中学校合同の授業研修の実施

小学校の授業や他教科の授業を参観するこ

とで、発達段階や教科の特性を踏まえた効果的な指導方法や学習規範についての理解を深めることができた。また、教科の系統的な指導を理解することで、指導力の向上につながった。

② 小・中学校合同講演会の実施

有識者や大学教授による講演から、国や県で行っている施策や研究の基になる理論、「確かな学び」をはぐくむ具体的な指導の手だてや効果的な学習活動についての研鑽を積むことができた。

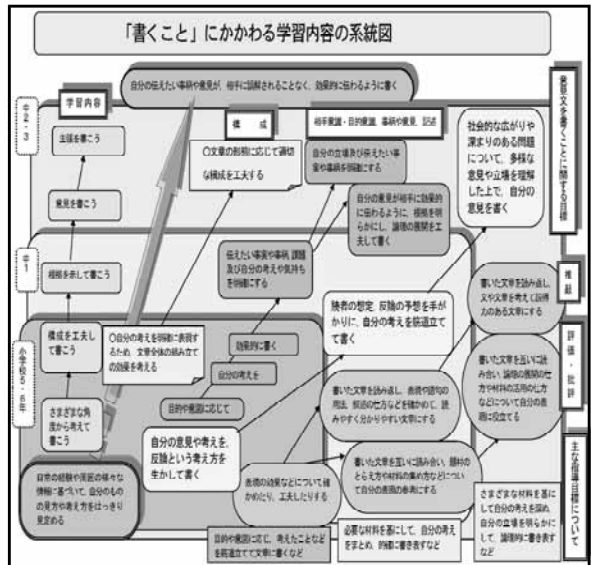
学校関係者に広く呼びかけを行った結果、講演によっては市外からの参加があった。

③ 小・中学校共通の研究だよりの発行

「研究だより」を発行したことにより、保護者会や役員会において、生徒の学力の変容や、家庭学習の時間等についての意見が出されるようになり、家庭学習の習慣を確立するための啓発活動として有効であった。

④ 国語科、数学科における基礎・基本の系統の把握

学習内容の系統性を見出し、小学校との連続性を意識した指導ができた。また、生徒が、どの段階でつまづいているのかを把握することが容易になり、個に応じた指導をする上で役立った。



(6) 家庭学習の習慣化の取組について

○ 「学習と生活の記録」の作成、活用

計画を立てて家庭学習に取り組む生徒が増え、学習時間も増えている。また、自主学習ノートの活用を図ったり、教科で復習課題に取り組ませるなどの手だてを取ることで、家庭学習の習慣化が図られてきている。

学習と生活の記録													年 期	番 氏 名									
今週の目標													テスト勉強を努力して頑張る。										
7月2日	<今日の計画 課題>		5	6	7	8	9	10	11	12	1	反省	◎	◎									
	社理 数		実	行	内	容	家	理	数	算	算	算	計	(分)									
<宿題>			社理 算 算									合計	30分										
7月3日	<今日の計画 課題>		5	6	7	8	9	10	11	12	1	反省	◎	◎									
	英 国		実	行	内	容	英	国	英	国	英	国	計	(分)									
<宿題>			英 国									合計	30分										
7月4日	<今日の計画 課題>		5	6	7	8	9	10	11	12	1	反省	◎	◎									
	英		実	行	内	容	英	国	英	国	英	国	計	(分)									
<宿題>			英 国									合計	30分										
7月5日	<今日の計画 課題>		5	6	7	8	9	10	11	12	1	反省	◎	◎									
	算 算		実	行	内	容	算	算	算	算	算	算	計	(分)									
<宿題>			算 算									合計	30分										
7月6日	<今日の計画 課題>		5	6	7	8	9	10	11	12	1	反省	◎	◎									
	数		実	行	内	容	数	数	数	数	数	数	計	(分)									
<宿題>			数									合計	30分										
◆ 週末																							
7月7日	<今日の計画 課題>		<宿題>		内 容						反省	◎	◎										
	土		数		算 算						計	(分)											
時刻			7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	合計	(分)
実 行			土 算 算																		合計	1290分	
7月8日	<今日の計画 課題>		<宿題>		内 容						反省	◎	◎										
	日		数		算 算						計	(分)											
時刻			7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	合計	(分)
実 行			日 数 算 算																		合計	8分	
◆ 今週の家庭学習時間の合計													1290分/7										
◆ 今週の反省・改善点													テスト直しを集中してがんばる										

4 今後の課題と改善策

(1) 生徒一人一人の学習状況の的確な把握・活用について

学年別、男女別など全体の傾向や意識を考察することはできたが、個の変容を考察するまでには至らなかった。今後は、実施する調査項目の見直しを図るとともに、学力と学習意識など調査項目のクロス集計を行い、関連について分析する必要がある。また、個々の生徒が身に付けなければならない学力を焦点化し、更に定着を図る手だてを検討し、指導の改善に努める必要がある。

(2) 基礎・基本の定着を図るための授業の質的改善について

各教科における「確かな学び」のとらえを吟味し、指導方法の更なる工夫・改善を図らなければならない。



### (3) 学習環境の整備について

「鶯タイム」の設定と「教科の部屋」の設置により、自学自習の時間と空間を与えることができたが、更に学習習慣の定着を図るためには、「教科の部屋」で担当教師が指導や助言できる環境づくりが必要である。

### (4) 生徒の学習意欲向上への取組について

他教科の教師とのT T指導では、指導の役割分担を明確にする必要があり、事前の打ち合わせの時間を確保する必要がある。また、教科の特性を踏まえた、指導の具体に迫るためには、本校のように教科担任が一人の場合には教師自らが積極的に研鑽を積む必要がある。

学習規範の形成に向けた掲示資料の作成では、行動目標の見直しを図るとともに、生徒一人一人の達成について評価する必要がある。

### (5) 小・中学校の連携した取組について

小・中学校合同の授業研修や講演会の実施は、学校行事やその他の事情で、日程的な調整が難しかった。また、授業研修会の日時が変更になることがあり、本来参加を予定していた担当教師が出席できないことがあった。実施における教師の派遣については、小・中学校における人的な調整が必要である。

研究だよりの発行では、保護者の意見を盛り込むなどの工夫・改善が必要である。

学習内容の系統図の活用を図り、個に応じた指導方法の工夫・改善が必要である。

### (6) 家庭学習の習慣化の取組について

「学習と生活の記録」の活用を図り、教育相談等で具体的な助言をすることで、家庭学習の内容面での充実を図る必要がある。

## 5 実践事例

### (1) 公開研究会

平成19年11月13日に、「学力向上拠点形成事業（確かな学力育成のための実践研究事業）」推進校として、公開研究会を行った。国語科、理科、数学科の授業を公開し、

参観していただいた先生方から、示唆に富んだ貴重なご意見をいただいた。



### ○まとめ

・総合学力調査や各教科による実態調査の分析を行い、学習指導の際の資料として活用し、指導方法の工夫と実践を図り、授業改善に生かしている。また、家庭学習に対する保護者の協力、啓発のために、情報提供や情報交換を行い、情報の共有化を図ったことの有効性が明らかになった。

・学習規範の形成と学習意欲の向上を図るための、「学力向上を目指す確かな学び5箇条」の作成、家庭における学習習慣の定着を図るための「学習と生活の記録」の作成、生徒の学びを支える「鶯タイム」の設定、「教科の部屋」の設置や「朝読書」の時間の設定は、学力向上や学習効果を高めるという視点から、必要な条件整備といえる。

### (2) 小・中連携授業（第1学年 国語科）

- ① 題材名 書く2 根拠を示して書こう
- ② 生徒の実態

平成19年6月に行った総合学力調査（B社）では、国語の平均到達度が74.7%であった。領域別では「書く力」と「言語事項」が他の領域に比較して低くなっている。また、国語に関する学習意識調査の結果では、「文章を書くことが嫌い、どちらかというと嫌い」と答えた生徒が54.2%で「書くこと」に抵抗感をもっている生徒が多い。

- ③ 題材に関わる研究内容

○題材に関する意識調査や既習知識調査の結果を基に、生徒一人一人のつまづきを明確に



押さえ、それを記載した座席表を活用し、机間指導の際、支援を要する生徒に声かけや助言指導を行う。

○「何を書いたらいいのか分からない、書くことが浮かばない」という実態を受けて、友達との関わり合いの中から、さまざまな考えがあることに気付かせるためにペアやグループでの話し合いや相互評価を行う場を多く設定する。その際自分の考えや意見をまとめた上で意見交換をさせ、自分と友達の考えを比較する相互交流のある授業を行うことで、一人一人の考えを深め、視野を広げる。

○学習内容の系統性を踏まえ、既習事項を生かすために、小学校の教師とのTT指導を行い、指導体制の工夫を図る。



#### ④ まとめ

- ・小・中連携は生徒理解、生徒指導に有効である。「中1ギャップ」を少なくするための方策として、意義のある提案授業であった。
- ・小・中連携が有効に行える題材や時期を研究していかなければならない。

### (3) 質的改善を目指した授業 (第2学年理科)

#### ① 題材名 物質どうしの化学変化

#### ② 生徒の実態

平成19年6月に行った総合学力調査(B社)では、「興味・関心」を除いた3つの観点の比較から「観察・実験の技能」は高いが、「科学的思考」が低い傾向にあり、実験を見通し、結果から考察することを苦手としている生徒が多い。

#### ③ 題材に関わる研究内容

○身近なものへの関心を高めるため、鉛など

の鉱石を産出した細倉鉱山を題材の導入で取り上げ、題材を構成する。

○化学変化による事象を日常生活と関連付けるため、環境とエネルギーの視点からも、指導に当たる。

○科学的視点から課題を追究できるようにするために、予想や見通しを大切にしながら指導過程を工夫する。

○既習事項や実験方法の確認では、生徒が一斉に確認できるように視聴覚機器の活用を図る。

○実験結果をまとめ、考察しやすいように学習プリントを工夫する。

○話し合い活動を活発にし、実験の技能や個に応じた指導を行うため、グループの人数を2人～4人と場面に応じて弾力的な編成を行う。

○個に応じた指導の徹底を図るため、教師間において情報交換を密にするなど指導方法の工夫を図る。

○試薬や実験器具の操作、実験結果の記録や表現の仕方など、実験時の約束の徹底を図る。

○基礎的な知識の定着を図るため、復習を中心とした家庭学習に取り組みさせる。



#### ④ まとめ

- ・実験の結果から考察しやすいような学習の工夫を図ったことにより、科学的な視点から事象を捉えようとする力が高まってきた。
- ・一人一人の興味・関心に応じた実験方法の工夫を図っていかねばならない。

栗原市立鶯沢中学校URL

<http://academic4.plala.or.jp/~ugu-jhs/>

学校名 登米市立北方小学校  
所在地 宮城県登米市迫町北方字富永 110-5  
電話番号 0220-22-2286

## 1 学校の実態

児童数 221名 職員数 18名

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	糊 媛	合 計
児童数	38	34	35	36	45	32	1	221
学級数	2	1	1	1	2	1	1	9

## 2 研究の概要

### (1) 研究主題

学ぶ意欲とスキルを高め、確かな学力を身に付ける子どもの育成—知的好奇心を喚起する指導方法の工夫・改善を通して—

### (2) 主題設定の理由

#### 【今日的課題から】

子どもたちを取り巻く環境は日々変化し、テレビ・雑誌・インターネットなどからさまざまな情報があふれている。さらに、少子化、核家族化、人間関係の希薄化などにより、家庭や地域社会における教育力が低下していることが指摘されている。こうしたさまざまな社会的な課題に加え、子どもたちの学習意欲の低下や、基本的な生活習慣が身に付いていないこと、体験活動や読書活動の不足、学力や体力、コミュニケーション能力の低下などの課題も指摘されている。

最近の全国的・国際的な調査の分析結果から、児童の学力についてのさまざまな課題が明らかになってきた。平成 14 年 1 月に文部科学省から「学びのすすめ」が発表され、確かな学力の育成の重要性が指摘されている。学びの根幹となる基礎・基本（読み・書き・計算）の確実な定着を図るとともに、学ぶことに喜びを見だし、生涯を通して学び続ける姿勢を身に付けさせることは、学校教育に課せられた喫緊の課題である。

#### 【本校の教育目標から】

本校では、新しい時代を生き抜く心身ともにた

くましく、知的で思いやりのある、しかも主体性と創造性に富んだ実践力のある「健康な子ども」の育成を教育目標として掲げ、児童像として「思いやりのある子ども」「よく考える子ども」「体をきたえる子ども」の 3 つを挙げている。他者への思いやりをもち、課題をもって学習に取り組み、よく考え、自己を豊かに表現することができる子どもを育てることが、教育目標の具現化につながるものと考えている。

#### 【児童の実態から】

これまでの宮城県学習意識調査の結果を見ると、本校児童の学習に対する意識（学習の大切さ、学習する理由、学習意欲）は決して低くはない。しかし、日常の学習活動の様子を観察していると、主体的に課題を設定し、自ら学ぼうとする意欲の高まりは十分満足できるものではない。また、新たに学習した知識を既習の知識と統合し、さまざまな形で表現する力についても満足できる状況ではない。これらは、効果的に学習を進めるための技能（学習スキル）が身に付いていないことに起因するものと考えられる。この点に着目した指導方法の工夫・改善が必要である。

#### 【学力向上拠点形成事業の趣旨から】

本校は、平成 17・18・19 年度の 3 年間、文部科学省より「確かな学力育成のための実践研究事業」の指定を受けている。宮城県教育委員会から示された本研究推進に関わる基本方針は、以下の 3 点である。

- ① 児童の学習意欲向上への取組
- ② 小・中学校の連携した取組
- ③ 家庭学習習慣化への取組

子どもたちの学習意欲を高めるためには、「分かる授業」の展開が欠かせない。子どもたちの知的好奇心を喚起するための発問や指示、ノート指導、ICT 活用など教師一人一人の授業力を向上させるための授業改善が必要である。このことは、子どもたちに基礎・基本を確実に身に付けさせ、それらをもとに自ら学び、自ら考える力など「生きる力」を育成することを目指すことであり、「確かな学力」の土台となるものと考えている。

また、子どもたちに学習スキルを身に付けさせることも重要である。発達段階に応じた学習スキルの指導は、学習内容を確実に定着させるためだけでなく、授業での学びと家庭学習を有機的に結び付けるためにも不可欠なものである。

最近の調査で、家庭学習が学力に大きな影響を及ぼしていることが次第に明らかになってきている。家庭での学習・生活習慣の見直しも含め、学校と家庭の連携・協力の在り方を探ることが、子どもたちのよりよい成長と学力向上に資するものとする。

### 【これまでの取組から】

これまで、ミニ授業研究会(平成17年度21回、平成18年度28回実施)を通して、ノート指導やICT活用、話し合い指導、TT及び少人数指導等に積極的に取り組んできた。また、表現活動や朝読書、基礎学力向上を図るための「寺子屋タイム」にも継続的に取り組んでいる。さらに、家庭での学習・生活習慣に関する実態調査を年2回実施し、分析結果をもとに学習・生活習慣等の改善、各家庭への啓発活動に努めてきた。これらの成果を生かしながら、よりよい指導方法や学習環境等の工夫・改善、教師の授業力向上を図り、子どもたちの学力を向上させていきたいと考える。

以上のことから、本研究主題を設定した(図1)。

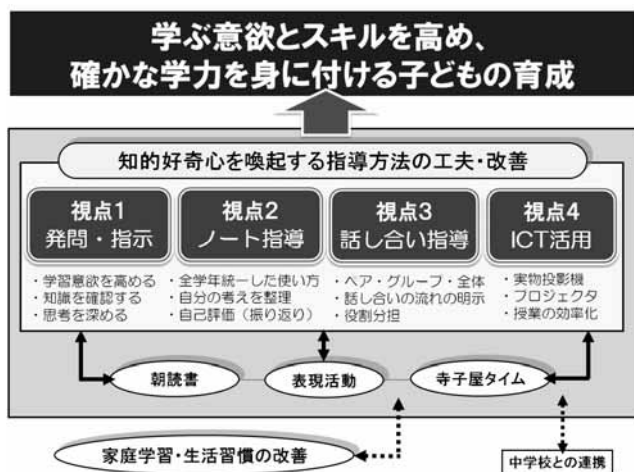


図1 「研究主題に迫るための指導の手立て」概念図

### (3) 研究組織図

研究推進委員会及び研究推進プロジェクトを中心に組織する。学年部については、必要に応じ

て招集し、研究に関する協議を行う(図2)。



図2 研究組織図

### 3 研究成果

平成16年度以降に実施した標準学力検査(3年生以上、国語・算数の2教科)の結果を分析したところ、平成16年度にはいずれの学年でも全国平均を下回っていたが、平成18年度には3・5・6年生で国語・算数ともに全国平均を上回り、4年においても全国平均に迫る結果となった。

また、平成19年4月に実施した全国学力・学習状況調査の結果を見ると、【A:主として知識】の平均正答率が国語・算数ともに全国平均を上回り、県平均との比較では国語で2.7ポイント、算数で1.5ポイントも上回った(図3)。

これらの結果から、本校児童の学力は向上傾向にあることが認められる。

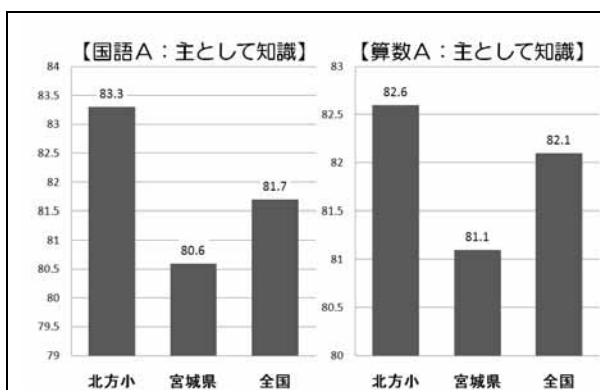


図3 全国学力・学習状況調査／【A:主として知識】の北方小・宮城県・全国の平均正答率比較(H19.4)

以下に、各プロジェクトの取組を中心に本校の研究成果を整理する。



(1) 授業改善プロジェクトの取組について

- ① 授業改善の4つの視点（発問・指示、ノート指導、話し合い指導、ICT活用）を指導過程に位置付けた研究授業（ミニ授業研）を行うことにより、子どもたちの学習意欲を高めるための授業設計についてより深く吟味するようになり、日常的に4視点を意識した授業づくりに取り組めるようになった（図4）。

ミニ授業研 6年1組 社会科指導案 平成19年7月2日（月）3校時 菅川 寛									
1 授業について（参観時間帯：□導入 ■展開 □まとめ）									
単元名	3人の武将と全国統一（本時 1/5）								
授業改善の主な視点	■発問・指示 □板書（ノート指導） ■話し合い □ICT活用								
本時の目標	○ 長篠の戦いの合戦図を読み取り、信長の戦い方の工夫や3人の武将の関係について気づき、3人の武将による全国統一に関心をもつ。（関心・意欲・態度）								
指導にあたって	・ 導入場面ではフラッシュ型教材を活用し、集中力と意欲を高め、本時学習課題につなげる。 ・ グループや学級全体での話し合いを通して、もの見方や考え方を深めさせる。								
ICTを活用する目的	■課題の提示 ■動機づけ □指示の明確化 □スギル定着 ■説明資料 □繰り返しによる定着 □モデルの提示 □失敗例の提示 □体験の代行 □体験の想起（繰り返し） □情報の共有 □比較 ■コンピュータ ■プロジェクタ ■スクリーン ■実物投影機 □デジタルカメラ □ビデオ □インターネット ■デジタルコンテンツ □CD-ROM □スピーカー								
活用する ICT									
2 授業の流れ									
<table border="1"> <tr> <th>主な活動</th> <th>留意点・準備物など ★評価</th> </tr> <tr> <td>1 前時までの学習を振り返る。 発問 スクリーンに映っている人物はだれですか。① 聖徳太子、源頼朝、菅野、源頼朝、織田信長、豊臣秀吉、...</td> <td>※フラッシュ型教材を活用し、これまで学習した歴史上の人物について復習する。テンポよくスライドを提示し、集中力と意欲を高める。 ・ プロジェクタ、スクリーン</td> </tr> <tr> <td>2 長篠の戦いの合戦図をもとに、3人の武将の関係に興味をもち、本時の学習課題を把握する。 課題 3人の武将は、それぞれどんな武将だったのだろう。</td> <td></td> </tr> <tr> <td>3 長篠の戦いの合戦図を見ながら、気づいたことを話し合う。 発問 現在の何県で起こった戦いですか。 何が見えますか。誰と誰の軍が戦っていますか。②</td> <td></td> </tr> </table>		主な活動	留意点・準備物など ★評価	1 前時までの学習を振り返る。 発問 スクリーンに映っている人物はだれですか。① 聖徳太子、源頼朝、菅野、源頼朝、織田信長、豊臣秀吉、...	※フラッシュ型教材を活用し、これまで学習した歴史上の人物について復習する。テンポよくスライドを提示し、集中力と意欲を高める。 ・ プロジェクタ、スクリーン	2 長篠の戦いの合戦図をもとに、3人の武将の関係に興味をもち、本時の学習課題を把握する。 課題 3人の武将は、それぞれどんな武将だったのだろう。		3 長篠の戦いの合戦図を見ながら、気づいたことを話し合う。 発問 現在の何県で起こった戦いですか。 何が見えますか。誰と誰の軍が戦っていますか。②	
主な活動	留意点・準備物など ★評価								
1 前時までの学習を振り返る。 発問 スクリーンに映っている人物はだれですか。① 聖徳太子、源頼朝、菅野、源頼朝、織田信長、豊臣秀吉、...	※フラッシュ型教材を活用し、これまで学習した歴史上の人物について復習する。テンポよくスライドを提示し、集中力と意欲を高める。 ・ プロジェクタ、スクリーン								
2 長篠の戦いの合戦図をもとに、3人の武将の関係に興味をもち、本時の学習課題を把握する。 課題 3人の武将は、それぞれどんな武将だったのだろう。									
3 長篠の戦いの合戦図を見ながら、気づいたことを話し合う。 発問 現在の何県で起こった戦いですか。 何が見えますか。誰と誰の軍が戦っていますか。②									

図4 視点を明確にした研究授業の指導案例

- ② 「ICT活用の目的と効果的な活用場面の分類表」（図5）をもとにICT活用の目的を明示した指導案を作成したり、日常的にICTを活用した授業づくりに取り組んだりしたことにより、ICT活用の目的や効果を意識した授業展開ができるようになった。

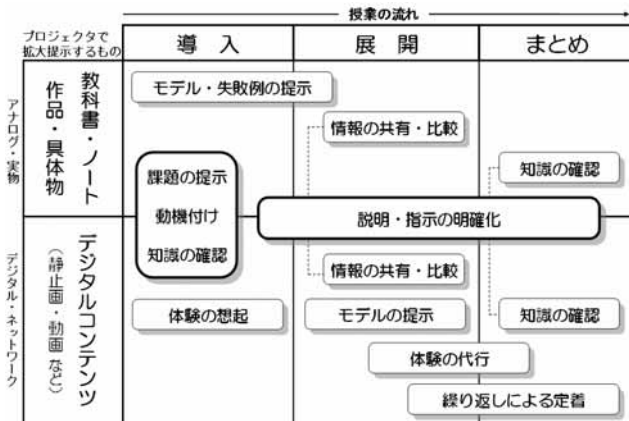


図5 ICT活用の目的と効果的な活用場面の分類表

- ③ 7つの観点を設けた授業評価シートを活用したことにより、授業において工夫・改善が見られた点やさらに工夫・改善が必要とさ

れる点が明確になった。また、ワークショップ型の事後検討会においても授業評価シートを活用したことにより、授業改善の対策が具体的になった。

(2) 基礎学力向上プロジェクトの取組について

- ① 寺子屋タイムでは、読み・書き・計算など基礎的事項の習熟を図ることを目的に週3回ずつ取り組んできた。学級ごとに子どもの進度にあった問題を選べるようにしたことにより、主体的に学習する様子が多く見られるようになった。
- ② 全校表現活動の取り組みを通して、全校で表現する楽しさを味わったり堂々と意見を発表したりする子どもが増えた。
- ③ フラッシュ型教材（フラッシュカードのように課題が瞬時に次々と表示される画面を使ったデジタル教材）を活用したことにより、学習意欲を喚起しながら集中して学習に取り組ませることができた。フラッシュ型教材を活用した授業実践をもとに提示方法を分類し、その効果を整理した（図6）。



図6 フラッシュ型教材の提示方法の分類と効果

(3) 学校家庭連携プロジェクトの取組について

- ① 家庭学習の習慣化を目的に作成した冊子「ステップ・バイ・ステップ」（家庭学習のねらい、学習時間の目安、学習の進め方、自主学習のメニュー）を各家庭に配布したことにより、学習の仕方や内容の例を参考にし、自分に合った家庭学習を進めることができるようになってきた。
- ② 家庭での学習・生活習慣に関するアンケート調査の結果や家庭での子どもの様子など



を集約し、プロジェクト通信「ぐんぐん北方っ子」を通して各家庭に知らせたことにより、家庭の理解や協力が得られるようになってきた。

- ③ 全学年で家庭学習カードを活用したことにより、子ども一人一人の家庭での学習や生活の様子を知ることができ、家庭との連携をより深めることができた。
- ④ 本校の特色ある教育活動や研究について、Web サイトを活用して紹介したことにより、学校に対する期待や信頼がしだいに高まってきている（図7）。



図7 全職員で更新している北方小学校 Web サイト

#### (4) 小・中学校の連携した取組について

校内研修や指導主事学校訪問の際には、登米市立佐沼中学校及び登米市立米山中学校と連携し相互に研修や授業参観に参加するなど、授業づくりや学習習慣等に関する情報交換を進めてきた。小・中それぞれの立場で議論し、相互理解の貴重な場となった。

### 4 今後の課題と改善策

#### (1) 授業改善について

- ① 発問の型を3つに分類したが、今後は授業実践を通してこの分類の妥当性を検証していきたい。
- ② 少人数指導や TT 指導については、習熟度別指導を組み合わせて取り組みたいが、指導者の人員等の課題があり実施体制が十分で

はない。早急に改善策を講じていきたい。

- ③ 授業改善の4つの視点の1つである「話し合い指導」については、形態を工夫したり話し合いの流れを提示したりしたが、さらに指導の具体目標を明示した「学年別指導段階表」の作成に取り組みたい。
- ④ 児童による授業評価については、今後、授業改善の視点として位置付け、研究を深めていきたい。

#### (2) 基礎学力の向上について

- ① 寺子屋タイムで基礎学力をさらに定着させるために、個別指導やTTを取り入れるなど、指導形態の改善を進めていきたい。
- ② 表現活動では、子ども一人一人がさらに自信をもって伸び伸びと表現できるように、各学年で事前に練習時間を確保するなどの工夫をしていきたい。
- ③ フラッシュ型教材を必要な場面で手軽に活用できるような環境整備に努めると共に、フラッシュ型教材活用による基礎学力定着の効果を検証していきたい。

#### (3) 学校と家庭の連携について

- ① 「ステップ・バイ・ステップ」のさらなる活用を促すために呼びかけてきたが、家庭学習等の取り組みには個人差がみられた。各家庭の実態や子どもの取り組み状況に応じた個別の指導にも力を入れていきたい。
- ② 生活習慣の改善については、子どもたち一人一人に数値目標を立てさせたり、強化週間や強化月間などを設けたりするなど、さらに習慣化が図られるような改善策を講じていきたい。
- ③ 家庭学習カードの継続的な活用を図るため、活用の仕方や内容についてさらに吟味していきたい。
- ④ 学力向上拠点校として、他校や教育関係者だけでなく、地域や家庭にも分かりやすい情報発信を心掛けていきたい。

## 5 実践事例

### (1) 実践事例1 <ICTを活用した授業改善>

学年・教科：1学年／国語（いろいろなふね）  
 ICTを活用する目的：指示の明確化  
 活用するICT：プロジェクタ，実物投影機

<ICT活用のポイント> 子どもと同じマス目のノートを拡大投影することで，教材の題名や日付を書く位置，気を付けることなどを具体的に指示することができる（図8）。これは指示の明確化につながり，授業を効率的に進めることができる。



図8 ノートを拡大投影しペンで書き込んでいる様子

### (2) 実践事例2<授業研・事後検討会の進め方>

研究授業後の検討会を活性化させるために，本校ではワークショップ型の話し合いを行ってきた。事後検討会の主な流れを紹介する。

- ① 授業改善プロジェクトより授業の様子をプロジェクタで拡大提示し，振り返る。
- ② 授業改善プロジェクトより「授業評価シート」の集計結果を提示する。視点を絞った上で話し合いを進める。



図9 話し合いながら付箋紙进行分类している様子

- ③ 3つのグループ（低・中・高学年）に分かれる。付箋紙に書いた改善点等を紹介しながら，付箋紙を分類ボードに貼っていく（図9）。
- ④ グループごとにお互いの感想について意見交換をしながら付箋紙进行分类し，タイトルをつける（図10）。



図10 タイトルを付けて整理された「分類ボード」

- ⑤ 授業改善の効果があつた点については「授業改善をさらに進めるためにはどのような手立てがあるか」，さらに工夫が必要な点については「改善するための具体的な手立ては何か」をグループごとに話し合う。話し合う時間が限られている場合には，それぞれ1項目に絞って話し合いを進める。
- ⑥ グループで話し合ったことを全体の場で発表し，意見交換する（図11）。
- ⑦ 意見交換を行い，最後にコーディネータが全体をまとめる。



図11 全体の場でグループの意見を発表している様子

\*下記のアドレスから実践事例が参照できます

<http://www.cms-school.jp/kitakata/>

---

学 校 名 : 登米市立米山中学校  
所 在 地 : 宮城県登米市米山町西野字西小路2  
電 話 番 号 : 0 2 2 0 - 5 5 - 2 0 4 1

---

## 1 学校の実態

生徒数 273人 職員数 28人

	1年	2年	3年	特別支援	合計
生徒数	82	84	105	2	273
学級数	3	3	3	1	10

## 2 研究の概要

### (1) 研究主題

自ら考え、表現することができる生徒の育成  
— 確かな学力の向上を目指す、

— 個に応じたきめ細かな指導の工夫 —

### (2) 主題設定のねらい

#### ① 今日の課題から

子どもたちは変化の激しい先行き不透明な社会状況の中をたくましく生き抜いていくため、主体的に判断・行動し、よりよく問題を解決する資質や能力を身に付けていくことが求められている。

そのためには、創意・工夫した教育課程を編成、実践する中で、基礎的・基本的な内容を確実に身に付けさせ、思考力、表現力、判断力などを高めていくとともに、自ら学ぶ意欲、態度の涵養が必要であると考ええる。

#### ② 学校教育目標から

本校は、伝統と新しい教育理念の融和を図りながら、知・徳・体の調和のとれた生徒の育成を目指し、「ゆたかな知性」「たしかな活力」「かがやく品位」を教育目標とし、教育活動全般を通して具現化しようとしている。

特に「ゆたかな知性」に迫るために設定した目指す生徒像「真理を求め自主的・主体的に学習する生徒」は、目標や探究心をもって主体的に学ぶ生徒を育てようとするものであり、「生きる力」の核となるもの

である。

主題に迫ることは、本校教育目標を具現化する有効な手段であり、生涯学習の基礎を培うものであると考える。

#### ③ これまでの研究の歩みより

これまでの学習指導を振り返ってみると、基礎・基本の定着を目指すための指導方法や指導体制に力点を置いた指導であった。そのため知識・技能面ではある程度の成果を得たものの、学ぶ意義を理解し、自ら学び自ら考える態度の育成には課題を残してきた。そこで、習得型の学習と探究型の学習を相互に連動させた授業への質的改善とともに、生徒の主体的な学習態度の育成のための学習習慣の改善にも視点をあて、指導方策を確立する必要があると考える。

#### ④ 生徒の実態から

本校の生徒は、清掃活動や生徒会及び部活動も活発で礼儀正しい。学習に対しても落ち着いてまじめに取り組んでいる。しかし、全体的に消極的で、挙手をして自分から意見を述べる生徒は少なく、自らの考えを他者に伝えたり、根気強く解決していく学習活動を苦手としている。

これまで実施した標準学力調査の結果を見ると、知識・理解、思考力及び表現力の各観点において全国平均を下回っている。

各教科の学習に関するアンケート調査結果からは、全体的に家庭学習が不足し、学年によって授業に対する意欲の低下傾向がみられた。また、授業において分からないことがあった時、その場で先生に尋ねたり、すぐに自分で調べたりする生徒は少ない。家庭での予習復習や、自分で調べたり、確かめたりする学習をする生徒も少ない。

以上の理由から「知識・技能」の確実な定着と、「思考力と表現力」を高めることを重点課題とし、指導内容、指導方法の改善を通して、授業の質的向上を図っていきたいと考え、研究目標と研究の視点を下記のとおり設定し、研究をすすめてきた。

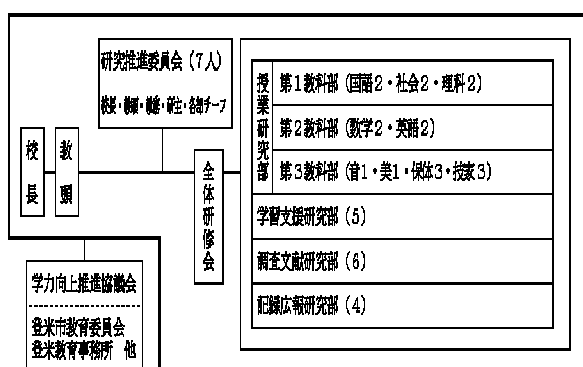
## 研究目標

生徒の「自ら考え、表現することができる」力を高める指導の在り方について、個に応じたきめ細かな指導の工夫を通して明らかにする。

## 研究の視点

- 1 場の設定の工夫
- 2 個の学びの把握とその活用
- 3 評価活動の工夫
- 4 家庭・地域との連携

### (3) 研究組織図



## 3 研究成果

### (1) 視点1：場の設定の工夫

生徒の思考力・表現力を高めていくために、思考・表現しようとする場や時間の設定の工夫を行う。また、学習過程の中で、思考・表現しようとする意欲や態度を育てる学習活動を工夫する。その手だてとして4つの重点実践事項を設定した。①～③はその手だてであり、④はねらいを思考力・表現力を高めることとし、研究主題に迫る。

#### ① 単元構想の吟味

思考活動や表現活動を取り入れた学習活動を、年間計画に位置づけたり、思考・表現しようとする意欲や態度を育てながら思考力・表現力を高める方策を考えたことにより、学習単位における題材・教材配置の工夫や、思考活動や表現活動が意図的・計画的に位置付けられ、指導事項が明確になり、生徒の学習意欲が高

まった。

#### ② 課題解決型学習の充実

基礎的・基本的な知識・技能の習得を目指した習得型の学習の充実に図りながら、課題解決型学習の指導計画上の効果的な位置付けを吟味した結果、学習の場の設定及び工夫した教材・教具の開発が行われ、生徒の主体的な学びや学び合いの質を高めることに効果が見られた。

#### ③ 習熟度別・少人数指導の充実

生徒の実態や生徒の希望を加味し、指導形態の工夫を行ったことにより、個に応じた、よりきめ細かな指導が可能となった。学習意欲の向上にもつながった。

#### ④ 朝読書とスキルタイムの充実

ねらいを「思考力・表現力を高める学力の基盤を養う。」と明確にし、内容を工夫し継続的に実施したことにより、自学自習の態度の育成や基礎学力定着で効果を上げた。

### (2) 視点2：個の学びの把握とその活用

授業の前、授業中の生徒の実態を把握し、生徒が学習活動の見直しや調整を図るための支援を行いながら主題に迫る。3つの重点実践事項を設定し、①は個の学びの把握の手だて、②・③がその活用の手だてである。

#### ① 各学習状況調査等の活用

生徒のつまずきに応じた対応を考えたことにより、集団及び生徒一人一人に対する指導の手掛かりを得ることができた。

#### ② 学習相談の充実

定期教育相談及び休み時間や放課後に積極的な個別学習相談を行ったことにより、生徒の生活習慣や学習習慣の改善につながることができた。

#### ③ 座席表・集団表の活用

ねらい・場面等に応じた使い方を工夫し活用したことにより、生徒一人一人を生かす意図的な指名や学習支援に役立ち、個に応じたきめ細かな指導の手立てとして有効であった。



### (3) 視点3：評価活動の工夫

教師が授業を行う際の目標設定や指導計画、指導方法について見直し・調整をする契機とし、研究主題に迫る。重点実践事項は以下の三つである。

- ① 形成的評価を取り入れた指導の充実  
形成的評価の結果に基づいて、学習過程の工夫、学習形態の吟味を行った。また、学習過程を構築する段階で、A、B、C評価の生徒の評価基準及びそれぞれに応じた学習支援の手だてをおさえた。その結果、指導計画や、指導過程に評価場面、評価方法を位置付けて指導にあたることができ、基礎・基本を定着させる上で効果が見られたと同時に、授業の質を高める有効な手立てとなった。
- ② 授業評価を取り入れた授業改善  
生徒による授業評価、保護者による学校評価を実施し、その分析を行った。その結果、授業改善及び教師の指導力向上のための反省材料となり、教師の授業改善に対する意識の高揚につながった。
- ③ 生徒の自己評価を生かした授業の構築  
授業の中で自己評価の場を位置付けた。その結果、生徒の意欲と主体的学びの向上の手立てとして効果が見られた。また、個に応じたきめ細かな指導の手立てとして有効であった。

### (4) 視点4：家庭・地域との連携

学力向上の基盤となるのが学習習慣、生活習慣である。家庭学習の定着を図るためには家庭・地域との連携が不可欠である。①～③の手だてから、より効果的な実践方法や内容を探る。

- ① 家庭学習の習慣化への工夫  
家庭学習課題の工夫や自主学習ノート「Let's Begin」を活用し、家庭学習の定着に向けた支援の工夫を目指した。その結果、生徒の学習状況を詳細に把握し、継続的な生徒へのアドバイスにつながった。また、その家庭への協力の働きかけによって、学習習慣の改善に効果が見られた。

- ② 学力向上に関する保護者・地域への啓発教育講演会開催、学校だより・研究だよりを発行したことは、生徒の学習習慣の形成に有効であった。また、教師の学力向上推進の意識の高揚につながった。

### ③ 地域の小・中・高校との連携

地域の学校と連携して、小・中・高の授業を互いに参観し合い検討会を実施し、広い視点から総合的に学力向上を目指した。特に、他校種間の授業検討会での意見交換によって、授業の質を高めることができた。

### (5) 生徒の学習意欲向上の取組について

先に述べたとおり、研究視点1の①「単元構想の吟味」・②「課題解決型学習の充実」、研究視点2の②学習相談の充実、研究視点3の①「形成的評価を取り入れた指導の充実」・③「生徒の自己評価を生かした授業の構築」により生徒の学習意欲の高まりが見られた。また、各教科で生徒の興味関心のある身近な事象を教材化したり導入に取り入れたことは、学習意欲の向上に有効であった。

### (6) 家庭学習の習慣化の取組について

自主学習ノート「Let's Begin」の活用の他に、今年度は長期休業における学習の連続性を考えた学習の場の設定（全学年で補習授業と自主学習を行う学習会の実施）と学習課題の工夫（各教科で系統的な学習課題を準備）を行い、学習習慣の確立を図った。併せて学習課題を評価するために表彰や校内掲示を行い意欲の向上を図った。

### (7) 小・中学校の連携した取組について

地域の小・中・高校の授業交流会で実施した授業参観後の検討会では、指導方法の工夫や評価、家庭学習等についての提案が多く出された。

## 4 今後の課題と改善策

### (1) 視点1：場の設定の工夫

- ① 「考えよう、表現しよう」とする意欲や態度を育てる学習活動や、「思考・表

現が高まったことが実感できる評価」を加味した単元構想の工夫を図り、その有効性について実践研究を継続していく。

- ② 朝読書と放課後学習「スキルタイム」の充実を図るために、教科・領域等との関連も視野に入れ、基礎学力の定着から思考力・表現力の向上につながる系統的発展的な全体計画の作成と、その運営に努める。

### (2) 視点2：個の学びの把握とその活用

- ① 各学習調査等について具体的方策を検討し、教育課程の編成と各教科の指導計画に反映させていくための校内システムを確立する。
- ② 個の学びの把握とその活用を図るため、生徒一人一人が3年間を通じて学習の記録（通信票、学習状況調査結果、各種検定資格証書、校内各種表彰状等）を累積するポートフォリオ的な学習総合ファイル（仮称「学習のあゆみ」）を作成する。

### (3) 視点3：評価活動の工夫について

- ① 学習単元と単位時間の学習過程の中に、指導と評価の一体化を目指す形成的評価を取り入れた授業の質的改善を一層図っていく。
- ② 全教科、全学年での「生徒による授業評価」の定例化を図り、授業改善及び教師の指導力向上に生かす。さらに、授業改善の視点を生徒、保護者に示していく。

### (4) 視点4：家庭・地域との連携について

- ① PTA活動の内容を見直し、親子や親同士が学力向上について理解を深める研修を立案していく。
- ② 小・中・高校の連携については、相互の授業参観を継続し、さらに各教科・領域等の年間指導計画の相互理解を図る場を設定する。

## 5 実践事例

### (1) 公開授業（9月21日）

- ① 概要 国語・数学（習熟度別）・社会・理科・英語（少人数）の5教科7クラスで、仮説に基づいた各教科の取組を

公開し、分科会で協議・検討を行った。

### ② 実践教科の紹介（3教科）

ア 社会科「世界と日本の自然環境」



課題解決型の学習  
「世界の果てまでいってQ」

ゲーム型のシュミレーション教材を開発し、既習事項を活用して課題を解決する活動を通して、学習への興味・関心を高め、さらに主体的に地理的事象をとらえる授業。

イ 理科（光の世界）



課題解決型の学習  
「夕焼け空はどうして赤く見えるのか」

光と色についての興味を高め、夕焼け空が赤く見える理由を自作教材による実験結果をもとにして考察する授業。

ウ 数学（1次関数）実践・確認コース



習熟度別指導  
「1次関数の利用」

具体的な事象を1次関数(式, グラフ, 表など)で表し, それを用いて問題を解く授業。各コースで, 具体物やレディネスを記入した座席表を用意した。

## (2) 実践事例 2

- ① 概要 思考力・表現力を高めることを目標に、朝読書・放課後学習及びそのコンテスト・休業中の学習の在り方等について改善を行った。

### ② 実践内容

#### ア 朝読書 (毎日15分・週4回)



読書カードに記録し、ブックレット等を作成した。

学習習慣を身に付け、読書への興味・関心を高め、読解力・思考力・表現力向上への基盤づくりを目指す取組。

#### イ 放課後学習 (毎日10分・週5回)



国・数・英を計画的に実施し、プリントはファイルに綴じ込んだ。

学習習慣を身に付け、思考力・表現力を高めるために欠かせない基礎学力(読み書き計算)の定着を図る取組。



実施教科全ての問題。漢字や計算・単語の問題を同時に行う。

上記の内容を受けて、学期毎にコンテストを行い、全校集会で優秀者を表彰した。また研究だよりでも内容、結果を紹介し意欲を高めた。

## (3) 実践事例 3

- ① 概要 生徒による授業評価を全教科で導入し、授業の質的改善を目指した。

### ② 実践内容

#### ア 国語科1学年の例



## (4) 実践事例 4

- ① 概要 学区の小・中・高の授業をそれぞれ参観し、検討会で各校の授業の状況、生徒の様子などの意見を交換し合う。

### ② 実践内容

#### ア 英語科の授業提供(平成19年7月)



英語で発表し、お互いの読みをチェックし合う授業。表現力の向上を目指す。

本校の英語・数学・国語の授業を小学校、高校の先生方が参観した。事後検討会で、習熟度別・少人数指導の方法、評価、家庭学習等の話し合いを行った。

以下のアドレスから研究事例が参照できます。

<http://www.tome-svr.jp/~yoneyama-chu/>



学校名 石巻市立広瀨小学校  
 所在地 石巻市広瀨字町北233  
 電話番号 0225-73-2251

## 1 学校の実態

児童数201人 職員数18人

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別 支援	合計
児童数	26	39	26	40	28	41	1	201
学級数	1	2	1	1	1	2	1	9

## 2 研究の概要

### (1) 研究主題

学ぶ楽しさを感じ、  
 確かな学力を身に付ける児童の育成  
 ～国語科・算数科の指導の工夫を通して～

### (2) 主題設定の理由

#### ① 今日の課題から

「生徒の学習到達度調査」「国際数学・理科教育動向調査」において、学力の低下傾向や学習意欲、学習習慣が必ずしも十分でない結果が出ている。

学力向上拠点形成事業の取組においては、「学び合う学習集団づくり」「実態や小・中の学び連続性の重視」「授業と家庭学習相互の関わりを大切にした学習指導の推進」等の提言がなされている。

#### ② 学校教育目標の具現化から

本校では、教育目標を「やさしさとかしこさを持つ、たくましい広小っ子」の育成を目指している。

#### ③ これまでの研究経過

17年度；「友達との関わり合い」を大切にした学習を取り入れた授業づくり

18年度；「教材・友達・自分との学び」を大切にした授業づくり

#### ④ 児童の実態 ※学力検査(CRTⅡから)

- ・国語、算数ともに全体として平均正答率が上昇している。
- ・国語科「読むこと」の観点において十分でない結果となっている。
- ・算数科「数学的な考え方」の観点において十分でない結果となっている。

以上のことを踏まえ、国語科・算数科の指導の工夫を通して、学ぶ楽しさを感じ、確かな学力を身に付ける児童の育成を目指してい

きたいと考え、本主題を設定した。

### (3) 研究の視点

#### 【視点1】学ぶ楽しさを感じさせる授業づくり

- 指導方法の工夫
  - ①教材や課題提示の工夫
  - ②考えをもたせるための工夫
  - ③考えを交流させるための工夫
  - ④振り返りをさせるための工夫
  - ⑤授業に生かす家庭学習の工夫

#### ○学習環境の充実

- ①自己表現する場の設定
- ②共感的な人間関係づくりの工夫
- ③学習コーナーの工夫

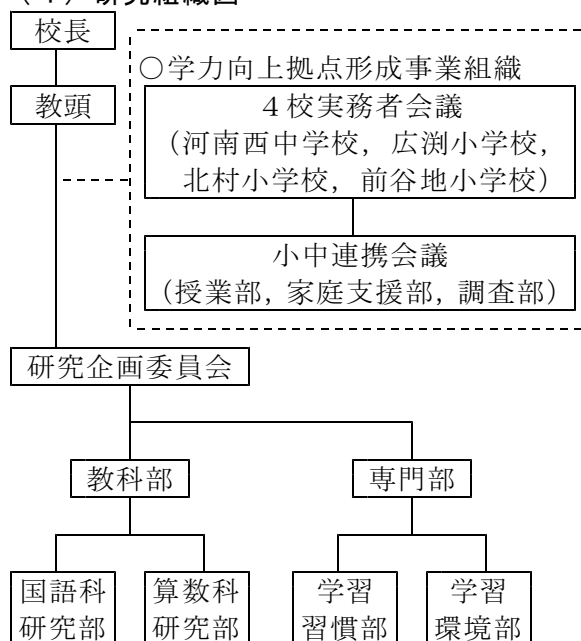
#### 【視点2】学びを支える学習習慣づくり

- 業前タイムの計画的実践
- 放課後学習の時間を利用した補充的な学習及び個別指導の計画的実践
- 家庭学習の工夫
  - ①習慣化への取組
  - ②家庭との連携の工夫

#### 【視点3】小学校と中学校をつなぐ連携づくり

- 国語科における中学校教員との連携の工夫
- 算数科における中学校教員との連携の工夫
- 相互の授業参観及び研修会の実施
- 授業体験等の中学校との交流事業
- 講演会等による4校合同研修会
- 児童・保護者に対する学習・生活習慣の実態調査の実施

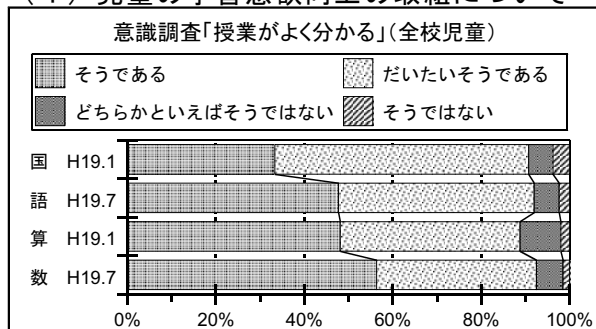
### (4) 研究組織図





### 3 研究成果

#### (1) 児童の学習意欲向上の取組について

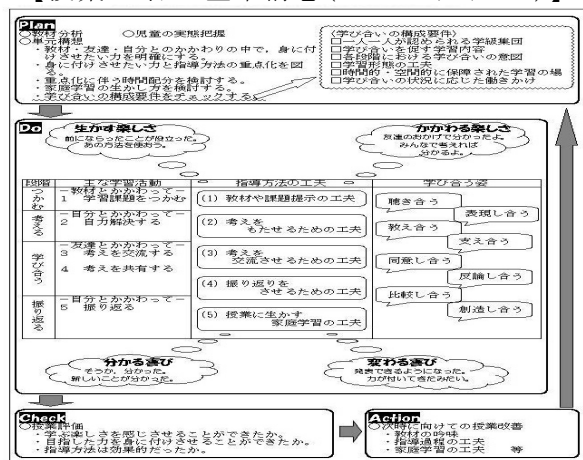


意識調査「授業がよく分かる」と答えている児童が90%を超えるようになった。特に「そうである」の回答率が高くなった。

→「授業づくりの基本構想 (PDCAサイクル)」及び「基本授業スタイル」を基に、授業改善に取り組んできた。教師にとっては、単元構成で検討・工夫すべきことが明確になり、具体的な授業像をイメージしながら、授業づくりに役立てることができた。

また、指導方法の工夫に加え、学習環境の充実への取組によって、授業以外の場面でも学びの雰囲気をつくり出したり、学びを日常的なものと感じさせたりすることができた。

#### 【授業づくりの基本構想(PDCAサイクル)】



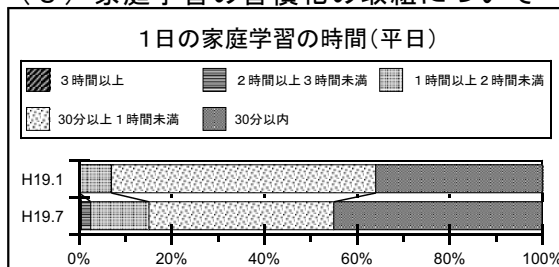
#### (2) 小・中学校の連携した取組について

児童にとって、「中学生の考え」「中学生が読む本」「中学校の先生」にふれることによって、学習活動や考えを広げたり深めたりすることができた。また、中学校や中学校の学習に対する興味・関心を高めることができた。(国語科TT授業から)

→国語科中学校教員とのTT授業に5年生の2つの単元で取り組んできたことによって、児童の中学校に対する様々な面での距離を縮めることができた。また、視点3にある他の手だて(4校共通)での取組によって、児童

のみならず、小学校教員においても中学校を意識した教育活動を展開できるようになってきた。

#### (3) 家庭学習の習慣化の取組について



家庭学習に1時間以上取り組んでいる児童の割合が増加した。

→4校共通での取組で「家庭学習の手引き」「生活がんばりカード」を作成、配付したことによって、家庭の協力が得られ、学習時間の増加につながっている。

また、家庭学習をどう授業に生かしていくかを明確にしたことによって、児童の目的意識、学習意欲の向上につながった。

#### 【家庭学習の授業への生かし方】

時期	家庭学習の内容	授業への生かし方	意義・有効性
短期 次期へ直接的に生かす内容	学習単元の音読 課題設定や課題解決のきっかけとなるもの 既習事項確認プリント 学習内容復習プリント	○つかむ段階において、家庭学習で取り組んできたことを課題設定に結びつける。 ○考える段階において、家庭学習で取り組んできたことを活用させながら課題解決に役立てる。	○学習内容の定着 ○学習の継続性 ○授業への積極的な関わり
中期 数時間後に生かす内容	漢字練習 算数準備 発表準備 テスト勉強 作文 読書の音読 計算練習 自主学習	○家庭学習で取り組んでいた学習内容を、小単元または単元のまとめの段階で生かす。	○より確実な学習内容の理解と定着 ○学び方の習得 ○授業への積極的な関わり
長期 基礎学力の定着を図る内容	など	○単元内での授業に生かすことはできないが、基礎的・基本的な学習事項の積み重ねにより定着を図る。	○基礎学力の向上 ○学習習慣の形成 ○生活リズムの定着 ○自己コントロール(忍耐力、集中力)

#### (4) 学習習慣づくりの取組について

学力検査(CRTII)の国語科「言語事項」算数科「表現・処理」において、正答率が高くなった。

→チャレンジタイム(漢字、計算練習)、パワーアップ教室を実施してきたことによって、読み、書き、計算といった基礎学力の向上につながった。

### 4 今後の課題と改善策

#### (1) 学ぶ楽しさを感じさせる授業づくりについて

ペア、少人数に比べ、一斉での学習のときの発表が少ない。さらに、一斉での考えの交流の手だてを工夫していきたい。

#### (2) 学びを支える学習習慣づくりについて

家庭学習への取り組みに個人差が見られるようになってきた。発達段階及び個に応じた手だてを検討していきたい。

#### (3) 小学校と中学校をつなぐ連携づくりについて

発達段階に応じた中学校へのつなぎ方の在り方や手だてを検討していきたい。

## 5 実践事例

### (1) 実践事例 1

〈国語科における実践〉

【視点1】学ぶ楽しさを感じさせる授業づくり

#### ①教材や課題提示の工夫

〔実践例〕

- ・教材文の提示
- ・文図の活用
- ・実物の提示
- ・多様な音読形態
- ・動作化
- ・さし絵や写真の提示や活用

【さし絵の提示】

#### ○5年「ちかい」

場面ごとの様子を表したさし絵を提示し、物語のイメージの手助けとした。



#### ②自分の考えをもたせるための工夫

〔実践例〕

- ・ノートやワークシートの活用
- ・文章に線を引きながら読むこと

【ノートの活用】

#### ○1年「どうぶつのはな」

「象の鼻はどんな鼻か」「鼻を使ってどんなことをするのか」分かる文章に線を引くことによって、自分の考えをもてるようにした。



#### ③考えを交流させるための工夫

〔実践例〕

- ・学習形態の工夫
- ・ハンドサイン
- ・学び合い進め方カード

【学習形態の工夫】

#### ○3年「自然のかくし絵」

自分が読み取ったことを友達と意見を交流させ、課題について話し合わせた。



#### ○5年「動物の体」

小グループで話し合わせ、様々な考えの交流を図った。(グループ学習)



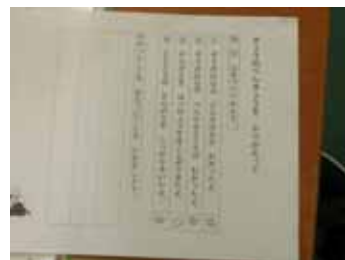
#### ④振り返りをさせるための工夫

〔実践例〕

- ・ワークシートやノートを活用しての評価

【ワークシートでの自己評価】

学習したことが分かったか、自分の考えを話すことができたかなどについて学年段階に応じた記入の仕方(記号・記述)で振り返らせた。



これまでの実践を通して、「国語科における基本授業スタイル」を構築した。各段階における児童の目指す姿、主な学習活動、具体的手だてを記載し、授業づくりの拠り所として活用してきた。

### 【国語科における基本授業スタイル】

段階	主な学習活動	指導方法の工夫
つ	<p>①教材とからわって</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○教材本文を読み、疑問をもったり、さらに繰り返して思ったことを書きつけ出したりする。</li> <li>① 学習課題をついて、本時の学習課題を精読したり確認したりする。</li> <li>・ 教師の提示</li> <li>・ 文図の活用</li> <li>・ さし絵や写真の提示と活用</li> <li>・ 多様な音読形態</li> <li>・ 指名読み、役割読み</li> <li>・ 動作化</li> </ul> <p>「どんな話なんだろう」「今日は〇〇を覚えていくぞ」</p>	<p>②教材で課題提示の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教材文の提示</li> <li>・ 文図の活用</li> <li>・ さし絵や写真の提示と活用</li> <li>・ 多様な音読形態</li> <li>・ 指名読み、役割読み</li> <li>・ 動作化</li> </ul>
か	<p>②自分正からわって</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○教材本文を読み、課題に対する自分なりの考えを思いだしていき、自分なりの考えをもつ。</li> <li>② 考えをもたせるための工夫</li> <li>・ ノートの活用</li> <li>・ ワークシートの工夫</li> <li>・ 文章に線を引きながら読むこと</li> </ul> <p>「主人公は〇〇と思ったのかな?」「この部分が大切だよ」</p>	<p>③考えをもたせるための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ノートの活用</li> <li>・ ワークシートの工夫</li> <li>・ 文章に線を引きながら読むこと</li> </ul>
ま	<p>③互正からわって</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○課題について叙述から自分はどう考えたのかを語ったり、友達のを聞いてたりする。</li> <li>○課題解決に向けて様々な意見を話し合いながら、よりよい考えを交流とともに真んたいいく。</li> <li>③ 考えを交流させるための工夫</li> <li>・ 学習形態の工夫</li> <li>・ 学び合い進め方カード</li> <li>・ ハンドサインの活用</li> <li>・ 文字写真の提示</li> <li>・ さし絵の活用</li> <li>・ 文図の活用</li> <li>・ 動作化</li> </ul> <p>「意見を交換する」「課題についての考えを互いに述べ合う。」「考えを共有する」「課題について全体で確認したりまとめたりする。」「主人公は〇〇と聞いたのか?」「〇〇と〇〇と同じ考えだ。」「そうか、ここが説明が大事なんだ」</p>	<p>④考えを交流させるための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学習形態の工夫</li> <li>・ 学び合い進め方カード</li> <li>・ ハンドサインの活用</li> <li>・ 文字写真の提示</li> <li>・ さし絵の活用</li> <li>・ 文図の活用</li> <li>・ 動作化</li> </ul>
あ	<p>④自分正からわって</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○学習に対する取り組みを、自分のことと友達のことについて振り返る。</li> <li>④ 振り返りをさせるための工夫</li> <li>・ ワークシートを活用しての評価</li> <li>・ ノートを活用しての評価</li> </ul> <p>「今日は発表ができたよかった。」「〇〇がよかった」</p>	<p>⑤振り返りをさせるための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ワークシートを活用しての評価</li> <li>・ ノートを活用しての評価</li> </ul>





**(3) 実践事例3**

〈学習環境の充実の実践〉

**【視点1】学ぶ楽しさを感じさせる授業づくり**

**【共感的な人間関係づくりの工夫】**

〔交流会〕

〔算数集会〕



学校全体で、お互いのよさや失敗を認め合える雰囲気づくりの試みとして、交流会と算数集会を実施した。

交流会では、6年生が中心となって「好きなスポーツ」「生まれ月」「ジャンケン列車」などの仲間づくりを行った。算数集会では、縦割り班で「長さを考えよう」「重さを考えよう」「正方形をつくらう」などでゲーム化して行った。

**(4) 実践事例4**

**【視点2】学びを支える学習習慣づくり**

**【放課後の時間を利用した補充的な学習及び個別指導の計画的実践】**

〔パワーアップ教室〕



学習意欲を高め、基礎的・基本的な内容を確実に定着できるように、以下の内容でパワーアップ教室を実施してきた。

- ・木曜日の放課後に実施
- ・3～6年生児童対象（任意参加）
- ・4コース（教科書，計算，どきどきわくわく，個別）の設定

**【家庭学習の工夫】 ※4校共通の取組**

〔家庭学習の手引き〕



〔生活がんばりカード〕

中学校区の全保護者対象のアンケートの結果を受け、平成18年度版を改善し〔家庭学習

の手引き〕を作成，配付した。家庭学習での5つのめあて（①正しい生活習慣を身に付けましょう②家庭での学習習慣を身に付けましょう③学習環境を整えましょう④時間を上手に使いましょう⑤お子さんのやる気をささえるおうちの方のバックアップが大切です）を設定し，それぞれに具体的な目標行動を記載した。

学力の向上に結びつく望ましい生活習慣の形成を目指して，〔生活がんばりカード〕を作成し活用を図った。カードには児童の興味を引くようなマーク（にこちゃんマークなど）を使用した。そして，「早寝，早起き，朝ごはん，家庭学習」の4つの項目について毎月1週間の生活をチェックさせ，自分の生活を振り返らせた。

**(5) 実践事例5**

**【視点3】小学校と中学校をつなぐ連携づくり**

**【国語科における中学校教員との連携の工夫（TT授業）】**

〔5年「ちかい」での実践〕

○本時のねらい

「ちかい」を読んで最も強く心に残ったことを短い文で表し，考えを交流する。

○授業の展開

段階	学習活動 ※中学校教員による指導
つかかむ	1 学習課題をつかむ (1) 前時を振り返る。 (2) 学習課題を読む。
考える	2 自力解決する (1) 解決方法を確認する。 (2) 自分の考えをまとめる。
学び合う	3 考えを交流する (1) グループで交流する。 (2) 全体で交流する。 (3) ※中学生の考えを聞き，交流する。
振り返る	4 振り返る (1) 友達や中学生の考えの交流の中で，気付いたことを書く。 (2) ※中学生が読んでいる本を知る。

○中学校教員の役割

- ・〔学び合う〕段階の最後で，中学校1年生の心に残ったことをまとめた意見文を紹介した。
- ・〔振り返る〕段階で，次時の読書活動に向けて，同じテーマで中学生が読んでいる本を紹介した。



学校名 石巻市立北村小学校  
 所在地 石巻市北村字幕ヶ崎一 17 番地  
 電話番号 0225-73-2202

## 1 学校の実態

児童数 90人 職員数 14人

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援	合計
児童数	13	11	17	15	17	16	1	90
学級数	1	1	1	1	1	1	1	7

## 2 研究の概要

### (1) 研究主題

学ぶ楽しさを味わいながら、基礎・基本を身に付ける児童の育成  
 一算数科における一人一人の学習意欲を高める指導の工夫を通して

### (2) 主題設定の理由

#### ① 学力向上拠点形成事業の趣旨から

「確かな学力」の向上を図るための方策について、河南西中学校区4校で具体的な連携の方策を考え実践していきながら、基本的な生活習慣や家庭学習の習慣化を身に付けさせるため、家庭への啓発などを充実させていくことが大切であると考えた。

#### ② 教育目標の具現化から

本研究において、児童に学習意欲をもたせ課題に取り組み、解決する楽しさを味わわせながら、基礎・基本を身に付けさせ、学力を向上させていきたいと考えた。また、児童相

互の学び合いを通して、自らの考えでは思いつかない見方・考え方に気付かせ、学習内容の定着を図りたいと考えた。これらのことが、目指す児童像「かしこい子供」の具現化につながるものととらえた。

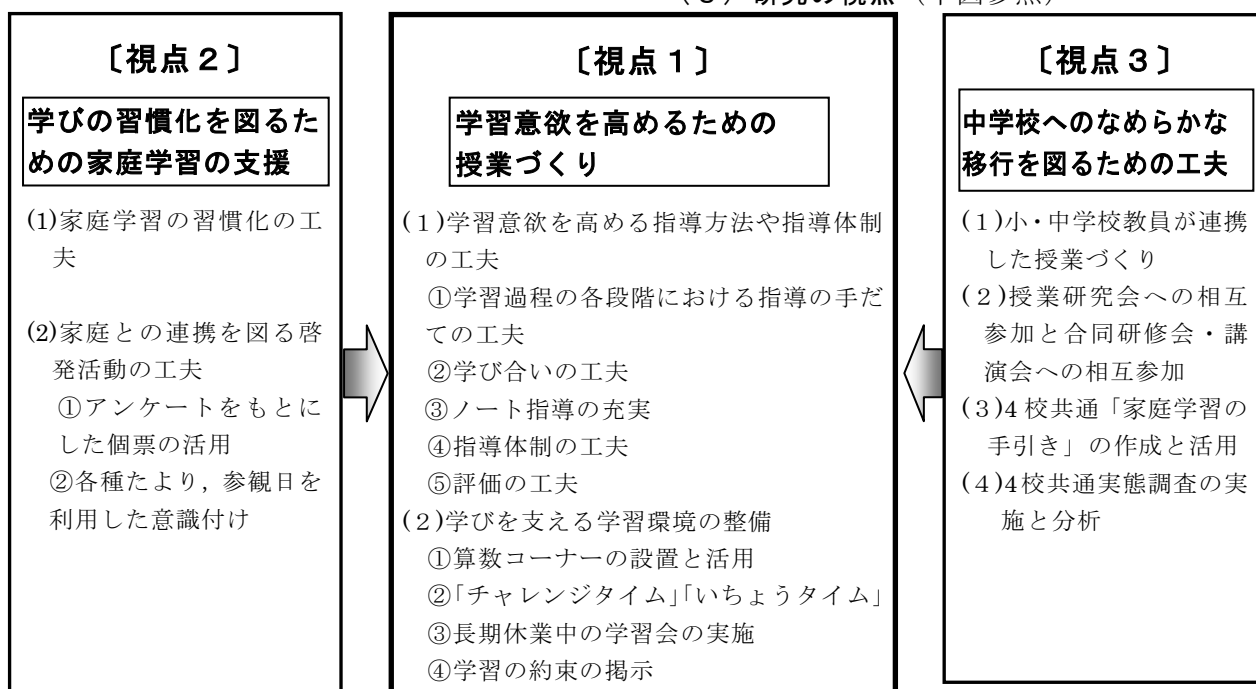
### ③ 児童の実態と研究の経過から

「学習していることは分かりますか」という意識調査では、「よく分かる」「分かる」と答えた割合は、研究初年度と比較すると、全体の80%で変化は見られない。「あまり分からない」「分からない」の割合は5ポイント減り、授業を「分からない」と感じる児童が少しずつ減ってきている。宿題の提出は良好な状況である。しかし、毎日の自主勉強が定着している児童の割合は20～30%にとどまっている。また、自主勉強の時間についてもあまり変化は見られない。平成18年度のCDTⅡの結果では全観点で前年度を上回った。しかし「数学的な考え方」は、全国平均にわずかながら及ばなかった。

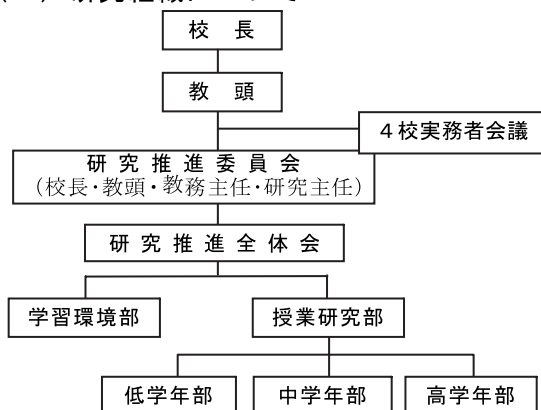
昨年度までの取組では、「算数コーナー」の活用、ノートの使い方の指導、自己評価カードでの振り返り、「チャレンジタイム」での復習、TT指導等で成果が見られた。課題としては、「学び合い」での発表のさせ方や話し合いの焦点化、自主勉強の定着、TTの役割分担の3点が挙げられる。

以上の理由から、本研究主題を設定した。

### (3) 研究の視点 (下図参照)



(4) 研究組織について



3 研究成果

(1) 児童の学習意欲向上への取組について

① 学習過程の各段階における指導の手だての工夫

資料1【学習過程の例】に示したような指導の手だて工夫することで学びの意欲が高まり、基礎・基本が確実に定着していくと考えた。事前に模擬授業を行ったことで、授業者は予想される児童の反応がイメージしやすくなり、発問や板書、教材教具が吟味され分かりやすい授業づくりができた。

意識調査の「算数は楽しいですか」という項目で「とても楽しい」「楽しい」の割合が研究初年度と比較すると11ポイント増え、75%になり、「学習が分かりますか」という項目では、「あまり分からない」「分からない」の割合が9ポイント減り2%になった。学力テストの結果、総合では、全国平均を3.8ポイント上回った。

資料1—【学習過程の例】

段階	○主な学習活動	学び合いの活動	○指導のねらい ・指導の手だて ・学び合いの手だて
つかむ	○問題を把握する。 ○学習課題を把握する。 問題の意味は～です。 この問題は～を求めます。 こういう問題なんだ。 これを求めればいいんだ。	め 題 の 意 話 し 握 合 合 の い た	○問題を確実に把握できるようにする。 ・学習問題の吟味 ・提示の工夫（絵や図など） ・聴写 ・算数的活動の工夫 ・話し合い活動
見通す	○解決の見通しをもつ。 ～すれば、解決できます。 ～する方法もあります。 そうすれば、解決できるんだ。 私と同じ解決方法だ。	の 解 話 し 決 合 い 通 し	○一人一人が確かな見通しを持てるようにする。 ・既習事項の想起（算数コーナー、ノートの活用） ・絵や図などの提示 ・話し合い活動
解決する	○自力解決をする。 こうするとできるよ。 そうすれば、できるんだ。	合 解 い 決 の 方 教 法 え	○一人一人が確実に解決できるようにする。 ・算数的活動の工夫・学習形態の工夫 ・文字、図、式で思考過程を表現 ・机間指導による個別支援と個々の思考過程把握（TTの役割分担と座席表の活用） ・発表の構想と発表者の意図的指名 ・発表準備の支援（ラミネート加工板、発表資料の書かせ方）
確かめる	○解決したことを確かめる。 ～の方法で解いたら、～（答え）になりました。 自分の考えと同じだ。 自分の考えと違う方法だ。 このやり方が簡単だ。 このやり方だと早くできるね。	の 解 話 し 決 合 い 方 と 法 結 果	○友だちの考えを理解し、よりよい解決方法を見つけ出せるようにする。（話し合いの焦点化） ・発表順の吟味（誤答、不完全解答を生かす） ・分かりやすい発表の工夫 ・考え方の類型化 ・絵や図などを活用した確かめや整理
まとめる	○まとめるをする。 今日の学習で～が分かりました。 ○学習を振り返る ～さんの発表で分かりました。 ～さんの考えが良かったと思います。	交 気 流 付 き や 感 想 の	○学習内容をまとめることができるようにする。 ・課題を振り返りながらの板書（できるだけ児童の言葉で） ・適用問題、作問 ○友だちの学びのよさに気付かせる。 ・学習感想 ・家庭学習への取組

\* 学習過程の全ての段階に「学び合い」があるのではなく、取扱う内容によって「学び合い」は限定される。

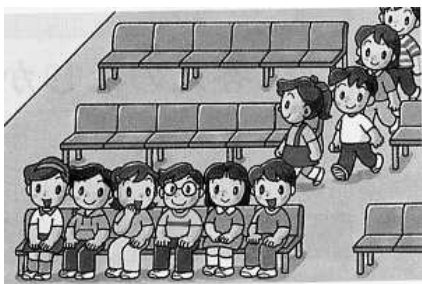
## 実践例1—「つかむ」段階の「学習問題の提示の工夫」

### ・3年「あまりのあるわり算」

子どもが32人います。1つの長いすに6人ずつすわります。長いすはいくつありますか。

○場面絵を提示することで学習問題を確実に把握できるようにする。

#### 【提示した拡大図】



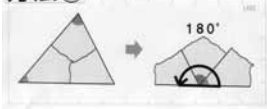
## 実践例2—「見通す」段階の「既習事項の想起」

### ・5年「図形の角」

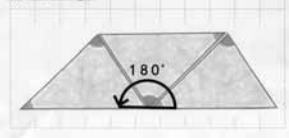
分度器を使わないで、4つの角の和を求める方法を考えよう。

○教室内の算数コーナーの、三角形の3つの内角を合わせた図や、内角の和が180度である図に注目させ、既習事項を振り返らせる。

#### 3つの角の和は何度だろう！ 方法①



#### 方法②



### ② 学び合いの工夫

本研究における「学び合い」とは、個人の学びが他者の学びに触れることによって互いに触発され質的に高まることをいう。「学び合い」は学習段階の一場面や、目的に応じた学習形態の中で、他者と関わる活動を通して行う。ここでの関わりは、児童同士の意見交流のみならず、友だちの考えを聞くことによって生ずる内的な変容も関わりとみなす。学習内容により、学習過程の各段階の「学び合い」の重点の置き方を考え、指導の手だてを工夫し授業を行ってきた。（資料1参照）

その結果、意識調査の「どんな時楽しいですか」という項目では、「友だちと一緒に

勉強する時」「発表した時」が研究初年度と比較するとそれぞれ6ポイント、14ポイント増えてきている。「学び合う」楽しさを味わいながら学習に取り組む児童が増えたと考えられる。

#### 「学び合い」の工夫—グループ学習



### ③ ノート指導の充実と学習感想

昨年度に引き続き「ノートの使い方」を児童に提示し、学年に応じて弾力的に指導するとともに、今年度は、学習感想を取り入れることにした。学習後、感じたことや分かったことを書かせることで、児童が主体的に学習に取り組んだかを評価した。また、友達の考えで感心したこと等を書かせることにより、児童はさらに自分の考えを広げることができ、学び合いにもつながると考えた。

継続した指導の結果、言葉・図・式を使ってノートに自分の解決方法や思考過程を表現しようとする態度も少しずつ身に付いてきている。また、学習感想からは、友だちと自分の考えを比べ、よりよい考えを見い出そうとする態度も身に付いてきていることが分かる。

#### 資料2—【学習感想の例】

**S児**：「私はTさんの方式がいいと思います。です。なぜかという、たとえば、50を25と25に分けたりする考えは思いつかなかったからです。この方式を使っているいろいろな暗算を試してみたいです。」4年

### (2) 家庭学習の習慣化の取組について

#### ① 家庭学習の習慣化の工夫

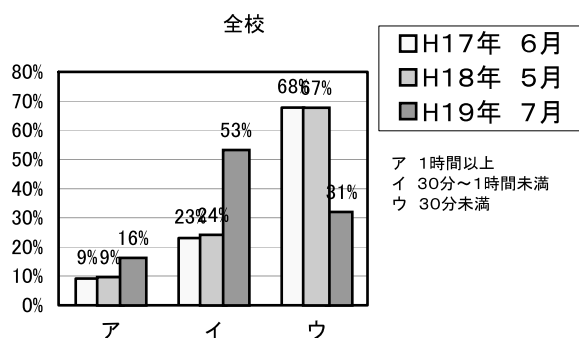
家庭学習の時間は宿題と自主勉強とし、各学年の目安とする時間は「学年×10分」とする。低学年は宿題を中心に家庭学習をする段階、中学年は自主勉強が始まる段階、高学年は計画を立てて内容を決める段階ととらえ、

学年に応じた指導をしてきた。

見通しをもって自主勉強に取り組めるよう、「自主勉強メニュー」を作成し、学級懇談で保護者に趣旨を説明し配布した。よい自主勉強ノートを紹介したり、教室に掲示したりすることで互いに勉強の質が高まるようにした。また、意欲付けを図るため、がんばりシールを貼るなど工夫をしたり、家庭との連携を図るため音読カードの通信欄を利用した。

この結果、自主勉強をしている児童の割合が全校の半数になり、「時々している」を合わせるとほぼ全員になった。また、自主勉強の時間も全学年で長くなった。(資料4参照)

### 資料3—【自主勉強の時間のアンケート】



#### (3) 小・中学校の連携した取組について

##### ① 小・中学校教員が連携した授業づくり ア 単元系統表の作成(算数・数学)

4校で作成した単元系統表を参考にし、小学校の6年間だけでなく中学校数学までのつながりを意識した授業づくりを考えた。

##### イ 小・中学校教員が連携した授業づくり

以下の点に留意しながら、本校では6年算数の連携授業を進めてきた。

- ・中学校教員は児童の実態を把握し、小学校の授業づくりについて理解するため、事前に数回授業参観した。
- ・小学校と中学校でのグループ活動や学び合い活動について情報交換し、指導を工夫し改善しあった。
- ・授業を作り上げるまでの教材研究の段階を大切にし、双方の指導方法の交流を図った。

##### ② 授業研究会への相互参加と合同研修会・講演会への相互参加

授業研究会後の分科会では、4校共通の視点である「学び合い」や小学校と中学校の学

習内容のつながりや、指導方法について話し合いをもち、今後の研究の参考にした。

##### ③ 4校共通の家庭支援の取組

昨年度の「家庭学習の手引き」を改善し平成19年度版を作成し、手引きの有効活用を家庭にお願いした。また、学力向上に結びつく望ましい生活習慣の形成を目指して「生活がんばりカード」作成し、活用を図った。

##### ④ 4校共通各種調査の実施と分析

4校共通「学習・生活意識調査」を実施分析したり、学習状況調査や学力テストを分析したりして研究の成果を探った。また、「中1ギャップ」に関するアンケート結果を分析し、小・中連携の方向性を探った。

#### 5年 小・中連携授業「円」



#### 4 今後の課題と改善策

##### (1) 児童の学習意欲向上への取組について

どんなことがらを学び合わせるかをさらに吟味し、内容に応じた支援を工夫していく。また、話し合いの焦点化については、児童の考え方の取り上げ方やよりよい考えを生み出すような発問の仕方について、今後も引き続き教材研究を深めていく。

##### (2) 家庭学習の習慣化の取組について

自主勉強は定着しつつあるが、内容や量でも個人差が大きく、取組への意識の差が見られた。内容の希薄な児童に対しては、他の自主勉強の良い例を参考に具体的に取組み方のアドバイスをする。

##### (3) 小・中学校の連携した取組について

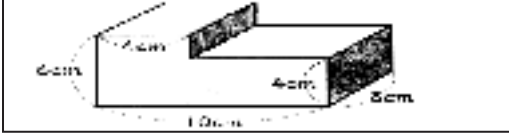
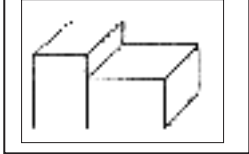
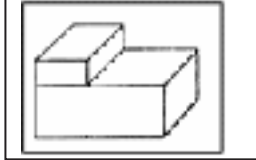
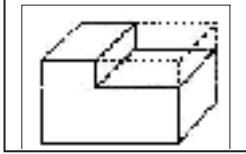
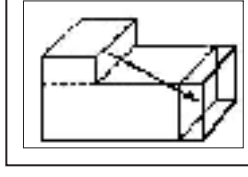


小・中連携授業は、打ち合わせの時間の確保等の時間的な負担が大きな課題として残っている。その負担をできるだけ軽減した連携のあり方を検討する模索する必要がある。



5 実践事例—小・中連携授業 【6年「複合図形の体積」】

(1) 本時のねらい 複合図形の体積を、直方体の体積の求め方を生かしながら考え、求めることができる。

(2) 学習過程

段階	教師の働きかけと児童の反応	指導上の留意点	
		T 1 (小)	T 2 (中)
確 か め る	<p>問題「体積は何cm<sup>3</sup>になるでしょうか。」</p>  <p>5 解決方法や結果について発表し、確かめる。 T1：解決できたようなので、発表してもらいます。 (C1～C4が、それぞれの解決方法について立体模型を使って説明する)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>立体模型を活用して発表できるよう支援する。</li> <li>座席表を用いて情報交換を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童の様子を見取り、友達の発表について理解しにくい児童がいれば声かけを行い、自分の考えとの違いを見つけさせる。</li> </ul>
学 び 合 い	<p>C1：図形を縦に切って、2つの直方体にする。</p>  <p>C2：図形を横に切って、2つの直方体にする。</p>  <p>T1：C3の方法と似たようなやり方を、前にしたことはありませんか。 C：面積の問題をした時にやりました。 C：C4のやり方はよく気付いたと思いました。 T1：4つのやり方の特徴を考えて、それぞれのやり方に名前を付けたいと思います。どんな名前にしますか。 (C1「縦割り方式」C2「横割り方式」C3「合体さよなら方式」C4「移動方式」と名付ける。) T1：どの方式にも、共通していることは何ですか。 C：どのやり方も直方体になっています。 C：直方体を作って、体積を求めています。</p>	<p>C3：欠けている部分を補い、大きな直方体の体積を求めた後補った部分を引く。</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>解決方法を振り返らせながら、それぞれの方法の特徴を考えさせる。</li> <li>共通点が出なかった時は、グループで話し合うよう指示を出す。</li> </ul>	<p>C4：部分を切り離して移動させることによって1つの直方体にする。</p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>直方体に目を向けさせるための補助発問を行う。</li> </ul>
ま と め る	<p>6 適用問題を解き、別の方法があることを知る。 T2：みなさんの複合図形の立体をよく見てください。 C：(立体を動かしながら考えている) T2：このように底面が2つ向かい合っていて同じ形をした立体を何と呼びましたか。(円柱の立体を提示) C：「柱」です。 T2：そうです。この立体を立てて見ると柱体と見ることができます。この時、1段目の体積は分かれますか。 C：48 す。 T2：48という数字は、この部分(底面)の面積と同じになります。48 段積み重なっていますか。 C：8段です。8段だから384 T2：底面の面積を表す数字と高さをかけても、答えは同じになります。中学校になると、このような柱体の体積を求める時は、底面積を求めてから高さをかけるという方法を勉強します。覚えていてください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題に適した方法を意識しながら解決できるよう声かけをする。</li> </ul> <p>&lt;適用問題&gt;</p>  	<ul style="list-style-type: none"> <li>立体模型を活用し、柱体としてとらえて体積が求められることに気付かせ、中学校での体積の学習との関連を促す。</li> </ul>

【考察】 拡大立体模型を準備したことで、児童は題意の把握がきちんとでき、方法の発表の際は分かりやすい説明ができた。また、座席表を用いてT1とT2が情報交換を行ったことで、効率的な支援を行うことができた。TTの役割分担はこれまでの授業実践をもとに比較的スムーズに行えたが、授業の中での中学校教員の役割については、さらに考えていく必要がある。

北村小学校URL

<http://www.mediaship.ne.jp/~elskitm/>

学校名 石巻市立前谷地小学校  
 所在地 石巻市前谷地字沖埜125番地  
 電話番号 0225-72-2014

## 1 学校の実態

児童数 103人 職員数 13人

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
児童数	16	11	18	19	19	20	103
学級数	1	1	1	1	1	1	6

## 2 研究の概要

### (1) 研究主題

分かる喜びを感じ、意欲的に学ぶ児童の育成  
 ～算数科における「学び合う授業づくり」と「学習環境づくり」を通して～

#### ○主題・副主題について

- ・「分かる喜びを感じ、意欲的に学ぶ児童」  
 児童が主体的に学習にかかり、思考や活動を通して、分かった喜びや学習の楽しさ・充実感・成就感を感じ、次の学習への意欲をもつ姿。また、そのことが基盤となつて積極的に学習に取り組んでいる姿ととらえる。
- ・「学び合う授業づくり」  
 友達とかかわって学ぶことを「学び合い」とし、お互いの考えの発表・意見交換・教え合い・練り合いなどを、学習内容に応じてさまざまな形態で行うものとする。その「学び合い」を中心として、児童が友達や教材、教師と主体的にかかわり合いながら、分かる喜びを感じる授業をつくり上げていくことととらえる。
- ・「学習環境づくり」  
 児童が分かる喜びを感じることができるとともに、児童をとりまき、支える環境をつかっていくこと。補充学習や教室環境、家庭学習の支援、小・中間の連携など、直接的・間接的手だてを総合してとらえる。

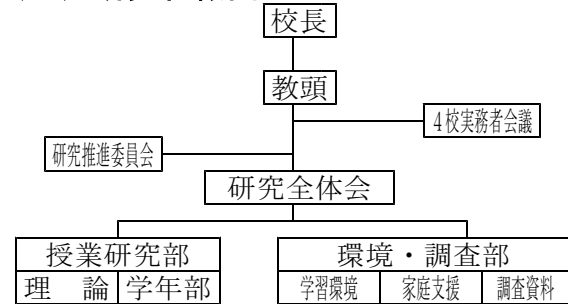
### (2) 主題設定のねらい

- 児童の実態と昨年度までの研究から  
 明るく素直で、指示されたことに対して真面目に取り組む、朝食摂取、睡眠時間の確保などの基本的な生活習慣に関してはほぼ良好であるが、次の点が課題である。  
 <平成17年度の児童の実態>  
 ・「授業がよく分かる・だいたい分かる」と答えた児童が全体の8割に満たない。また、学力検査における算数の各観点が全国平均を下回る。  
 ・家庭で宿題以外の学習に取り組まない児童が43%と多い。  
 <昨年度までの児童の変容から>  
 ・既習事項を生かして自分なりに考え、課題を解決しようとする児童が増えてきた。  
 ・学び合いにおいて、児童同士のかかわり方や、練り合いのし方がまだ不十分である。  
 ・ほぼ全員が宿題に取り組むようになった。宿題以外の家庭学習を充実させ、学年に応じた家庭学習の時間を確保させたい。

### (3) 研究の視点と主な手だて

視点1	分かる喜びを感じさせるための授業の工夫・改善 ・児童が自ら考え、学び合う授業づくり ・学びを支える学習環境の工夫
視点2	学習意欲を高めるための家庭学習の支援 ・家庭学習の工夫・家庭学習の啓発と生活習慣の改善指導
視点3	小・中のなめらかな連携を図るための工夫 ・小・中間における系統性を意識した授業づくり ・中学校区共通の実態調査・意識調査の実施 ・相互の研修・交流事業の実施

### (4) 研究組織図



## 3 研究成果

視点1 分かる喜びを感じさせるための  
 授業の工夫・改善

### (1) 児童が自ら考え、学び合う授業づくり

児童自らが取り組み、考え、活動し、課題解決することをとおして学ぶ楽しさを感じさせたいと考え、問題解決的な学習過程を取り入れた授業への転換を図ってきた。また、各段階での手だての工夫を図ってきた。

<本校でとらえる問題解決的な学習の学習過程例>

段階	学習活動
つかむ	・問題を把握する。・課題を把握、または設定する。
見通す	・解決への見通しをもつ。
考える	・自力解決を行う。・互いの考えを比較検討する。
まとめる	・学習課題に対する結論や学習内容をまとめる。
ひろげる	・適用問題に挑戦する。・本時の学習を振り返る。 ・次時の内容をつかむ。

#### ① 問題提示・教材教具の工夫

<問題提示の実践例>

##### ○具体物、絵図での提示

バス停での乗降の様子を表した絵図を提示した。乗降する動物数と時間の流れをつかむのに有効であった。1年「ふえたりへたり」

##### ○条件過不足問題の提示

問題文の前半だけ提示して後半は児童に考えさせたり、必要以上の情報を盛り込んだりした。問題文の必要条件を考えることは問題場面の理解に効果的であった。5年「小数のかけ算」

##### ○生活場面からの提示

駄菓子屋でお菓子を2つ買う場面を「買い物ごっこ」風に再現した。実生活と学習内容を結びつける提示となった。2年「くりあがりのあるたし算」

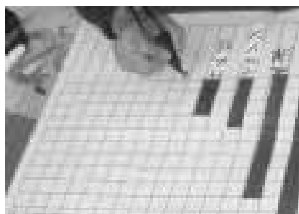
○家庭学習問題からの提示

家庭学習で児童が作問した文章問題の数値を変えて提示した。家庭学習との関連が図られ、児童の意欲向上につながった。

<教材教具の工夫の実践例>

○3年「表とグラフ」

グラフに必要な要素を考えさせるために、枠線・マス目のみのグラフ用紙を使用した。また、4年生に生活アンケートを行い、結果を利用した。



○5年「平行四辺形の面積を求めよう」

等積変形の理解を図るため、封筒の中にクリアシートを入れ、斜めに切ってシートを引き出す教具を用いた。



② 算数的な活動の工夫

○作業的・体験的活動

大豆やきな粉など、自分たちで収穫したものの重さを量り、重さを実感させた。3年「重さ」

○調査的活動

校内で「円」のものをを見つけ、円周と直径を測り、円周率を導き出した。5年「円の面積」

○具体物・半具体物の活用

3けたの数を数える操作活動で、キャラメルを利用した。10個ずつ箱に入れることで、まとまりがとらえやすかった。2年「1000までの数」



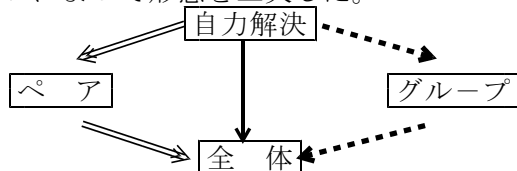
○探求的活動

各授業における集団解決の場面は、概念や性質、解決方法などを見つけ出す場面であり、探求的な算数的な活動としてとらえた。

③ 学び合いの工夫

○学習形態の工夫

本時のねらい、児童の実態、学び合いのねらいによって形態を工夫した。



・自力解決→ペア→全体

全員が自分の考えを発表できる。そばにいる友達に気軽に相談できるよさがある。



・自力解決→グループ→全体



ペアより意見の幅が広がる。グループで話し合うことにより、ほぼ解決できる場合もある。

○話し合いを深める工夫

発表順と発表方法

自力解決の段階で児童の解決方法を見取り、ねらいを考慮し、発表順の構想を立てるようにした。主に、簡単な考えから難しいものへ、多数から少数への順で行うようにしている。また、発表方法は、ねらいやその授業の重点を考え、全員・指名・グループ代表・類型化などから選択した。

互いの考えを理解し合う

解決方法を類型化させる  
 ① 他者の考えを類推させる  
 ② 提示された解決方法を全員で読み取り、考えた本人ではなく他の児童に発表させる方法を試みた。共感的に話し合いを進めようとする姿につながってきた。



つまずきを生かす

自力解決でつまずいている児童には、教師が個別に支援をする場合もあるが、そのまま全体の練り合いの場で、悩んだ部分やできたところまでを話させることで、考えを共有化することができた。

小集団の活用

全体発表の途中で、学習課題に直接関わるような疑問点が見えてきた場合には、グループに戻すことにより、話し合いが焦点化されて深まり、解決に結びつくことがあった。

意見をつなぎ合わせるための発問

質問	・～さんの考えはわかりましたか？ ・質問はありますか？ ・わからないところや聞いてみたいところはありますか？
付け足し	・～さんに付け足しはありますか？
繰り返す	・～さんはどう考えたでしょう？ ・今の発表は、なんて言ったでしょう？繰り返してみよう
理由	・どうしてそう考えたのですか？ ・ここはどういう意味でしょう ・ここをもう少し詳しく話してください
よさ	・～さんの考えのよいところはどこでしょう ・どこを工夫したのでしょうか？ ・この考えの大事なポイントは？
相違点 共通点	・この考えとこの考えで違う点はどこでしょう ・どこが同じでしょう
一番よい方法	・はやく、かんたんに、せいかくに求められる方法 はどれ？
まとめ	・どんなことがわかりましたか

児童の考えを生かしたまとめ

まとめの場面では、学年の発達段階に応じて、できるだけ児童の言葉を生かしながら、課題と対応させて話し合ったり、ノートにまとめたりできるようにしてきた。



○学習用具の工夫

ハンドサインや気持ちメーター



話し合いの時には、ハンドサインや気持ちメーター（重ねた2色の円形カードの色の出し具合で、課題に対する理解度や自信度を示す）を活用し、発表に対する自分の考えや「理解度」を表すようにした。教師は、意図的な指名や評価に役立っている。

読書台、話し合いの進め方の手順カード

グループでの話し合い時に、各自のノートを見やすくするために「読書台」を活用した。友達の発表が聞きやすくなり、聞こうとする意識が高まった。また、中学年などの話し合いの初期段階では、話し合いの手順を書いたカードを与え、全員が話し合いに参加できるようにした。



発表ボード

ラミネートシートを利用して作成した発表ボードを一人一人に持たせ、集団解決の時に活用した。



(2) 学びを支える学習環境の工夫

① 補充学習の工夫

○学習タイム

火曜は算数（ミニドリル）、水曜は国語（漢字の復習）を業前に15分間実施。

○放課後学習パワーアップタイム

水曜日の放課後に30分間、年間20回実施。スキル問題や自主学習に取り組む。スキル問題を100種類用意し、自分の興味・関心や能力に応じて選べるようにしている。

○各スクールの開設

【サマースクール、ウインタースクール】

夏休みに3日間、冬休みに2日間実施。特別教室などを解放し、児童が自分の取り組みたい課題を持ち込み自主学習を行う。



② 教室環境の充実

○各教室の算数コーナー

学習内容の重要事項をカード化して掲示している。

○算数ルーム

スキル問題を設置し、放課後学習の場としたり、掲示物を工夫することで、既習事項を確認できる学習室として活用している。



○おもしろ算数コーナー

・算数クイズコーナー

学年部ごとにクイズを設置し、授業の発展問題や考え方に触れることができるようにしている。



・チャレンジノート紹介

チャレンジノートを紹介し、友達の勉強の仕方を参考にしている場となっている。

・先輩からのアドバイスコナー

勉強方法や算数に関するアドバイスなど、卒業生からのコメントを掲示している。

視点2 学習意欲を高めるための家庭学習の支援

(1) 家庭学習の工夫

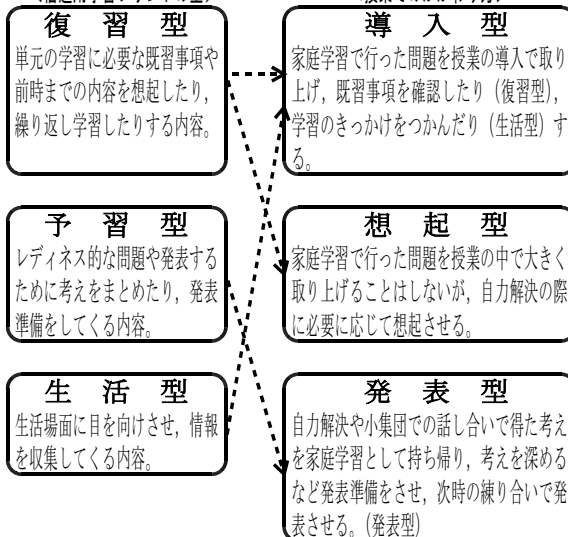
① 授業とかかわった宿題用学習プリント

既習事項の定着を主な目的とし、家庭で取り組む宿題用の学習プリントの作成を試みた。プリントは、各学年の教師が単元全体を見通して問題を作成し、下記のように3つのパターンに分類化している。教師側にとっても教材研究を深めるよい機会となっている。

また、授業では宿題とのかかわりを意識した学習内容を工夫し、宿題と授業がつながることで児童の学習意欲向上を目指してきた。

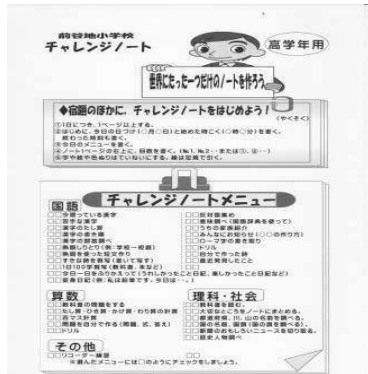
〈宿題用学習プリントの型〉

〈授業でのかかわり方〉





## ② 自主学習への取組



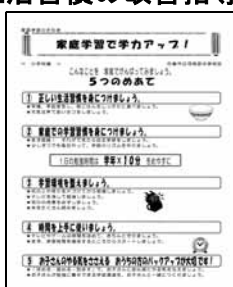
学年部で作成した「チャレンジメニュー」と自主学習専用の「チャレンジノート」を配布して取り寄せ、家庭学習カードに記録させた。担任と保護者の励まし

や賞賛が、児童の意欲につながっている。

## (2) 家庭学習の啓発と生活習慣の改善指導

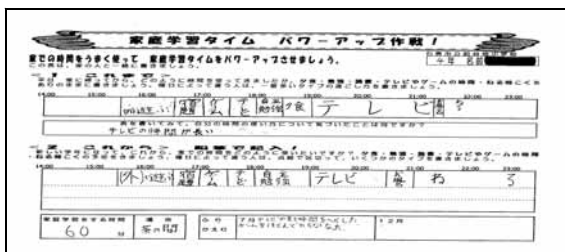
### ① 「家庭学習の手引き」

4校で協議・作成し全家庭に配布した。



### ② 生活時間改善表の配布と学活指導

帰宅後のスケジュール表を各家庭で年度初めに作成し、その後望ましい家庭学習の在り方について学級活動を行った。自分の立てたスケジュールに無理がないか、年2回の見直しを行い、時間の使い方考えさせてきた。

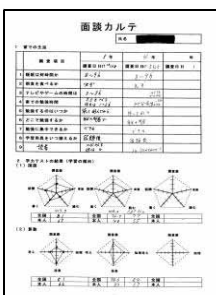


### ③ 講演会・おたより

本校の児童にとって必要と思われる生活習慣に関する内容を、講演会やおたよりなどで保護者に啓発活動を行ってきた。



### ④ 学習相談・面談カルテ



児童及び保護者対象の学習相談で得た情報をカルテに記載し、次の学年に引き継いでいる。

家庭での生活の様子や家庭学習の様子、学力検査の結果なども記録している。

## 視点3 小・中のなめらかな連携をはかるための工夫

### (1) 系統性を意識した授業づくり

#### ① 教科の系統性を意識した授業

系統性が明確である算数科の特徴を生かし、既習事項の定着と関連に重点をおいた授業づくりをすすめる。特に、中学校までの系統を4校で作成した単元系統表や中学校数学の教科書などで教師が確認し、その関連性を単元の指導に生かす。

また、校内での教材解釈と指導方法に一貫性をもたせる。計算問題における補助数字の書き方や、算数ブロックの操作方法などの指導方法、話型・ノートの使い方の統一を行う。

#### ② 小・中連携授業

4校共通の取り組みとして、本校では、5年生の授業に、中学校数学教員がT2として参加する形態に取り組んだ。



#### 【実践例】

○単元名「分数のたし算とひき算を考えよう」

○小・中連携授業にあたって

- ・通常のT T形式をとり、単元のねらいを達成できる内容とする。

- ・T2は一般的な指導の他に、中学生の学習の実態をもとに考えた小学生へのワンポイントアドバイスを行う。本時では、中学生につまずきの多い「仮分数と帯分数」の相互の変換に慣れておく大切さや「分数の量感」について、終末の部分で話すことにした。授業内容を児童に印象づけるとともに、中学校教員への親近感をもつことで中学校への不安を軽減することにつながると考えた。

○授業後の児童の感想

- ・中学校の先生の先生が優しいので安心しました。中学校に行くのが楽しみです。
- ・今日勉強したことが、中学校の勉強につながっていると知ってびっくりしました。

※以下については、4校共通の取組である。

### (2) 中学校区共通の実態調査・意識調査の実施

毎年7月に、児童・生徒及び保護者対象の意識・実態調査を共通項目で実施した。調査部が分析を行い、その後の研究に調査結果を生かしてきた。

### (3) 相互の研修(授業研究会や講演会への参加)

外部講師を召いての研究に関する講演会や、各校で実施される指導主事訪問等に相互に参加した。授業については、参観だけでなく、その後の話し合いにも参加し、互いの研究内容や指導方法を理解し合う上で大変参考になった。

#### (4) 交流事業の実施 (小6による中学校訪問)

中学校入学を目前に控えた3つの小学校の6年生を対象に、授業参観、技能教科の授業体験が中学校で開かれた。中学校に対する不安感が薄らぐとともに、入学後に一緒になる他校の児童と触れ合うことで、中学校生活への期待感をもつことにつながった。

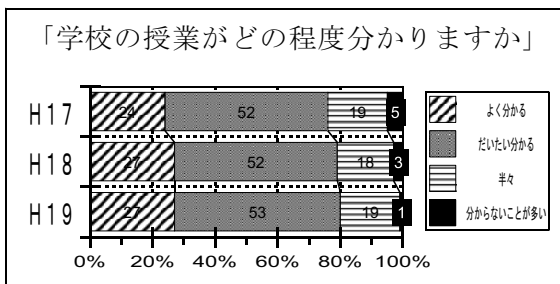


### 全体的な成果

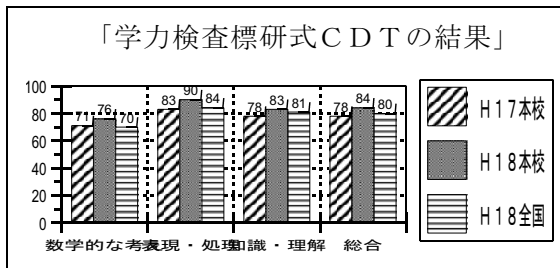
#### (1) 児童・生徒の学習意欲向上への取組について

##### ① 「授業が分かる」と答えた児童の増加

これらの取組により、児童の主体的で意欲的な学習への参加が進むとともに、学習内容に対する理解度が向上してきている。意識調査「学校の授業がどの程度分かりますか」では、「分からないことが多い」と答えた児童が減り、「よく分かる・だいたい分かる」の児童が平成19年度では80%となった。



学力テスト(標研式CDT)の結果(平成19年2月実施)では、どの観点においても全国平均を2点から6点上回るなど、好ましい変容を遂げている。



##### ② 自分の考えを伝えることへの意欲の向上

意欲をもって話し合いに参加する姿が増えてきている。算数的表現を活用することにも少しずつ慣れ、相手に分かりやすく説明しようとしている。また、相手の考えを理解しようとする姿勢は、学級内の児童理解を進め、好ましい人間関係へとつながってきている。

#### (2) 家庭学習の習慣化の取組について

家庭学習への取組が定着してきている。上学年になるにつれて家庭学習に取り組む時間

が延びており、宿題と自主学習を合わせて「学年×10分」の目安時間が達成されつつあるといえる。また、保護者の家庭学習に対する意識も向上してきている。

「家庭学習を1日にどのくらいしますか」%

	1年		2年		3年		4年		5年		6年	
	H17	H19	H17	H19	H17	H19	H17	H19	H17	H19	H17	H19
1時間～2時間	5	6	5	0	0	0	16	5	4	0	0	16
30分～1時間	17	0	43	42	31	47	44	84	55	79	48	84
30分より少ない	78	88	47	58	69	53	35	11	37	21	48	0
全くない	0	6	5	0	0	0	5	0	4	0	4	0

#### (3) 小・中学校の連携した取組について

教師が中学校の教科指導の様子と生徒の実態を知り、中学校へつなぐための小学校の指導の在り方について考えるようになった。また、児童にとっては、中学校教師との触れ合いや指導により、印象強い学習となっただけでなく、中学校生活への不安を軽減することにつながってきていることが分かった。

### 4 今後の課題と改善策

#### ① 「学び合い」の充実

本校児童の「学び合い」は、まだ教師の導きによるところが大きく、今後は、児童自らが進んで取り組む積極的な「学び合い」へと発展させていく必要がある。そのためには、「学び合い」の基本である相手の考えをよく聴くことと、自分の考えを分かりやすく伝える表現力を向上させていきたいと考える。

#### ② 家庭学習習慣化のための継続指導

このより良い取り組みを維持するためには、保護者と教師による児童への励ましが欠かせない。保護者との共通理解のための啓発活動を含め、これまでの取組を継続していく必要がある。

#### ③ 小・中連携授業に適した学年や単元の吟味

本校では、5年生において連携授業を実施したが、中学校教諭が関わる意義を十分に発揮するためには、連携に適した学年や単元を吟味する必要がある。

#### ④ 小・中連携授業の実践化

取組の効果が大きい連携授業であるが、一つの授業をつくり上げるためには、何回にも及ぶ打ち合わせや教材研究が必要となる。今後は、より効果的で無理のない連携授業の在り方を探っていきたい。

石巻市立前谷地小学校 URL  
[http:// www.mediaship.ne/~ elsmaey/](http://www.mediaship.ne/~elsmaey/)

学校名	石巻市立河南西中学校
所在地	石巻市北村字小崎一37番地2
電話番号	0225-72-2411

## 1 学校の実態

生徒数240人 職員数20人

	1年	2年	3年	特別支援	合計
生徒数	69	81	88	2	240
学級数	2	3	3	1	9

## 2 研究の概要

### (1) 研究主題

河南西中学校区4校共通の研究主題

学ぶ喜びに満ちた児童・生徒の育成

### 河南西中学校研究主題

主体的に学び続けようとする生徒の育成  
～「分かる喜び」「できる喜び」を  
実感できる指導のあり方の工夫～

### (2) 主題設定の理由

本校の生徒は、明るく素直で、学習にも落着いた態度で取り組み、特に、指示された事柄や与えられた課題には、前向きに取り組んでいる。

しかし、自分から進んで質問したり、自分で計画を立てて学習したりすること等については、消極的な面が多く見られる。また、平成17、18年度に河南西中学校区の4校で共通に行ってきた学習・意識調査の結果では、授業の理解度は50%程度にとどまっている。また、同調査から、家庭学習への取組が充分ではないことや、学年があがるにつれてテレビ等の視聴時間が長い傾向が見られることが明らかになった。

このような実態を踏まえ、日々の授業で一人ひとりの生徒に「分かった」「できた」と実感させることを積み重ねるとともに、家庭と連携・協力して、家庭学習の取組を充実させていくことをとおして、自ら意欲的に学習に取り組む姿勢を育てていきたいと考える。

### (3) 研究の視点と主な手だて

視点1 学習意欲を高めるための授業づくり

- ① 個に応じた指導方法の工夫
- ② 体験的・問題解決的な学習の充実
- ③ 学び合いを取り入れた学習過程の工夫
- ④ 教師の授業力向上を目指した授業研究の充実

視点2 学習意欲を継続させるための家庭学習の支援

- ① 授業につなぐ家庭学習の充実
- ② 個に応じた家庭での生活設計
- ③ 自主学習ノートの充実
- ④ 家庭や地域への啓発活動

視点3 小学校から中学校へのなめらかな接続

- ① 学習に関する実態調査の実施と分析、考察
- ② 家庭学習の手引きの作成
- ③ 授業研究会への相互参加と合同研修会・講演会への相互参加

### (4) 研究組織図（河南西中学校区）



研究組織の中に、昨年度まで月1回の割合で



行ってきた4校実務者会議に加えて、授業部、家庭支援部、調査部という新たな3つの部からなる小・中連絡会議という組織を設けた。各部ごとに担当校を設定し、図の中に掲げているものを中心に研究を推進してきた。

### 3 研究成果

#### (1) 授業における小・中学校の連携

##### ① 単元系統表の作成 (算数・数学)

算数・数学に関して、小学校5・6年生と中学校1年生の学力検査等の実態から、つまずきの多い単元であった「分数」「面積」「単位量あたりの大きさ」「体積」の系統表を作成した。系統表を作成したことにより、児童・生徒の9年間の学習内容をおさえ、系統性を意識した授業づくりを行うことができた。

##### ② 小・中学校教員が連携しての授業づくり

###### 【実践例】

	実施時期	授業者	教科・単元等
①	平成19年 2月	T1 小学校教員 T2 中学校教員	5年 算数 「円周と円の面積」
②	平成19年 2月	中学校教員	6年 図工 「色・いろいろに料理しよう」
③	平成19年 6月	T1 小学校教員 T2 中学校教員	6年 算数 「単位量あたりの大きさ」
④	平成19年 6月	T1 小学校教員 T2 中学校教員	5年 算数 「分数のたし算」

○中学校の教員の指導を受ける機会をとおして、児童は、小学校での学習事項が中学校の学習内容につながっていくことを理解することができた。

○小学校教員との授業づくりをとおして、児童の実態把握や、個に応じたきめ細かな指導の工夫等、学習指導に関する視野を広げるこ

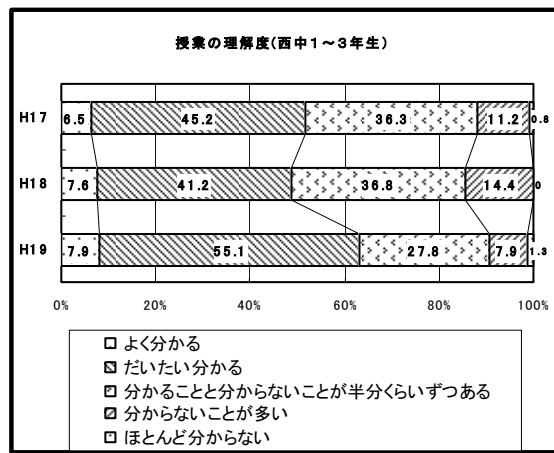


とができた。

○小学校教員との授業づくりをとおして、小学生の中学校生活に対する不安を軽減し、期待を持たせることができた。

#### (2) 生徒の学習意欲向上への取組について

##### ① 分かる授業の充実



\* 河南西中学校区「学習・生活意識調査」より

○学習・生活意識調査において、「授業が分かる」と答える生徒の割合は前年度より12.75ポイント上がり、目標として定めてきた60%を超えた。

○学習目標を明確にした授業づくりや、体験的・問題解決的な学習の時間の充実を目指した授業を行うことによって、意欲的に授業に取り組む生徒が増えてきた。

##### ② 学び合いを取り入れた学習過程の工夫

○主に、小グループで学び合う場面を取り入れた授業実践を行うことにより、授業において、すべての生徒が必ず一度は発言する機会ができ、誰もが学びに参加しているという所属感、有用感を感じさせることができた。

○グループ内でお互いの考えを聞き合うことにより、自分の考えを広げたり深めたりする場面や、自信を持って発表したりする姿が多く見られるようになった。

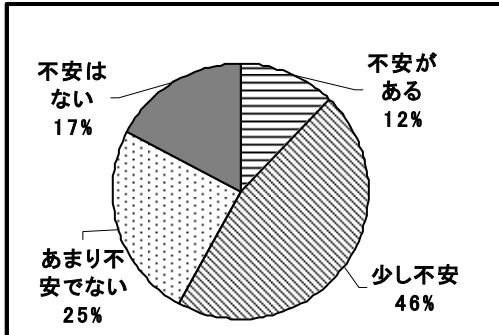




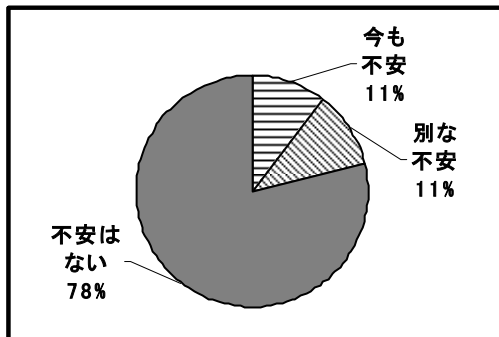
### (3) 小・中学校の連携した取組について

#### ① 学習に関する実態調査の実施と分析

調査により、小学生の中学校生活に対する不安や期待を把握できた。



\* 図1：中学校入学時の気持ち (H18)



\* 図2：中学2年生になった時の気持ち (H19)

図1から、中学生になったばかりの時は、58%の生徒が不安を感じており、その内容は勉強（教科では主に数学と英語）と部活動のことであった。

しかし、図2から、2年生になると78%の生徒が不安はないと答えている。

#### ② 小6児童による中学校の授業参観・体験

次年度中学校へ入学する3つの小学校の6年生を対象に、中学校の授業を参観したり、実際に中学校の授業（体育、音楽、家庭）を体験する機会を設けた。児童の感想から、来年度、他校の児童と一緒に活動することや、教科担任制や学習内容などについて、中学校への不安が少なくなったことが伺われた。



### (4) 家庭学習の習慣化の取組について

#### ① 個に応じた家庭での生活設計

生徒が家庭での学習時間を確保できるよう、テレビ（ビデオ・ゲームなど）の視聴時間、スポーツ少年団等の夜練習、睡眠時間等を考慮しながら、家庭での1日のスケジュール表を作成させ、教師も支援やアドバイスを行ってきた。



また、本年度は、生徒の生活実態を考慮し、1年間を5期に区分して、その都度、スケジュール表を見直しさせることとした。

さらに、そのスケジュール表を、ひもを付けた台紙に貼り、家の中の家族が集まる場所や机の近くの壁などにかけて、いつでも確認や声かけ、励ましができるように工夫した。

※5期

- 1)4～7月 2)夏休み 3)9～12月（中総体終了後、新たに）
- 4)冬休み 5)1～3月（一番落ち着いて学習に取り組める時期、3年生は受験期）

#### ② マイ・スタディ・チェックの活用

曜日	時間	科目	勉強時間	自分の感想	親の感想	達成感・達成率
5/27 月			2.5	自分の勉強	数学・英語	けっこう集中できた。
5/28 火			1	自分の勉強	国語	さしひかされた。
5/29 水			1.5	自分の勉強	英語・数学	集中してできた。
5/30 木			1	自分の勉強	英語	さしひかされた。
5/31 金			1.5	自分の勉強	国語	集中できた。
親の先生から 毎日勉強をがんばってほしい。がんばろう。						
5/31 月			1.5	自分の勉強	数学	集中してできた。
5/31 火			1.5	自分の勉強	理科	集中してできた。
5/31 水			1	自分の勉強	理科	集中してできた。
5/31 木			1.5	自分の勉強	英語	集中してできた。
5/31 金			1.5	自分の勉強	英語	集中してできた。
5/31 土			1.5	自分の勉強	数学	集中してできた。
親の先生から 毎日勉強をがんばってほしい。がんばろう。						
5/31 月			1.5	自分の勉強	社会	集中してできた。
5/31 火			1.5	自分の勉強	数学	集中してできた。
5/31 水			X	自分の勉強	数学	集中してできた。
5/31 木			1.5	自分の勉強	英語	集中してできた。
5/31 金			1.5	自分の勉強	英語	集中してできた。
5/31 土			1.5	自分の勉強	数学	集中してできた。
親の先生から 毎日勉強をがんばってほしい。がんばろう。						

中学校では、小学校での取り組みである「生活がんばりカード」との連続性を考慮し、家庭学習をふりかえるための「マイ・スタデ

イ・チェック」を導入している。

前日の家庭学習の取組の様子を、朝の会か帰りの会で毎日記入させ、担任が一週間に一度、励ましの言葉や来週へのアドバイスを記入することで、家庭学習に対する意識を高め、家庭学習の習慣化を促している。

### ③ 自主学習ノートの充実

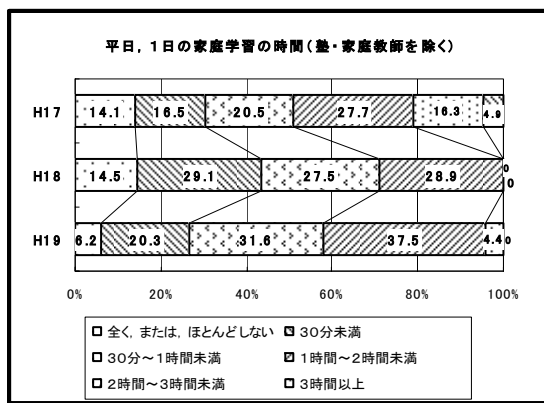
家庭学習に自主的・継続的に取り組ませるために、自主学習ノートの提出を奨励している。本年度は、各教科で、課題提示の仕方や、学習内容のアドバイスをを行い、ノートをチェックする担当者が、良い所をほめるコメントを書き、生徒に返却している。

○担当者 … 家庭学習の「量」のチェック  
○教科担 … 学習内容・「質」の向上に向けてのアドバイス

### ④ 家庭や地域への啓発活動

学力向上のための保護者向け通信「ホップ・ステップ・ジャンプ」を発行し、望ましい生活習慣に関するアドバイスや、家庭学習の重要性や取組方法について、家庭や地域に対する啓発活動を行っている。

○これらの取り組みとともに、4校共通の家庭学習の手引きの作成や、保護者への啓発を行ったりすることによって、生徒の基本的な生活習慣や、学習に対する意識が徐々にではあるが、改善されてきた。



\* 河南西中学校区「学習・生活意識調査」より

○上記の図より、平日の家庭等での学習時間が1時間以上の生徒の割合は、41.9%と前年度より13.0ポイント上がったが、目標値の70%には達していない。しかし、家庭学習を全くしない、または、ほとんどしない生徒の割合は半減した。

## 4 今後の課題と改善策

### (1) 学習意欲を高めるための授業づくり

- ① 「学習・生活意識調査」において授業が「分からないことが多い」「ほとんど分からない」と答えた生徒に対する個に応じた支援の在り方を検討する。
- ② 生徒の学習意欲の向上を図るために、より効果的な学び合いの在り方について研究を深めていきたい。
- ③ 校内授業研究を年間をとおして計画的に実施することによって、教師一人ひとりの授業力を向上させるとともに、学び合う教師集団にしていきたい。

### (2) 学習意欲を継続させるための家庭学習の支援

- ① 各教科において家庭学習の方法に関する

指導を充実させるとともに、適度な内容と量の家庭学習の課題について検討する。

- ② 教師のコメントによるアドバイスを継続し、自主学習ノートとマイ・スタディ・チェックの活用の充実を図る。
- ③ 定期的に生活設計を見直しさせることにより、家庭学習に対する意識を高めるとともに、個に応じた支援や指導を継続する。

**(3) 小学校から中学校へのなめらかな接続**  
効果的で、無理のない小・中連携の在り方について検討を継続する。

## 5 実践事例

### (1) 実践事例 1

#### 体験的・問題解決的な学習の充実

具体物を用い、体験的・作業的・活動的な授業を展開するなど、興味・関心を持って授業に臨むことができるように



【数学科】  
具体物を用いた授業

【理科】  
問題解決的な学習  
(学び合い)



【社会科】  
具体物を用いた授業

地球儀に懐中電灯を当てて、日本と他の国には時差があることを理解させる。



### (2) 実践事例 2

#### 授業につなぐ家庭学習の充実

教科ごとに、生徒の自学自習を促すような内容の課題を出し、家庭学習を促進している。

英語科では、書く力や語彙力の向上、教科書の内容の読み取りや要点の把握のために、予習課題を出している。それを次の日の授業において確認し、文章を読み取る力の向上を図ってきた。



【英語科】生徒の予習ノート



### (3) 実践事例 3

#### 教えます！私の勉強法

学級活動等の時間において、生徒が学習する上での悩みを取り上げ、その悩みの解決法や改善策を、生徒同士でアドバイスする形式の発表会を行った。これにより、自分たちで学習集団をつくっていこうとする意欲を育てることができた。





**学校名** 気仙沼市立九条小学校  
**所在地** 気仙沼市九条327  
**電話番号** (0226) 22-6984

## 1 学校の実態

児童数 370人 職員数 22人

	1年	2年	3年	4年	5年	6年	教員	合計
児童数	54	48	63	55	74	69	7	370
学級数	2	2	2	2	2	2	2	14

## 2 研究の概要

### (1) 研究主題

「学ぶ楽しさを味わいながら、確かな学力を身に付ける児童の育成～感じ、考え、生かすことを支援する算数科の指導を通して～」

#### ① 主題と副題について

ア 「確かな学力」

- 学ぼうとする力………関心・意欲・態度
- 学ぶ力………思考力 判断力 表現力
- 学んだ力………知識 技能
- 学びを生かす力………問題解決力

イ 「楽しさを味わう」

- 課題に対し興味をもつ
- 問題を解決するために柔軟に発想する
- 他の児童と学び合う
- 学習した成果への充実感をもつ

ウ 「感じ、考え、生かす」

児童が学ぶ楽しさを味わいながら確かな学力を身に付けていく学びの過程を3つの段階でとらえた。

「感じる」：学習課題へ興味をもち、数や量などへ感覚を働かせていく段階

「考える」：感じたことを基に柔軟な発想をしたり学び合ったりして筋道を立てて答えを求めていく段階

「生かす」：感じたことや考えたことに充実感をもち、日常の生活に生かそうとしたり、次の問題解決に結びつけたりしていく段階

### (2) 主題設定の理由

確かな学力の育成、本校の教育目標の具現を目指し、児童の実態を踏まえて、学んだことを生かして筋道を立てて考えたり自分の考えを他に伝えたりする力を身に付けさせる指導を実践研究することとした。

### (3) 研究の視点

【視点1】感じ、考え、生かすことを支援する授業設計

- ① 数や量への感覚を働かせ、進んで学習に取り組ませる指導の工夫
- ② 考えを表現し、学び合わせる指導の工夫
- ③ 確かに理解させる指導体制の工夫
- ④ 新しい学びに生かす評価の工夫

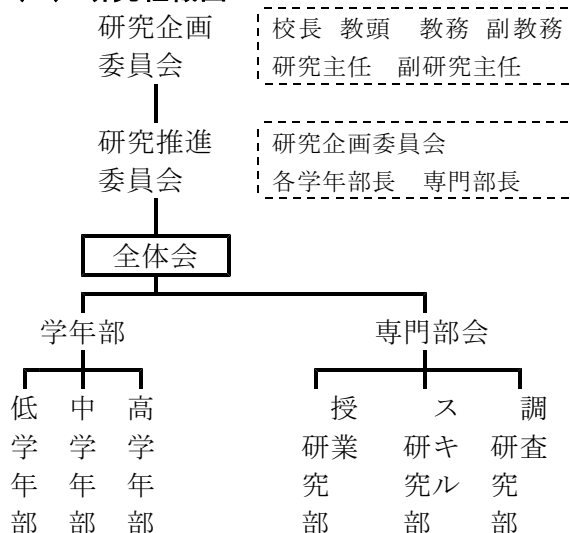
【視点2】学びを定着させる場の設定

- ① 習熟を図る「あかまつタイム」
- ② つまずいた児童のための「パワーアップタイム」
- ③ 学習と学習習慣の定着を図る家庭学習

【視点3】学びを支える学校間の連携

- ① 中学校における学習の様子把握と小学校の学習へのフィードバック
- ② 学習習慣や生活習慣育成について中学校との連携
- ③ 高校生ボランティアによる学習支援

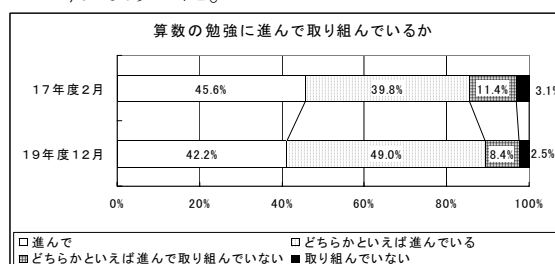
### (4) 研究組織図



## 3 研究成果

### (1) 児童の学習意欲向上への取組について (主に視点1から)

意識調査を行ったところ、算数の学習に「進んで取り組んでいる」と「どちらかといえば進んで取り組んでいる」と答えた児童が90%であった。





「あきらめずに答えを考えている」や「学習したことを生活と結び付けている」と答えている児童は80%を越えていた。

日常生活と結びついた問題を取り上げ、具体物や半具体物を用いた算数的な活動を取り入れたことは、児童に題意を把握させ、学習意欲を高める効果があった。

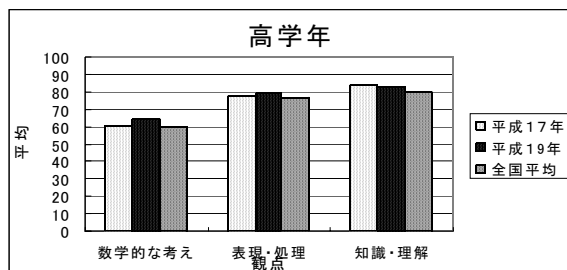
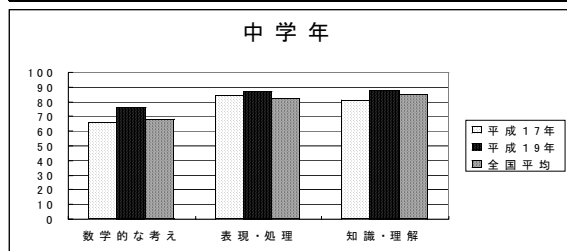
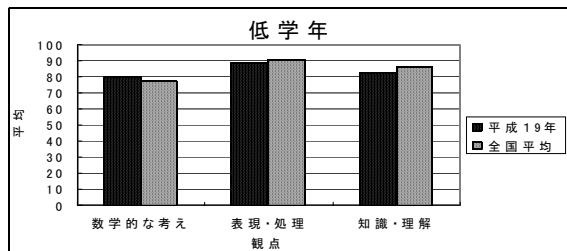
また、児童の話聞いて考える視点を提示したり、互いに意見を補い合わせながら授業を進めたことで、発言に消極的だった児童が安心感をもって話合いに参加し、学び合う姿が見られるようになってきた。

学習カードに書いた学習の振り返りに教師がコメントで返信したり、他の児童に紹介したりしたことにより、友達の考えを次の学習に生かそうという姿勢が見られ、意欲を持続させることにつながった。

## (2) 学習事項の理解を進める取組について (主に視点1と2から)

今年度に行ったC R T-Ⅱ学力診断テストの学年部ごとの結果は次の通りである。

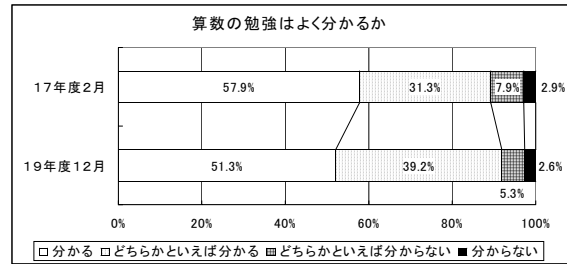
< C R T-Ⅱ学力診断テストの結果 >



低学年では、観点によっては全国平均を下回る場所もあった。しかし、中学年や高学年では、ほとんどの観点で平成17年度の同じ児童の平均、今年度の全国平均を上回った。

意識調査では、「算数の学習はわかりますか」という質問に、90%の児童が「分かる」

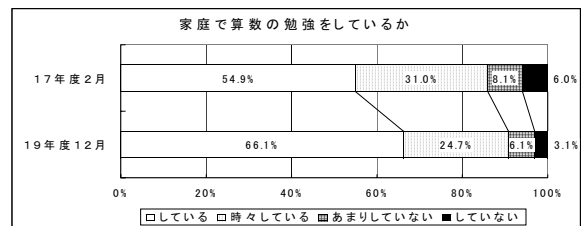
「どちらかといえば分かる」と答えている。



3 (1) で述べた授業における指導の工夫に加え、個人差が顕著になるような時には少人数指導、多様な考えの学び合いを促す時にはT T指導など指導体制を工夫することで、知識や技能を確かに身に付けたり、柔軟な発想を発表し合う児童の姿が見られた。

業前の時間を活用した繰り返し学習や放課後の補充学習により、学習内容の理解や基礎的な技能の習熟を図ることができた。

## (3) 家庭学習の習慣化の取組について (主に視点2から)



意識調査では、平成17年度に比べて「家庭で算数の学習をいつもしている」「ときどきしている」と答える児童が増えてきた。

下学年では教師から課題を出し、4年生以上では自主学習(自学)を加えた家庭学習を勧めるなど、学年段階に応じて家庭での学習のねらいや時間のめやす、内容を示したり、自分で設定させたりして「がんばりっ子カード」を活用させたことにより、児童が目標をもち継続して家庭学習に取り組むようになってきた。「がんばりっ子カード」の記録により、教師が児童の家庭学習の様子を把握し、必要に応じて学級全体や個々に賞賛したり励ましたりすることもできた。

## (4) 小・中・高校の連携した取組について (主に視点3から)

学習状況調査や学力診断テストの結果から、特に正答率が低い内容を確認し合うことにより、指導の重点化が図られ、補充指導にも役立てることができた。

定期的に中学校と情報交換会を進めていく中で、児童が学習を進めていくための望ましい学習習慣や生活習慣と、その育成に向けた

共通の取組みについて理解し合うことができた。また、中学校見学を早期に行ったことにより、児童が中学校の生活や授業の様子に触れ、小学校から中学校へのスムーズな移行へつながるきっかけをつくることができた。

学年末に高校の生徒が教師の補助として学習支援をしたことにより、児童の意欲を高め、きめ細やかな指導をすることができた。

#### 4 今後の課題と改善策

(1) 児童の学習意欲向上への取組について  
学び合いを深めて本時のねらいに迫るために、解決のヒントとなる考えをもつ児童の見取りと支援の仕方を更に吟味する。

(2) 学習事項の理解を進める取組について  
C R T 学力診断テスト、全国や県の学力・学習状況調査を踏まえて、指導内容の重点を検討していく。

(3) 家庭学習の習慣化への取組について  
家庭学習の必要性や取組について児童と家庭に呼びかけ、内容や量を更に検討していく。

(4) 小・中・高校との連携した取組について  
望ましい生活習慣や学習習慣の形成について、今後も中学校と情報交換の機会をもち、継続して指導に当たりたい。

#### 5 実践事例

(1) 実践事例 1～感じ、考え、生かすことを支援する授業設計～

児童の学習への意欲を喚起して、互いに学び合わせながら考える力を身に付けさせるための授業設計に取り組んだ。

① 数や量への感覚を働かせ、進んで学習に取り組ませる指導の工夫

ア 学年 4年

イ 単元名 わり算のしかたを考えよう

ウ 本時のねらい (14 / 18時)

何倍かにあたる数と倍を表す数から、もとの大きさを求める式を考えることができる。

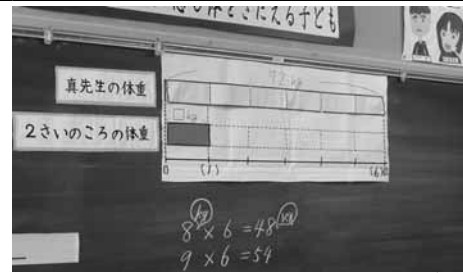
エ 指導の工夫

児童に、倍、何倍にあたる数、もともになる数の関係を学ばせるために、算数的な活動の中から半具体物を用いた活動を取り入れた。

授業では、まず、もとの数の6倍の数を求める時はかけ算を使うことを確認した。次に、問題を提示した後、分からないもとの数を□として問題をテープ図と数直線に表した。

問題：真先生の体重は、2さいのころの

体重の6倍で、72kgです。2さいのころの体重は、何kgでしょうか。



<問題を表したテープ図と数直線>

② 考えを表現し学び合わせる指導の工夫

ア 学年 6年

イ 単元名 比べ方を考えよう

ウ 本時のねらい (15 / 18時 発展問題)

単位量あたりの考え方で、数量を比べることができる。

エ 指導の工夫

教師の問いやお互いの話合いの中で児童がさまざまな考えに触れ、学び合うようにするために次のような支援を行った。

○自分なりの考えをもたせ表現させるための支援

・課題意識をもたせる。

・考えを式や図、言葉などに表現させる。

○学び合わせるための支援

・自力解決の見取りを基に学び合いの構想を立てる。

・児童の発言を促す働き掛けをする。

自力解決の発表と話合いの様子は、次の通りである。(抜粋 Tは教師、Cは児童の発言)

問題：3ヶ所のスーパーで牛肉の値段を比べました。A店は250gで925円、B店は150gで585円、C店は350gで1225円で売っています。どの店の牛肉が一番安いでしょうか。

C1：1gあたりの値段を求めた

A店  $925 \div 250 = 3.7$

B店  $585 \div 150 = 3.9$

C店  $1225 \div 350 = 3.5$

答え C店

C2：10gあたりの値段を求めた

A店  $925 \div 25 = 37$

B店  $585 \div 15 = 39$

C店  $1225 \div 35 = 35$

答え C店

C3：1円あたりのgを求めた

A店  $250 \div 925 = 0.27 \dots$

B店  $150 \div 585 = 0.25 \dots$

C店  $350 \div 1225 = 0.28$

答え C店

T 2 : 585 円の B 店が一番安いんじゃないですか。

C : C は、値段が高いけれども g も一番大きいから C のほうが安いと思います。

C : B が値段が安くても、B は量が一番少ないから、B が安いとは言えない。

T 1 : T 2 は、何を見て安さ考えたのかな  
C : 値段だけ見たと思います。

T : T 2 の考えは、値段だけで見た安さなんだね。では、C 1 から C 3 の考えで似ているところはないかな

C : 何 g あたりで考えているところが似ていると思います。

C : C 2 も、10 g あたりなので、何 g あたりの考えと似ている。

T : T 2 の考えは価格だけを見て、C 1 から C 3 の考えは何を見ているのかな。

C : 単位量あたりです。

T : お買い得と言ったら B 店かな C 店かな。

C : C 店です。

(D 店は 100 g で何円にすれば C 店よりお買い得になるかという問題へ続く)

③ 確かに理解させる指導体制の工夫

ア 学年 2年

イ 単元名 100 より大きい数を調べよう

ウ 本時のねらい (8 / 10 時)

10 を単位とする数の見方に着目して、(何十) + (何十)、(百何十) - (何十) の計算の仕方を考える。

エ 指導の工夫

単元の中で、1 単位時間の中心となる観点別目標によって、TT、少人数指導 (集団間等質、習熟度別、課題選択) など指導体制を変え、知識や技能の定着を図ったり、思考を促したりした。

2 年生では、TT 指導が中心であるが、1 単位時間の後半に学級を 2 グループに分け、習熟に応じた指導を行った。

授業では、 $50 + 70$  の計算は、10 の束で考えて  $5 + 7$  とすると答えを求めやすいことを学習させた。その後、学級を 2 グループに分け、習熟に応じた指導を行った。

○A グループの児童 : 10 のまとまりで考えるとよい計算や 100 のまとまりで考えるとよい計算に取り組ませる。

○B グループの児童 : 具体物を提示し、10 の束で考えるよう助言しながら答えを

求めさせる。

④ 新しい学びに生かす評価の工夫

ア 学年 3年

イ 単元名 3けたの数の計算を考えよう

ウ 指導の工夫

児童の学びを見取って支援に生かすために、単元の指導と評価の計画を作成した。

一単位時間ごとの評価を 1 か 2 観点にしぼり、評価規準と共に、A 評価の状況や C 評価の児童への支援を明記した。

<単元の指導と評価の計画>

【時間】 形態	ねらい・学習活動 算数的活動	学習活動における具体的評価規準 (評価方法) など
小単元 【1・2】 T T	① 何十、何百のかけ算 ○何十、何百に1位数をかける乗法計算の仕方を理解しその計算ができる。 ・ $20 \times 3$ の計算の仕方を考える ・ $300 \times 5$ の計算の仕方を考える。  具体物を用いた活動 探究的な活動	【考】何十、何百×1位数の計算を、乗法九九の計算を基に考えている。(ノート、発言) 【知】何十、何百×1位数の計算の仕方を理解している。(ノート、板書) <Aの状況> 【考】乗法九九を基に答えを導き出すことができ、自分の考えを分かりやすく表現できる。 【知】何十、何百×1位数の計算は、乗法九九に帰着できることを理解し、説明することができる。 <Cへの手立て> 【考】半具体物などを用い、乗法九九で求

また、学習カードを作成し、自己評価、学習を通じて分かったことや感想、友達の考えのよさなどを書かせ、よい学び方や考え方を他の児童に紹介した。そして、教師が評価に活用したり、授業を振り返って次時以降の指導に役立てたりした。

(2) 実践事例 2 ~学習内容の定着を図る繰返し学習や補充学習~

学習内容を習熟させるために、繰返し学習や補充学習を行う時間を設定した。

① 繰返し学習「あかまつタイム」

ア 時間 毎週金曜日 8時15分~8時30分

イ 対象 全校児童

ウ 内容 授業と関連付けた練習問題

学年ごとに指導の重点を決め、県学習状況調査や CRT 学力診断テストの結果も基にして重点項目を設定した。また、指導の重点に従って年間指導計画を作成し、自作プリントも使用して指導に当たっている。

<各学年の指導の重点>

学年	指導の重点	平成18年度CRTテスト・県学習状況調査の結果から重点項目
1年	10までの補数 100までの数	長さ 形
2年	加法、減法の計算 かけ算九九	加法、減法、乗法の適用 問題 長さ
6年	分数の四則計算	公倍数・公約数 平均 長さ 割合



＜あかまつタイム年間計画とプリント＞

平成19年度 あかまつタイム(算数) 月別指導計画			
回数	単元名	あかまつタイム指導内容 ★重点項目(プリント裏面も含む)	実施日 月 日
①	5年生の復習	小数の乗除計算(小数×整数、小数×小数)	
②	5年生の復習	あかまつタイム(算数)プリント	
③	5年生の復習	分数のたし算とひき算の計算と適用問題 [6年-⑮]	
④	分数のたし算とひき算を考		
⑤	分数のたし算とひき算を考		

6年 組 名前	
1	次の計算をしましょう。 ① $\frac{1}{3} + \frac{1}{4} =$
2	棒が2本あります。1本は $\frac{3}{5}$ m、もう1本は $\frac{3}{4}$ mです。 (1) 2本の棒を合わせると、何mになりますか。

② 補足的な学習「パワーアップタイム」  
ア 時間 毎週水曜日14時45分～15時30分  
イ 対象

授業や「あかまつタイム」で学習内容の理解が十分でない児童

ウ 内容

計算練習、音読練習、漢字練習、プリント等で正答率が低かった事項

パワーアップタイムでは、1回につき各学級5名程度の児童が学習した。夏季休業中にも3日間各1時間程度実施した。

(3) 実践事例3～学習の定着を図る家庭学習～

① 家庭への呼びかけ

年度初めの学校説明会、学年懇談会やたよりで、本校の家庭学習について知らせている。

○意義

- ・授業や自分が学びたいことの理解が進む。
- ・学ぶきっかけをつくる。
- ・自分で自分を律する力をつける。

○時間

- ・学年×10分間程度

○学年部ごとの留意点

- ・低学年：学習の仕方を教え、短い時間で楽しく学習させる。
- ・中学年：自主性や甘えなどの心の動きを見取り、見守ったり励ましたりする。
- ・高学年：学習の目標をもたせ予習を勧める

② 内容

各学年で準備した課題を行わせる他、4年生以上では自学の仕方を提示し、自主学習を促している。

＜各学年の内容と自学の仕方＞

学年	内 容
1～	・本読みカード ・日記
3年	・国語プリント(漢字)

	・算数プリント
4～	・本読み ・日記 ・自学
6年	・国語プリント(漢字) ・算数プリント

「自主学習」のすすめ!

自分から進んで学習に取り組もう!

○自主学習は、毎日の宿題です。先生から出された宿題だけではなく、自分の力を伸ばすために積極的に勉強してほしいことを、下のメニューを参考にし、いろいろな学習を選んで取り組もう。(同じ内容を繰り返さないようにしましょう)

「算数教室」メニュー

○かけ算やわり算、小数や分数の計算練習をする。→計算力のアップ!  
「自分で式や問題を作る!」おうちのの人に式や問題を考えてもらう!  
「教科書の問題をくり返しやる」「じゅくの問題をくり返しやる」など  
○学校で学習したことをもう一度ノートの上で確認してみる。  
○学校で学習した問題を繰り返してノートにやる。  
○学習した図形を正確にかいて、もう作りをする。

③ 家庭学習の目標設定と振り返り

「がんばりっ子カード」を作成し、学校で示した学習時間や内容を参考に、自分なりの工夫も加えて家庭学習のめあてや学習時間を設定させ、毎日の家庭での学習を振り返らせた。

＜がんばりっ子カード＞

5月		学 習		生 活		おうちの人のサイン	
本読み	家庭学習	早起き	手洗い	先生へのサイン	先生のサイン		
正しく読める	やったこと(宿題、自学、日記など)	学習時間(分)	早起き	手洗い	先生へのサイン	先生のサイン	
1日 火	自学漢字	40分	◎	◎	◎	◎	打印
2日 水	自学漢字	40分	◎	◎	◎	◎	打印
3日 木	解漢字	60分	◎	◎	◎	◎	打印

カードの中には、音読練習の様子や行った学習を記入する欄も設け、学習の内容も振り返ることができるようにした。また、家庭での確認欄も設けた。児童が記入した事項は教師が確認をし、励ましたり賞賛したりする返信を継続した。

(4) 実践事例4～学びを支える学校間の連携～

① 学年 全学年

② 教科 算数 パワーアップタイム

③ 指導の様子

気仙沼高校3年生の生徒が、学習支援ボランティアとして教師の指導の補助にあたった。期間は1月後半～2月中とし、5校時の算数の授業とパワーアップタイムとした。

＜児童の感想＞むずかしい算数を親切に教えて



＜気仙沼高校生徒による学習支援ボランティア＞

ていただき、ありがとうございました。ぼくも高校生になったら、小学生に教えてあげられるように勉強したいです。



学校名 気仙沼市立条南中学校  
 所在地 気仙沼市田中前四丁目8番地  
 電話番号 0226(24)3131

## 1 学校の実態

生徒数 244人 職員数 17人

	1年	2年	3年	特別支援	合計
生徒数	69	90	81	4	244
学級数	2	3	2	1	8

## 2 研究の概要

### (1) 研究主題

「自ら学ぶ生徒をはぐくむための指導の工夫」  
 ー学ぶ楽しさやわかる喜びを体感させる  
 授業づくりを通してー

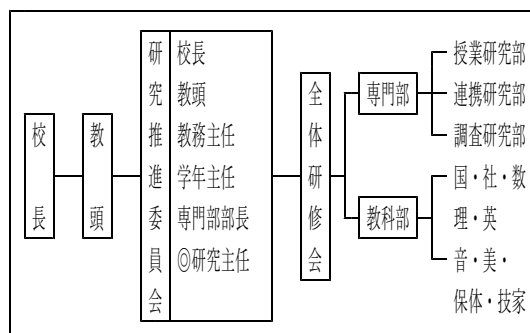
研究で目指す生徒像（「自ら学ぶ」生徒とは）

学ぶことに意義や喜びを見いだす生徒  
 粘り強く課題解決に取り組む生徒  
 深く思考する生徒

### (2) 主題設定の理由

学ぶ楽しさやわかる喜びを体感させる授業づくりを工夫することをとおして、学ぶことの意義を見いださせ、自ら学ぶ生徒を育むことが、「確かな学力」を身に付けさせる上で最も重要であると考え、本主題を設定した。

### (3) 研究組織図



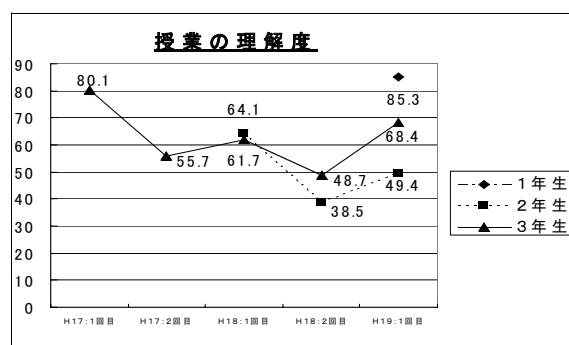
## 3 研究成果

### (1) 生徒一人一人の実態に即した指導の工夫について

#### ① 明確化・焦点化を図った指導の工夫

学習意欲を高めるとともに、基礎・基本を確実に身に付けさせるためには、授業の「質」を高めることが重要である。そのためには、学習のねらいや評価規準、授業においてどのような力を身に付けさせたいのかを明確化し、授業づくりの焦点化を図ることが大切である。そこで、「授業における教師が求める生徒の姿」と「授業づくり」を効果的に組み合わせることで、授業におけるねらいを確実に達成しようと試みている。

授業において、教師が「ねらいと評価規準」「教師が求める生徒の姿」を生徒に明確に示すことで、本時で何を学ばせ、どのような姿を身に付けてほしいかを生徒に意識させながら取り組ませることができた。また、授業づくりの方法を焦点化し、「効果的な組合せ」を考えることで、教材分析を深めることができた。

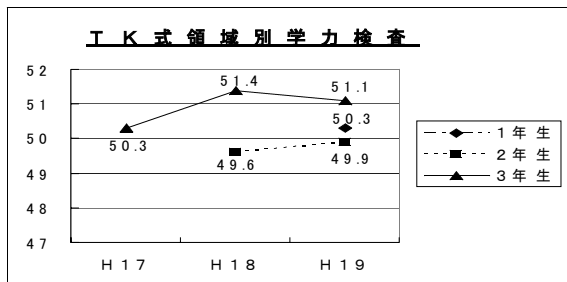


(数値は「よく分かる」「だいたい分かる」の合算値 単位：%)

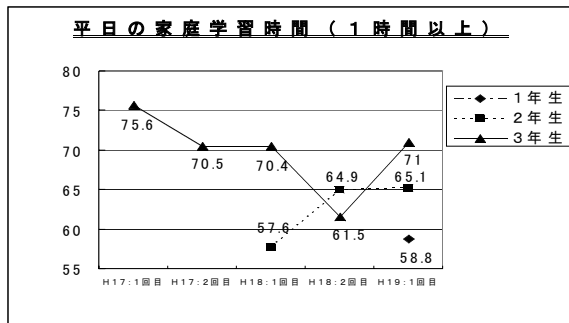
#### ② 各種調査による実態把握を生かした指導の工夫

##### ◇実施した調査◇

内 容	対 象
宮城県学習意識調査と同内容の調査	全校生徒
家庭における生活習慣調査	全校生徒
家庭学習状況調査・学習意識調査	保護者
AAI (学習適応性検査)	2・3年生
T K式領域別学力検査 (田研出版)	全校生徒



(標準得点(偏差値): 全国平均 50.0)



(単位: %)

各種調査の結果を基に、生徒一人一人の興味・関心を高めたり、つまずきの解決につなげたりすることができた。また、各調査を関連付けて考察したことにより、生徒一人一人を多面的に理解することができた。

### ③ 補充指導の工夫

#### ア 放課後学習

対象：3年生  
ねらい：基礎・基本の定着  
時間：帰りの会終了後10分間  
使用教材：ドリル形式の問題集  
教科：5教科



#### イ 長期休業における学習会

夏・冬の長期休業を利用して、3～4日間の補充学習を行っている。これは、学習の機会を増やしてほしいという生徒や保護者の願いから実施することにしたものである。対象は各学年の希望者とし、基礎・基本の定着を図り、授業において理解が不十分だと思われる内容を重点的に学習させることをねらいとしている。

これらの補充学習により、学習の仕方を身に付けさせたり、基礎・基本の定着を図らせたりすることができた。また、学習への意欲を高め、粘り強い取組の重要性を認識させることに効果的だった。

### (2) 家庭学習の習慣化の取組について

#### ① 授業と家庭学習の連動を図ったステップガイドの作成と活用

各教科において、生徒一人一人に「ステップガイド」を作成し、生徒自らが進んで学習に取り組めるようにした。「予習」→「授業」→「復習」の学習サイクルを生徒が身に付けることで、「自ら学ぶ意欲」も高まるものと思われる。

#### 【「ステップガイド」の概要】

##### ア 意味

「生徒の学びを導く」ための各教科における学習の手引き

##### イ 内容

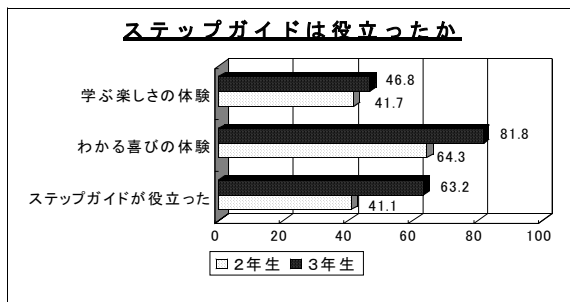
- ・授業と家庭学習の連動
- ・家庭学習の習慣付け
- ・授業内容・ねらいの明確化
- ・知識の定着度の確認
- ・つまずきの明確化
- ・補充・発展学習
- ・シラバス
- ・評価
- ・診断

##### ウ 作成

- ・各教科担当者が単元毎に作成
- ・ステップガイドに含まれる共通内容である「シラバス」「自己評価」「客観的評価」以外は、各教科の特性を生かした教科担当者の自由な内容構成



ステップガイドをそれぞれの教科で作成することにより、教科の特性を効果的に生かした学習内容を生徒に活用させることができた。また、それぞれの教科の学習の仕方を身に付けさせ、教科間の系統性を認識させながら、基礎・基本の定着を図らせることができた。さらに、情意面での自己評価を行わせることにより、意欲を高めることにつながった。

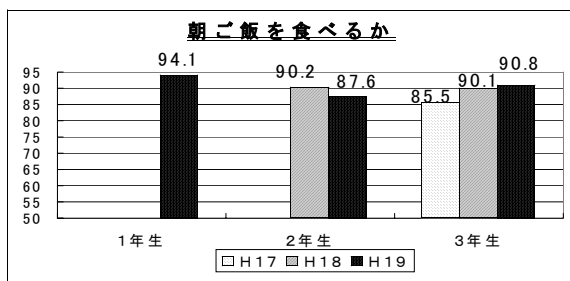


(単位: %)

② 家庭学習の習慣及び基本的生活習慣の確立を目指した保護者と学校との協働体制づくり

自ら学ぶ生徒を育むことを目指した保護者と学校との協働体制を確立すること、また、家庭における生徒の学習習慣や生活習慣の見直しを図り、意欲的に学習に取り組ませる基盤づくりを行うことをねらいとして、次の二つの取組を行っている。

ア P T A総会、学年懇談会、地区懇談会等で、保護者に対して調査の結果を示す。そこで、生徒の学習及び生活習慣の状況を伝え、改善や向上のための協力をお願いする。



(数値は「必ずとる」「たいていとる」の合算値 単位: %)

イ 家庭学習ファイルにある「学習計画」や「学習チェック表」などに保護者の検印欄やコメント欄を設け、家庭での励ましをお願いする。

これらの取組によって、保護者と学校が一体となって生徒の学習習慣や基本的生活習慣の確立を図る支援を行うことができた。特に生徒の学力向上を支える「温かで力強い基盤である心の支え」において、学校と保護者が同じ方向を向いて支援する土台づくりが進んだ。

(3) 小・中・高の連携について

① 小・中の連携の工夫

「国語」及び「算数・数学」における小・中合同の情報交換を行っている。小学校と中学校の学習状況調査や学力検査の結果を基に、「特に指導が必要な領域や単元」を話し合い、お互いの対応策を具体的に出し合う。これらの話し合いの結果を校内研修会で職員全体で検討し合い、その後の指導に生かしている。

② 中・高の連携の工夫 (高校生学習ボランティア)

本校や地元の高校を会場に、高校生による英語学習の支援を行っている。英検3・4級の受験を目標とする希望者を対象に、月1回、放課後の約70分間で実施している。年度初めに、中・高のそれぞれの担当教師が打合せを行い、受講の約束事や支援の在り方、学習内容について話し合い、その後高校生と中学生にガイダンスを行ってから実施している。

中・高の生徒にとって、「勉強になる」「自分のもっている知識をどのように伝えれば良いのかわかってきた」など、お互いの立場から高校生学習ボランティアの良さを実感する感想や、今後の継続を望む声も多く聞かれている。



4 今後の課題と改善策

(1) 生徒一人一人の実態に即した指導の工夫について

① 「効果的な組合せ」が、どのような学習に適切であるかを継続して検証していく必要がある。今後も多くの授業実践に取り組み、多様な組合せの累積を基に、効果的な指導と教師一人一人の授業力向上を図っていききたい。

② 研究の流れが変わってきたため、それを見越した調査を実施することができなかった。そこで、今後は各種調査の実施内容の精選化を図る必要がある。また、調査で明らかになった姿や複数の調査結果の関連性、さらには新たな傾向などを探り、指導に生かしたい。

③ 補充指導において、より多くの生徒に成就感を味わわせ、自信や学習への意欲につなげる指導の在り方を今後も工夫していきたい。

## (2) 家庭学習の習慣化について

① ステップガイドの内容を、生徒の実態に合わせてより精選・構造化する。また、家庭学習における基礎・基本の定着を図った内容を吟味・工夫していきたい。

② 学校から協力をお願いするだけでなく、保護者からの要望に応える双方向の協働体制の工夫をより図っていきたい。

## (3) 小・中・高の連携について

① 生徒の実態や傾向の把握をより確かなものとし、効果的な指導につなげるために、国語・数学における小・中の学習の連携や、中・高の英語における学習の連携に、今後も継続して取り組む。

## 5 実践事例

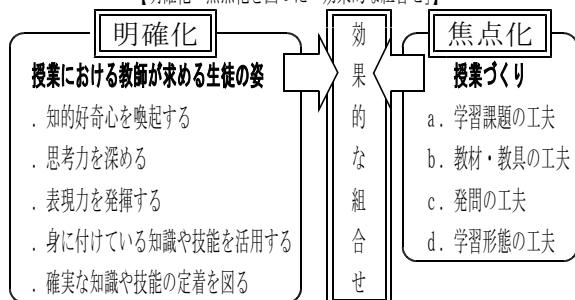
### (1) 実践事例 1

生徒一人一人の実態に即した指導の工夫

#### ◇明確化・焦点化を図った指導の工夫◇

単元全体を「効果的な組合せ」に基づいて1時間毎に分析する。生徒の興味・関心や実態、教師の教材分析によって組合せは多様に考えられる。これらの過程で教材分析が深まっていく。また、授業における生徒の姿を「明確化」し、授業づくりを「焦点化」することにより、授業のねらいがぶれずに達成できる。

【明確化・焦点化を図った「効果的な組合せ」】



## ◇題材における「効果的な組合せ」例 英語科◇

◇題材における「効果的な組合せ」◇ □内の数字は指導計画の時数を表す

	a 学習課題	b 教材・教具	c 発問	d 形態
1 知的 好奇心を 喚起する	・ 新出文法を用いて、身近なことから自分のことについて英語で表現させる学習課題に取り組みさせることで、意欲を高めます。 [1]	・ AIT や教師の英語によるホームステイの様子を聞きとらせたり、写真などを見せることにより興味・関心を高めさせる。 [2]	・ 新出の文法事項を主眼点として AIT の被験者に関する英文を用いた短文スキットを聞きかせ、その内容を聞きとらせることにより、興味・関心を高めさせる。 [1]	・ ホームステイの様子やその感想を英語で紹介し、その内容に関する質問をクイズ形式で行うことにより、興味・関心を高めさせる。 [2]
2 思考力 を深める	・ 日本とアメリカの生活習慣を比較させ、相違点を思いださせ、その上で、英語で表現するためにどのような単語、文法を活用すればいいかを考えさせる。 [1]	・ 教師からの質問に対し、英和辞書や英辞書などを用いて、自分の意見を実現するための適切な英語を考えさせる。 [2]	・ 対話文を読ませその内容についての疑問を行うことにより、外国の文化について理解させること共に人との関わりにおいて何が大切かを考えさせる。 [2]	・ 自分の思いを相手に伝えるための高次思考させ、それをグループで話し合わせることで確実な思考力と幅広いものの見方を養わせる。 [2]
3 発表 力	・ 生活場面において、自分が果たすべき役割などについて英語でわかりやすく表現させる。 [2]	・ IT 機器を使用し、各自の時間割を作成させ、wall を用いた英語の表現を工夫させる。 [2]	・ 学校生活における義務や禁止事項に関する疑問に対する応答を聞き、must と should の運用を図らせる。 [2]	・ ペア学習で、互いに運来の予定を話ししたり、聞きとらせることで自己表現力を高めさせる。 [2]
4 技術 力	・ 既習の文法（特に助動詞）を活用させ、日本や外国の生活に関するアドバイスを考え、この立場により自分の考えを相手に伝えることの喜びや楽しさを味わわせる。 [2]	・ ホームステイについての知識を生かしながら、聞き取り教材に取り組ませることにより、聞く力を向上させる。 [2]	・ 自分のことや身近な生活についての疑問に自らに付随する知識を活用して、適切に回答させる。 [2]	・ 既習の文法を用いた英語の質問に英語で答える活動をグループでゲーム形式によって行うことで、楽しみながら基礎・基本の定着を図る。 [2]
5 確実な 定着	・ 既習の文法事項を生かした英文で質問に答えさせることにより、確実な知識定着を図る。 [2]	・ ステップガイドを活用し、授業と関連した設問に取り組みさせておく。その内容を授業に活用させることにより、have to の用法を確実に理解させる。 [1]	・ 助動詞を用いた表現を比較させながら疑問に組み立てさせることで、助動詞の活用能力を定着させる。 [2]	・ 議題リストの前にグループ学習において問題を話し合わせるなど、学び合いを行わせることにより、高次型学習を定着させる。 [2]

### 実践例：国語科 【2-a】思考力を深める学習課題の工夫

#### —書く・2 主張を書こう—

説明文を読み、それを基に自分の主張を書かせる。その際、賛成



意見と反対意見の両方を考えさせ、その上で根拠を基に自分の意見を展開させる。本時では、反対意見に対する説得力のある反論を書かせるために、他の人の意見を要約した内容や発表を基に、自分の考えを根拠のあるものに深めさせた。

### 実践例：社会科 【2-a】思考力を深める学習課題の工夫

#### —3年社会「現代の民主政治」—

模擬議会を開き、議題をグループ毎に多面的・多角的に検討させた。その際、自らの学習課題にふさわしい資料を収集、選択させ、課題解決に効果的に活用





させた。また、自力解決の後、話し合いをやらせ、自らの意見と他の意見との共通点や相違点を見つけさせながら思考を深めさせる工夫を行った。その結果、生徒一人一人が思考を深めながら課題に取り組むことができたと同時に、異なる視点から課題解決を図ることができた。

実践例：保健体育科【2-b】思考力を深める教材・教具の工夫  
—マット運動—

マット運動において、個を生かした集団演技の構成を、仲間と協力しながら工夫させた。そのために、ステップガイドや体育館の壁面に拡大表示した資料などを活用させるとともに、視聴覚機器の活用により、仲間や自分の演技を客観的に見つめさせながら、技を考えさせた。この取組により、自分の技のつまずきの原因やグループの課題を把握させ、解決や向上に向けて意欲的に取り組ませることもつながった。

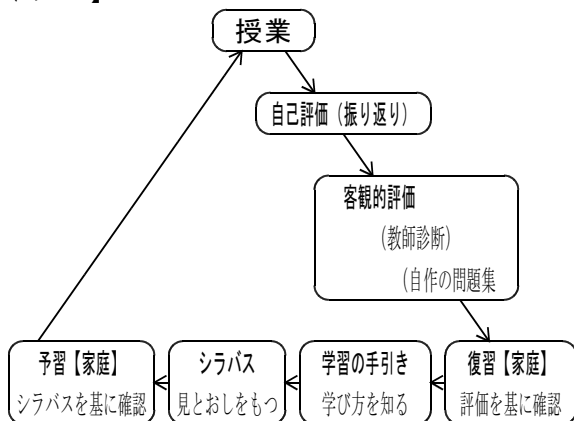


(2) 実践事例 2

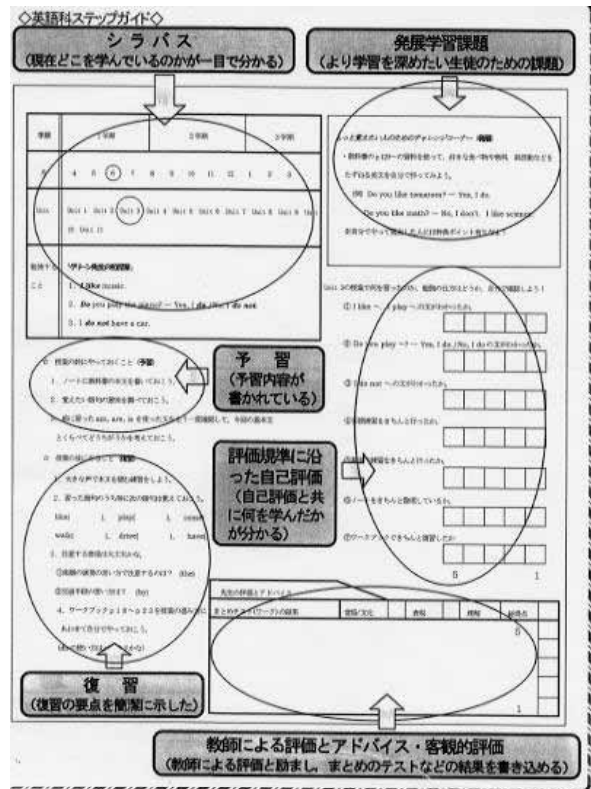
家庭学習の習慣化の工夫

◇授業と家庭学習の連動を図ったステップガイドの作成と活用◇

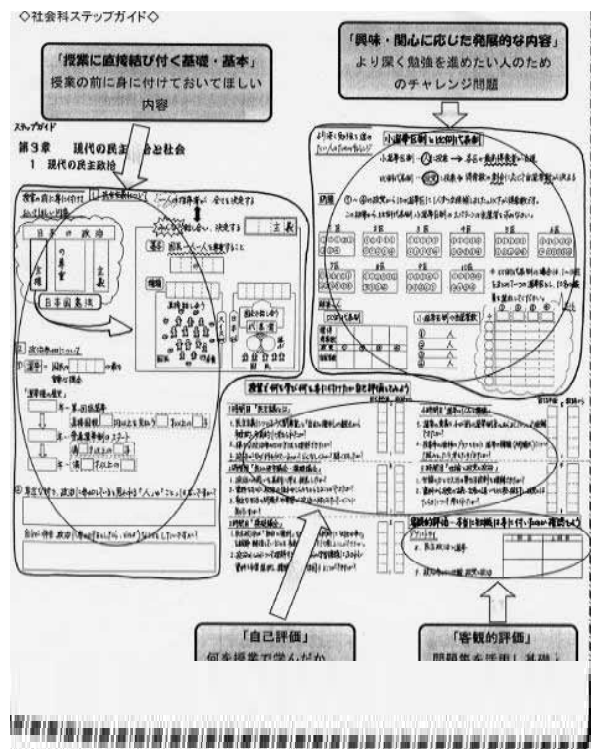
【「ステップガイド」の活用における学習サイクル】



例：英語科ステップガイド



例：社会科ステップガイド



ホームページ 気仙沼市立条南中学校  
<http://www16.ocn.ne.jp/~jonan-jh/>

